特別史跡

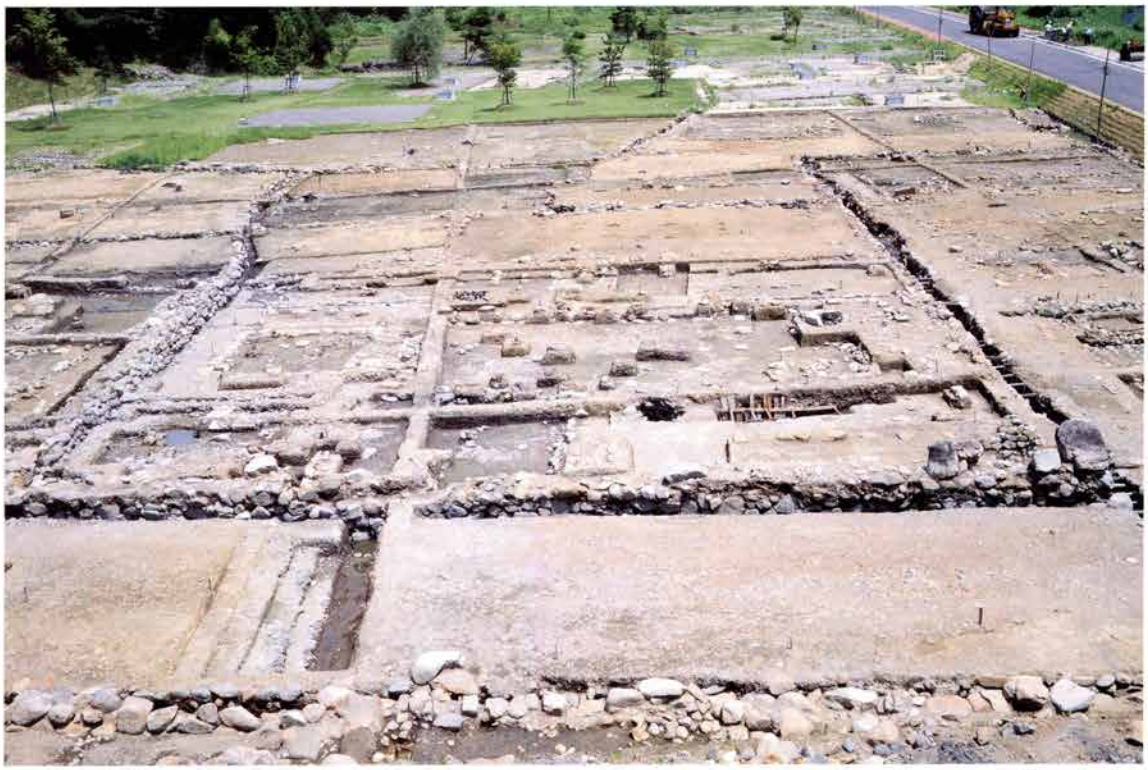
一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅸ

第49・50次調査

２００７

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

口絵１　第49次調査



武家屋敷全景（南から）

バンバ

櫛

口絵２　第50次調査

全景（南から）

区画50-1出土　黒漆椀

序

戦国時代、天下統一する人物として、「越前の朝倉義景、甲斐の武田信玄、尾張の織田信長」(『多聞院日記』)の三人が取り上げられています。その筆頭が朝倉義景でした。

一方、軍奉行として朝倉義景に仕えた朝倉宗滴は当主と二人きりになったとき、「天下を取り、御屋形様を在京させ申すべき武略、重々様々思案候」(『朝倉宗滴話記』)とあり、朝倉方に天下を取る考えのあったことがわかります。

この有力な戦国大名朝倉氏五代の残した戦国城下町が一乗谷朝倉氏遺跡です。昭和46年遺跡の278haが国指定の特別史跡に、平成3年四つの庭園が国指定の特別名勝に、そして今春、一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査出土資料の2,343点が国指定の重要文化財として、国の文化審議会によって伊吹文明文部科学相に答申されました。昭和42年の発掘開始から丁度40年の時を経て国からトリプル指定を受けるのです。正に一乗谷朝倉氏遺跡が戦国城下町遺跡としてかけがえのない日本遺産となったことの証です。

この記念すべき年に、『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅸ 第49・50次調査』を刊行いたしました。広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、これまでにご指導・ご協力いただきました関係者・関係機関に心から感謝申し上げまして序といたします。

平成19年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長 青 木 豊 昭

目　　次

口　絵
序
目　次 …… 5
図版目次 …… 6

Ⅰ　事業概要

1．調査の目的 …… 1
2．発掘調査・環境整備・保存処理事業の経過 …… 1
3．昭和59年度朝倉氏遺跡資料館事業 …… 4
4．本報告書について …… 6
5．第49・50次発掘調査および本報告書刊行に関わった職員 …… 6

Ⅱ　第49次調査

1．調査の経過と概要 …… 9
2．遺　構 …… 12
3．遺　物 …… 17
4．小　結 …… 25

Ⅲ　第50次調査

1．調査の経過と概要 …… 27
2．遺　構 …… 30
3．遺　物 …… 36
4．小　結 …… 48

図 版 目 次

口 絵（カラー）

第49次調査

口絵１　第49次調査　武家屋敷全景

第49次調査　バンバ・櫛

第50次調査

口絵２　第50次調査　全景

第50次調査　区画50-1出土　黒漆椀

図　　面

第49次調査

第１図　第49次調査土層図

第２図　第49次調査遺構詳細図（1）

第３図　第49次調査遺構詳細図（2）

第４図　第49次調査遺構詳細図（3）

第５図　第49次調査遺構立面図

第６図　第49次調査出土遺物（1）

第７図　第49次調査出土遺物（2）

第８図　第49次調査出土遺物（3）

第９図　第49次調査出土遺物（4）

第10図　第49次調査出土遺物（5）

第11図　第49次調査出土遺物（6）

第12図　第49次調査出土遺物（7）

第13図　第49次調査出土遺物（8）

第14図　第49次調査出土遺物（9）

第15図　第49次調査出土遺物（10）

第50次調査

第16図　第50次調査土層図（1）

第17図　第50次調査土層図（2）

第18図　第50次調査石垣立面図

第19図　第50次調査遺構詳細図（1）

第20図　第50次調査遺構詳細図（2）

第21図　第50次調査遺構詳細図（3）

第22図　第50次調査遺構詳細図（4）

第23図　第50次調査遺構詳細図（5）

第24図　第50次調査出土遺物（1）

第25図　第50次調査出土遺物（2）

第26図　第50次調査出土遺物（3）

第27図　第50次調査出土遺物（4）

第28図　第50次調査出土遺物（5）

第29図　第50次調査出土遺物（6）

第30図　第50次調査出土遺物（7）

第31図　第50次調査出土遺物（8）

第32図　第50次調査出土遺物（9）

第33図　第50次調査出土遺物（10）

第34図　第50次調査出土遺物（11）

第35図　第50次調査出土遺物（12）

第36図　第50次調査出土遺物（13）

第37図　第50次調査出土遺物（14）

第38図　第50次調査出土遺物（15）

写 真 図 版

PL.1　第49次調査区全景

PL.2　第49次調査　武家屋敷

PL.3　第49次調査　道路

PL.4　第49次調査　道路・溝

PL.5　第49次調査　土塁・溝

PL.6　第49次調査　建物他

PL.7　第49次調査　建物

PL.8　第49次調査　各遺構（1）

PL.9　第49次調査　各遺構（2）

PL.10　第49次調査出土遺物（1）

PL.11　第49次調査出土遺物（2）
PL.12　第49次調査出土遺物（3）
PL.13　第49次調査出土遺物（4）
PL.14　第49次調査出土遺物（5）
PL.15　第49次調査出土遺物（6）
PL.16　第49次調査出土遺物（7）
PL.17　第49次調査出土遺物（8）
PL.18　第49次調査出土遺物（9）
PL.19　第50次調査区全景（1）
PL.20　第50次調査区全景（2）
PL.21　第50次調査　区画50-1（1）
PL.22　第50次調査　区画50-1（2）
PL.23　第50次調査　区画50-1（3）
PL.24　第50次調査　区画50-1（4）
PL.25　第50次調査　区画50-2･3･4
PL.26　第50次調査　区画50-2･3
PL.27　第50次調査　区画50-3･4
PL.28　第50次調査　道路・溝
PL.29　第50次調査　道路
PL.30　第50次調査　溝
PL.31　第50次調査　各遺構
PL.32　第50次調査出土遺物（1）
PL.33　第50次調査出土遺物（2）
PL.34　第50次調査出土遺物（3）
PL.35　第50次調査出土遺物（4）
PL.36　第50次調査出土遺物（5）
PL.37　第50次調査出土遺物（6）
PL.38　第50次調査出土遺物（7）
PL.39　第50次調査出土遺物（8）
PL.40　第50次調査出土遺物（9）
PL.41　第50次調査出土遺物（10）
PL.42　第50次調査出土遺物（11）
PL.43　第50次調査出土遺物（12）
PL.44　第50次調査出土遺物（13）
PL.45　第50次調査出土遺物（14）
PL.46　第50次調査出土遺物（15）

挿　　図

挿図１　第49次調査区周辺地形図
挿図２　第49次調査区グリッド設定図
挿図３　第49次調査区略図
挿図４　石器
挿図５　草履
挿図６　第50次調査区周辺地形図
挿図７　第50次調査区グリッド設定図
挿図８　第50次調査区略図

表

表１　第49次調査出土遺物一覧表
表２　銅銭出土分布
表３　第50次調査出土遺物一覧表
表４　第50次調査遺構時期別分類一覧

付　　図

付図１　一乗谷朝倉氏遺跡地形図
付図２　第49・50次調査遺構全測図

Ⅰ　事　業　概　要

Ⅰ　事業概要

1．調査の目的

一乗谷朝倉氏遺跡の保存は、大正13年9月福井県史蹟名勝天然記念物調査委員会によって「一乗城跡」の選定を受けたことに始まる。昭和5年7月8日には、「一乗谷朝倉氏館阯附南陽寺阯」1.4haが史蹟及名勝に、「西山光照寺阯」1.6haが史蹟に指定された（文部省告示第180号）。昭和42年12月11日には、山城跡、上下両城戸跡、南陽寺跡の一部、英林塚が追加指定され（指定地は6.8haになる）、名称も「史跡一乗谷朝倉氏遺跡附南陽寺跡」・「名勝一乗谷朝倉氏館跡庭園附南陽寺跡庭園」と変更になった（文化財保護委員会告示第68号）。昭和46年7月29日には、278haが特別史跡に格上げ指定され、名称も「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡」となった（文部省告示第179号）。平成3年5月28日には、朝倉義景館跡・湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡の4庭園（4,205㎡）が特別名勝に格上げ指定され、名称も「特別名勝一乗谷朝倉氏庭園」となった（文部省告示第61号）。平成19年3月16日、文化審議会文化財部会は、「福井県一乗谷朝倉氏遺跡出土品」2,343点（その内訳は、土器・土製品1,246点、ガラス製品1点、木製品267点、木簡・墨書木製品184点、漆器28点、石製品144点、金属製品456点、骨角製品12点、布残欠2点、墨1点、紙残欠1点、炭化米1点）を重要文化財（考古資料の部）とする議決を行い、近々文部科学相に答申することとなった。

このように、一乗谷朝倉氏遺跡の調査目的は、第1に広大な遺跡を特別史跡や特別名勝に指定して永久に国民の文化遺産として保護していくことにあり、第2に研究機関を現地に設置して発掘調査等を実施し、戦国時代の城下町の規模や構造、人々の暮らしぶりの実態等を明らかにして遺跡の持っている価値を正当に評価していくことにあり、第3に検出された遺構を整備し、また特別史跡指定地の環境整備をおこなうことによって「特別史跡公園」の完成をめざすことにあり、第4に出土した遺物を重要文化財として後世に伝えていくことにあり、第5に一乗谷朝倉氏遺跡のもつ歴史・文化・自然環境等を活かした学習の場を市民・県民・国民に提供していくことにある。

2．発掘調査・環境整備・保存処理事業の経過

発掘調査

第1次5カ年計画（昭和42年度～46年度）足羽町・福井県調査

昭和42年の湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡庭園の調査から発掘は開始された。43年足羽町教育委員会は、朝倉氏遺跡整備事業委員会を立ち上げ、国の「風土記の丘整備構想」における「環境整備事業第1次3ケ年計画」を立案し、奈良国立文化財研究所の指導を得て朝倉館跡の調査を実施した。戦国大名の館跡が発掘調査によって完全に姿を現したのは全国でも初めてのことであった。45年には東新町で一乗谷地区農業構造改善事業が実施され多くの遺構や遺物が露呈し破壊された。そのため、46年には福井県が朝倉氏遺跡の発掘調査と環境整備事業を、足羽町を合併した福井市が遺跡地の買収と管理を行うという役割分担の協定書が調印され、福井県の本格的発掘調査が開始されることとなったのである。

第２次５カ年計画（昭和47年度～51年度）福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所調査

昭和47年、福井県教育委員会は「朝倉氏史跡公園基本構想」を策定し、文化庁の指導による「福井県朝倉氏遺跡研究協議会」を発足し、現地に「福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所」を設置し、発掘調査・環境整備事業をスタートさせた。48年、朝倉義景館跡北側濠の調査で将棋の駒が174枚以上出土した。49年からは、中の御殿跡や平井地籍の武家屋敷を調査。50年にはサイゴー寺跡の調査で寺院東側の町屋跡から火縄銃関連遺物が一括出土した。51年には魚住出雲守屋敷跡や瓢町地籍の小規模建物（町屋）など一乗谷の各地点を調査し、その性格や規模を明らかにすることができた。

第３次５カ年計画（昭和52年度～56年度）福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所調査

昭和52年から新設県道予定地の発掘調査開始。一乗谷に幅10mのトレンチを入れたのと同じで、当時の谷全体の都市計画（縄張り＝普請）を知る上で大きな成果があった。平井地籍、斉藤地籍で武家屋敷、平井・川合殿・赤淵・奥間野・木蔵地籍で町屋跡が多く検出された。とくに、55年の町屋の調査で「金隠し」板が出土し、日本で初めて便所遺構が確定された。下城戸跡の濠も明らかになった。56年には、赤淵地籍で文献に出てくる「上殿ノ橋ノ通」（「永禄十一年五月十七日朝倉屋形へ御成御門役辻固ノ事」）に比定される東西道路を検出した。56年8月20日、特別史跡指定外の安波賀町に福井県立朝倉氏遺跡資料館が開館した。

第４次５カ年計画（昭和57年度～61年度）朝倉氏遺跡資料館調査

昭和57年、中惣地籍で外濠や坪庭が検出され、一節切や宅鎮具が出土した。伝承でしかなかった朝倉式部大輔景鏡館である可能性がさらに強まった。赤淵地籍の中規模屋敷では茶筅・茶杓が出土。58年には奥間野地籍の寺院裏の墓地から嬰児を葬った木棺20基や、卒塔婆・位牌・柿経の束が出土し、市中寺院の墓地のあり方や嬰児の埋葬方法、積善功徳等の様相が明らかとなった。59年には、本報告書で扱った第49・50次の武家屋敷の発掘調査が行われた。また、城下町の外辺部にあたる安波賀町上武者野地籍で火葬場の営まれていたことが判明した。60年には吉野本地籍で土塁や坪庭をもつ屋敷から医学書『湯液本草』の炭化片が出土し、医者の屋敷であることが明らかとなった。また、この医者は青磁刻花文盤や青白磁梅瓶など12～14世紀頃の古い陶磁器を多く所持していたことも判明した。61年には資料館開館５周年記念特別展と記念シンポジウム「一乗谷と中世都市 ～都市の構造と生活の復元～」を開催した。

中期第１次10カ年計画（昭和62年度～平成8年度）朝倉氏遺跡資料館調査

５カ年計画では山城の発掘調査計画と公有地化計画とがなかなか整合性がとれないため、中期10カ年計画にシフトすることが朝倉氏遺跡研究協議会で採択された。昭和62年、川合殿地籍の武家屋敷の井戸から銅銭16,594枚が出土。第１回目の企画展「朝倉文化と茶の湯」を開催する。63年上城戸跡、平成元年南陽寺跡を発掘。２年には中惣地籍の伝朝倉式部大輔景鏡館跡を発掘。３年には権殿地籍の武家屋敷を発掘。４年４月１日、それまでの「福井県立朝倉氏遺跡資料館」という館名を変更し、以後「福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館」となる。斉藤地籍の武家屋敷を発掘。５年には平井地籍と川合殿地籍の武家屋敷、６年には下城戸跡の巨石土塁石垣を調査。また、西山光照寺跡の調査では地下式倉庫から大量の遺物が出土した。７年には西山光照寺跡の続きの発掘と御所・安養寺跡を調査。８年には東新町の安如寺地籍を発掘調査した。

中期第２次10カ年計画（平成9年度～平成16年度）一乗谷朝倉氏遺跡資料館調査

平成9年、川合殿地籍の武家屋敷を調査し、飛青磁瓶など中国陶磁器の優品が出土した。10年には斎藤兵部少輔の屋敷と推定される斉藤地籍を発掘。11年にも斉藤地籍を発掘し甲冑大袖、草摺、兜鍬などが出土した。12年には新御殿地籍と「中山間ふるさと農業基盤整備事業」での遊歩道設置に伴う事前調査が行われた。13年には木蔵地籍の武家屋敷の調査が行われ、八地谷川から金箔の残った石灯籠が出土した。14年には木蔵・雲正寺地籍、15年には同じく雲正寺地籍の発掘が行われ、武家屋敷の井戸から能楽で用いられる獅子口系の面の一部が出土した。なお、当初の計画は平成18年度までであったが、平成15年1月16日のヒヤリングで西川一誠知事は「発掘調査は今のスピードでは今後112年かかる。現在の10カ年計画は、2カ年前倒しして平成16年度で終了せよ。平成17年度からは新10カ年計画（30カ年計画でも良いが…）を立て2倍のスピードで事業の促進をはかること」と決定した。16年には雲正寺地籍の発掘を実施していたが、平成16年7月18日の「福井豪雨」で中断した。以後、その災害復旧に全力で取り組む。

中期第３次10カ年計画（平成17年度～平成26年度）一乗谷朝倉氏遺跡資料館調査

平成17年は、新10カ年計画（中期第３次10カ年計画）の初年次にあたる。16年の雲正寺地籍の中断していた発掘を再開した。釉裏紅瓶や古手の石塔が多く出土。10月23日には皇太子殿下の行啓があり、当館および復原町並、一乗小学校の災害復旧状況のご視察があった。18年は、上殿・馬出地籍の試掘調査と、激甚災害復旧の砂防ダム建設予定地の遺構確認調査等を実施した。19年からは米津地籍の調査と月見櫓の試掘調査を実施する。20年には門の内地籍の発掘。21年からは福井市による一乗城山の公有地化にあわせて一乗山城の発掘調査を本格化する予定である。

環境整備

発掘調査の成果を充分に生かした平面復原を基本とし、建物礎石や溝石、井戸石、土塁などの遺構をそのまま野外展示するという、全国初の整備手法を採用し実施してきた。また、「史跡公園基本構想」にある園路整備や、便益施設や説明板の整備、景観保存のための修景整備等を実施し、昭和59年には「復原武家屋敷」、平成７年には「一乗谷町並立体復原事業」の完成をみた。

保存処理

昭和60年度から発掘調査で出土した遺物の中の木製品や金属製品等脆弱な遺物について、５カ年計画を作成し順次保存処理している。

今後の課題

一乗谷朝倉氏遺跡資料館が取り組んできた以上の諸事業については、約40年という長い年月が経過した。平成18年度末現在、①遺跡・遺構の修理および再整備事業、②一乗山城の公有地化と保存・発掘・整備・活用についての指針、③特別史跡の追加指定、指定地全域の公有地化、④「特別史跡公園」の完成と利活用、⑤「史跡公園法」の提唱、⑥当資料館を「（仮称）福井県立一乗谷戦国城下町研究所」に再編整備するなど、将来に残された重要な課題が山積している。

3．昭和59年度朝倉氏遺跡資料館事業

経費

発掘調査費　28,000千円

環境整備費　15,000千円

博物館費　18,000千円

計　61,000千円

発掘調査（昭和59年度は、「発掘調査・環境整備事業第4次5カ年計画」の3年次）

・第48次調査　安波賀町上武者野地籍（約200㎡。昭和59年4月2日～4月26日）

石敷や石積施設を検出。城下町の外辺部に火葬場のあったことが判明した。大量の火葬骨や土師質皿、銅銭18枚等が出土。

・第49次調査　城戸ノ内町奥間野地籍（約1,300㎡。昭和59年5月1日～8月15日）

・第50次調査　城戸ノ内町奥間野地籍（約1,300㎡。昭和59年8月1日～11月6日）

この地区で、3本目の幅の広い東西幹線道路を検出し、その道路間隔が約105m等間であることや、武家屋敷と町屋の間で突抜道の遺構が明らかになったことから、戦国城下町の計画的な町割普請の実態がかなり明らかになった。さらに、翌昭和60年には、幅約7.6mの東西幹線道路SS2001を断ち割って断面を観察することができた。よく叩きしめられた粘土質の山土の上に砂利を敷き詰めた厚さ5～10㎝の層が幾層も見られた。大きくは5回（細かく分けると9回程度）の嵩上げが考えられ、最下層の道路面と最上層の道路面との間には0.8～1.2mの差が認められた。城下町の初期と滅亡時では、その景観に人一人分の目線の違いのあったことが分かってきたのである。

また、第49次の武家屋敷から日本最古の黒漆書きの将棋の駒「歩兵」、墨書きの「王将」、「香車」、彫り駒の「金将」、黒漆の箱、聞香の源氏香の記号をあしらった蒔絵の櫛、羽子板、刷毛、地鎮具として用いられたとみられる土師質皿の入った曲物、雪バンバ、3本溝の敷居、草鞋、「西厳寺」銘が刻まれた石盤、角盥の渡し金、平鑿、錐など豊富な遺物が出土した。

環境整備

・第44次調査地　城戸ノ内町赤淵地籍整備工　2,850㎡

・福井市一乗谷史跡公園センターの南地区整備工　560㎡

・第12回朝倉氏遺跡調査研究協議会（昭和59年11月24日　当資料館）

出席者―文化庁　加藤　允彦　文化財調査官

委　員　青園謙三郎（郷土史家）

委　員　水上　勉（作家）　欠席

委　員　戸塚　文子（評論家）　欠席

委　員　木村竹次郎（朝倉氏遺跡保存協会長）

委　員　上坂　義雄（地元区長）

専門委員　石井　進（東京大学教授）

専門委員　近藤　公夫（奈良女子大学教授）

専門委員　重松　明久（福山女子短期大学長）

専門委員　田畑　貞寿（東洋大学教授）
専門委員　岸谷　孝一（東京大学教授）　欠席
専門委員　木原　啓吉（千葉大学教授）　欠席
専門委員　坪井　清足（奈良国立文化財研究所長）欠席
福 井 県　教 育 長
　　文化課長
福 井 市　教 育 長
　　文化課長
資 料 館　藤原　武二（館長・庭園）
　　中谷　　賢（次長・事務）
　　水野　和雄（文化財調査員・考古）
　　小野　正敏（文化財調査員・考古）
　　清田　善樹（文化財調査員・文献）
　　岩田　　隆（文化財調査員・考古）
　　吉岡　泰英（文化財調査員・建築）
　　南洋　一郎（文化財調査員・考古）

報　告―昭和59年度事業報告
　　昭和60年度事業計画

協議題―朝倉氏遺跡の見学者対策について

資料館事業

・朝倉館前の電柱撤去
　史跡景観の保全と館前芝生広場利用者の便宜をはかった
・公開講座の開催
　「中世瀬戸内の町草戸千軒」松下正司氏（昭和59.08.）
・資料館関係の刊行物
　福井県立朝倉氏遺跡資料館「要覧」（昭和59.08.20）
　特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XVI 昭和59年度発掘調査整備事業概報（昭和60.03.31）
　朝倉氏遺跡資料館紀要1984（昭和60.03.31）
・資料館総観覧者数
　59年度　　49,844名
・その他の関連事業・行事
　復原武家屋敷一般公開（昭和59.04.29～）
　第1回越前朝倉薪能で館前広場に3,000人（福井新聞社・㈶朝倉氏遺跡保存協会）（昭和59.05.20）
　豊原寺跡山城山墓地の発掘調査指導（丸岡町教育委員会の依頼）
　新県道鯖江・美山線完成し、供用開始。
　岸信介元首相、遺跡来訪。
・資料館研修旅行（近江風土記丘・安土城跡・彦根城方面）（昭和59.07.16）
　「ハンドブック一乗谷」刊行（資料館・㈶朝倉氏遺跡保存協会）（昭和60.03.25）

4．本報告書について

内　容

本報告書は、国庫補助事業として福井県教育委員会が昭和59年度に実施した第49・50次調査の報告書である。すでに『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XVI ～昭和59年度発掘調査整備事業概報～』と『朝倉氏遺跡資料館紀要1984』で概要を報告しているが、内容については本報告書が優先する。本書の構成は3章からなり、Ⅰは事業概要、Ⅱは第49次発掘調査、Ⅲは第50次発掘調査について記し、それぞれの章には小結を付した。

執　筆

本報告書は、昭和59年度の調査諸記録をもとに、以下の分担により執筆し、全体の編集は佐藤圭が担当した。Ⅰ 水野和雄、Ⅱ－1・2 佐藤圭、Ⅱ－3 川越光洋、Ⅱ－4 佐藤圭、Ⅲ－1・2 宮永一美、Ⅲ－3 水村伸行、Ⅲ－4 宮永一美

図　面

遺構平面図はアジア航測㈱に委託し、空中写真測量により作成したものを用いた。遺物実測については、当時の調査補助員と各担当者で作成し、遺物整理作業員がこれを助けた。付図や挿図として使用した地形図は、昭和44年に足羽町がパシフィック航業㈱に委託して作成した基本図（1／1,000）を使用した。

その他

本報告書の遺構図に用いた座標は、国土座標系「第Ⅵ系」である。また、遺構番号の頭に付した記号は以下の分類による。

SA：土塁・塀・柵、SB：建物（礎石・掘立柱等）、SD：溝・濠、SE：井戸、SF：石積施設（便所等）、SG：庭（池）、SI：門、SK：土壙（ピット・埋甕遺構等）、SS：道路・通路、SV：石垣・段、SZ：暗渠、SX：その他の遺構

5．第49・50次発掘調査および本報告書刊行に関わった職員

朝倉氏遺跡資料館職員（昭和60年3月31日現在）

藤原　武二（館長　庭園）
中谷　　賢（次長　事務）
水野　和雄（文化財調査員　考古）
小野　正敏（文化財調査員　考古）
清田　善樹（文化財調査員　文献）
岩田　　隆（文化財調査員　考古）
吉岡　泰英（文化財調査員　建築）
南洋　一郎（文化財調査員　考古）
久保　昭三（嘱託　事務）
山田　武男（嘱託　学芸）

川村　俊彦（調査補助員）

田中文右衛門　小林　英男　平鍋与津治　木村　政志　堀田　深　斉藤喜代松

山崎　庵　吉川　京一　福岡　栄　吉村　正雄　山根木茂麿　三崎チエ子

上坂　和子　梅田みさを　奥田　末子　奥田恵美子　岸田あや子　小林ヒサヲ

山下喜美子　山下千代子　吉川サダ子　石田はまを　石田ミヨ子　（以上、発掘作業員）

朝倉八重子　辻岡　幸子　石田　隆代　千葉　和子　天井　康昭　（以上、遺物整理員）

一乗谷朝倉氏遺跡資料館職員（平成19年3月31日現在）

青木　豊昭（館長　考古、嘱託）

水野　和雄（副館長　考古）

田中　直美（次長　事務）

佐藤　圭（総括文化財調査員　文献）

水村　伸行（主任　考古）

川越　光洋（主査　考古・保存科学）

宮永　一美（主査　歴史）

千木良礼子（文化財調査員　建築）

家城　直猛（嘱託）

松山　直子（嘱託）

竹田ひとみ（嘱託）

北野　薫（調査補助員）

辻岡　幸子　高木　愛子　斉藤　美保　松村　貴子　山岡　靖代　齋藤真裕美

山本真由美　酒井　智恵　（以上、遺物整理員）

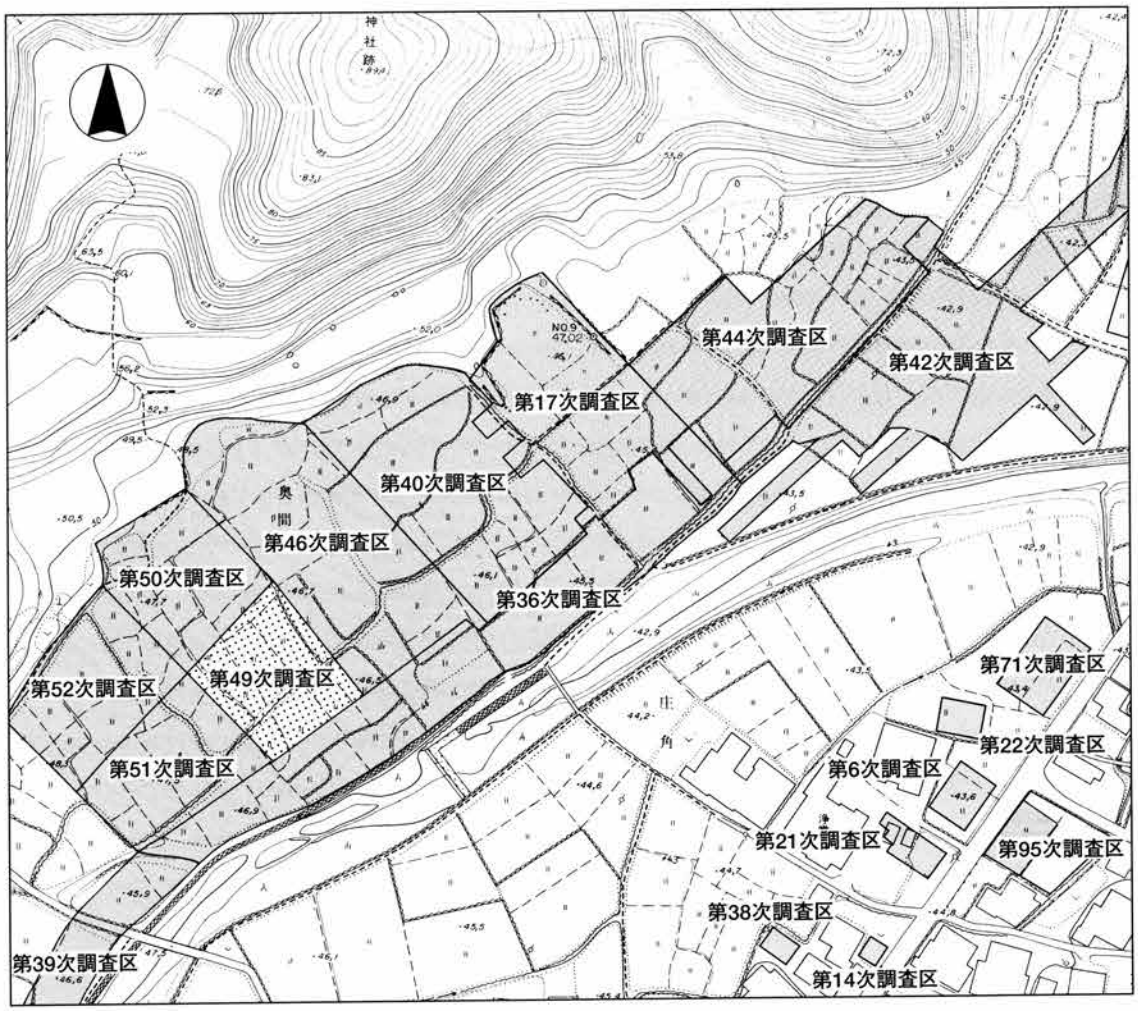
Ⅱ　第 49 次 調 査

Ⅱ　第49次調査

1．調査の経過と概要

今回報告する第49次調査地は一乗谷朝倉氏遺跡の中央部、福井市城戸ノ内町字奥間野地係に所在する。この調査地は城戸ノ内の谷の最も広くなった部分の北よりの赤淵・奥間野・吉野本地区にあり、一乗谷川より西側にあたり、朝倉義景館より北方に位置する。この赤淵・奥間野・吉野本地区は武家屋敷・寺院・町屋等の遺構が良好に残存し、全面的な発掘調査により、一乗谷の町割に関する重要な資料が得られたところである。

第49次調査は福井県立朝倉氏遺跡資料館によって昭和59年度に実施された。この第49次調査区の周囲は、それに前後する第36次、第46次、第50次、第51次、第52次調査により発掘されており、赤淵・奥間野・吉野本地区の平地部分は昭和60年度までに順次発掘調査された。この第49次調査は、それまでの発掘区を面的に拡大することによって、城下町的様相の全体像をより明らかにする資料を得ることを目的として実施され、引き続き、隣接する諸調査区も調査された。



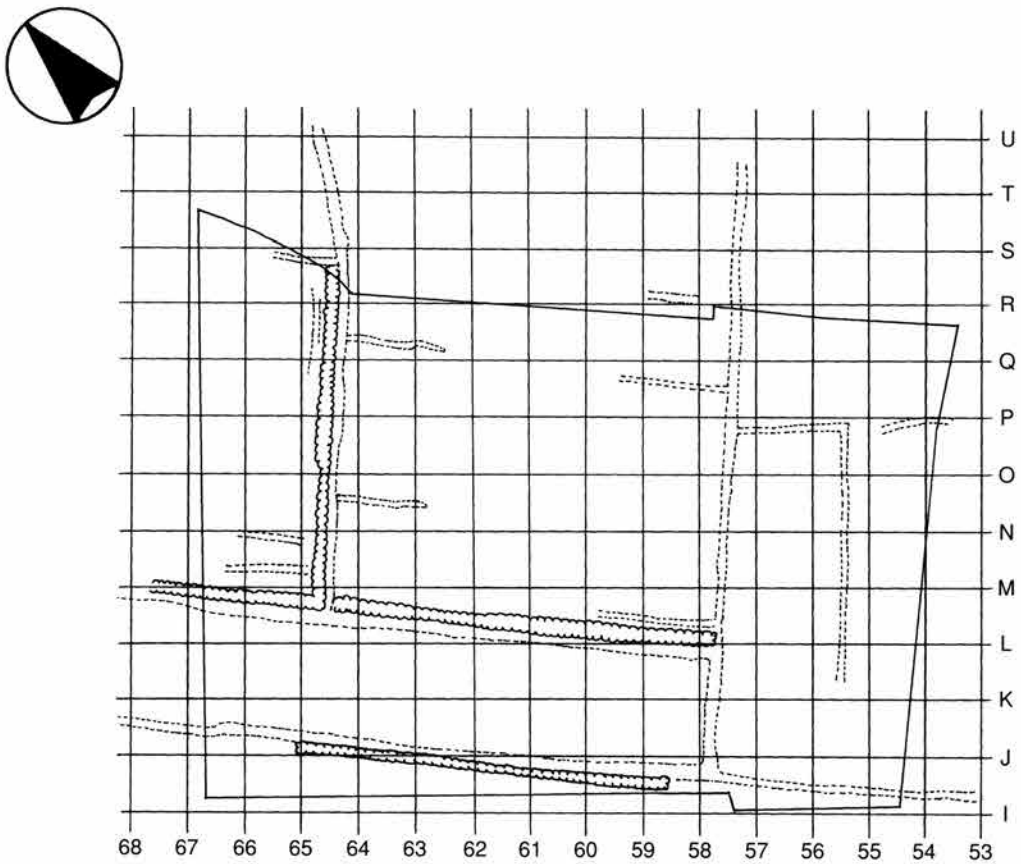
挿図1　第49次調査区周辺地形図（1／2,000）

調査は昭和59年４月17日から同年８月15日まで実施し、11月15日には第50次調査区とともに、ヘリコプターによる空中写真測量をおこない、遺構平面図の成果を得て終了した。

第49次調査区の設定は、先行する第46次調査区に接して幅約30m、奥行約40mの不整形の長方形の区画を設定した。調査区内は３mグリッドで区画し、I列からR列に至り、また54列から67列に至る。一部この列からはみ出た調査区もあり、調査面積は約1,300㎡となっている。

なお、以下の本文や写真・図版において、これまでの報告書と同様に、方位については、町割の方向によって実際の北より約45度東に振れた方向を北として叙述することにする。なお標高は測量値により小数点以下２桁まで示し、単位のmは省略した。

また、今回の報告で叙述する遺構の範囲は、第49次調査区のうち南北方向の溝SD2872とSD2699によって囲まれる武家屋敷と道路SS2001、SS2680に限定し、溝SD2872より西側部分の武家屋敷については、第50次調査と一括して次章において報告する。



挿図2　第49次調査区グリッド設定図

第49次調査日誌抄

昭和59年（1984）4月17日～7月28日

4·17～　25　排土。調査区の設定。

4·26～5·18　耕土取り。

5·21　地区杭打ち。

·22　畦石（57列）はずし。

·23　調査区東側から遺構検出。砂利敷道路SS2001、井戸SE2897、溝SD2864南端部、砂利敷道路SS2908、上層建物SB2883等の検出。ならびにI66区の溝等の検出。

·24　62ラインまで掘る。道路SS2689上のガラ石、上層井戸SE2900、建物SB2889、石積施設SF2906等の検出。道路SS2001の掃除。

·25　62～65ラインの遺構検出。一面に砂利面がある。建物SB2894の検出。

·26　溝SD2863の検出。

·28　L9附近で土塁石垣列SA2880を検出。タメマスSF2907を検出。溝SD2870の検出。1石のみ。L61附近で1石のみの溝石を検出。I62～67で巨大な平石を3個ほど確認。その高さぎりぎりに玉砂利が敷いてある。タメマスSF2906の掘り下げ。6段くらい。

·29　建物SB2894附近の下層遺構の検出。砂利面をはずす。

·30　井戸SE2900を1.8mぐらい掘る。漆木箱、青磁盤等出土。

6·1　57ラインから60ラインの砂利をはずし、下層の遺構面を検出する。東西溝SD2867、土塁内側の溝SD2866、雨落ち溝SD2871等の検出。

·2　タメマスSF2905、建物SB2887の検出。

·6　土塁際の溝SD2873、暗渠SZ2921の検出。57ラインの南北溝SD2699をO～Rまで下げて排水を良くする。

·7　町屋地区の確認。65ラインまで下層掘り始める。

·11　井戸SE2910の検出。

·12　P66附近の精査。

·13　建物SB2894の砂利面写真撮影し、砂利面をはずす。

·14　P65附近の掃除と写真撮影。

·15　P60附近の掘り下げ。

·21　道路SS2001にトレンチを入れる。道路SS2680にトレンチを入れる。7面まで確認した。（町屋部分の精査）

·28　（町屋部分の精査）

7·3　今日からN63附近の砂利はずして、暗褐色土または炭層を検出する。

·10　道路トレンチセクションとる。石敷SX2935検出。MN62附近で砂利敷検出。

·11　M61附近を掘る。有機質の暗褐色土を30cmほど下げると灰色土になり、ガラ石敷が検出された。礎石も若干検出された。下層南北溝SD2869の検出。黄土がピット上にあり、その下にガラ石が厚さ20cmくらいたまりその下から溝が検出された。

·17　K66附近の道路の掘り下げ。

·18　今日から溝を中心に深く掘り下げる。

·25　写真撮影のための掃除に入る。

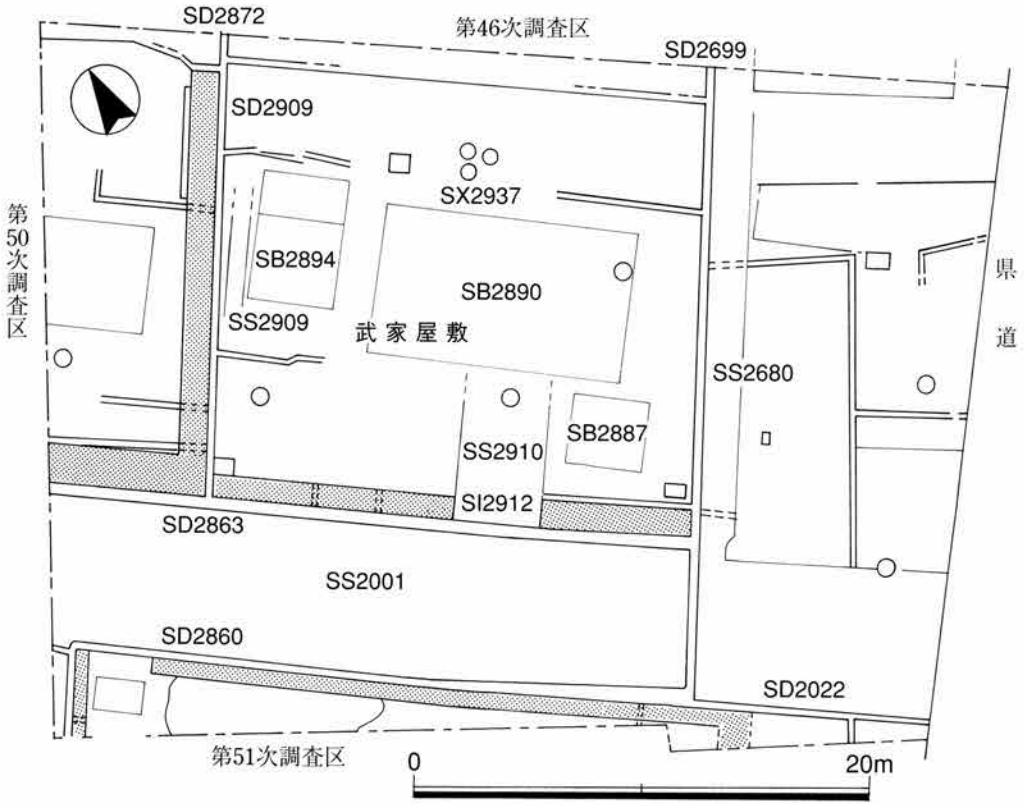
·27　発掘区の掃除。

·28　掃除仕上げ。

2．遺構（第1～5図、ＰＬ.1～9）

発掘調査の結果検出され、今回報告する遺構は、道路4、土塁1、門1、礎石建物8、溝11、井戸3、石積施設4等である。武家屋敷内の生活面はおおよそ4面検出され、それを囲む道路面については6面ないし9面の遺構面が確認されているが、それらの相互の対応関係は未詳である。まず耕作土より下の床土面上には一面に薄く小砂利が敷かれており、その際に検出したSA2880、SD2870、SV2683、SB2889、SB2893などの遺構面を第1面とする。第2面は、SD2866、SB2887、SF2905などが相当する。そして今回検出した主な生活面が第3面で、SI2912、SS2910、SB2890、SB2891、SB2894等である。それより下層の第4面以下にはSD2868、2869などがみられた。なお以下の叙述においては、遺構の相対的な関係について、上層・下層と表現し、調査区とは第49次調査区全体を指し、武家屋敷とは特に断らない限り、この節で報告する武家屋敷を指していっているものとする（挿図3参照）。

SS2001　調査区南部に位置する東西方向の幹線道路である。すでに第36次調査で溝SD2022とともに検出されている。今回の第49・50次調査では、それに続く長さ約64.5mを検出した。路面上端部の路肩の幅は一定せず、約6～7mとなっている。調査区中央の南北方向の62列セクションベルトの延長上に設けられたトレンチによれば、道路面には6面の砂利面が確認された。その標高は上層から47.09、46.93、46.81、46.63、46.47、46.27であり、それより下層は暗灰色粘土層、さらに下は青灰色粘土層で、そこに数本の杭が打ち込まれているのが見られた。また、このトレンチから約10m西方の路面にトレンチを



挿図3　第49次調査区略図

入れたところ、石列SX2924が検出され、それより南側部分は一面にガラ石を敷いたような状態であった。このガラ石の標高は46.88～46.93であり、石列と東西方向の土塁SA2881との間隔は約3.5mあった。この東西方向の道路SS2001はこの附近では両側に側溝を持っており、両側の側溝を含めた幅は約7.5mとほぼ一定している。この道路SS2001の上層の道路面の標高は、西端部で47.55、武家屋敷の東部で47.08であり、東側に行くほど低くなっており、平均勾配は9.8‰である。

SS2680　調査区東部に位置する南北方向の道路である。すでに北隣の第46次調査区で検出されており、今回それに続く約20mを検出した。調査区中央のN列に設けたセクションベルトの延長上に設定したトレンチの精査により、9面の道路面を確認した。その下は0.3～0.4m厚の炭層となっており、その下は青灰色粘土層である。この南北方向道路SS2680の西は側溝SD2699であり、道路の東は石列SV2682が南北に続いている。溝を含めた幅は1.9mであり、路面の幅は1.6m程度であるが、路面中央部には砂利面が顕著に残っている。路面の標高は、南端部で46.72、北端部で46.50を計っており、平均勾配は13.1%となっている。なおこの道路を横断する暗渠SZ2917、SZ2918が検出されている。

SV2683　調査区の北端にある東西方向の石列である。第46次調査で検出されており、その北側の大型建物SB2713と今回の調査区の武家屋敷とを区切る施設である。残存している石の標高は、西部では46.84～46.86、東部では46.76～46.80。

SD2699　調査区東部にある南北方向の石組みの溝である。すでに第46次調査で検出されている。南北道路SS2680の側溝である。道路と同様に約20mを検出した。幅0.5m、深さ0.9mあり、6石積んでいる。溝の東側は道路SS2680の縁石を兼ね、また溝の西側は武家屋敷の石垣列となっている。

SD2860　第49・50次調査区の南端部にある東西方向の石組みの溝である。東西方向の幹線道路SS2001の南側の側溝となっている。幅約0.5m、深さ0.9mあり、西から東へ流れ、南北方向の溝SD2699につながっている。長さ約52mを検出した。

SD2863　同様に第49・50次調査区の南部を東西方向に流れる石組みの溝である。東西方向の幹線道路SS2001の北側の側溝で、長さ約54mを検出した。

SD2865　調査区東南部の南北道路SS2680の南端部に設けられた東西方向の溝である。長さ1.9m、幅0.2mの木樋の両側に側石を配したものである。道路SS2680を横断し、西端部は暗渠SZ2917になっている。

SD2866　調査区東南部で、武家屋敷の内部の東南端に設けられた石組みの溝である。東西方向に長さ約7m検出した。南の側石は土塁石垣を兼ねている。北の側石は天端石も残っており、その標高は46.83～46.82を測る。

SD2867　武家屋敷内部の東北部に設けられた下層の石組みの溝である。東西方向に流れ、幅0.3m、長さ約6m検出した。天端の石の高さがほぼそろっており、標高46.64である。

SD2868　調査区の北端、武家屋敷の東北端で検出された下層の石組み溝である。幅0.3m、長さ3m検出。北側の天端の石が残っており、その標高は46.25である。以上3条の溝は、この屋敷の東側部分の排水溝と考えられ、西から東へ流れていたものと考えられるが、それから先の接続状況については詳らかでない。

SD2869　調査区北部の中ほどに検出された南北方向の石組み溝である。天端の石が東側に3個、西側に4個残っているだけである。幅0.35m、長さわずかに1.2mを検出。天端の石の標高は46.46を測る。

SD2870　調査区西部に検出された上層の東西方向の石組み溝である。側石の残りが悪いが、5mほど検出した。天端石が数個残っており、それらの標高は46.88～46.91である。東から西へ流れ、溝SD2872

につながっている。

SD2871　調査区西部に検出された上層の東西方向の石組み溝である。側石の残りは良いが、連続しておらず、改修を重ねた結果とみられる。長さ6.6m。天端石の標高は、46.74～46.76のものが多く、後述する礎石建物SB2894の母屋部分の礎石の標高と一致することから、その雨落ち溝とみられる。東から西に流れ、南北方向の溝SD2872につながる。

SD2872　調査区西部にある南北方向の石組み溝である。南端は暗渠SZ2290により溝SD2863につながり、北端は第46次調査で検出した溝SD2704につながっている。長さ19.2mで、西側は西隣の武家屋敷の土塁石垣SA2882であり、また東側の上層の側石はほとんど残っていない。幅約0.4m、深さ1.1m。

SA2880　調査区南部に位置する東西方向の土塁である。この武家屋敷の南辺を区切る重要な遺構で、土塁南面の石垣はよく残っている。北面の石垣は溝SD2866附近で検出された他は詳らかでない。土塁の幅は1.2mで裏込めにガラ石が多く詰まっていた。長さ21.4m。南面の土塁石垣は、高さ1.0～1.5m残存している。東端部の石垣上には、高さ0.7～0.85mの巨石が残存しており、東端の巨石は通称「おこり岩」といわれている。この土塁南面の石垣中に暗渠3、門1を検出しており、武家屋敷の南辺全体がこの土塁であったと考えられる。西隣の武家屋敷南辺の土塁SA2881と連続しているが、土塁幅がかなり異なり、別個のものと考えられる。

SB2887　調査区南部にある礎石建物で、この武家屋敷の東南部に位置している。土塁SA2880に並行する東西方向の礎石列を検出した。礎石の標高は46.87～46.94である。

SB2888　武家屋敷の東南部に位置する礎石建物で、前述の建物SB2887の北隣に検出された下層遺構である。礎石の残りは悪いが、その標高は46.59～46.60である。

SB2889　調査区中央にある大きな礎石建物で、この武家屋敷の中心部に位置する上層遺構である。礎石は長径0.4～0.55mの大ぶりのものが残っており、これを残して下層遺構を検出した。各礎石の標高は46.88～46.96であり、井戸SE2900や建物SB2887と同レベルの上層遺構である。土塁SA2880と同じ方向の東西約11.5m、南北約6.7mの建物が確認されるが、東側に1mほど延びて井戸を内部に完全に取り込み、また建物SB2887とつながっていた可能性がある。

SB2890　前述の建物SB2889と同位置、同規模の下層遺構である。東西11.43m、南北6.68mの礎石建物。礎石の標高は46.50～46.63で、SB2889より約0.3m深い所にある。礎石の周囲にこぶし大の石を帯状に配石していることから建物の規模はこれ以上は拡がらないと考えられる。そして北側にある東西方向の溝SD2867は、側石の高さが、この建物の礎石の高さとほぼ一致することから、この建物の雨落ち溝と考えられる。この建物SB2889およびSB2990は、この武家屋敷の敷地の中央に位置する最も大きな建物であり、この屋敷の中心的な建物としてその機能を維持しつつ建て替えられたものと考えられる。

SB2891　調査区の北部にある小規模な礎石建物である。武家屋敷の北端部にあり、小ぶりの礎石がよく残っており、東西約2.9m、南北1.9mの建物が想定できる。この附近の遺構面の高さは46.68で礎石の標高は46.69～46.81を測る。この高さは、後述する建物SB2894の礎石の高さに近い。

SB2892　調査区南部に位置する上層の礎石建物である。大型の礎石2個が残っており建物跡と想定されるが、詳細は不明である。各礎石の標高は46.75と46.76で間隔は約1.5mである。この2個の礎石の位置は、建物SB2887の礎石の延長線上に位置しているが、高さが異なり、時期的にみて無関係であろう。

SB2893　武家屋敷の西部に位置する上層の礎石建物である。大型の礎石3個が検出された。その標高は46.98、46.96、46.92で、建物SB2889の高さに近く、関連する可能性も想定されるが、詳細は不明である。

SB2894　武家屋敷西部に位置する礎石建物で、東西3.78m、南北5.67mを測る。建物SB2889・2890の西隣に位置している。礎石の残りが非常によく、東辺の一部を除いてほぼ完全に残存していた。一辺につき9個の石を並べて、その北辺には庇が付く。礎石の標高は46.71～46.82であるが、標準的と見られる高さは、母屋部分で46.72～46.73、庇部分で46.81～46.82とみられる。礎石の方向は建物SB2889・2890とほぼ同方向である。母屋部分の2間四方の建物の礎石には、1間の4分の1づつに線刻が施されており、1間が6尺2寸5分であることが確認された。母屋内には、厚さ0.08～0.13m程度に小砂利が敷かれており、その下に黄色土を若干掘りくぼめて、南北方向に4本の根太SX2936が据えられていた。

SE2899　調査区中央に位置する石組み井戸である。径0.8m。天端石が1石残っており、その標高は46.80を測る。深さ2m発掘した。

SE2900　調査区東よりに位置する石組み井戸である。良好に残る上層遺構で、天端石の標高は46.96～47.00を測る。上層の建物SB2899と同レベルの遺構である。

SE2901　調査区西部に位置する石組み井戸である。上部は破壊、攪乱されており、約1m下から石組みが見られる。

SF2905　調査区東南部にある石積施設である。武家屋敷の東南隅に位置する。完全に残っているのは最も下の1石のみで、3辺は直線状、西の1辺は曲線状に石が並んでいる。、東西1m、南北0.8m。底部の標高は46.61あり、上層遺構である。

SF2906　調査区北部にある石積み施設である。よく残っており、下から6石程度を検出した。東西1.08m、南北0.96m。底部の標高は46.27。下層遺構である。

SF2907　調査区西南部にある石積み施設である。残りが悪い。底部の標高は、46.59で上層遺構である。以上3個の石積み施設のうちSF2905とSF2907は武家屋敷の東南隅と西南隅に位置し、かつ高さもほぼ同じで時期的に対応する遺構と考えられる。

SS2909　調査区西部にある南北方向の砂利敷道路である。武家屋敷の西辺に位置し、建物SB2894と溝SD2872の間の通路となっている。幅約1mで、長さ約8m検出した。路面の高さは、46.66～46.69。北端部はやや大きな砂利が敷かれており、高さ46.74を測る。

SS2910　調査区中央部、武家屋敷の南辺中央に位置する砂利敷の道路である。後述する門SI2912のすぐ内側にあり、幅3.7mにわたって小砂利が固く敷かれていた。縁石列も検出できたことから、屋敷内に入る通路とみられる。路面の高さは46.57～46.60を測り、下層建物SB2890に対応する。

SI2912　調査区南部、武家屋敷の南辺中央東よりに位置する門である。下層遺構で左右の袖石が完全に残っており、石垣中に埋められている。幅約2.10m。

SX2931　調査区の東部、屋敷地の東南部にある下層の石敷である。標高46.06～46.08。

SX2932　調査区の東部、武家屋敷の東辺部にある南北方向の石列である。約3m検出。高さは46.94～47.08で建物SB2889の礎石列と同じであることから、この建物の東部を区画する石列とみられる。

SX2933　調査区北部に数個残る石列である。

SX2934　門SI2912の内側の上層遺構で、石列とその西側の砂利敷を検出した。この砂利敷の高さは46.95～46.98で非常に高い。

SX2935　武家屋敷西南隅に位置する下層遺構で、長径0.35～0.5mの大ぶりの石を敷きつめた遺構である。石の高さは、46.64～46.71。

SK2937　武家屋敷の北部中央に検出された3個のピットである。大甕の抜き取り穴とみられる。底部

の標高は46.38～46.39であり、上層遺構である。

SX2938　屋武家屋敷西北部にある砂利敷と石列である。南隣の溝SD2871より下層の遺構で、砂利面の高さは46.65。

3．遺物（第6～15図、ＰＬ.10～18、表1･2）

本報告で取り扱う遺物は第49次調査の東西道路（SS2001）と武家屋敷および周囲にめぐる溝からの出土遺物である。出土遺物の総点数は19,406点を数える。調査面積約1㎡あたりの密度は29.1点/㎡となる。遺物の内容は多様であり、金属製品、石製品、木製品が多種出土した。

器種			破片数	%
日本製陶器	越前焼	甕	1,921	
		壺	500	
		鉢	156	
		擂鉢	637	
		桶	1	
		花生	1	
		計	3,216	16.57
	土師質	皿	12,903	
		羽釜	59	
		土鈴	15	
		灯芯押	1	
		小壺	1	
		計	12,979	66.88
	鉄釉	碗	194	
		皿	23	
		茶入	10	
		壺	36	
		瓶	1	
		水滴	1	
		計	265	1.37
	灰釉	碗	38	
		皿	128	
		鉢	4	
		香炉	3	
		計	173	0.89
	瓦質	香炉	22	
		手焙り	5	
		計	27	0.14
	信楽		2	
	その他		67	
	計		69	0.36
合計			16,729	86.21

器種			破片数	%
中国製陶磁器	青磁	碗	118	
		皿	149	
		鉢	9	
		盤	22	
		壺	8	
		香炉	7	
		花瓶	1	
		蓋	1	
	計		315	1.62
	白磁	碗	2	
		皿	472	
		杯	20	
		合子	1	
	計		495	2.55
	染付	碗	148	
		皿	277	
		杯	7	
		盤	1	
	計		433	2.23
	青白磁		7	
	その他		3	
計			10	0.05
朝鮮製			43	0.22
合計			1,296	6.68

器種		破片数	%
金属製品	釘	114	
	煽止金具	5	
	鋲	1	
	楔	1	
	錐	3	
	鑿	1	
	鍬	1	
	刀	1	
	刀子	16	
	鏃	3	
	毛抜き	4	
	刀装具	1	
	笄	1	
	簪	2	
	金覆輪	1	
	小札	2	
	切羽	1	
	鈴	3	
	蓋	2	
	鍋	1	
	火打金	2	
	火箸	8	
	火皿	2	
	紅皿	1	
	盤	1	
	紡錘車軸	1	
	環付金具	4	
	飾金具	4	
	鉄製金具	4	
	銅製金具	8	
	銅銭	199	
	鉱滓	1	
	その他	1	
合計		400	2.06%
石製品	臼	3	
	硯	22	
	鉢	11	
	盤	29	
	砥石	17	
	火鉢	2	
	火炉	61	
	板石	8	
	井戸枠	1	
	環状石斧	1	
	その他	19	
合計		174	0.90%

器種		破片数	%
木製品	漆皿	27	
	漆碗	34	
	黒漆鉢	3	
	円盤	2	
	楕円盤	1	
	壺形木製品	1	
	箸	34	
	灯明台	1	
	家具材	24	
	箱物	3	
	折敷	33	
	片木板	47	
	栓	1	
	桶	47	
	櫛	7	
	草履	1	
	下駄	16	
	敷居	1	
	柱材	25	
	楔	31	
	曲物	22	
	木簡	7	
	ヘラ	1	
	杭	5	
	将棋	4	
	柄	4	
	木刀	1	
	鍔	1	
	舟	1	
	竹材加工物	9	
	その他	309	
合計		719	3.71
その他	ガラス玉	1	
	坩堝	1	
	壁土	1	
	骨	41	
	貝	6	
	種子	33	
	雲母	1	
	その他	4	
合計		88	0.45
総合計		19,406	100

表１　第49次調査出土遺物一覧表

遺物の整理および掲載は、はじめに耕土・表採の遺物をまとめ、つぎに東西道路（SS2001）と側溝および武家屋敷を区画する南北溝からの遺物をまとめた。最後に武家屋敷内の上層・下層遺構の出土遺物および整地層からの遺物をまとめた。本調査区は多種多様な遺物が出土しているが、時間的制約および筆者の力量不足のため多数の遺物の図・写真を掲載できなかったことは否めないが、出土遺物の種類・数量については表１を参照していただきたい。今後、図・写真等が未掲載になった遺物が重要な遺物と判断されたものについては別稿で報告するものとする。

遺物の分類については既刊の報告書を踏襲し、越前焼大甕・擂鉢の分類は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983年、土師質皿は『朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』1979年による。

耕土出土・表採遺物（第６図、PL.10）

ここで扱う遺物は調査区全体を覆う耕土（表土層）出土である。また、調査終了後等に採集した遺物についても出土位置不明なため、ここでまとめて報告する。

越前焼　(1)～(3)は越前焼甕である。(1)は口縁の肥大するⅣ群ｃに属する大甕である。(2)はⅣ群ａに属する。(3)はⅢ群に属する。(4)･(7)･(8)は鉢である。(4)は口径16.2cm、器高5.5cmを測る。内面底部に櫛による同心円文を有する。(7)は口径33.6cmを測り、内面上部に半同心円文を有する。(8)は口径33.4cmを測り、内面上部に７条の半同心円文を有する。(6)は口径32.0cmを測り、11条１単位の擂目を持つⅢ群に属する擂鉢である。(9)はⅣ群に属する擂鉢で９条１単位の擂目を持つ。

土師質土器　(10)は口径7.0cm、器高1.9cmを測るC類の皿であり、(11)･(12)はともに口径10.6cmのD類の皿である。器高は、それぞれ2.5cmと2.2cmを測る。(13)は土鈴である。(14)は(13)土鈴の土玉である。

瀬戸・美濃焼　(15)は口径13.2cmを測る鉄釉の壺である。(16)は口径10.4cm、器高2.7cmを測る鉄釉皿である。(18)は鉄釉の水滴である。口縁の一部と把手を欠損している。底部は糸切である。(17)は口径9.0cm、器高2.2cmを測る灰釉皿である。

中国製陶磁器　(20)は碁笥底で内面に捻花が描かれる染付皿である。口径10.4cm、器高3.0cmを測る。

金属製品　(21)は笄である。表面には魚子地に丸菱文が3箇所配置される。魚子は1cm²あたり約160個数える。最大幅1.2cm、全長20.7cmである。耳掻きは歪んでいる。(22)～(26)は銅銭である。(22)は開元通宝、(23)は祥符元宝、(24)は天聖元宝、(25)は皇宋通宝、(26)は元豊通宝である。

その他　(19)は口径5.2cm、器高2.0cmの坩堝である。高温に曝されたため表面は細かく軽石状に穴があく。

SS2001出土遺物（第７図、PL.11）

幅約5.5mの東西方向に走る道路SS2001から出土した遺物を報告する。

越前焼　(27)は口径35.5cm、器高7.9cmの越前焼鉢である。

瀬戸・美濃焼　(28)は口径11.6cmの鉄釉碗である。(29)口径12.4cmの鉄釉碗である。

中国製陶磁器　(30)は口径13.5cm、器高2.9cmの染付皿である。外面には牡丹唐草文、内面底部には玉取獅子が描かれる。

金属製品　(31)は煽止金具である。断面は多角形の稜がみられるが、ほぼ円形を呈する。(32)は最大長5.6cmを測る釘である。

石製品　(33)は通称、笏谷石といわれる緑色凝灰岩製の行火である。５個の透かし窓が確認でき、削り

だしの2足がみられる。

SD2860・SD2863出土遺物（第7・8図、PL.11・12）

SS2001の南辺側溝であるSD2860と北辺側溝SD2863から出土した遺物を報告する。SD2860からの遺物は(53)と(58)である。以外はSD2863からの出土である。

土師質土器　(34)～(36)は手づくねによる成形のみで回しナデを施さないB類の皿である。(34)は6.4cm、器高1.5cmを測る。(35)は口径6.7cm、器高1.6cmを測り、(36)は口径7.4cm、器高2.15cmを測る。(37)～(45)はC類の皿である。(37)・(38)は口径6.5cm前後、器高1.5cm前後を測る。(39)～(41)は口径7.5cm前後、器高2cm前後を測る。(42)～(45)は口径8.5cmから9.5cm前後を測り、器高は2cm前後を測る。(46)・(47)はD類の皿である。(46)は口径11.8cm、器高2.5cmを測り、器高2.5cmを測る。(47)は口径10.8cm、器高2.3cmを測る。(48)～(50)は羽釜である。(48)は口径11.3cm、(49)は口径9.3cm、(50)は口径8.3cmを測る。いずれも羽部より下の外面は煤が多量に付着する。また突帯部にはヘラ記号がみられる。

中国製陶磁器　(51)は口径11.9cm、器高6.5cmの染付碗である。外面には中央に松、左に竹、右に梅を配置する松竹梅文が2単位描かれる。内面は無文で口縁に2条の界線、内部底面には牡丹唐草が描かれ、周囲に2条の界線を有する。

金属製品　(52)は足金物である。黒漆が施され、各端部は使用擦れによる漆剥げが確認できる。

(53)は鞘である。(54)～(58)は銅銭である。(54)は五銖、(55)は至和元宝、(56)は聖宋元宝、(57)・(58)は元豊通宝である。

木製品　(59)は栓である。(60)～(62)は曲物の底である。(60)については、孔が3箇所ある。(63)は黒漆椀である。底部に「法十」の漆書文字が認められる。(64)は鍋蓋の把手であり、釘が多数打ち込まれている。(65)は用途不明であるが、両端に径約1.0cmの穴が在り、中央部が括れる加工木製品である。(66)は鞘である。(67)・(68)は将棋の駒である。(67)は「王将」の墨書が残る。(68)は「金将」の文字が線刻されている。

SD2872出土遺物（第8図、PL.12）

第49次調査区と第50次調査区の武家屋敷を区画する南北方向溝からの出土である。

越前焼　(69)はⅣ群の擂鉢である。8条1単位の擂目を持つ。(70)は口径9.5cm、器高12.3cmを測る壺である。肩部にヘラ記号を有する。(71)は口径5.6cmを測る壺である。

土師質土器　(72)は口径6.5cm、器高1.5cmを測るC類の皿である。内面には獣戯画を有する。2頭描かれているが、描かれた動物は判然としない。(73)～(81)はC類の皿である。(73)は口径6.2cm、器高1.3cmを測る。(74)は口径7.2cm、器高1.6cmを測り (75)は口径7.0cm、器高1.8cmを測る。(76)～(79)は口径8.5cm前後、器高2cm前後を測る。(80)は口径9.6cm、器高2.0cmを測る。(81)は口径10.4cm、器高2.55cmを測る。

瀬戸・美濃焼　(82)は口径12.2cm、器高6.4cmを測り、(83)は口径11.6cm、器高6.0cmを測る鉄釉碗である。(84)は口径11.4cm、器高2.8cmを測る灰釉皿である。

中国製陶磁器　(85)は口径11.2cm、器高2.9cmを測る青磁稜花皿である。内面口縁部にはヘラにより3条の花弁風の文様が施され、内面には草花文が3単位描かれる。内面底部は釉の掻取がみられる。また、

内面は使用による細かな擦痕がみられる。底部には黒漆が付着する。(86)は香炉である。(87)は口径11.6cm、器高2.9cmの染付皿である。

金属製品　(88)・(89)は銅銭である。(88)は開元通宝であり、(89)は永楽通宝である。

SD2699出土遺物（第9図、PL.13）

武家屋敷とSS2860を区画する南北方向溝からの出土である。

土師質土器　(90)はB類の皿である。口径7.15cm、器高1.8cmを測る。(91)～(97)はC類の皿である。(91)・(92)は口径6.5cm前後、器高2cm前後を測る。(93)～(97)は口径9cm前後、器高2cmから2.5cm前後を測る。

瀬戸・美濃焼　(98)～(101)は鉄釉碗である。(98)は口径12.2cm、(99)は口径11.0cm、(100)は口径11.2cmを測る。(101)は口径9.0cm、器高4.6cmを測る。(102)は口径11.2cm、器高2.4cmを測る灰釉皿である。

中国製陶磁器　(103)は口径11.7cm、器高3.0cmの白磁皿である。釉調は良好で灰白色を呈する。口縁部内面から外面全体に黒ずんだ濁りがみられる。また、高台内には「一」の字状の墨書がみられる。

金属製品　(104)は用途不明である。最大長11.2cmを測り、中央部で引きちぎられている。(108)～(116)は銅銭である。(108)は開元通宝、(109)は至道通宝、(110)は景徳元宝、(111)は天禧通宝、(112)は天聖元宝、(113) は皇宋通宝、(114)は嘉祐元宝、(115)は紹聖元宝、(116)政和通宝である。

木製品　(105)は黒漆の施された木製品である。家具材であると考えられている。(106)は下駄である。径0.5mmの紐の穴の他に辺約0.2mmの方形の穴が8箇所ある。そこには鉄製あるいは木製の釘状のものが打たれている。(107)は外面、内面に草花文が朱漆で描かれた黒漆椀である。ほぼ完形で出土しているが、器形の歪みが著しい。また、底部は高台部分が削り取られており、胴部から腰部にかけての位置に穿孔が施されている。

武家屋敷上層遺構出土遺物（第10・11図、PL.14・15）

武家屋敷内の上層遺構から出土した遺物である。SD2870から(127)、SE2900から(140,141)、SE2901から(136)、SF2906から(118,119,137)、SF2907から(138)、SZ2918から(134)、SZ2920から(129)、SX2937から(130,133)が出土している。以外は遺構面からの出土である。

越前焼　(117)～(119)は甕である。(117)はⅣ群に属する。(120)はⅣ群に属する擂鉢で、擂目は非常に密である。(121)は8条1単位とする擂目をもつ擂鉢である。内面底部にも施される。

土師質土器　(122)・(123)はC類の皿である。それぞれ口径8.6cm、器高2.1cmと口径9.0cm、器高1.9cmを測る。(124)は口径11.7cm、器高2.5cmを測るD類の皿である。

瀬戸・美濃焼　(125)・(126)は鉄釉碗である。(125)は口径12.6cm、(126)は口径12.4cm、器高6.1cmを測る。

中国陶磁器　(127)は器高2.1cm青磁皿である。(128)は口径9.9cm、器高3.1cmの青磁の菊花皿である。(129)は碁笥底の染付皿である。内面に捻花文が描かれる。(130)は口径20.2cm、器高4.2cmの染付皿である。外面、内面底部に花牡丹菊唐草文が描かれる。

金属製品　(131)・(132)は鐶付金具である。鐶台には装飾が施される。菊花文の周囲は、籠目の毛彫を有する。(133)は小札である。表面には炭化物が付着している。(134)は火箸である。上部4面ともに魚

子打ちによる波状の文様が施されている。(135)は片刃の刀である。刀部現存長23.1cm、刀部最大幅2.2cm、茎長8.9cmである。(136)～(137)は銅銭である。(136)は元祐通宝、(137)は熙寧元宝、(138)は至道元宝である。

石製品　(139)は硯である。海部縁辺を一部欠損しているが良好に遺存している。陸部隅、海部に墨痕が残る。

木製品　(140)は黒漆の箱で短辺の側板1枚が欠失している。箱物に組むための木釘痕がみられる。(141)は漆塗木製品である。用途は不明であるが、片面は黒漆、その裏面は朱漆が施されている。漆膜の残らない部分は焼け焦げている。

武家屋敷下層遺構出土遺物（第11図、PL.15）

武家屋敷内の下層遺構から出土した遺物である。SD2871から(144)、SB2890から(145, 148, 149, 155, 157)、SB2894から(146, 147, 150)、SD2866から(161)、SD2868から(151)が出土している。以外は砂利敷面からの出土である。

越前焼　(142)・(143)はⅢ群に属する擂鉢である。(142)は11条1単位の擂目である。(143)は7条1単位の擂鉢である。内面底部にも擂目を有する。

土師質土器　(144)～(147)はC類の皿である。(144)・(145)は口径7cm前後、器高1.5cm前後を測る。(146)・(147)は口径9.0cm前後、器高2cm前後を測る。(148)は口径7.6cm、器高1.5cmを測る皿である。底部が穿孔されている。(149)は土鈴である。

瀬戸・美濃焼　(150)は口径12.6cmを測る鉄釉碗である。

中国製陶磁器　(152)は口径27.8cm、器高6.0cmの青磁盤である。(151)は口径11.9cm、器高2.5cmを測る白磁皿である。(153)は口径6.2cmの染付杯である。割口には漆による接合痕がある。

金属製品　(160)・(161)は銅銭である。(160)は唐国通宝、(161)は元豊通宝である。

石製品　(154)は完形の硯である。内面隅には墨の痕跡がみられる。

木製品　(155)は将棋の駒である。表裏に「香車」「金」が墨書されている。(156)～(158)はいわゆる1ツ目下駄である。(159)は漆塗木製品である。家具材と考えられている。釘穴が2箇所存在する。

武家屋敷整地層出土遺物（第12～15図、PL.16～18）

武家屋敷内の整地層から出土した遺物である。各土層の説明は第1図に譲る。遺構面下層から(163)、砂利面下層から(166～174,196～201,221,230,233,236,237,239,241～243,253)、砂利面下炭層から(162,175～186,202～212,224,223,226,232,234,238,245,251,302,305,311,313,316)、砂利面炭層から(165,227,231)、砂利面下青色山土層から(164,187～195,214～220,222,225,228,235,240,246～250,303,309,310,314)、ガラ石下褐色有機質層から(213,299)、砂利下暗褐色土層から(167,312)、土塁下暗褐色土層から(307)、青色整地土下層から(252,300,301)、砂利面石列下層から(304)が出土した。その他、土層確認畦から(229,244,255,256,306)やトレンチから(254,308,315)が出土した。また、銅銭の出土については表2を参照されたい。

越前焼　(162)・(163)はⅣ群に属する擂鉢である。(162)は9条1単位の擂目を持ち堅く焼き締まっている。(163)は11条1単位の擂目を持ち、口縁内部に1単位の擂目を周回させている。焼成は堅く焼き締まっている。(164)は口径37.2cm、器高7.2cmの鉢である。焼成は堅く焼き締まっている。(165)は口径

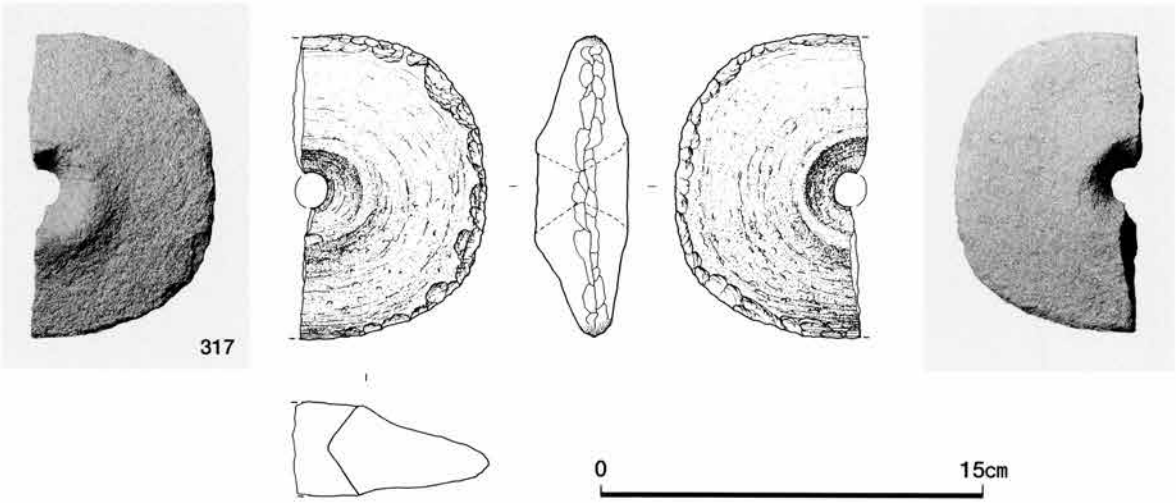
7.2cmの越前焼掛花生である。円筒形をなし、口縁から1.7cm下に方形の孔を持つ。

土師質土器　(166)は口径1.9cm、器高2.4cmを測る土師質の小壺である。底部外面には指痕が残る。(167)～(188)、(190)～(220)はC類の皿である。(167)～(195)は口径6～7cm前後、器高1.5cm前後を測る。(196)～(220)は口径9cm前後、器高2cm前後を測る。(189)は本遺跡では類例の少ないF類である。口径5.7cm、器高1.3cmを測る。(221)～(229)はD類の皿である。(221)・(222)・(224)・(225)・(227)は口径11cm前後、器高2～2.5cm前後である。(223)・(226)・(228)・(229)は口径13cm～14cm前後を測る。

瀬戸・美濃焼　(230)・(231)は鉄釉碗である。それぞれ口径は12.0cmと11.6cmである。(232)・(233)は灰釉碗である。(232)は口径11.9cm、器高6.5cmである。口縁はほぼ直立する。外面にヘラ削りの稜を残す。釉調は澄んだ淡緑色を呈し、光沢を残す。(233)の口径が13.0cmである。(234)・(235)は灰釉皿である。(234)は口径10.8cm、器高2.6cmであり、(235)は口径10.8cm、器高2.5cmである。

中国製陶磁器　(237)・(238)は線描きの蓮弁文が施された青磁碗である。(237)は底径4.4cmを測り、内面底部に吉祥文を呈する。(238)の口径は13.8cmである。(236)は青磁盤である。(239)は口径6.6cmを測る染付坏である。外面に蓮池文が描かれる。(240)は11.4cm、器高6.1cmであり、外面に獅子文と牡丹唐草文を1単位とする文様が3単位描かれる。底面内部には2条の界線内に牡丹唐草文を呈する。高台内には「天」がみられる。(241)～(243)は染付皿である。(241)は口径12.3cm、器高2.8cmを測り、(242)は口径12.4cm、器高2.6cmを測る。ともに外面に牡丹唐草文、内部底面に玉取獅子が描かれる。(243)は口径9.8cm、器高2.1cmを測り、外面は牡丹唐草文を、内面底部には花文が描かれる。

金属製品　(244)・(245)は小柄である。(244)には毛彫りによる柑橘文が施されている。(245)は真鍮製で列点文が施されている。(246)は火打金である。紐孔を呈する。(247)は飾り金具であり、両端に釘穴を有する。(248)・(249)は鈴である。(250)は口径5.1cm、器高2.3cmの紅皿である。(251)は煽止金具である。断面は多角形に近い稜をもつ。(252)は錐である。(253)は鑿である。(254)は把手である。(257)～(298)は銅銭である。(257)・(258)は開元通宝、(259)は唐国通宝、(260)は太平通宝、(261)は至道元宝、(262)は咸平元宝、(263)は景徳元宝、(265)は祥符元宝、(266)は天禧通宝、(267)・(268)は天聖元宝、(269)～(272)は皇宋通宝、(273)至和元宝、(274)は嘉祐通宝、(275)は嘉祐元宝、(276)・(277)は治平元宝、(278)～(280)は熙寧元宝、(281)・(282)元豊通宝、(283)～(285)は元祐通宝、(286)大観通宝、(287)・(288)は聖宋元宝、(289)・(290)は政和通宝、(291)は正隆元宝、(292)は淳熙元宝、



挿図4　石器

(293) は嘉泰通宝、(294)・(295) は洪武通宝、(296) は永楽通宝、(231) は宣徳通宝、(298) は朝鮮通宝である。

石製品　(255)・(256) は硯である。ともに脚の削りだしはない。(256) は陸部の左半分が非常に擦り減っている。また、(挿図4、317) の環状石斧と考えられる打製石器がSD2863最下層（青色砂礫土層）から検出された。扁平な円形で、周縁は刃状に狭まり中央に孔を有する。輝石安山岩製である。同層からの伴出遺物はない。永平寺町の栗住波遺跡から出土例がある。

木製品　(299) は外面および内面に開扇文を朱漆で描いた黒漆皿である。高台内には「二」の文字線刻を有する。口径9.2cm、器高2.8cmを測る。(300) は口径8.9cm、器高2.1cmの朱漆皿である。内部底面には液状の物質が凝固した痕跡がある。(301) は蒔絵の櫛である。歯はほとんど欠損している。(302) は縦6.4cm、横6.6cm、厚さ0.6cmを測る木製の鍔である。四隅を面取りし、朱と墨で輪違文が描かれている。(304) は墨書されているが書き散らした様子があり、判読できない。文字であることも疑わしい。(303) は木札である。墨書されている。「し□まいるとの、いわほ」と書かれているようにも見えるが、文字の判読は困難である。(305) は将棋の駒である。表裏ともに黒漆で「歩兵」「と」が書かれている。漆文字の将棋の駒は、これが初見である。(306) は羽子板状木製品である。(307) は舟である。最大長23.1cm、最大幅9.8cm、最大高3.8cmを測る。中央付近に底まで貫通する径0.15cmの孔を施す。(308) は雪ばんばである。最大長123.4cm、最大幅21.8cmを測る。柄部は四隅を面取りしており、断面は多角形を呈する。櫂状の部分には表面に三角形の記号が刻まれている。(309) は黒漆が施された木製品である。U字状の幅約2.5cmの溝を持っていたようだ。(311) は竹材を加工したものである。用途は不明である。(310)・(312) はいわゆる1ツ目下駄である。(310) には焼ゴテで型押しされた斜格子目を有する。(313) は約0.6cmの穴の他に径約0.1cmの穴が11箇所穿孔されている。用途は不明である。(314) は茶臼の柄である。臼のホゾに入る部分は圧縮され収縮している。(315) は敷居である。最大長は148.4cm、最大幅13.8cm、最大厚5.2cmを測る。幅約13mm、深さ約11mmの溝が2条、幅約22mm、深さ約7mmの溝を1条有する。測辺左右ともに手斧による荒削り加工がみられる。刃幅は33～35mmである。測辺長軸方向に対して必ず斜行する方向に削りが確認される。(316) は直方体の木製品で、長辺の四隅は面取りされている。また、穿孔された穴内部は焼け焦げている。また、(挿図5、318) の草履はSB2892の下層より出土した。非常に脆弱であったため現存しない。

挿図5　草履（318）

3．遺物（第6～15図、ＰＬ.10～18、表1･2）

本報告で取り扱う遺物は第49次調査の東西道路（SS2001）と武家屋敷および周囲にめぐる溝からの出土遺物である。出土遺物の総点数は19,406点を数える。調査面積約1㎡あたりの密度は29.1点/㎡となる。遺物の内容は多様であり、金属製品、石製品、木製品が多種出土した。

器種			破片数	%
日本製陶器	越前焼	甕	1,921	
		壺	500	
		鉢	156	
		擂鉢	637	
		桶	1	
		花生	1	
		計	3,216	16.57
	土師質	皿	12,903	
		羽釜	59	
		土鈴	15	
		灯芯押	1	
		小壺	1	
		計	12,979	66.88
	鉄釉	碗	194	
		皿	23	
		茶入	10	
		壺	36	
		瓶	1	
		水滴	1	
		計	265	1.37
	灰釉	碗	38	
		皿	128	
		鉢	4	
		香炉	3	
		計	173	0.89
	瓦質	香炉	22	
		手焙り	5	
		計	27	0.14
	信楽		2	
	その他		67	
	計		69	0.36
合計			16,729	86.21

器種			破片数	%
中国製陶磁器	青磁	碗	118	
		皿	149	
		鉢	9	
		盤	22	
		壺	8	
		香炉	7	
		花瓶	1	
		蓋	1	
	計		315	1.62
	白磁	碗	2	
		皿	472	
		杯	20	
		合子	1	
	計		495	2.55
	染付	碗	148	
		皿	277	
		杯	7	
		盤	1	
	計		433	2.23
	青白磁		7	
	その他		3	
計			10	0.05
朝鮮製			43	0.22
合計			1,296	6.68

器種		破片数	%
金属製品	釘	114	
	煽止金具	5	
	鋲	1	
	楔	1	
	錐	3	
	鑿	1	
	鍬	1	
	刀	1	
	刀子	16	
	鏃	3	
	毛抜き	4	
	刀装具	1	
	笄	1	
	簪	2	
	金覆輪	1	
	小札	2	
	切羽	1	
	鈴	3	
	蓋	2	
	鍋	1	
	火打金	2	
	火箸	8	
	火皿	2	
	紅皿	1	
	盤	1	
	紡錘車軸	1	
	環付金具	4	
	飾金具	4	
	鉄製金具	4	
	銅製金具	8	
	銅銭	199	
	鉱滓	1	
	その他	1	
合計		400	2.06%
石製品	臼	3	
	硯	22	
	鉢	11	
	盤	29	
	砥石	17	
	火鉢	2	
	火炉	61	
	板石	8	
	井戸枠	1	
	環状石斧	1	
	その他	19	
合計		174	0.90%

器種		破片数	%
木製品	漆皿	27	
	漆碗	34	
	黒漆鉢	3	
	円盤	2	
	楕円盤	1	
	壺形木製品	1	
	箸	34	
	灯明台	1	
	家具材	24	
	箱物	3	
	折敷	33	
	片木板	47	
	栓	1	
	桶	47	
	櫛	7	
	草履	1	
	下駄	16	
	敷居	1	
	柱材	25	
	楔	31	
	曲物	22	
	木簡	7	
	ヘラ	1	
	杭	5	
	将棋	4	
	柄	4	
	木刀	1	
	鍔	1	
	舟	1	
	竹材加工物	9	
	その他	309	
合計		719	3.71
その他	ガラス玉	1	
	坩堝	1	
	壁土	1	
	骨	41	
	貝	6	
	種子	33	
	雲母	1	
	その他	4	
合計		88	0.45
総合計		19,406	100

表１　第49次調査出土遺物一覧表

だしの2足がみられる。

SD2860・SD2863出土遺物（第7・8図、PL.11・12）

SS2001の南辺側溝であるSD2860と北辺側溝SD2863から出土した遺物を報告する。SD2860からの遺物は(53)と(58)である。以外はSD2863からの出土である。

土師質土器　(34)～(36)は手づくねによる成形のみで回しナデを施さないB類の皿である。(34)は6.4cm、器高1.5cmを測る。(35)は口径6.7cm、器高1.6cmを測り、(36)は口径7.4cm、器高2.15cmを測る。(37)～(45)はC類の皿である。(37)・(38)は口径6.5cm前後、器高1.5cm前後を測る。(39)～(41)は口径7.5cm前後、器高2cm前後を測る。(42)～(45)は口径8.5cmから9.5cm前後を測り、器高は2cm前後を測る。(46)・(47)はD類の皿である。(46)は口径11.8cm、器高2.5cmを測り、器高2.5cmを測る。(47)は口径10.8cm、器高2.3cmを測る。(48)～(50)は羽釜である。(48)は口径11.3cm、(49)は口径9.3cm、(50)は口径8.3cmを測る。いずれも羽部より下の外面は煤が多量に付着する。また突帯部にはヘラ記号がみられる。

中国製陶磁器　(51)は口径11.9cm、器高6.5cmの染付碗である。外面には中央に松、左に竹、右に梅を配置する松竹梅文が2単位描かれる。内面は無文で口縁に2条の界線、内部底面には牡丹唐草が描かれ、周囲に2条の界線を有する。

金属製品　(52)は足金物である。黒漆が施され、各端部は使用擦れによる漆剥げが確認できる。

(53)は鞘である。(54)～(58)は銅銭である。(54)は五銖、(55)は至和元宝、(56)は聖宋元宝、(57)・(58)は元豊通宝である。

木製品　(59)は栓である。(60)～(62)は曲物の底である。(60)については、孔が3箇所ある。(63)は黒漆椀である。底部に「法十」の漆書文字が認められる。(64)は鍋蓋の把手であり、釘が多数打ち込まれている。(65)は用途不明であるが、両端に径約1.0cmの穴が在り、中央部が括れる加工木製品である。(66)は鞘である。(67)・(68)は将棋の駒である。(67)は「王将」の墨書が残る。(68)は「金将」の文字が線刻されている。

SD2872出土遺物（第8図、PL.12）

第49次調査区と第50次調査区の武家屋敷を区画する南北方向溝からの出土である。

越前焼　(69)はⅣ群の擂鉢である。8条1単位の擂目を持つ。(70)は口径9.5cm、器高12.3cmを測る壺である。肩部にヘラ記号を有する。(71)は口径5.6cmを測る壺である。

土師質土器　(72)は口径6.5cm、器高1.5cmを測るC類の皿である。内面には獣戯画を有する。2頭描かれているが、描かれた動物は判然としない。(73)～(81)はC類の皿である。(73)は口径6.2cm、器高1.3cmを測る。(74)は口径7.2cm、器高1.6cmを測り (75)は口径7.0cm、器高1.8cmを測る。(76)～(79)は口径8.5cm前後、器高2cm前後を測る。(80)は口径9.6cm、器高2.0cmを測る。(81)は口径10.4cm、器高2.55cmを測る。

瀬戸・美濃焼　(82)は口径12.2cm、器高6.4cmを測り、(83)は口径11.6cm、器高6.0cmを測る鉄釉碗である。(84)は口径11.4cm、器高2.8cmを測る灰釉皿である。

中国製陶磁器　(85)は口径11.2cm、器高2.9cmを測る青磁稜花皿である。内面口縁部にはヘラにより3条の花弁風の文様が施され、内面には草花文が3単位描かれる。内面底部は釉の掻取がみられる。また、

内面は使用による細かな擦痕がみられる。底部には黒漆が付着する。(86)は香炉である。(87)は口径11.6cm、器高2.9cmの染付皿である。

金属製品　(88)・(89)は銅銭である。(88)は開元通宝であり、(89)は永楽通宝である。

SD2699出土遺物（第9図、PL.13）

武家屋敷とSS2860を区画する南北方向溝からの出土である。

土師質土器　(90)はB類の皿である。口径7.15cm、器高1.8cmを測る。(91)～(97)はC類の皿である。(91)・(92)は口径6.5cm前後、器高2cm前後を測る。(93)～(97)は口径9cm前後、器高2cmから2.5cm前後を測る。

瀬戸・美濃焼　(98)～(101)は鉄釉碗である。(98)は口径12.2cm、(99)は口径11.0cm、(100)は口径11.2cmを測る。(101)は口径9.0cm、器高4.6cmを測る。(102)は口径11.2cm、器高2.4cmを測る灰釉皿である。

中国製陶磁器　(103)は口径11.7cm、器高3.0cmの白磁皿である。釉調は良好で灰白色を呈する。口縁部内面から外面全体に黒ずんだ濁りがみられる。また、高台内には「一」の字状の墨書がみられる。

金属製品　(104)は用途不明である。最大長11.2cmを測り、中央部で引きちぎられている。(108)～(116)は銅銭である。(108)は開元通宝、(109)は至道通宝、(110)は景徳元宝、(111)は天禧通宝、(112)は天聖元宝、(113) は皇宋通宝、(114)は嘉祐元宝、(115)は紹聖元宝、(116)政和通宝である。

木製品　(105)は黒漆の施された木製品である。家具材であると考えられている。(106)は下駄である。径0.5mmの紐の穴の他に辺約0.2mmの方形の穴が8箇所ある。そこには鉄製あるいは木製の釘状のものが打たれている。(107)は外面、内面に草花文が朱漆で描かれた黒漆椀である。ほぼ完形で出土しているが、器形の歪みが著しい。また、底部は高台部分が削り取られており、胴部から腰部にかけての位置に穿孔が施されている。

武家屋敷上層遺構出土遺物（第10・11図、PL.14・15）

武家屋敷内の上層遺構から出土した遺物である。SD2870から(127)、SE2900から(140,141)、SE2901から(136)、SF2906から(118,119,137)、SF2907から(138)、SZ2918から(134)、SZ2920から(129)、SX2937から(130,133)が出土している。以外は遺構面からの出土である。

越前焼　(117)～(119)は甕である。(117)はⅣ群に属する。(120)はⅣ群に属する擂鉢で、擂目は非常に密である。(121)は8条1単位とする擂目をもつ擂鉢である。内面底部にも施される。

土師質土器　(122)・(123)はC類の皿である。それぞれ口径8.6cm、器高2.1cmと口径9.0cm、器高1.9cmを測る。(124)は口径11.7cm、器高2.5cmを測るD類の皿である。

瀬戸・美濃焼　(125)・(126)は鉄釉碗である。(125)は口径12.6cm、(126)は口径12.4cm、器高6.1cmを測る。

中国陶磁器　(127)は器高2.1cm青磁皿である。(128)は口径9.9cm、器高3.1cmの青磁の菊花皿である。(129)は碁笥底の染付皿である。内面に捻花文が描かれる。(130)は口径20.2cm、器高4.2cmの染付皿である。外面、内面底部に花牡丹菊唐草文が描かれる。

金属製品　(131)・(132)は鐶付金具である。鐶台には装飾が施される。菊花文の周囲は、籠目の毛彫を有する。(133)は小札である。表面には炭化物が付着している。(134)は火箸である。上部4面ともに魚

子打ちによる波状の文様が施されている。(135)は片刃の刀である。刀部現存長23.1cm、刀部最大幅2.2cm、茎長8.9cmである。(136)～(137)は銅銭である。(136)は元祐通宝、(137)は熙寧元宝、(138)は至道元宝である。

石製品　(139)は硯である。海部縁辺を一部欠損しているが良好に遺存している。陸部隅、海部に墨痕が残る。

木製品　(140)は黒漆の箱で短辺の側板1枚が欠失している。箱物に組むための木釘痕がみられる。(141)は漆塗木製品である。用途は不明であるが、片面は黒漆、その裏面は朱漆が施されている。漆膜の残らない部分は焼け焦げている。

武家屋敷下層遺構出土遺物（第11図、PL.15）

武家屋敷内の下層遺構から出土した遺物である。SD2871から(144)、SB2890から(145, 148, 149, 155, 157)、SB2894から(146, 147, 150)、SD2866から(161)、SD2868から(151)が出土している。以外は砂利敷面からの出土である。

越前焼　(142)・(143)はⅢ群に属する擂鉢である。(142)は11条1単位の擂目である。(143)は7条1単位の擂鉢である。内面底部にも擂目を有する。

土師質土器　(144)～(147)はC類の皿である。(144)・(145)は口径7cm前後、器高1.5cm前後を測る。(146)・(147)は口径9.0cm前後、器高2cm前後を測る。(148)は口径7.6cm、器高1.5cmを測る皿である。底部が穿孔されている。(149)は土鈴である。

瀬戸・美濃焼　(150)は口径12.6cmを測る鉄釉碗である。

中国製陶磁器　(152)は口径27.8cm、器高6.0cmの青磁盤である。(151)は口径11.9cm、器高2.5cmを測る白磁皿である。(153)は口径6.2cmの染付杯である。割口には漆による接合痕がある。

金属製品　(160)・(161)は銅銭である。(160)は唐国通宝、(161)は元豊通宝である。

石製品　(154)は完形の硯である。内面隅には墨の痕跡がみられる。

木製品　(155)は将棋の駒である。表裏に「香車」「金」が墨書されている。(156)～(158)はいわゆる1ツ目下駄である。(159)は漆塗木製品である。家具材と考えられている。釘穴が2箇所存在する。

武家屋敷整地層出土遺物（第12～15図、PL.16～18）

武家屋敷内の整地層から出土した遺物である。各土層の説明は第1図に譲る。遺構面下層から(163)、砂利面下層から(166～174,196～201,221,230,233,236,237,239,241～243,253)、砂利面下炭層から(162,175～186,202～212,224,223,226,232,234,238,245,251,302,305,311,313,316)、砂利面炭層から(165,227,231)、砂利面下青色山土層から(164,187～195,214～220,222,225,228,235,240,246～250,303,309,310,314)、ガラ石下褐色有機質層から(213,299)、砂利下暗褐色土層から(167,312)、土塁下暗褐色土層から(307)、青色整地土下層から(252,300,301)、砂利面石列下層から(304)が出土した。その他、土層確認畦から(229,244,255,256,306)やトレンチから(254,308,315)が出土した。また、銅銭の出土については表2を参照されたい。

越前焼　(162)・(163)はⅣ群に属する擂鉢である。(162)は9条1単位の擂目を持ち堅く焼き締まっている。(163)は11条1単位の擂目を持ち、口縁内部に1単位の擂目を周回させている。焼成は堅く焼き締まっている。(164)は口径37.2cm、器高7.2cmの鉢である。焼成は堅く焼き締まっている。(165)は口径

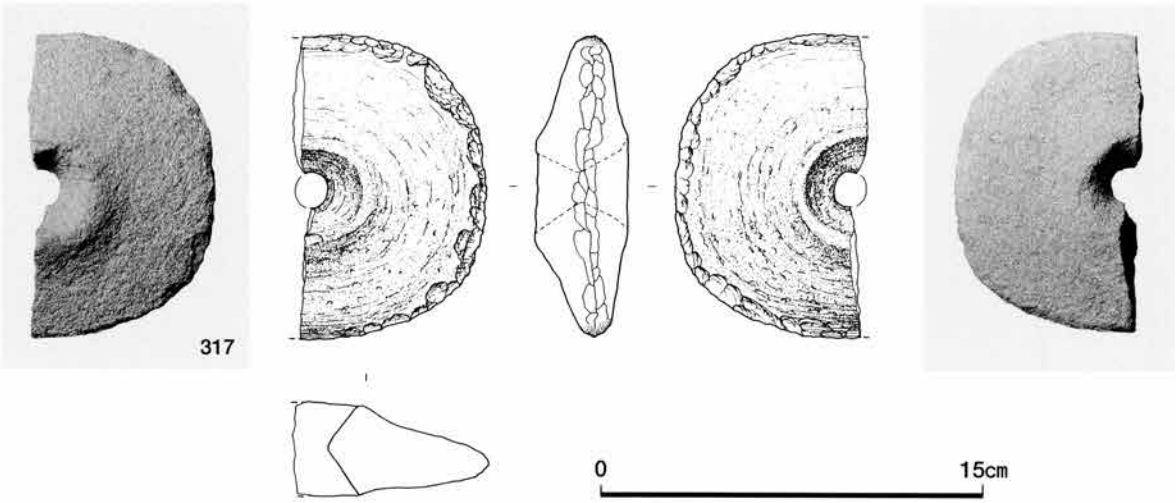
7.2cmの越前焼掛花生である。円筒形をなし、口縁から1.7cm下に方形の孔を持つ。

土師質土器　(166)は口径1.9cm、器高2.4cmを測る土師質の小壺である。底部外面には指痕が残る。(167)～(188)、(190)～(220)はC類の皿である。(167)～(195)は口径6～7cm前後、器高1.5cm前後を測る。(196)～(220)は口径9cm前後、器高2cm前後を測る。(189)は本遺跡では類例の少ないF類である。口径5.7cm、器高1.3cmを測る。(221)～(229)はD類の皿である。(221)・(222)・(224)・(225)・(227)は口径11cm前後、器高2～2.5cm前後である。(223)・(226)・(228)・(229)は口径13cm～14cm前後を測る。

瀬戸・美濃焼　(230)・(231)は鉄釉碗である。それぞれ口径は12.0cmと11.6cmである。(232)・(233)は灰釉碗である。(232)は口径11.9cm、器高6.5cmである。口縁はほぼ直立する。外面にヘラ削りの稜を残す。釉調は澄んだ淡緑色を呈し、光沢を残す。(233)の口径が13.0cmである。(234)・(235)は灰釉皿である。(234)は口径10.8cm、器高2.6cmであり、(235)は口径10.8cm、器高2.5cmである。

中国製陶磁器　(237)・(238)は線描きの蓮弁文が施された青磁碗である。(237)は底径4.4cmを測り、内面底部に吉祥文を呈する。(238)の口径は13.8cmである。(236)は青磁盤である。(239)は口径6.6cmを測る染付坏である。外面に蓮池文が描かれる。(240)は11.4cm、器高6.1cmであり、外面に獅子文と牡丹唐草文を1単位とする文様が3単位描かれる。底面内部には2条の界線内に牡丹唐草文を呈する。高台内には「天」がみられる。(241)～(243)は染付皿である。(241)は口径12.3cm、器高2.8cmを測り、(242)は口径12.4cm、器高2.6cmを測る。ともに外面に牡丹唐草文、内部底面に玉取獅子が描かれる。(243)は口径9.8cm、器高2.1cmを測り、外面は牡丹唐草文を、内面底部には花文が描かれる。

金属製品　(244)・(245)は小柄である。(244)には毛彫りによる柑橘文が施されている。(245)は真鍮製で列点文が施されている。(246)は火打金である。紐孔を呈する。(247)は飾り金具であり、両端に釘穴を有する。(248)・(249)は鈴である。(250)は口径5.1cm、器高2.3cmの紅皿である。(251)は煽止金具である。断面は多角形に近い稜をもつ。(252)は錐である。(253)は鑿である。(254)は把手である。(257)～(298)は銅銭である。(257)・(258)は開元通宝、(259)は唐国通宝、(260)は太平通宝、(261)は至道元宝、(262)は咸平元宝、(263)は景徳元宝、(265)は祥符元宝、(266)は天禧通宝、(267)・(268)は天聖元宝、(269)～(272)は皇宋通宝、(273)至和元宝、(274)は嘉祐通宝、(275)は嘉祐元宝、(276)・(277)は治平元宝、(278)～(280)は熙寧元宝、(281)・(282)元豊通宝、(283)～(285)は元祐通宝、(286)大観通宝、(287)・(288)は聖宋元宝、(289)・(290)は政和通宝、(291)は正隆元宝、(292)は淳熙元宝、



挿図4　石器

(293) は嘉泰通宝、(294)・(295) は洪武通宝、(296) は永楽通宝、(231) は宣徳通宝、(298) は朝鮮通宝である。

石製品　(255)・(256) は硯である。ともに脚の削りだしはない。(256) は陸部の左半分が非常に擦り減っている。また、(挿図4、317) の環状石斧と考えられる打製石器がSD2863最下層（青色砂礫土層）から検出された。扁平な円形で、周縁は刃状に狭まり中央に孔を有する。輝石安山岩製である。同層からの伴出遺物はない。永平寺町の栗住波遺跡から出土例がある。

木製品　(299) は外面および内面に開扇文を朱漆で描いた黒漆皿である。高台内には「二」の文字線刻を有する。口径9.2cm、器高2.8cmを測る。(300) は口径8.9cm、器高2.1cmの朱漆皿である。内部底面には液状の物質が凝固した痕跡がある。(301) は蒔絵の櫛である。歯はほとんど欠損している。(302) は縦6.4cm、横6.6cm、厚さ0.6cmを測る木製の鍔である。四隅を面取りし、朱と墨で輪違文が描かれている。(304) は墨書されているが書き散らした様子があり、判読できない。文字であることも疑わしい。(303) は木札である。墨書されている。「し□まいるとの、いわほ」と書かれているようにも見えるが、文字の判読は困難である。(305) は将棋の駒である。表裏ともに黒漆で「歩兵」「と」が書かれている。漆文字の将棋の駒は、これが初見である。(306) は羽子板状木製品である。(307) は舟である。最大長23.1cm、最大幅9.8cm、最大高3.8cmを測る。中央付近に底まで貫通する径0.15cmの孔を施す。(308) は雪ばんばである。最大長123.4cm、最大幅21.8cmを測る。柄部は四隅を面取りしており、断面は多角形を呈する。櫂状の部分には表面に三角形の記号が刻まれている。(309) は黒漆が施された木製品である。U字状の幅約2.5cmの溝を持っていたようだ。(311) は竹材を加工したものである。用途は不明である。(310)・(312) はいわゆる1ツ目下駄である。(310) には焼ゴテで型押しされた斜格子目を有する。(313) は約0.6cmの穴の他に径約0.1cmの穴が11箇所穿孔されている。用途は不明である。(314) は茶臼の柄である。臼のホゾに入る部分は圧縮され収縮している。(315) は敷居である。最大長は148.4cm、最大幅13.8cm、最大厚5.2cmを測る。幅約13mm、深さ約11mmの溝が2条、幅約22mm、深さ約7mmの溝を1条有する。測辺左右ともに手斧による荒削り加工がみられる。刃幅は33～35mmである。測辺長軸方向に対して必ず斜行する方向に削りが確認される。(316) は直方体の木製品で、長辺の四隅は面取りされている。また、穿孔された穴内部は焼け焦げている。また、(挿図5、318) の草履はSB2892の下層より出土した。非常に脆弱であったため現存しない。

挿図5　草履（318）

銭　種	耕土	SD2860	SD2863	SD2699	SD2872	武家屋敷上層遺構面				武家屋敷下層遺構面				整地層	その他	計
						SF2906	SF2907	SE2901	その他	SB2890	SB2894	SD2866	その他			
五銖			1													1
開元通宝	2			2	1				3	1				7	3	19
唐国通宝											1			1		2
太平通宝														1		1
至道元宝				1			1				1			2	1	6
咸平元宝														1		1
景徳元宝				1						1				1	1	4
祥符元宝	1													1		2
祥符通宝										1				3		4
天禧通宝				1						1				1		3
天聖元宝	1			2					1					4	1	9
景祐元宝									1					1		2
皇宋通宝	2			2					1	1			2	7	3	18
至和元宝			1											1		2
至和通宝									1							1
嘉祐元宝				1												1
嘉祐通宝														4	1	5
治平元宝														2		2
熙寧元宝						1			2	2			1	5	2	13
元豊通宝	1	1	2						1	1		1	1	10	3	21
元祐通宝								1	1	1			1	14		18
紹聖元宝				1							1	1	2			5
聖宋元宝			1										2	4		7
大観通宝															1	1
政和通宝				1										3		4
正隆元宝															1	1
淳熙元宝										1				1		2
嘉泰通宝														1		1
洪武通宝														6	15	21
永楽通宝					1								1	3	2	7
宣徳通宝															1	1
朝鮮通宝															1	1
解読不能			2	1							1			7	2	13
計	7	1	7	13	2	1	1	1	11	10	4	2	10	91	38	199

表２　銅銭出土分布

4．小結

今回の発掘調査においては、上層遺構を残しつつ、下層遺構を部分的に検出しているため、下層遺構、特に第4面以下の状況については十分に知られない。そこでここでは建物SB2889・2890を中心とする2時期について遺構の解釈を行なう。この報告においてこれまで、この第49次調査のこの地区について「武家屋敷」と呼んで叙述してきた。それはこうした屋敷の構造が、武家屋敷と呼ぶにふさわしいというこれまでの当遺跡の遺構分類上の便宜によったものであり、ここに実際に住んでいた人物が武家であるかどうかを確認しえたわけではない。しかし、大路に門を開き、その両側には土塁を廻らし、隣の屋敷地とは土塁・溝・道路・石垣などによって完全に区画された約20m四方の敷地は、小規模ながらも一定の格式を備えており、その敷地の中央部に建てられた大型の礎石建物に生活していたこの屋敷の当主が相当の格式を持った身分の人物であることは十分に想定可能であろう。

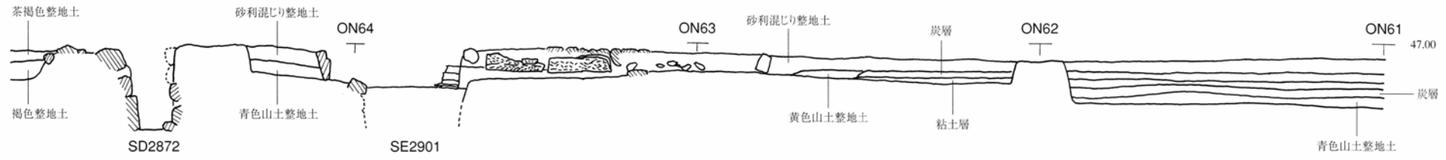
この武家屋敷の中央部の上層建物SB2889は、遺構面の高さからみて東南部の建物SB2887と連続するものと考えられ、中門を持った主殿と解釈することが可能であろう。この建物の南北には空間的余裕があり、南側は門から入る広場など表向きの空間、北側は日常的な生活空間とみられる。主殿SB2889の北に位置する小規模な建物SB2891は、遺構面の高さがSB2889が建つ遺構面より0.1m程下がっているが、敷地自体の段差を想定するならば、SB2889と同時期のものとみることも可能であろう。

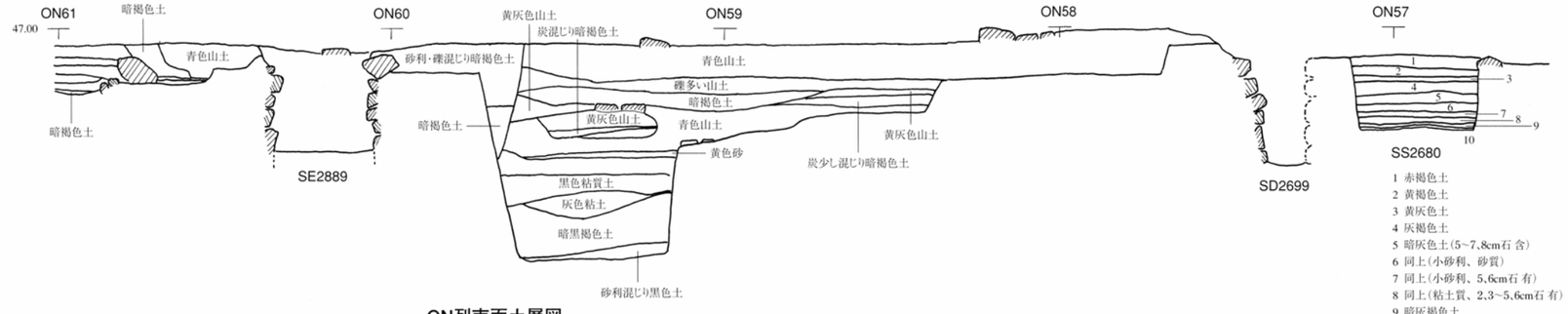
この第49次調査の武家屋敷の建物配置をみると、第15、25次調査地内のいわゆる「復原武家屋敷」と共通するところが多い。すなわち主殿の棟の方向、建物内の井戸の配置、敷地のへりの土塁際に見られる石積施設、「使用人住居兼納屋」という小型建物などの配置状況である。この復原武家屋敷には、石敷の板蔵が建てられているが、この第49次調査の主殿の西隣にあるSB2894も規模や構造などからみて蔵としての機能を持った建物の可能性が想定される。このSB2894は発掘調査の所見では第3面に属し、実際その上層に建物SB2893が建っているわけであるから、SB2889が建っていた時期にはすでに全面的に埋められて、その結果現在まで良好に遺構が残されたのであろう。

次に下層のSB2890の時期については、細部は未詳のところが多いが、この屋敷の基本的な構造はすでに出来上がっていると考えられ、主殿の西隣のやや高い所に蔵とみられるこの建物SB2894が存在していたとみられる。

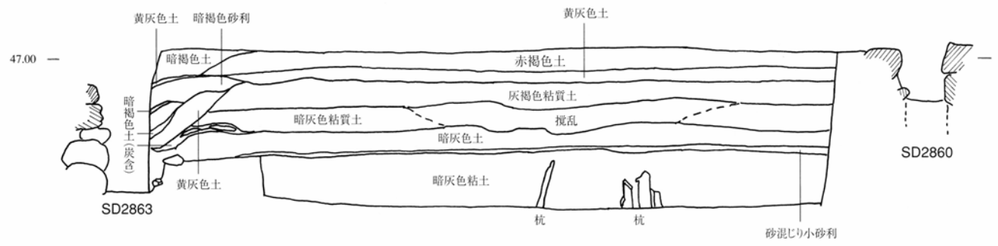
こうした比較的小規模な屋敷地においても、屋敷の構造や機能は大型の武家屋敷とほぼ同様であることに注目される。もとよりこうした屋敷の住人については、資料的に知られるところは限られているが、その当主は一乗谷において相当の身分、格式を備えた有力な人物であったことは確実であり、屋敷の規模や構造と住人の関係について今後検討を続けていくことが必要であろう。

第1図　第49次調査土層図

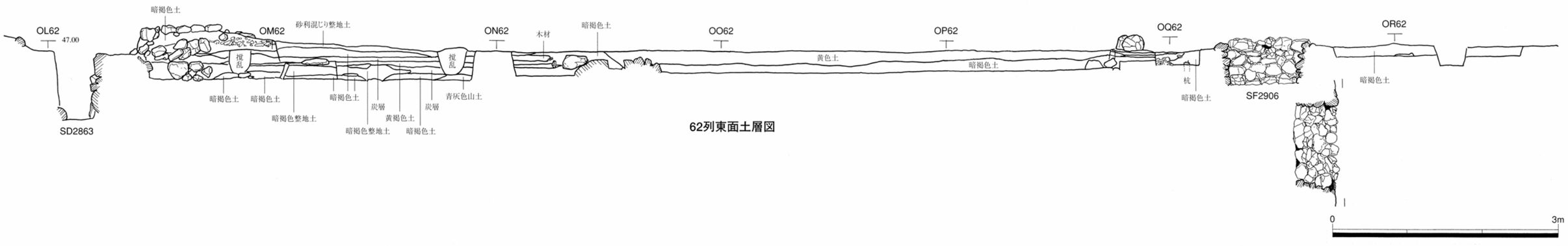




ON列南面土層図

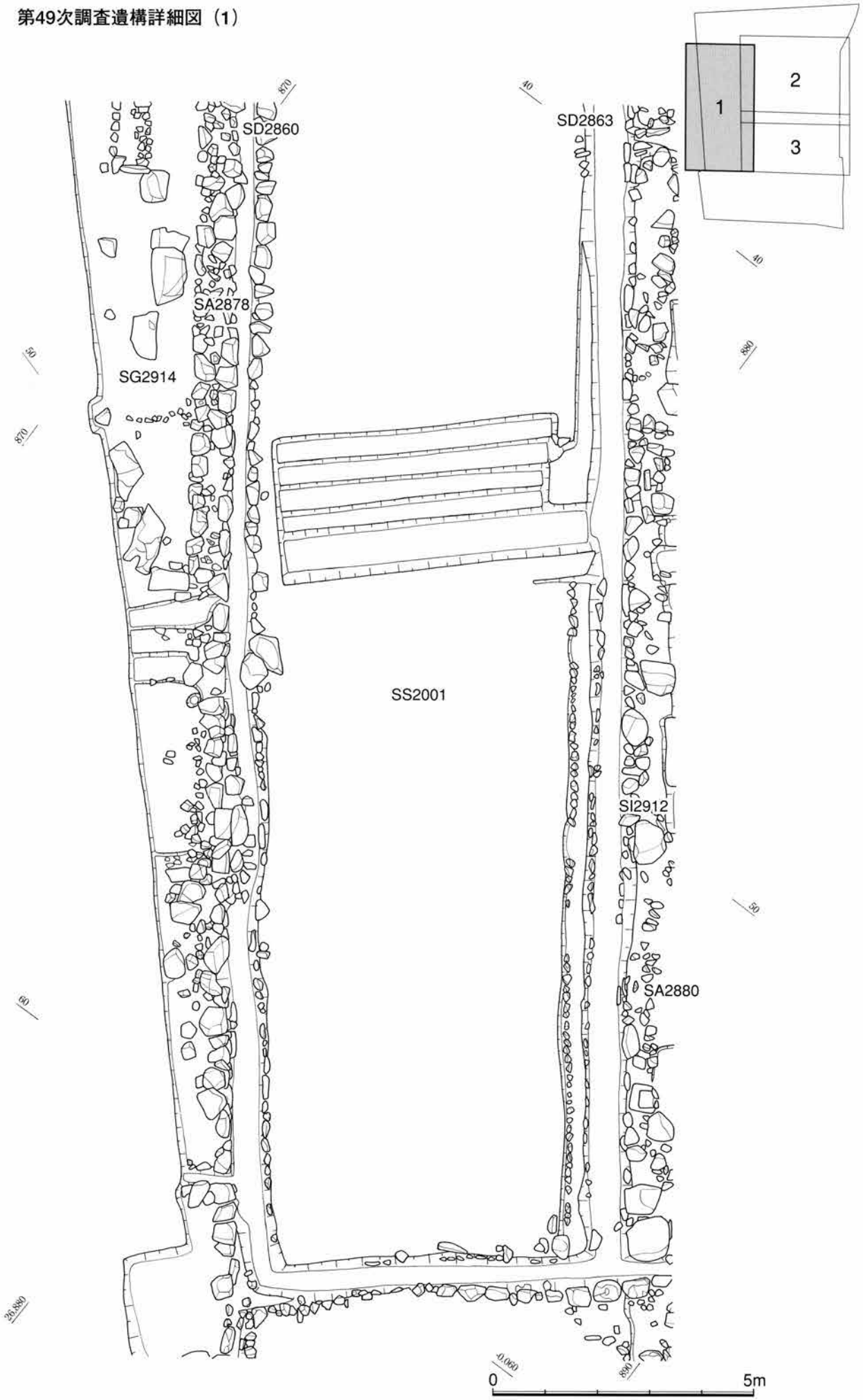


SS2001　62列西面土層図

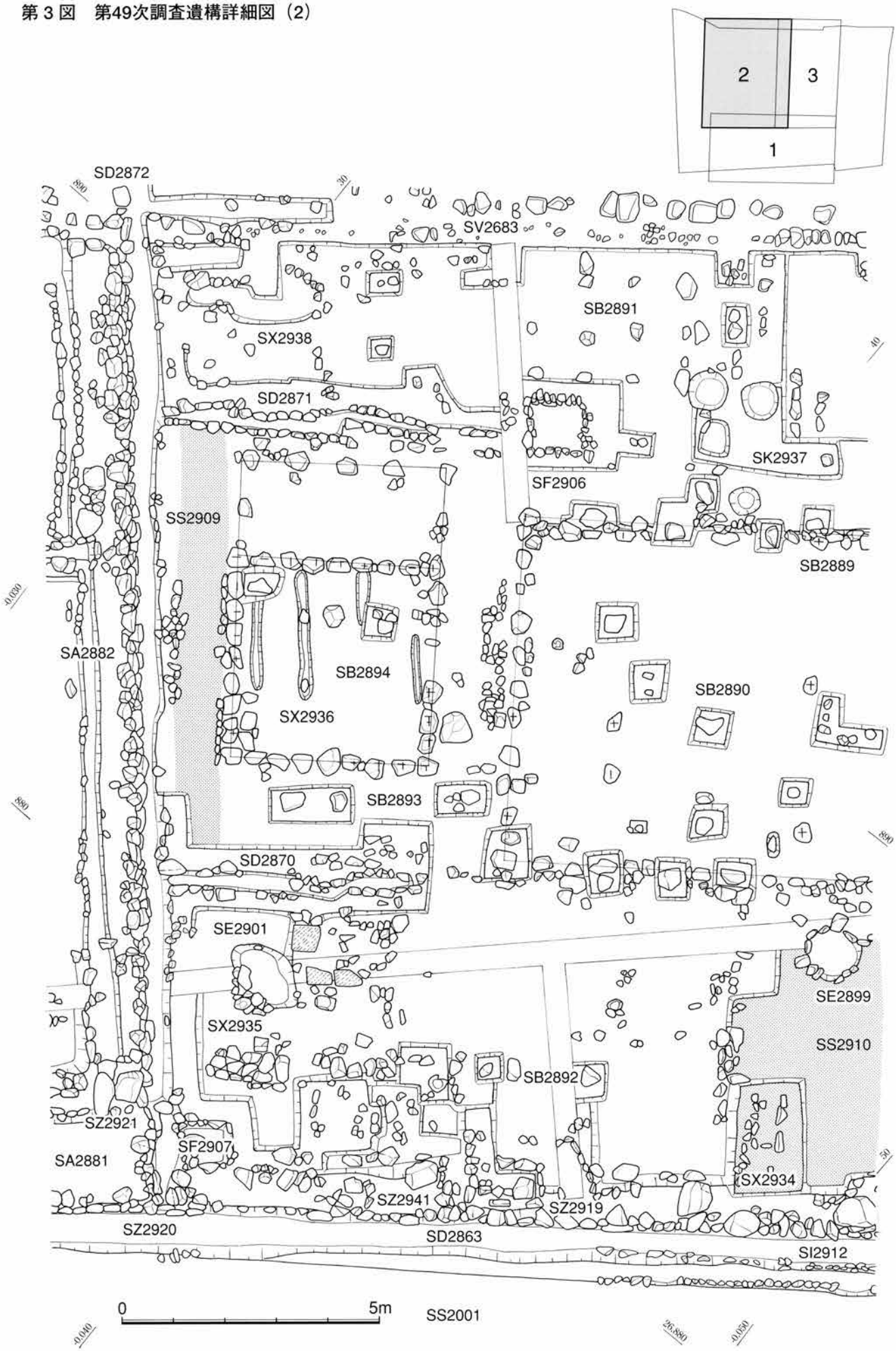


62列東面土層図

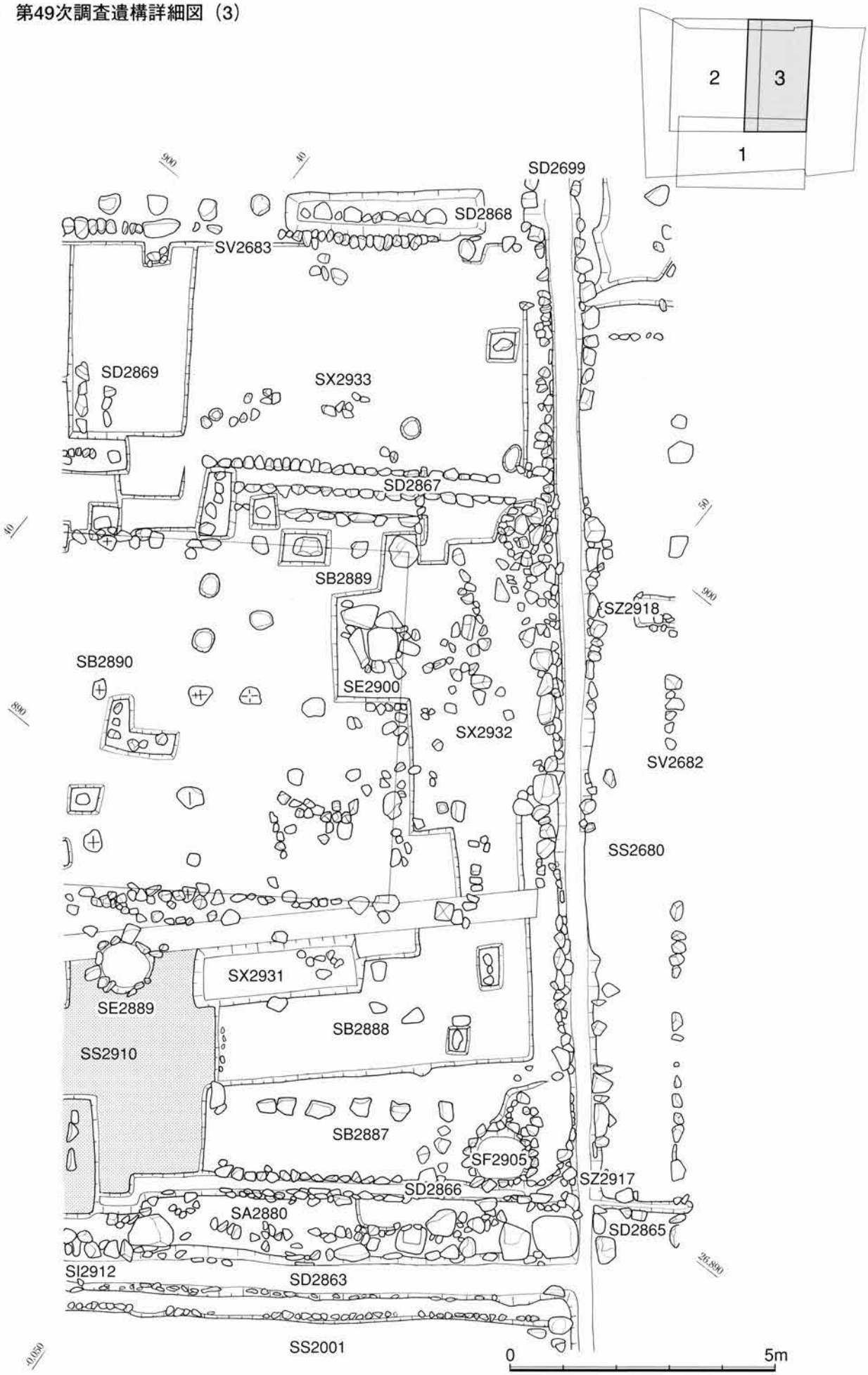
第２図　第49次調査遺構詳細図（1）



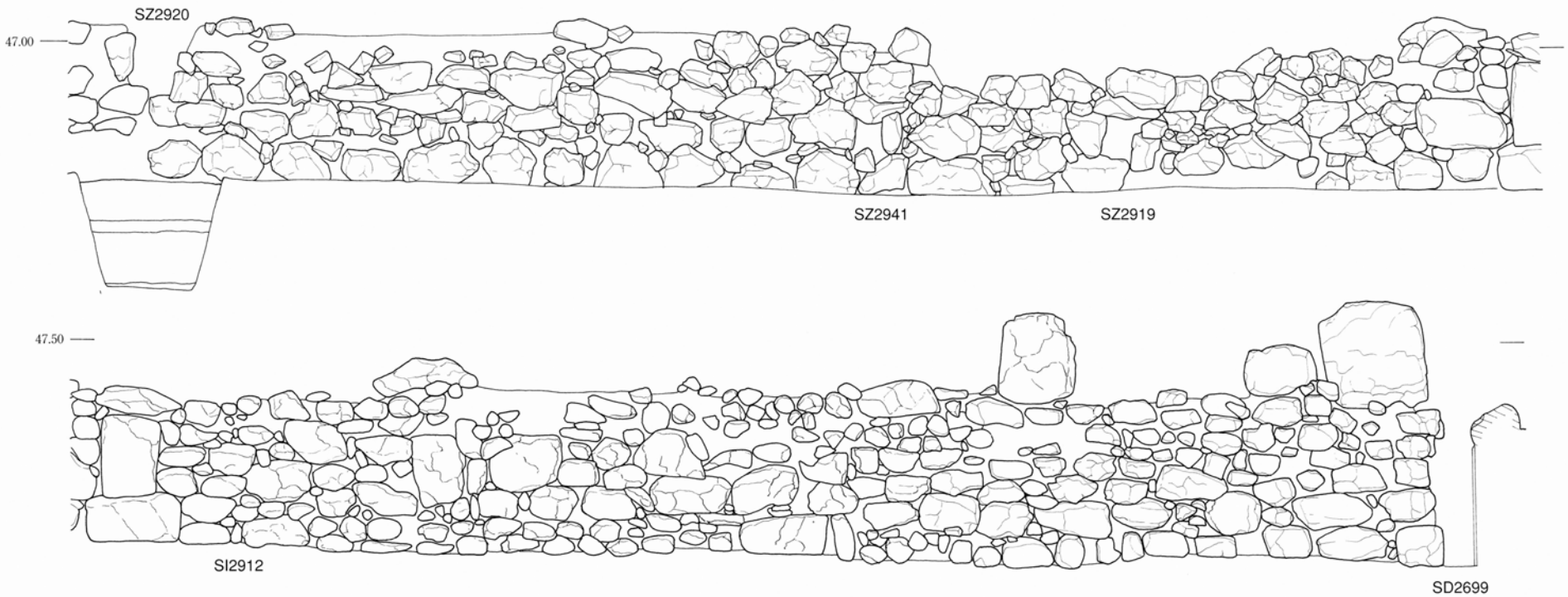
第３図　第49次調査遺構詳細図（2）



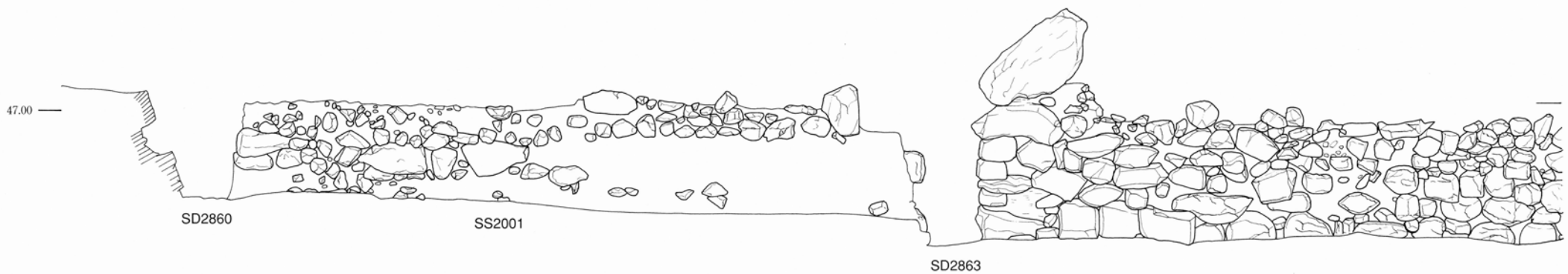
第４図　第49次調査遺構詳細図（3）

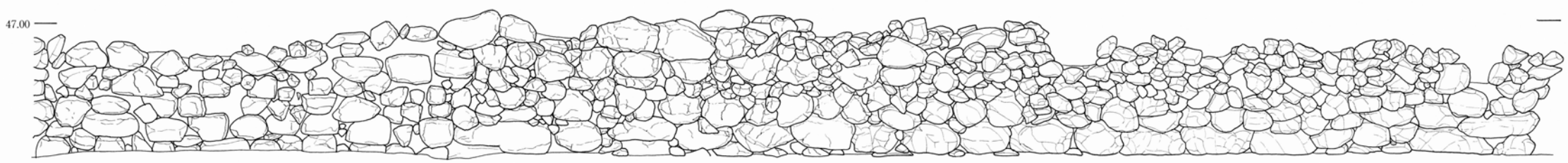


第5図　第49次調査遺構立面図



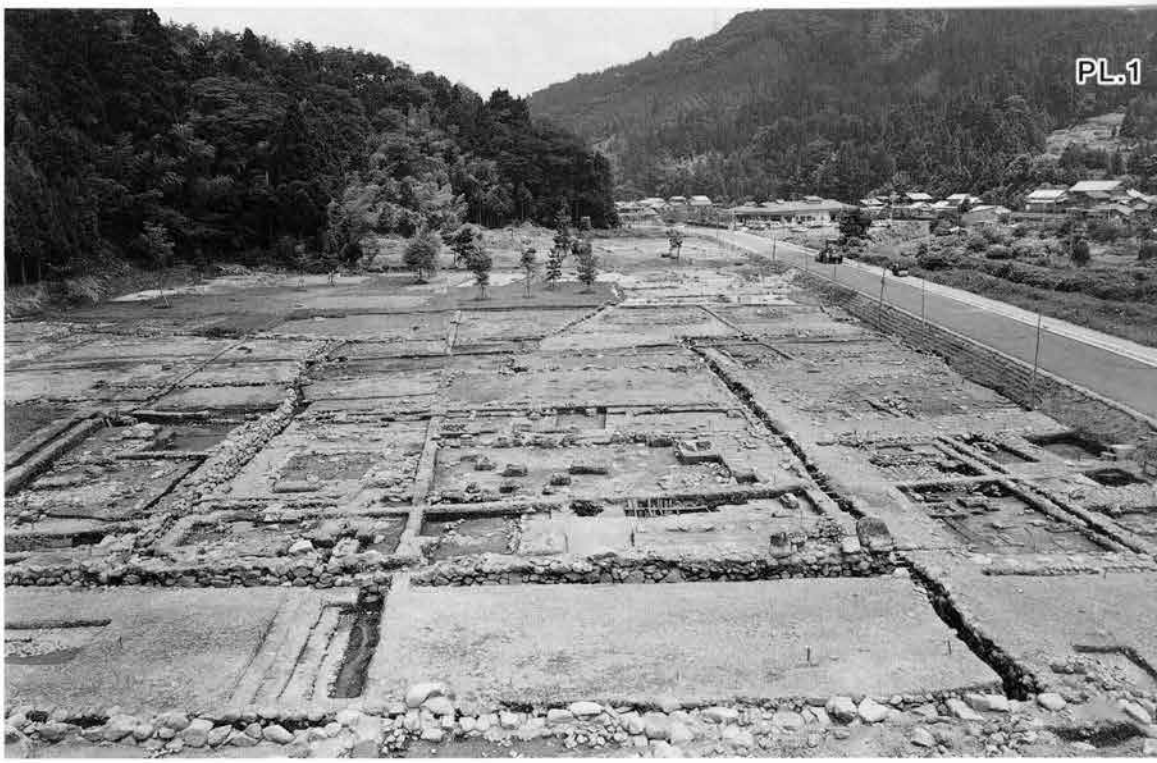
SA2880 南面立面図





SD2699 西側石立面図

第49次調査区　全景



（南から）

（東南から）

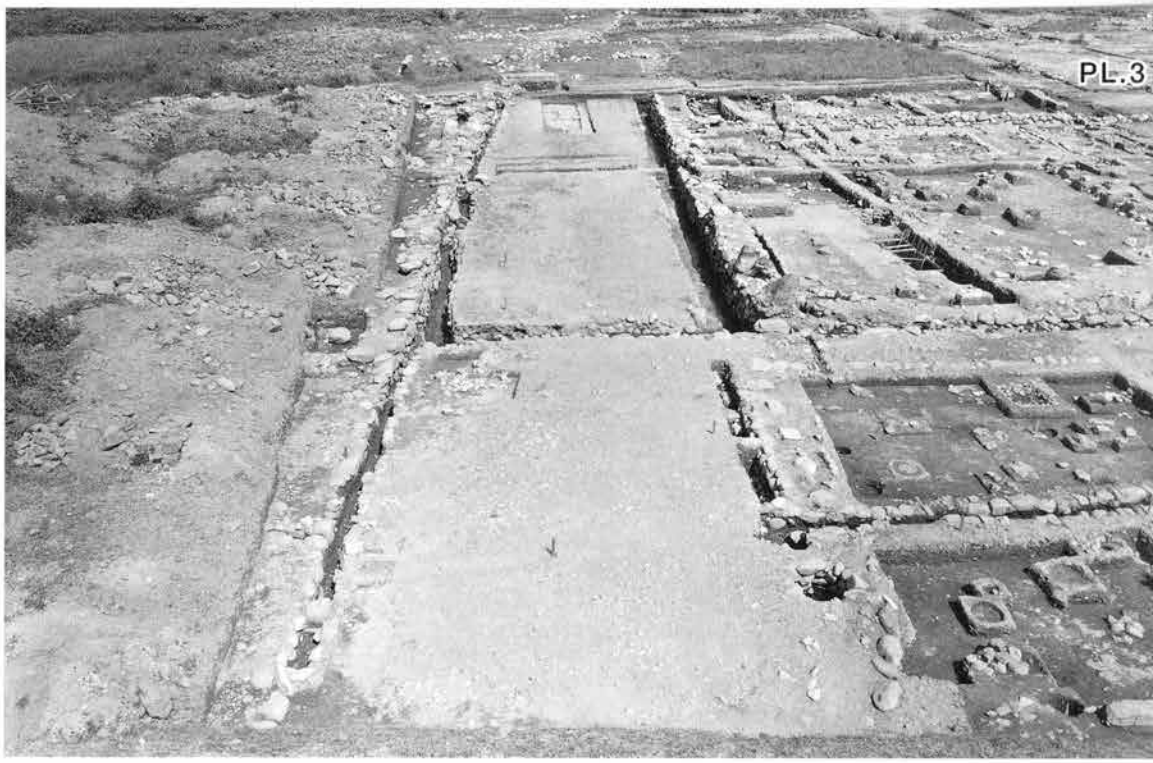
（東から）

第49次調査　武家屋敷

武家屋敷 全景
（南から）

武家屋敷 全景
（西から）

武家屋敷 東部
（北から）



SS2001
（東から）

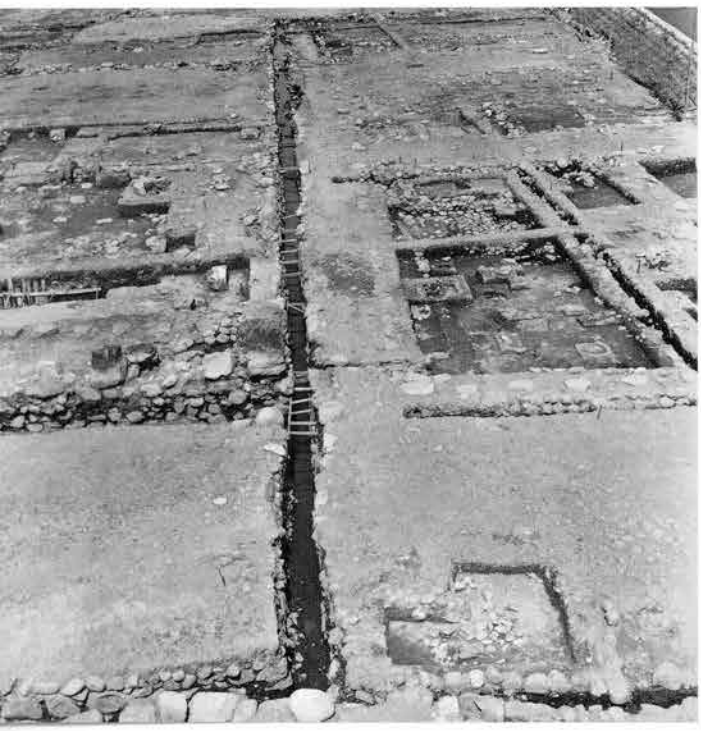
SS2001
（東から）

SS2001
（西から）

第49次調査　道路・溝

SS2680・SD2699
（北から）

SS2680・SD2699
（東から）



SS2680・SD2699
（南から）

SA2880
（南から）

SA2880・SD2863
（北西から）

SA2880・SD2863
SD2699・SD2866
（東から）

第49次調査　建物他

SB2889・2890
（北から）

SB2891・SF2906・SK29
（北から）

SE2900
（東から）

SB2894（砂利面）
（東から）

SB2809
（東から）

第49次調査　各遺構（1）

◀SD2871
（東から）
▶SF2906
SD2871
（東から）

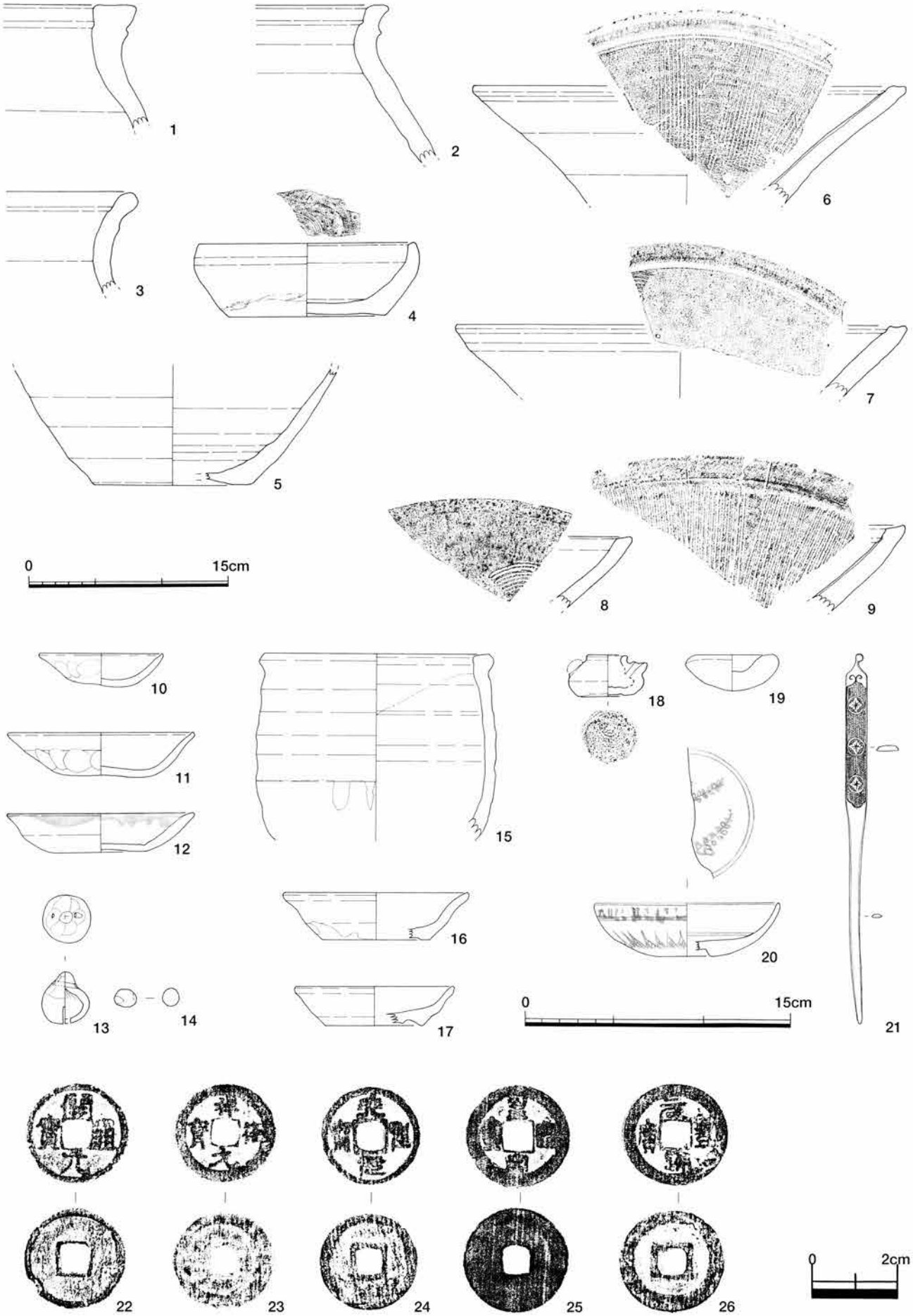
◀SD2867
（東から）
▶SD2869
（北から）

◀SZ2918
（西から）
▶SD2865
（東から）

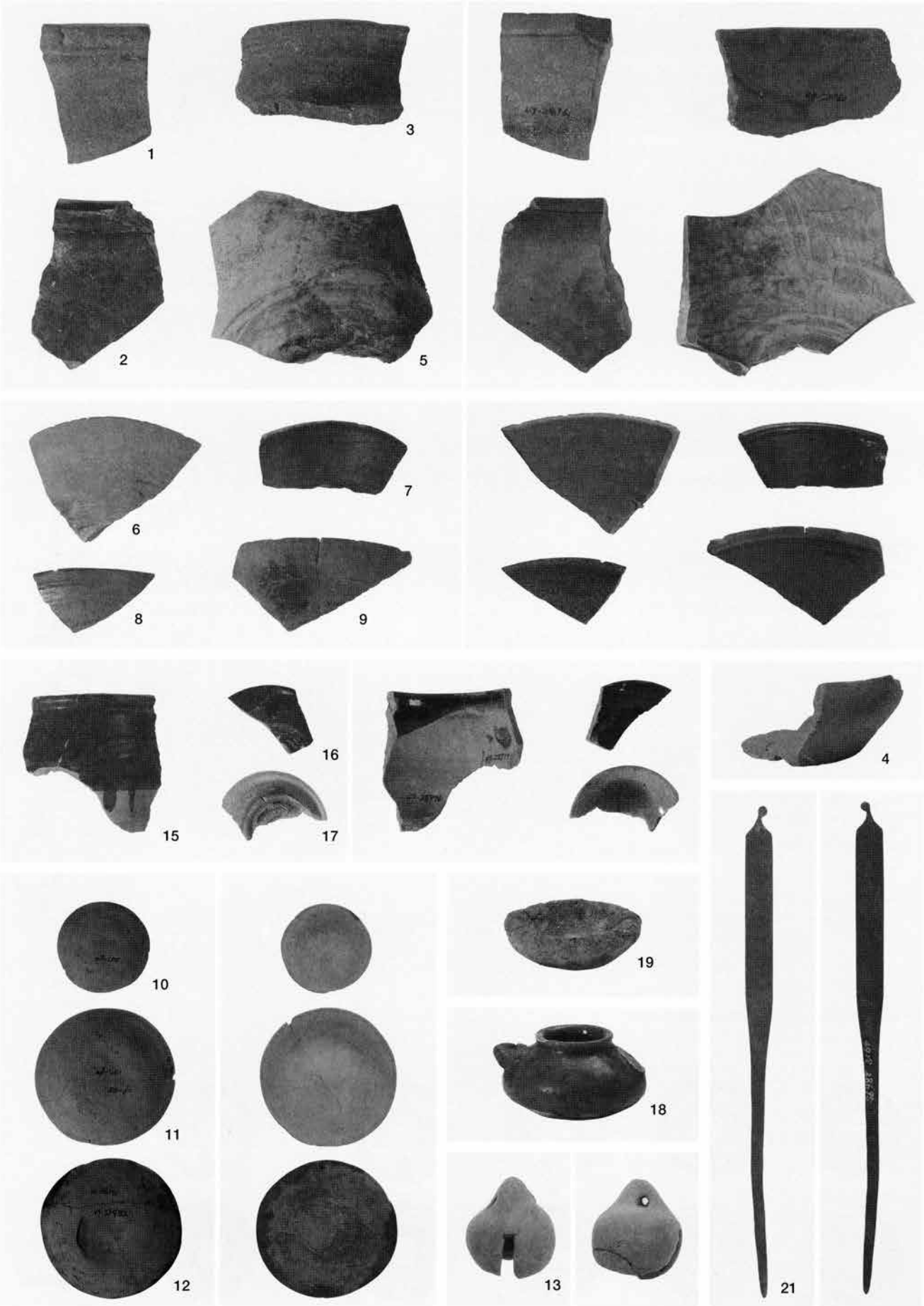
SZ2919
（南から）

第6図　第49次調査出土遺物（1）

耕土出土・表採遺物



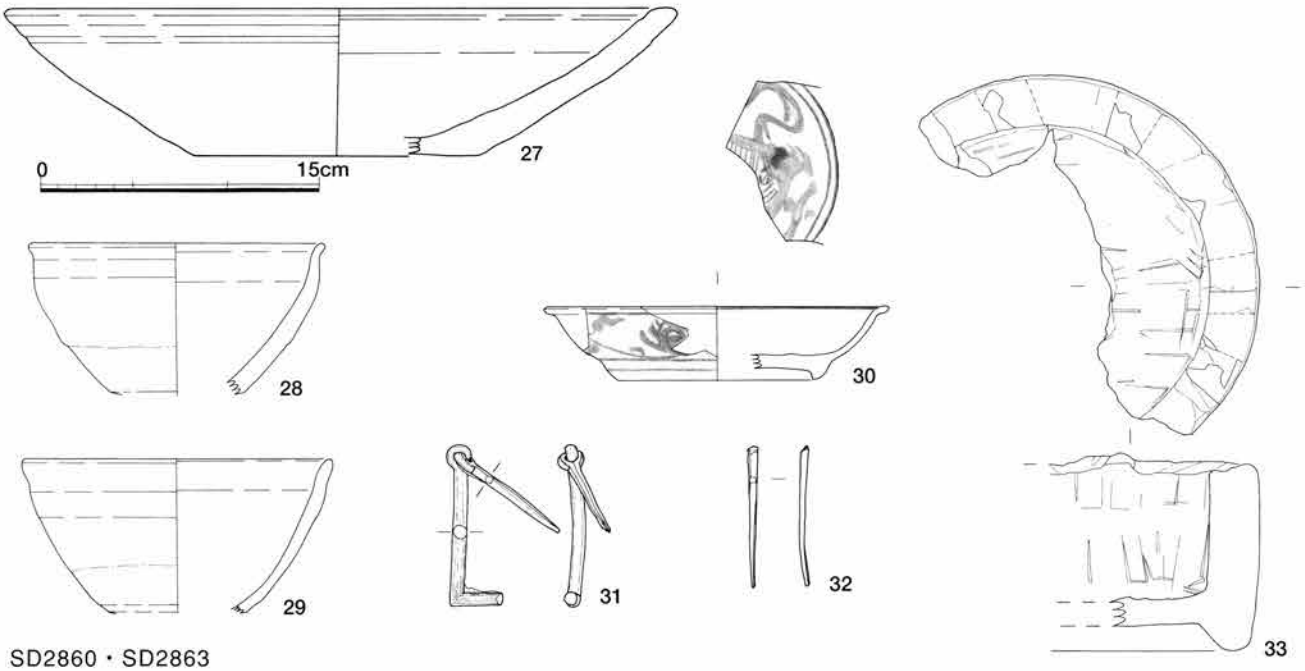
越前焼 甕1～3　鉢4･7･8　擂鉢6～9　**土師質土器** 皿10～12　土鈴13･14　**鉄釉** 壺15　皿16　水滴18　**灰釉** 皿17
染付 皿20　**金属製品** 笄21　銅銭22～26　**その他** 坩堝19



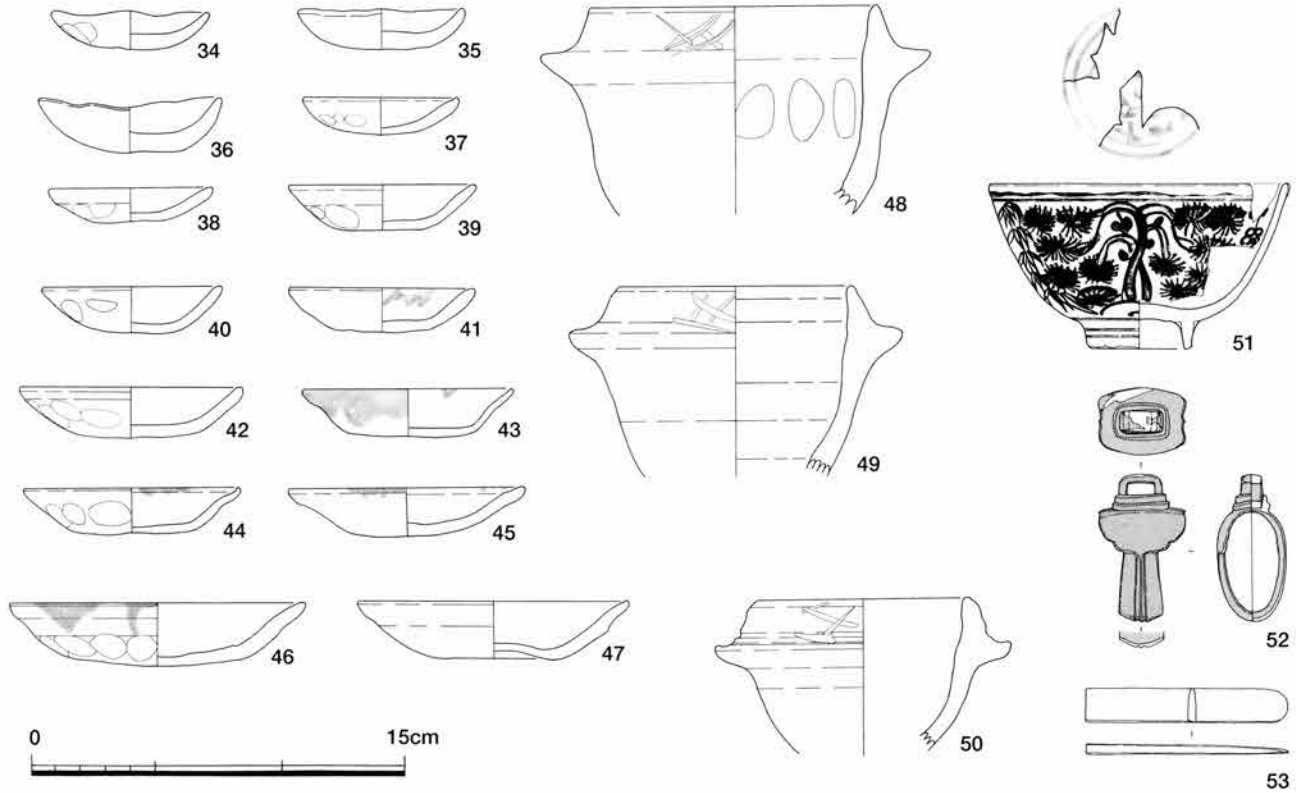
耕土出土・表採遺物　**越前焼** 甕1～3　鉢4・7・8　擂鉢6・9　**土師質土器** 皿10～12　土鈴13　**鉄釉** 壺15　皿16　水滴18　**灰釉** 皿17
金属製品 笄21　**その他** 坩堝19

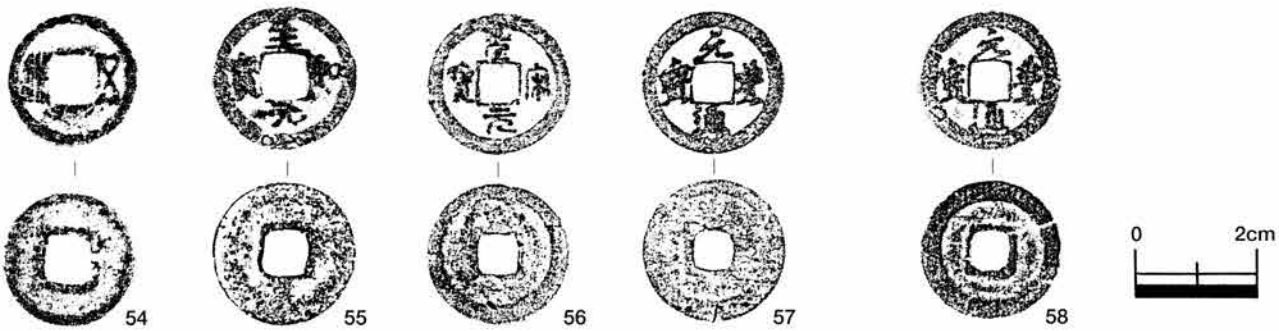
第7図　第49次調査出土遺物（2）

SS2001

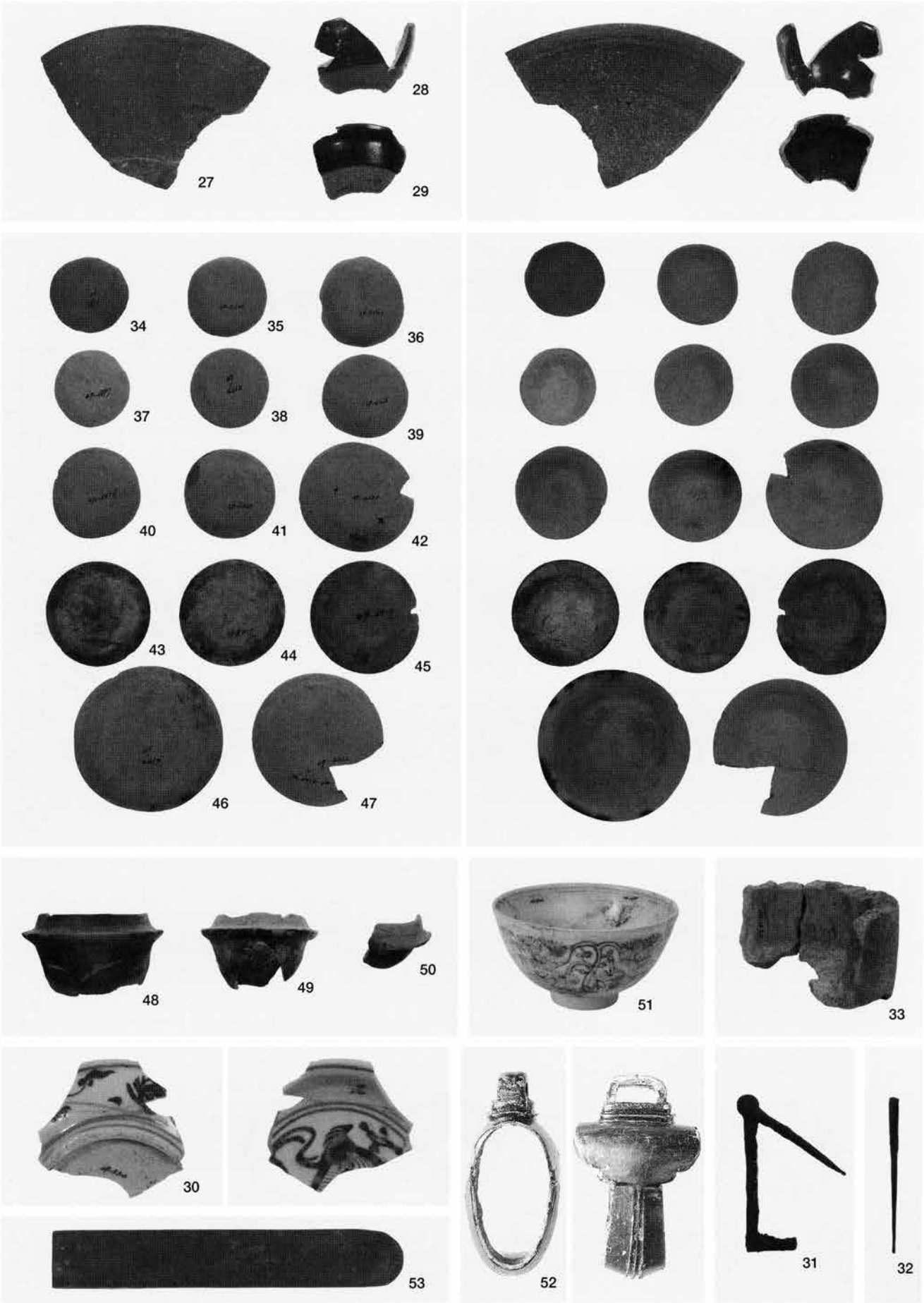


SD2860・SD2863





越前焼 鉢27　**土師質土器** Ⅲ34～47　羽釜48～50　**鉄釉** 碗28・29　**染付** Ⅲ30　碗51　**金属製品** 煽止金具31　釘32　足金物52　鞘53　銅銭54～58　**石製品** 行火33

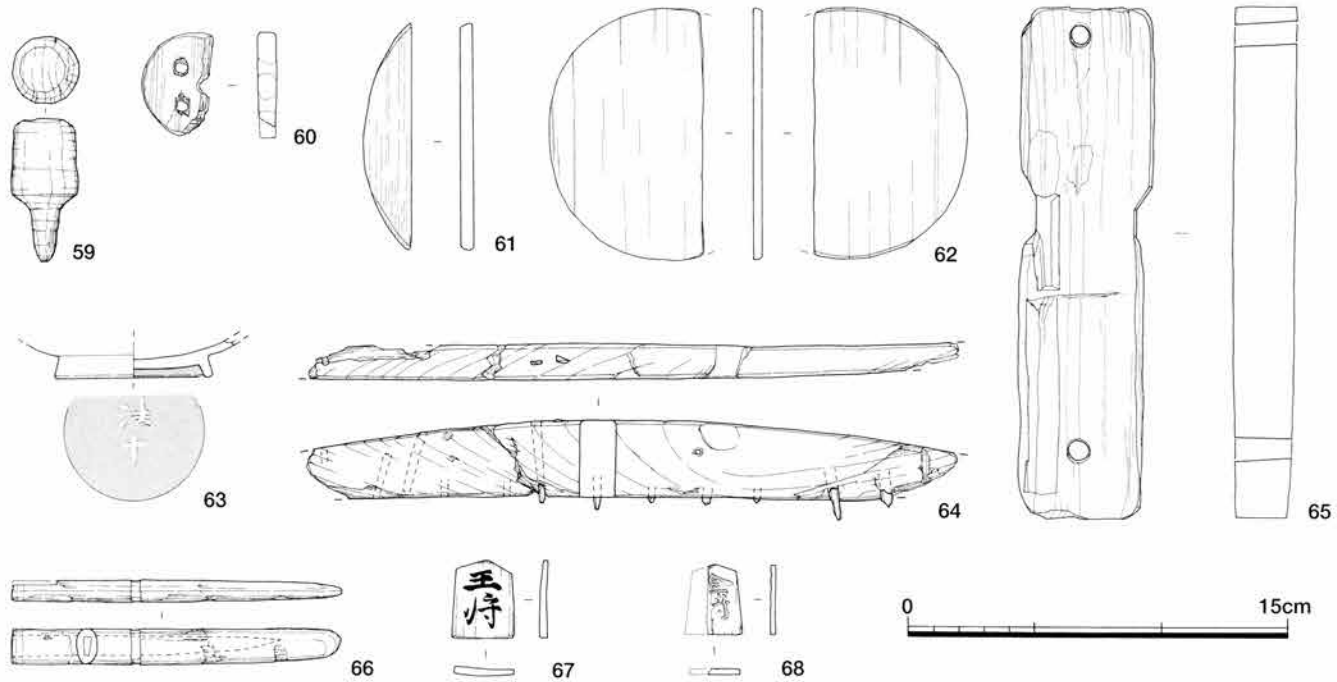


SS2001 **越前焼** 鉢27　**鉄釉** 碗28・29　**染付** 皿30　**金属製品** 煽止金具31　釘32　**石製品** 行火33

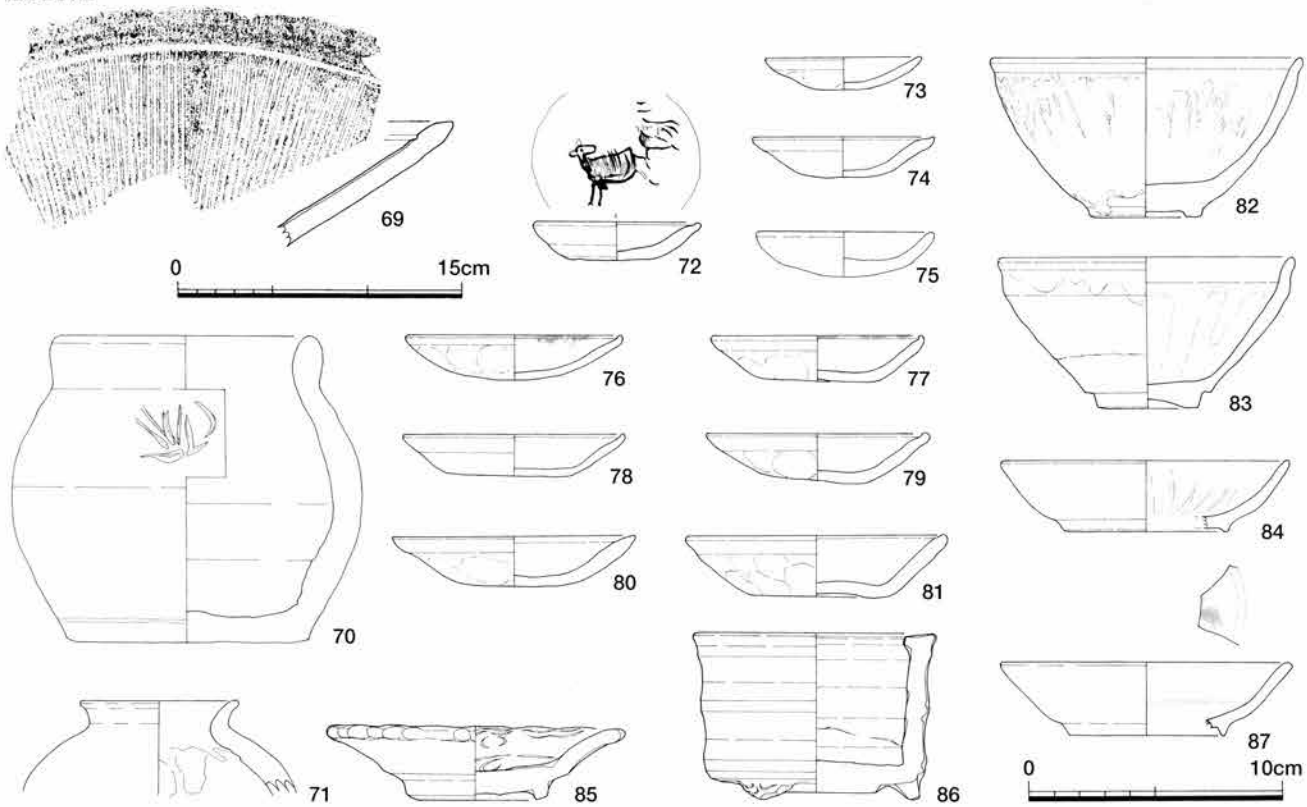
SD2860・SD2863 **土師質土器** 皿34～47　羽釜48～50　**染付** 碗51　**金属製品** 足金物52　鞘53

第8図　第49次調査出土遺物（3）

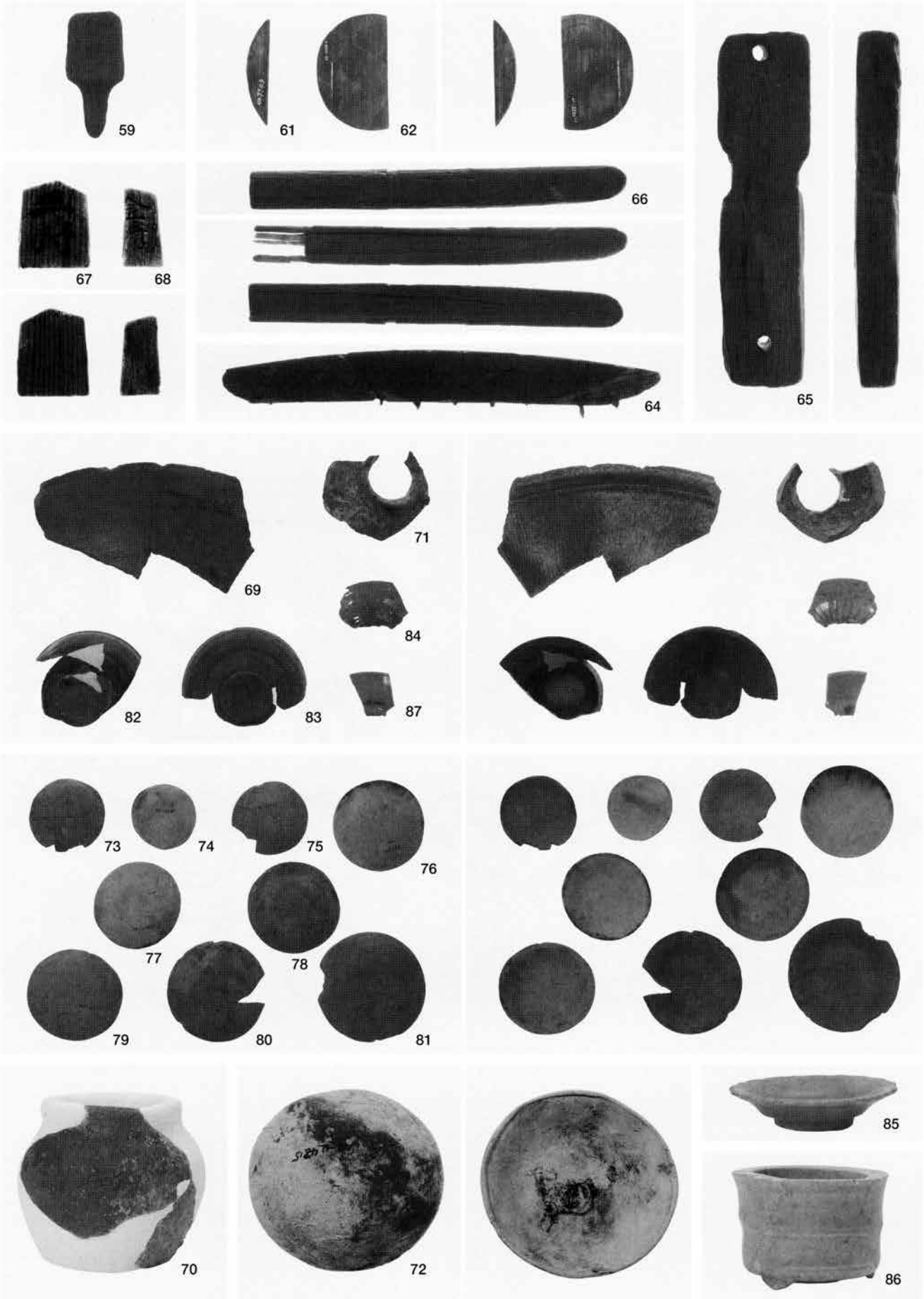
SD2863



SD2872



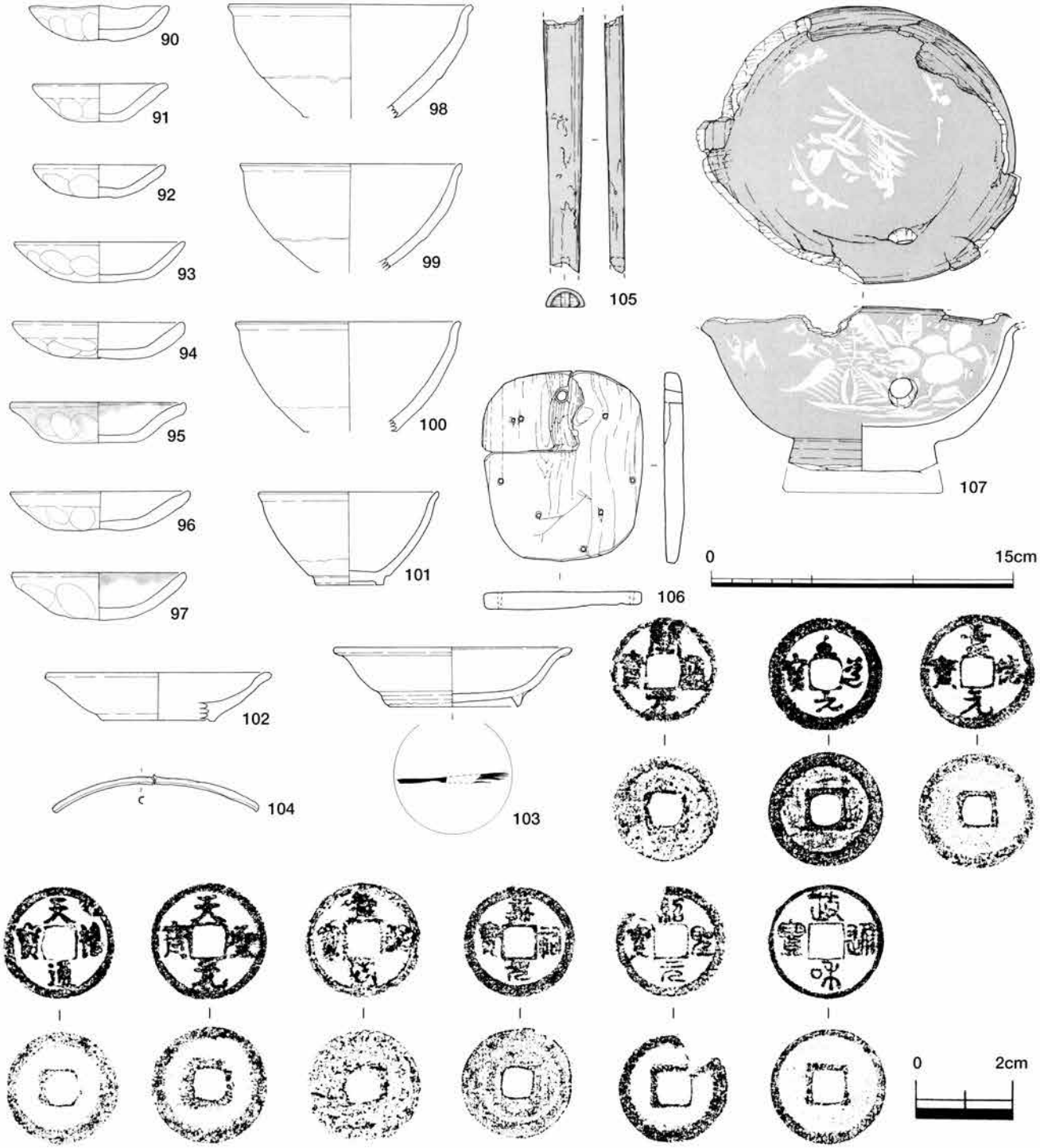
木製品 栓59　曲物60～62　漆椀63　把手64　不明65　鞘66　将棋駒67・68　**越前焼** 擂鉢69　壺70・71　**土師質土器** 皿72～81
鉄釉 碗82・83　皿84　**青磁** 皿85　香炉86　**染付** 皿87　**金属製品** 銅銭88・89



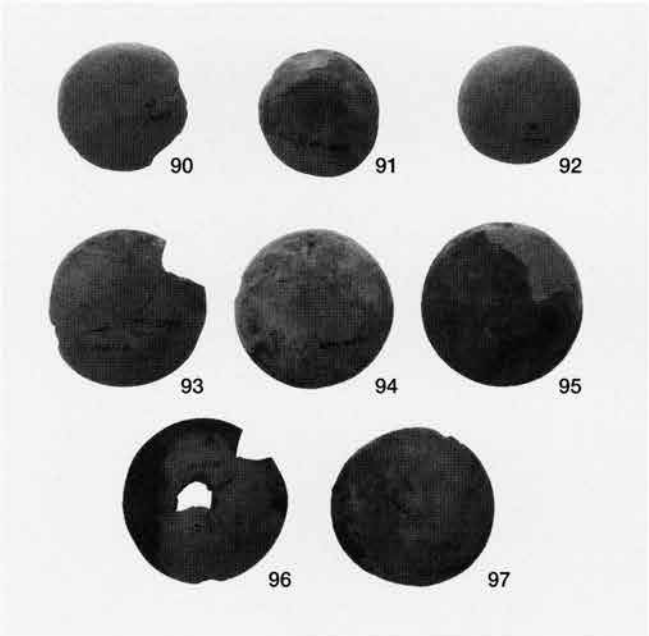
SD2863 **木製品** 栓59　曲物61・62　把手64　不明65　鞘66　将棋駒67・68　SD2872 **越前焼** 擂鉢69　壺70・71　**土師質土器** 皿72～81　**鉄釉** 碗82・83　皿84　**青磁** 皿85　香炉86　**染付** 皿87　**金属製品** 銅銭88・89

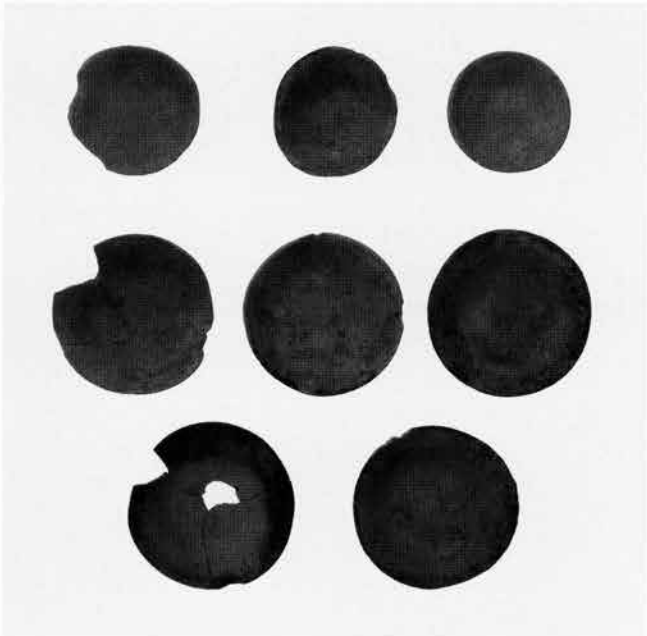
第9図　第49次調査出土遺物（4）

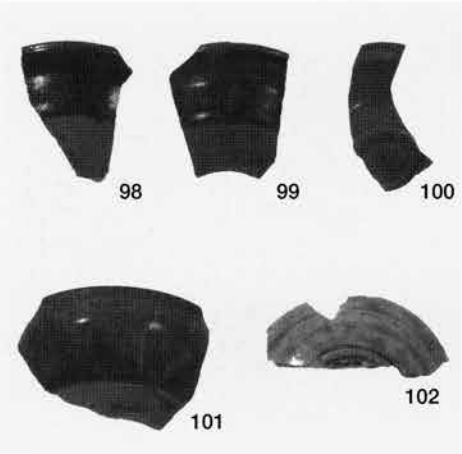
SD2699

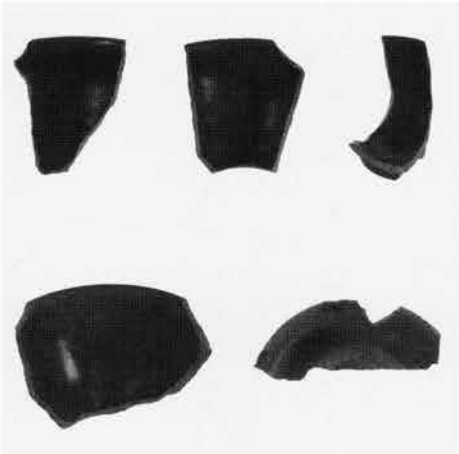


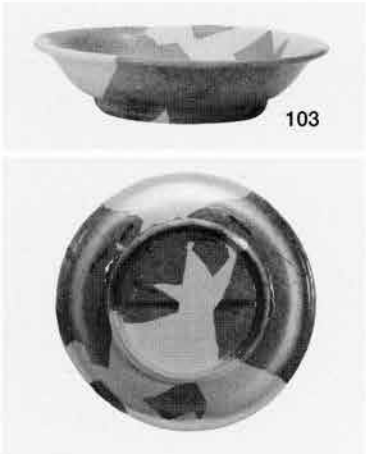
土師質土器 皿90～97　**鉄釉** 碗98～101　**灰釉** 皿102　**白磁** 皿103　**金属製品** 不明104　銅銭108～116　**木製品** 漆塗木製品105
下駄106　漆椀107

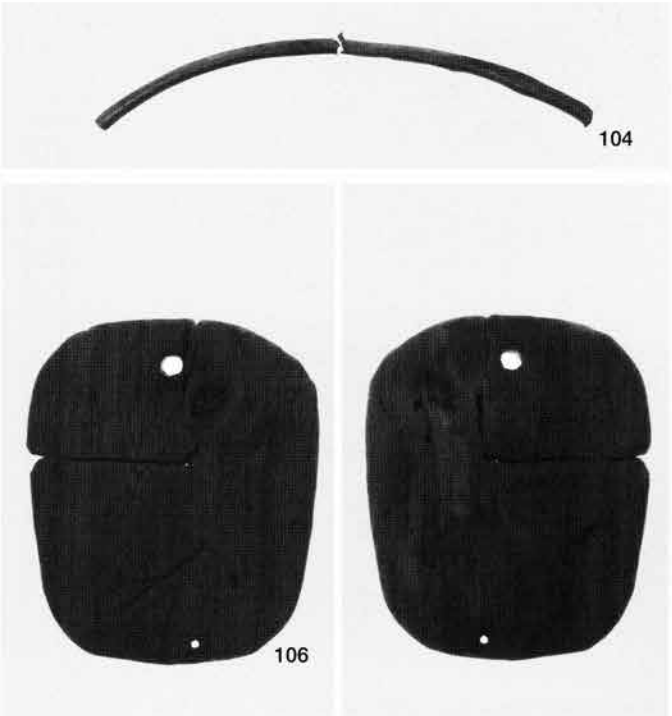








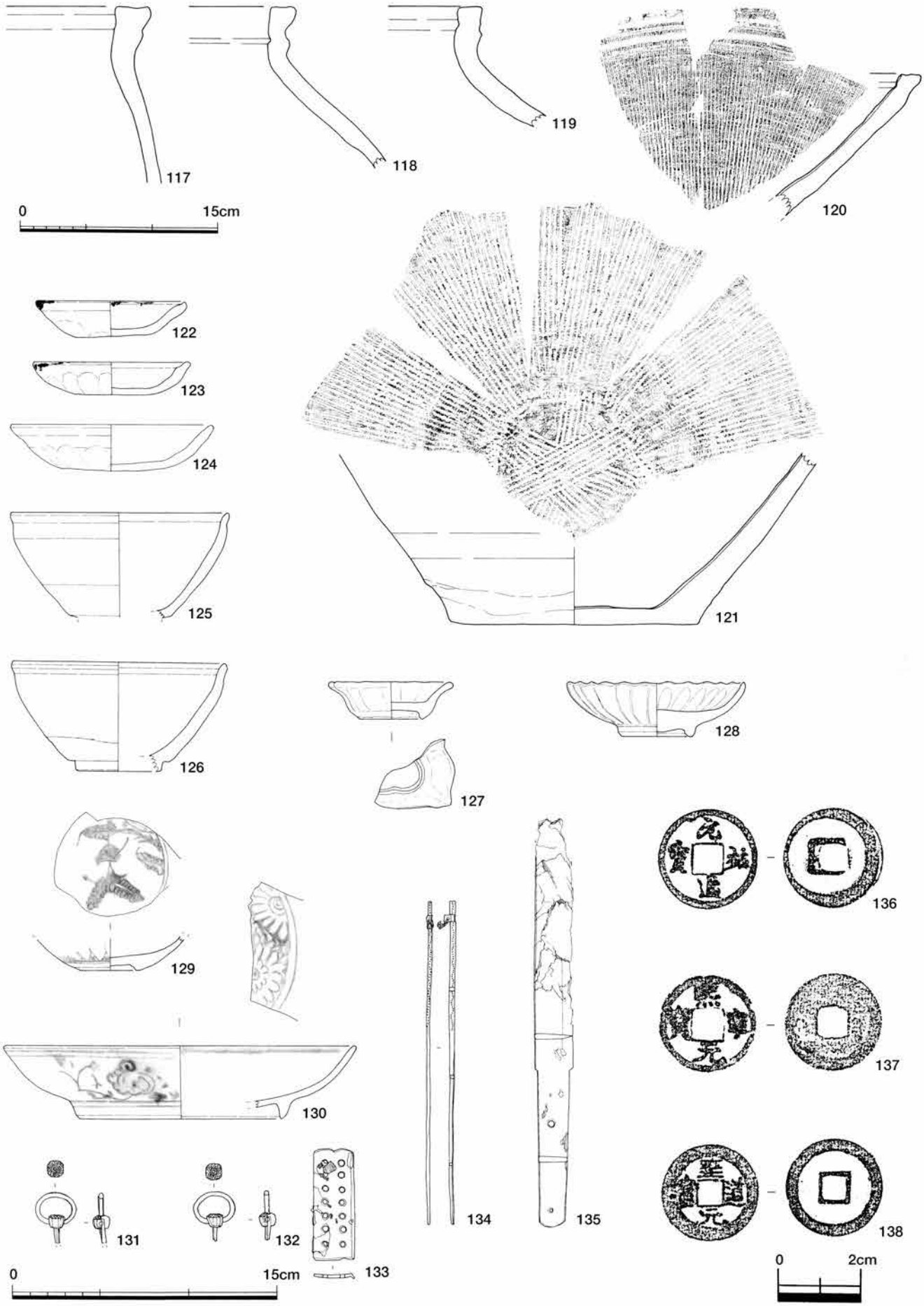




SD2699 **土師質土器** Ⅲ90～97　**鉄釉** 碗98～101　**灰釉** Ⅲ102　**白磁** Ⅲ103　**金属製品** 不明104　**木製品** 漆塗木製品105　下駄106　漆椀107

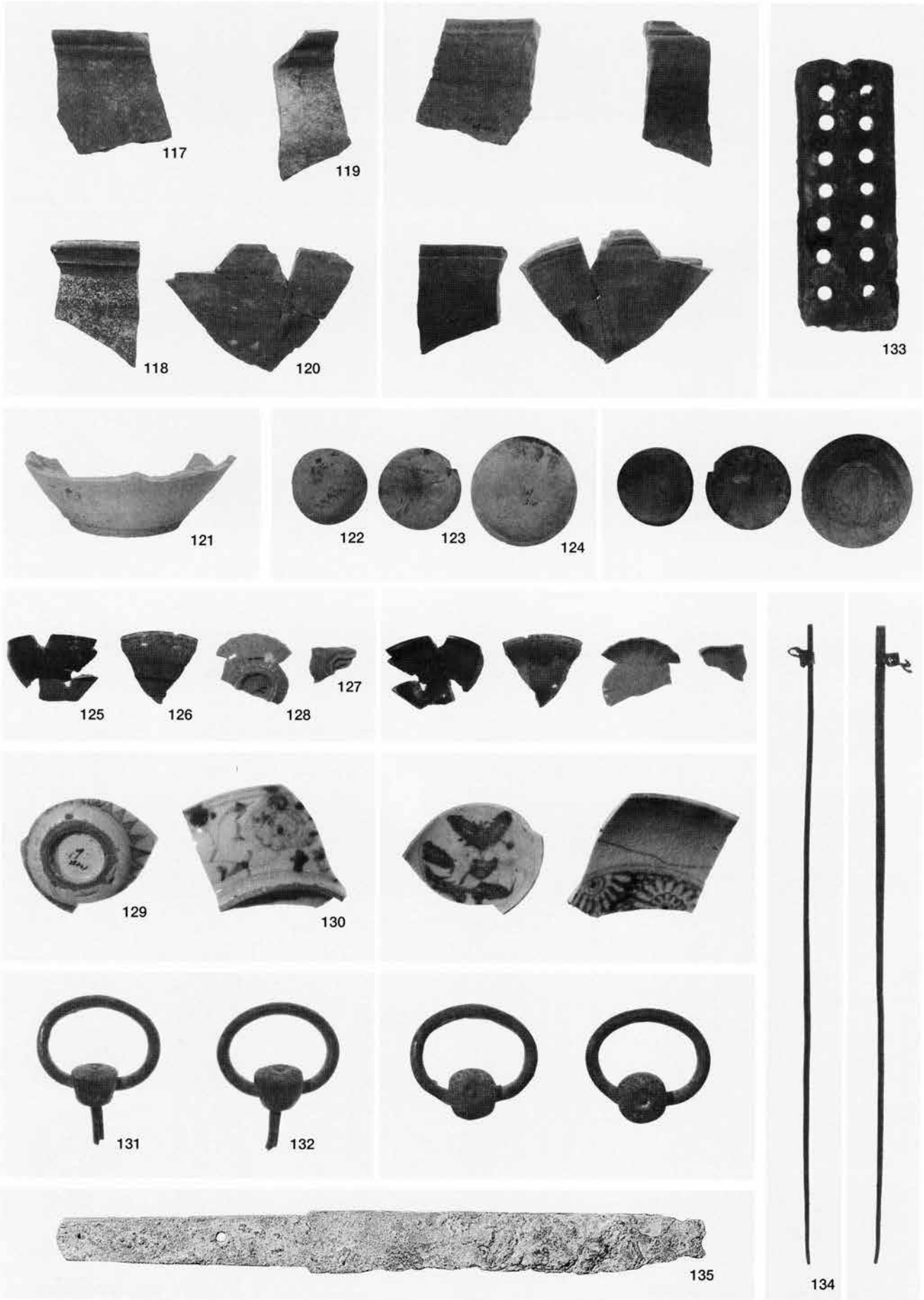
第10図　第49次調査出土遺物（5）

武家屋敷上層遺構



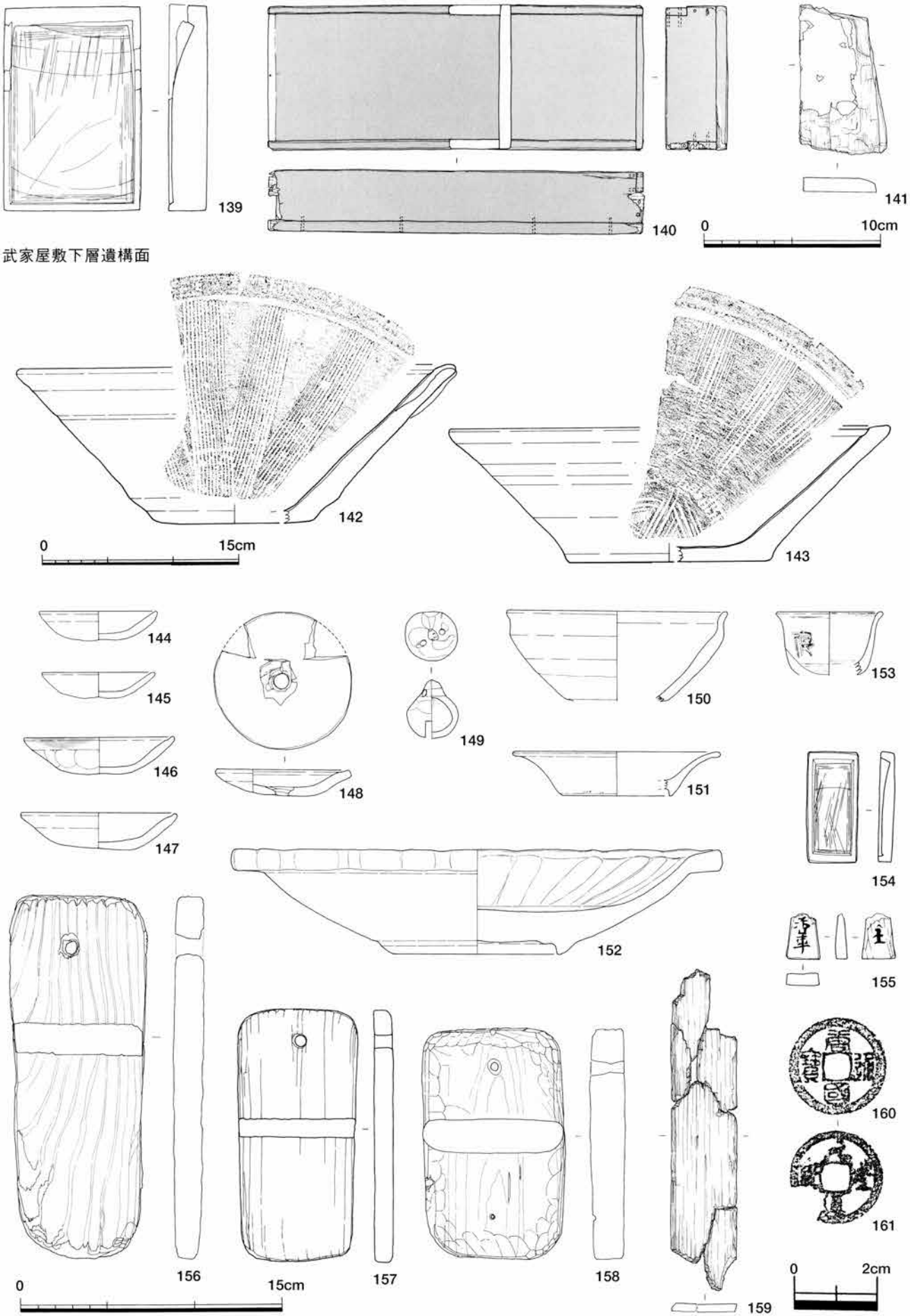
越前焼 甕117～119　擂鉢120・121　**土師質土器** 皿122～124　**鉄釉** 碗125・126　**青磁** 皿127・128　**染付** 皿129・130

金属製品 鐶付金具131・132　小札133　火箸134　刀135　銅銭136～138

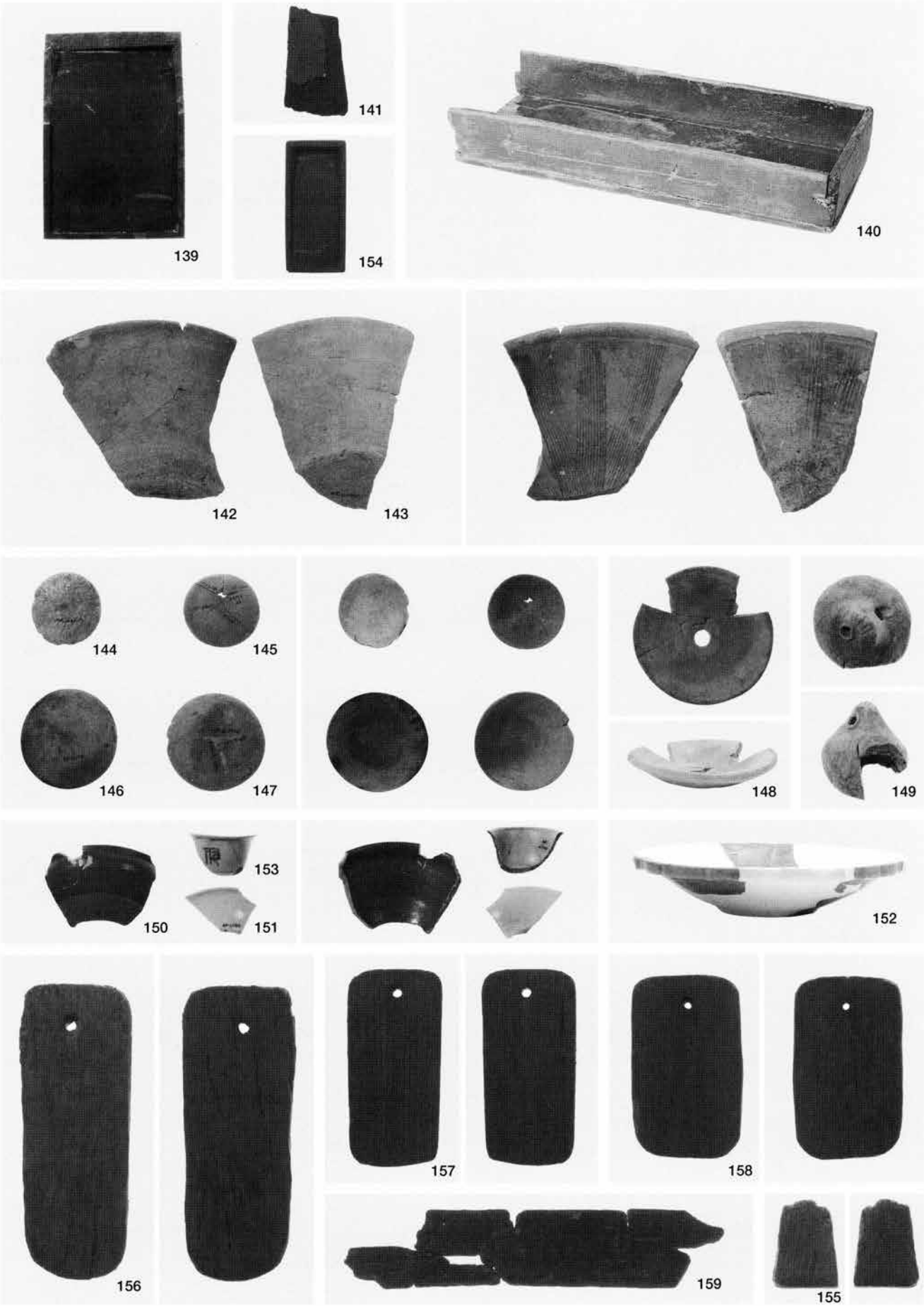


武家屋敷上層遺構 **越前焼** 甕117～119　擂鉢120・121　**土師質土器** 皿122～124　**鉄釉** 碗125・126　**青磁** 皿127・128
染付 皿129・130　**金属製品** 鐶付金具131・132　小札133　火箸134　刀135

第11図　第49次調査出土遺物（6）



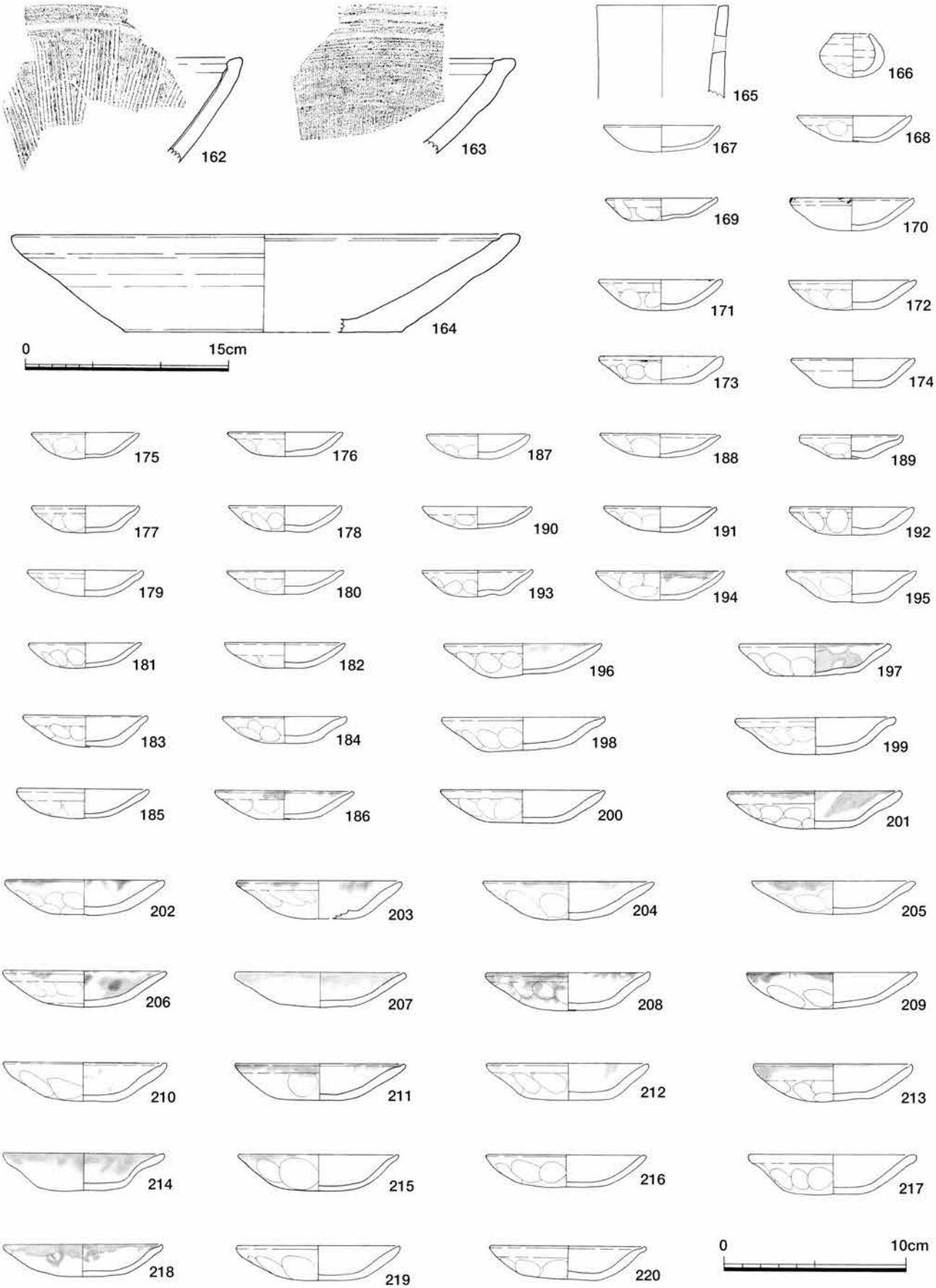
石製品 硯139・154　**木製品** 漆箱140　漆塗木製品141・159　将棋駒155　下駄156～158　**越前焼** 擂鉢142・143
土師質土器 皿144～148　土鈴149　**鉄釉** 碗150　**青磁** 盤152　**白磁** 皿151　**染付** 坏153　**金属製品** 銅銭160・161



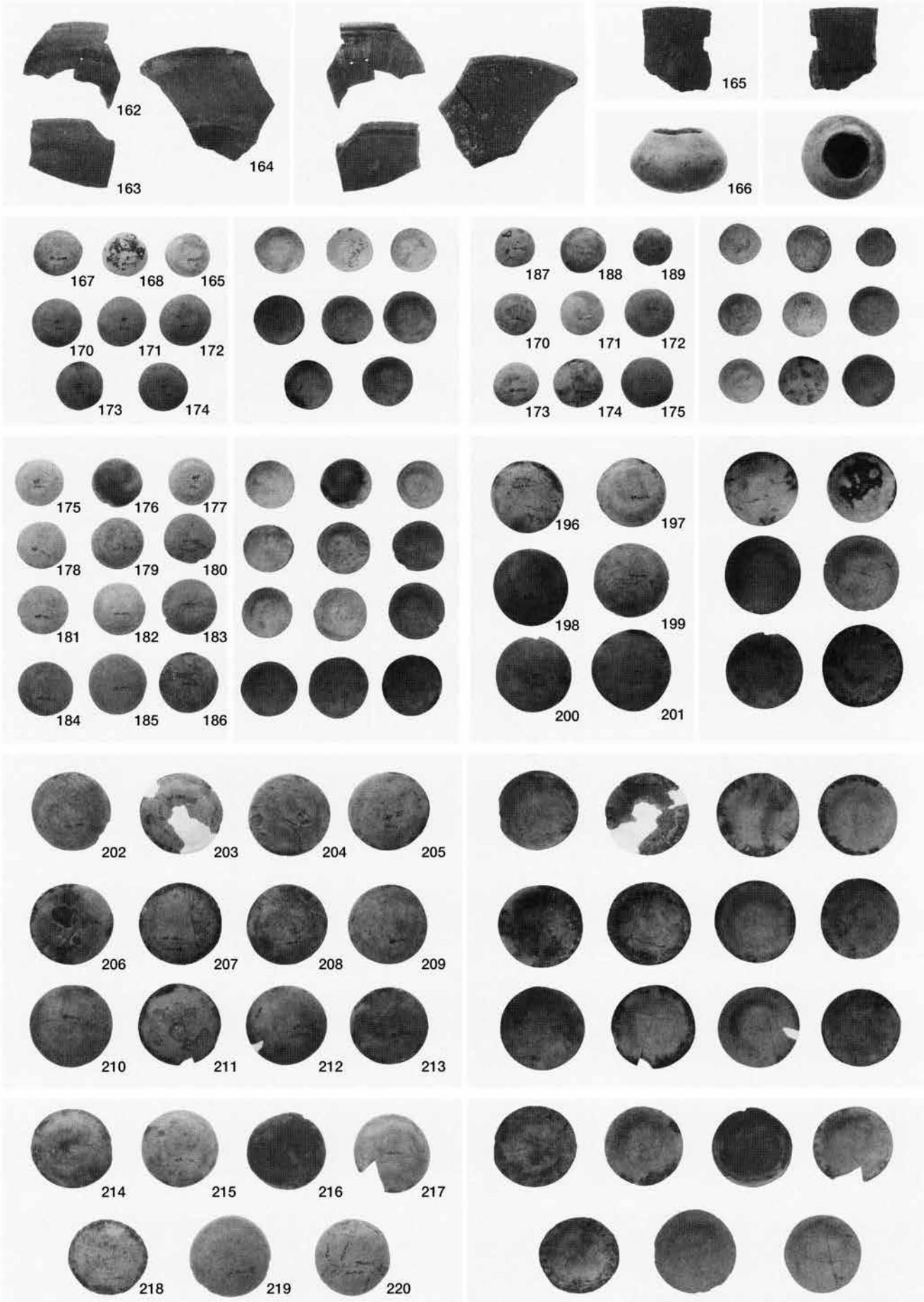
武家屋敷上層遺構　**石製品** 硯139　**木製品** 漆箱140　漆塗木製品141　武家屋敷下層遺構　**越前焼** 擂鉢142・143
土師質土器 皿144～148　土鈴149　**鉄釉** 碗150　**青磁** 盤152　**白磁** 皿151　**染付** 坏153　**金属製品** 銅銭160・161　**石製品** 硯154
木製品 将棋駒155　下駄156～158　漆塗木製品159

第12図　第49次調査出土遺物（7）

武家屋敷整地層

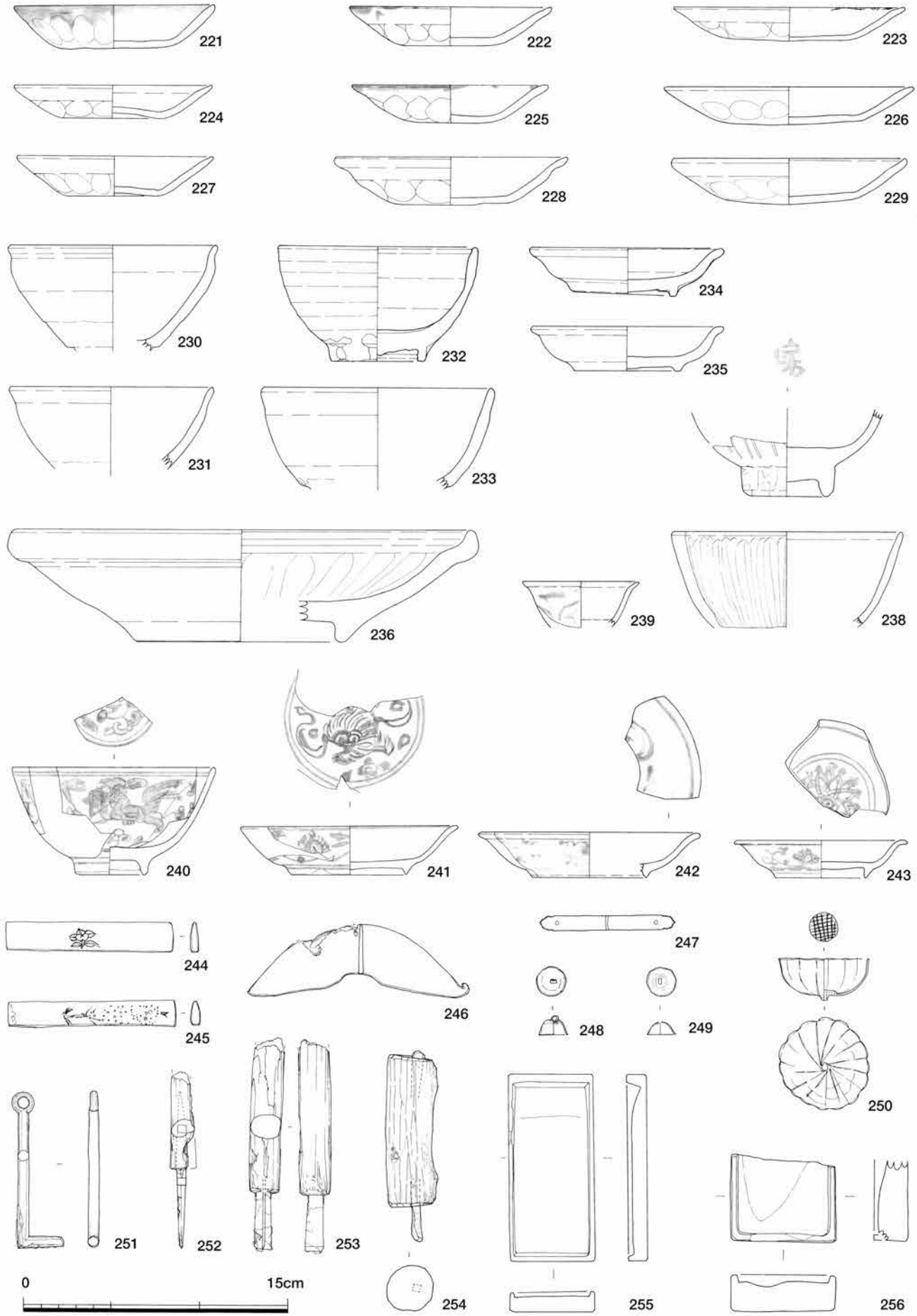


越前焼 擂鉢162･163　鉢164　掛花生165　**土師質土器** 小壺166　皿167～220

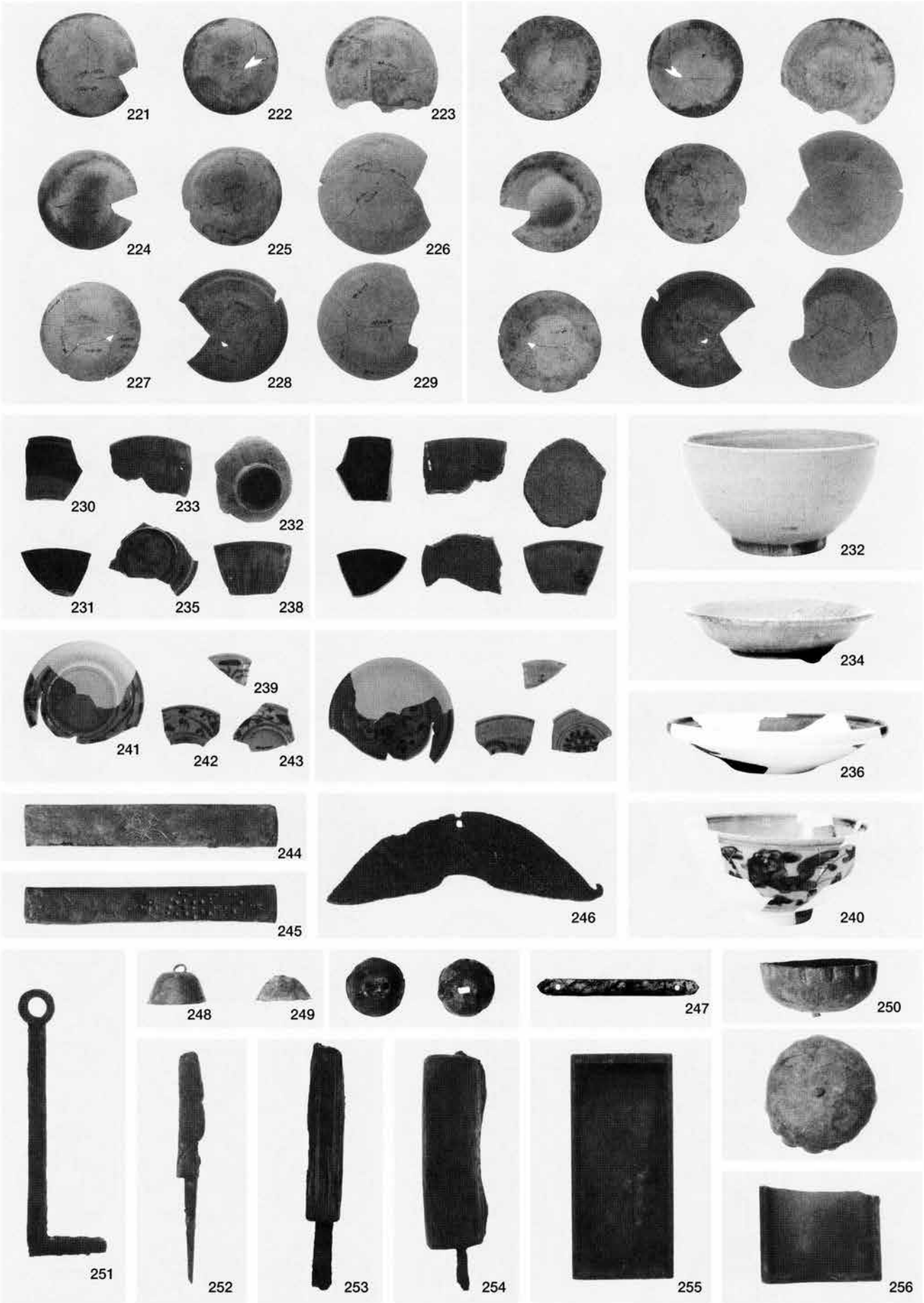


武家屋敷整地層　**越前焼** 擂鉢162・163　鉢164　掛花生165　**土師質土器** 小壺166　皿167～220

第13図　第49次調査出土遺物（8）

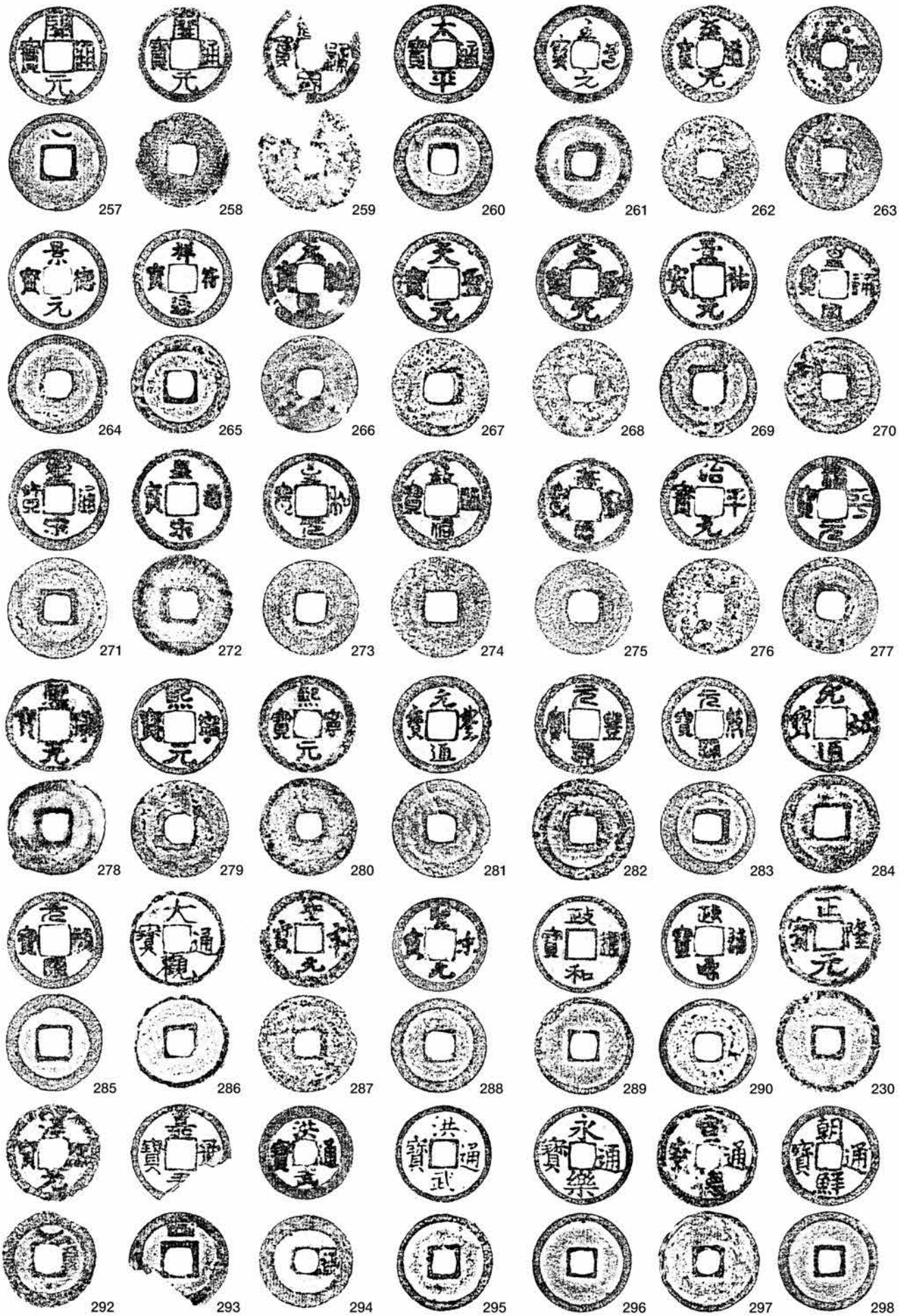


土師質土器 皿221～229　**鉄釉** 碗230・231　**灰釉** 碗232・233　皿234・235　**青磁** 碗237・238　盤236　**染付** 坏239　碗240　皿241～243　**金属製品** 小柄244・245　火打金246　飾り金具247　鈴248・249　紅皿250　煽止金具251　錐252　鑿253　把手254　**石製品** 硯255・256

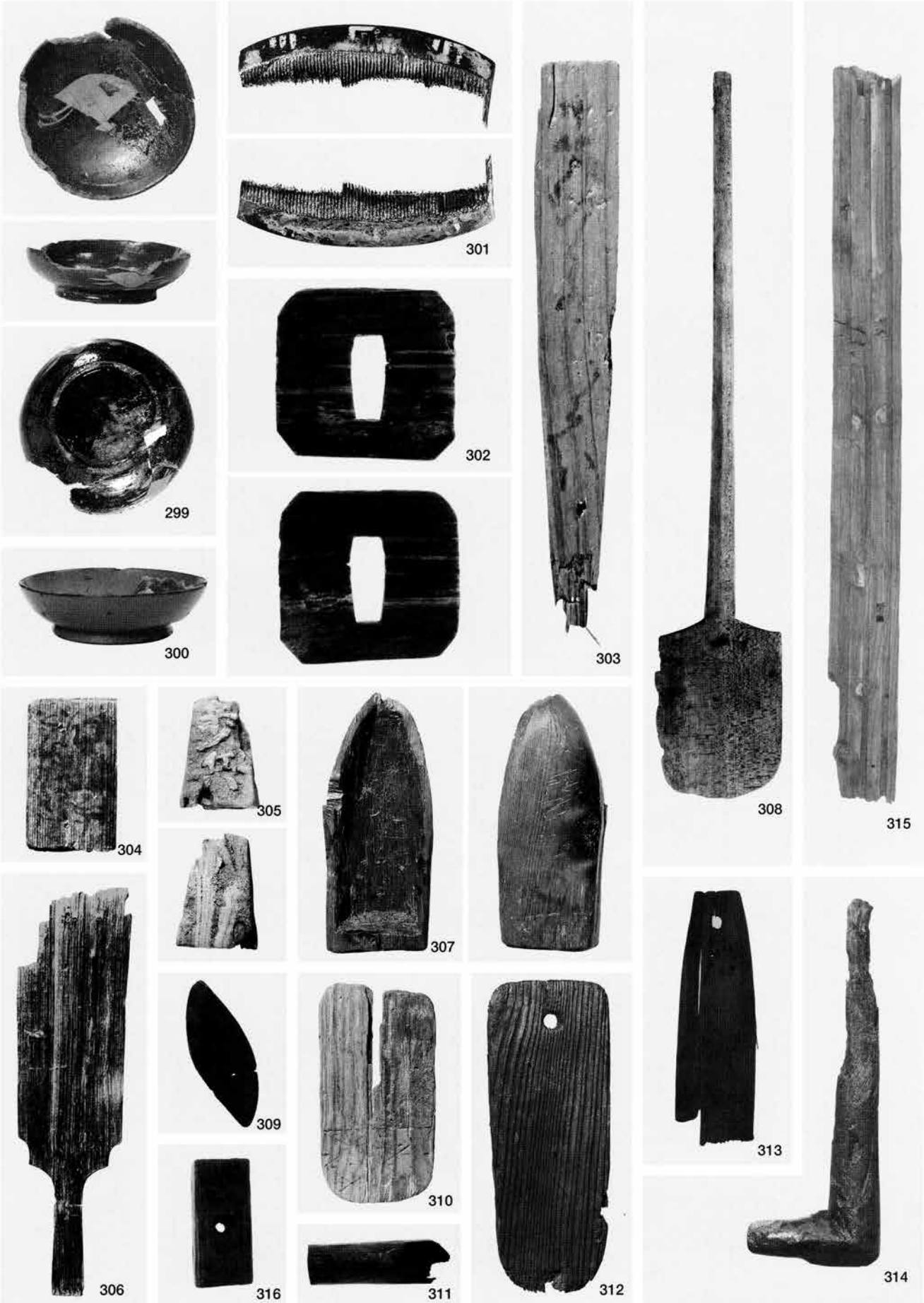


武家屋敷整地層　**土師質土器** 皿221～229　**鉄釉** 碗230・231　**灰釉** 碗232・233　皿234・235　**青磁** 碗237・238　盤236
染付 坏239　碗240　皿241～243　**金属製品** 小柄244・245　火打金246　飾り金具247　鈴248・249　紅皿250　煽止金具251　錐252
鑿253　把手254　**石製品** 硯255・256

第14図　第49次調査出土遺物（9）

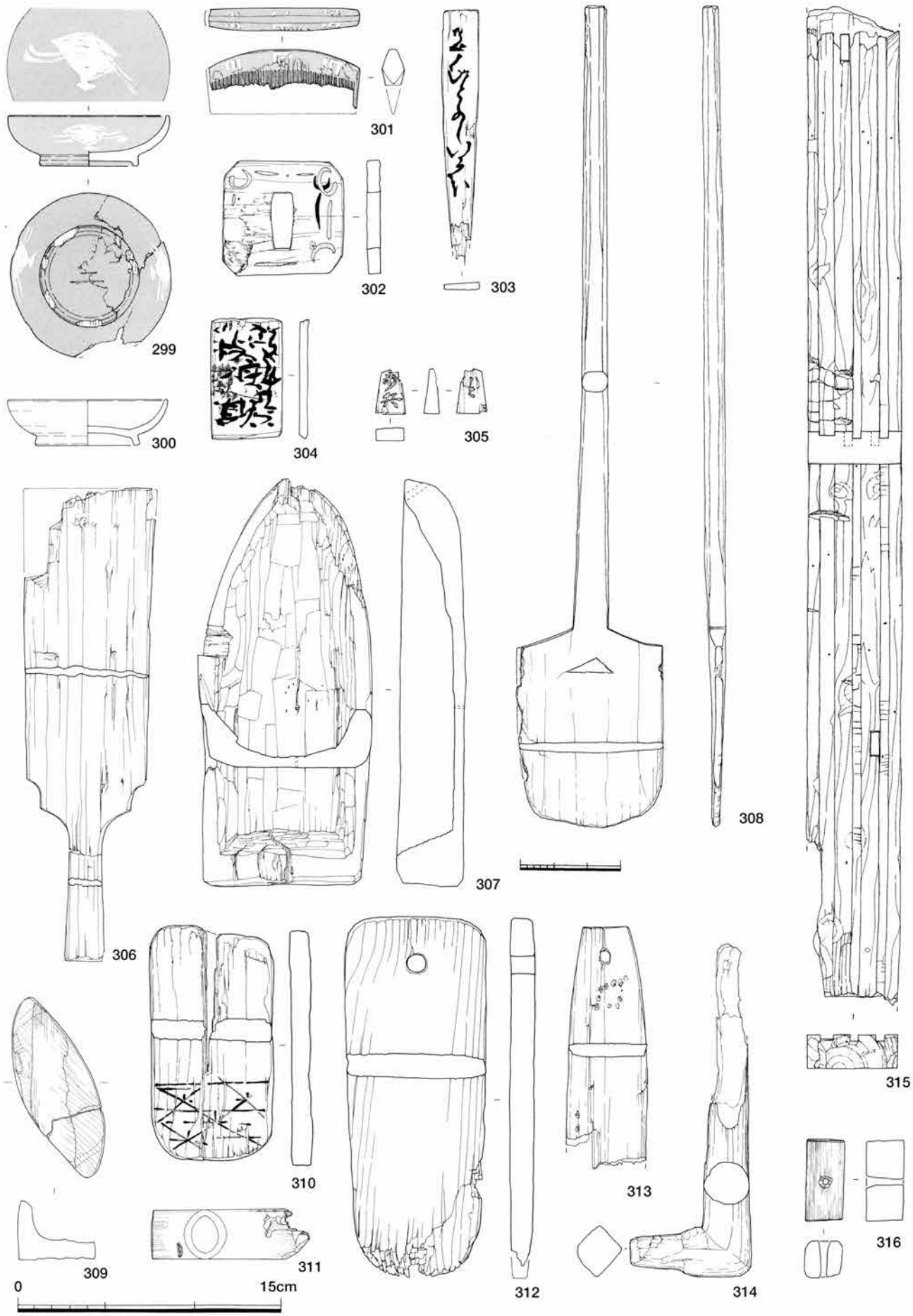


金属製品 銅銭257～298



武家屋敷整地層　**木製品** 漆塗皿299・300　蒔絵櫛301　鍔302　木札303　墨書木製品304　将棋駒305　羽子板状木製品306　舟307　雪ばんば308　黒漆塗木製品309　竹材加工製品311　下駄310・312　不明木製品313・316　柄314　敷居315

第15図　第49次調査出土遺物（10）



木製品 漆塗皿299・300　蒔絵櫛301　鍔302　木札303　墨書木製品304　将棋駒305　羽子板状木製品306　舟307　雪ばんば308　黒漆塗木製品309　竹材加工製品311　下駄310・312　不明木製品313・316　柄314　敷居315

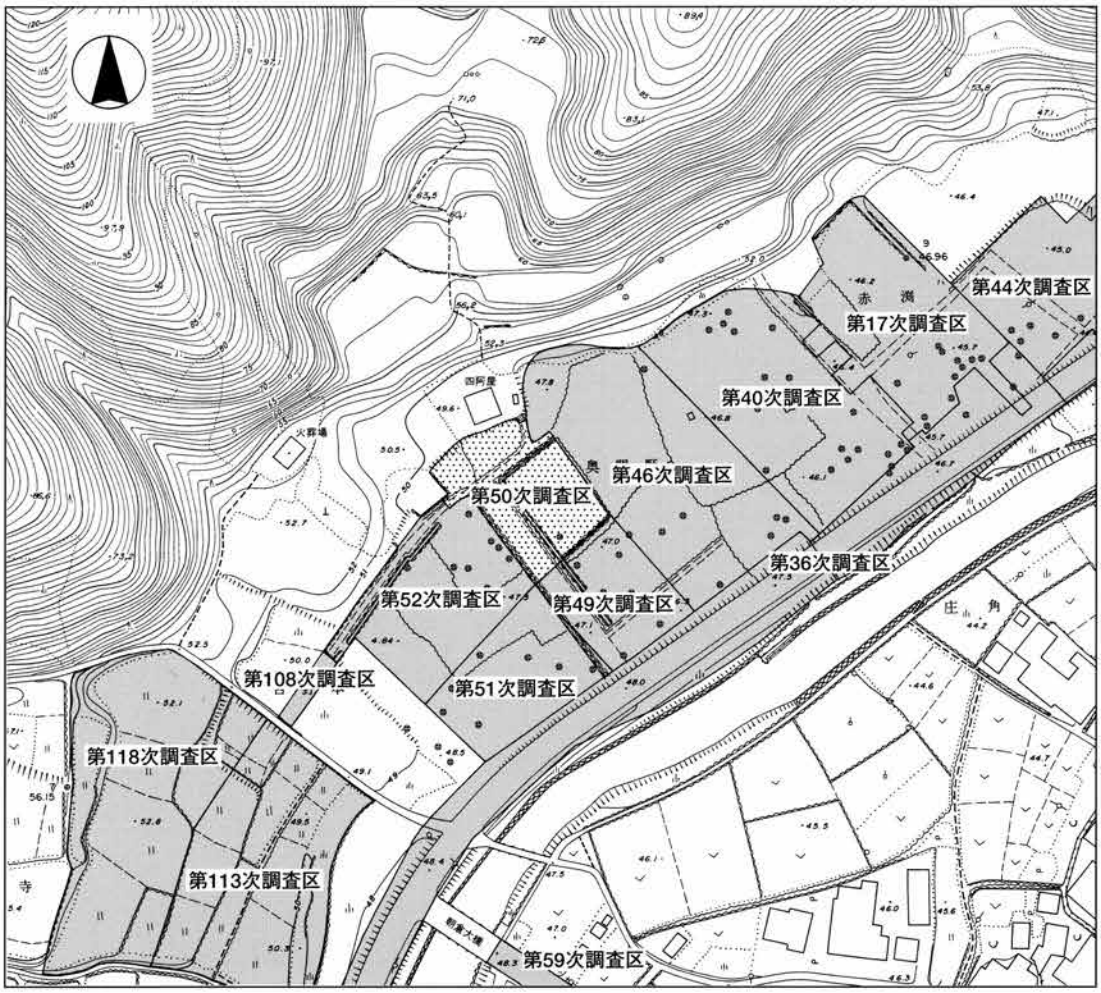
Ⅲ　第 50 次 調 査

Ⅲ　第50次調査

1．調査の経過と概要

第50次調査の対象地区は、第46次調査区の南側、第49次調査区の西側に位置する。字名は奥間野および吉野本で、第17・36・40・42・44・46・49次調査と継続して発掘してきた赤淵・奥間野地区の南西部分にあたる。調査面積は約1,300㎡である。赤淵・奥間野地区は遺構の残りが良く、町割が良くわかる地区ということで、調査範囲を拡大し広範囲にわたって詳細な町割についての情報を得ることを目的として調査を実施した。しかし、本調査区の場合は、朝倉氏滅亡時に対応する最終期と考えられる遺構の残存状況は悪く、一部を除いて下層遺構の検出を行った。

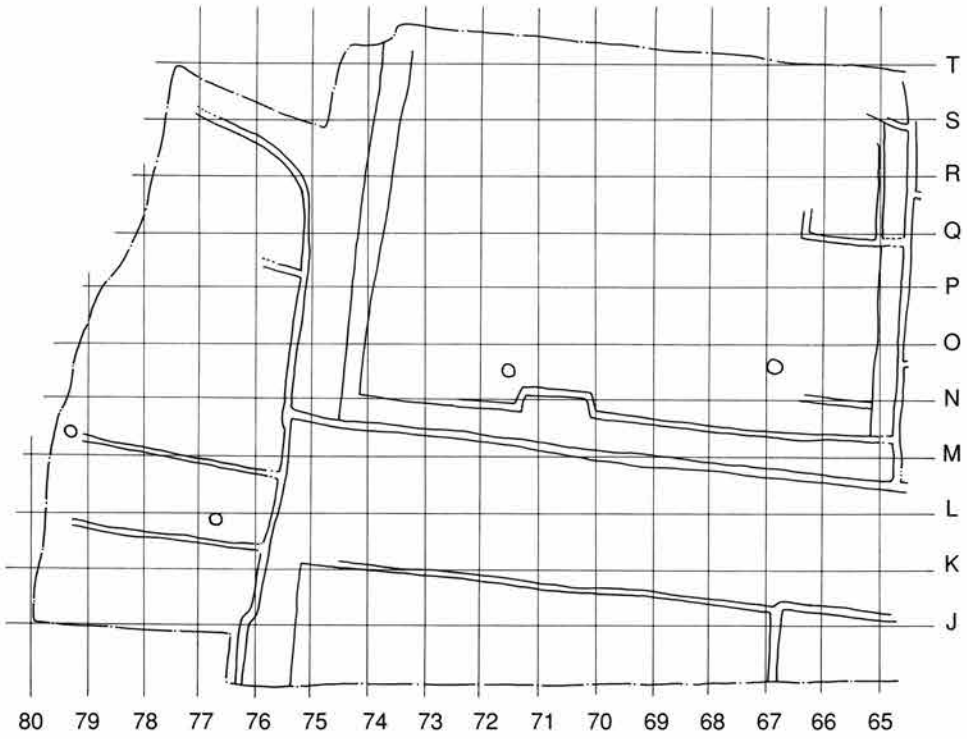
赤淵・奥間野地区は、「一乗谷古絵図」や地籍図等から、遊国寺・西光寺・サイゴー寺などの寺名が知られ、第17・46次調査の結果でも、寺院や墓地の遺構が検出されていた。第50次調査では寺院の遺構は検出されなかったが、三方を土塁石垣で囲まれた武家屋敷が1区画と、小区画に分割された町屋区画が検出された。町割に関係する遺構としては、第36・49次調査で検出されていた東西道路SS2001の西端が、南北道路SS2950・2952に接続してT字路となることがわかった。



挿図６　第50次調査区周辺地形図（1／2000）

第50次調査区は第46・49・52次調査区と接しているため、発掘調査によって確認された遺構にしたがって、本報告書で取り扱う範囲を若干調整する。まず、東西道路SS2001の北側の武家屋敷区画は、すでに第49次調査で屋敷区画の東側一部を検出していた。グリッド配置図でみると、67列東側までは、第49次調査で発掘した範囲となるが、土塁石垣で囲まれた屋敷区画の大部分は第50次調査区に含まれるので、屋敷の境界となる石垣土塁SA2882以西を、1区画として第50次調査でまとめて取り扱う。東西道路SS2001以南の町屋区画は、第50次調査で発掘したが、区画の一部分しか検出していないので、第52次調査区の町屋区画として扱うこととし、本報告書では取り上げない。また、道路SS2951の北側についても、第46次調査区として扱い、本報告書では取り上げない。

なお、本報告書で記述、使用している方位は、町割の方向にしたがっており、地図上のものとは若干異なり、一乗谷川側を東、山側を西としている。



挿図7　第50次調査区グリッド設定図

第50次調査日誌抄

昭和59年(1984)8月1日～11月6日

8・1　50次調査区の表土除去作業を開始。

・23　ベルトコンベアを使って、上層遺構面まで検出。上層遺構は削平されてほとんど残っていないことを確認する。M列で土塁石垣SA2881および門SI2988を検出。

・24　東西道路SS2001のガラ石埋土を除去。道路面は未検出。

・25　東西道路南側を引き続き検出する。J列70～72付近は上部が崩れており、下部の石のみ残る。72～74は大きな割り石を立てて組んでおり、石垣明瞭。道路北側石垣については、M列73付近の崩れた石垣を除去する。

・31　Q列74～T列74にかけて土塁石垣SA2791を検出。74列西側で南北道路と一部で側溝を検出。

9・5,6　南北道路SS2950を埋める石を除去する。75列西側の遺構面検出作業。J列およびQ列で礎石列を確認。

・10　石垣SV2965・2966検出作業。南西角の石垣は残存状態悪い。東西溝SD2955を検出。

・11　西山裾の石垣検出終了。75列以西は排水不良のため乾くまで遺構の検出保留。75列東側の遺構出作業にかかる。

・12　74列以東について青色粘土・山土整地土を除去し下層検出に入る。全体に25～30cm掘り下げ、一部で礫石敷・木炭層を確認。また柱根、杭を検出する。越前焼、染付等の遺物を出土するが、古い時期のものがみられる。

・13　70列以東の山土整地土を除去し、下層で礎石建物SB2975を検出。礎石建物の南半では山土ブロック整地土と有機質土による土座面を検出した。石積施設SF2987を検出する。焼土がつまる。

・19　礎石建物SB2975の西側部分を検出。硯、白磁皿等出土。

・26　76列以西について、下層掘り下げ。茶褐色山土盛地土を約10cm掘り下げる。礎石建物SB2970を検出。石積施設SF2986検出。遺構内は木炭の多い黒褐色粘土がつまる。SE2983検出。粘土で埋まる。遺物の出土は少ない。

・27　遺構面検出終了し、清掃と溝掘り作業。

10・1～12　46次調査区の池周辺の確認調査。

・14、15　東西道路SS2001の北側溝を掘る。下層では素掘りになっており、門の部分のみ石を積んでいる。下層の道路面を確認する。

・18　東西道路SS2001の西半を更に掘り下げ、道路面を5面確認する。

・19　東西道路SS2001の道路面検出作業続ける。南北道路SS2950のN列にトレンチを入れる。

・20　南北道路SS2950のトレンチ写真撮影。

・22　セクションベルト断面清掃。

11・6　遺構清掃作業終了。第49・50次調査区を合わせて、ヘリコプターによる空中写真測量を実施。

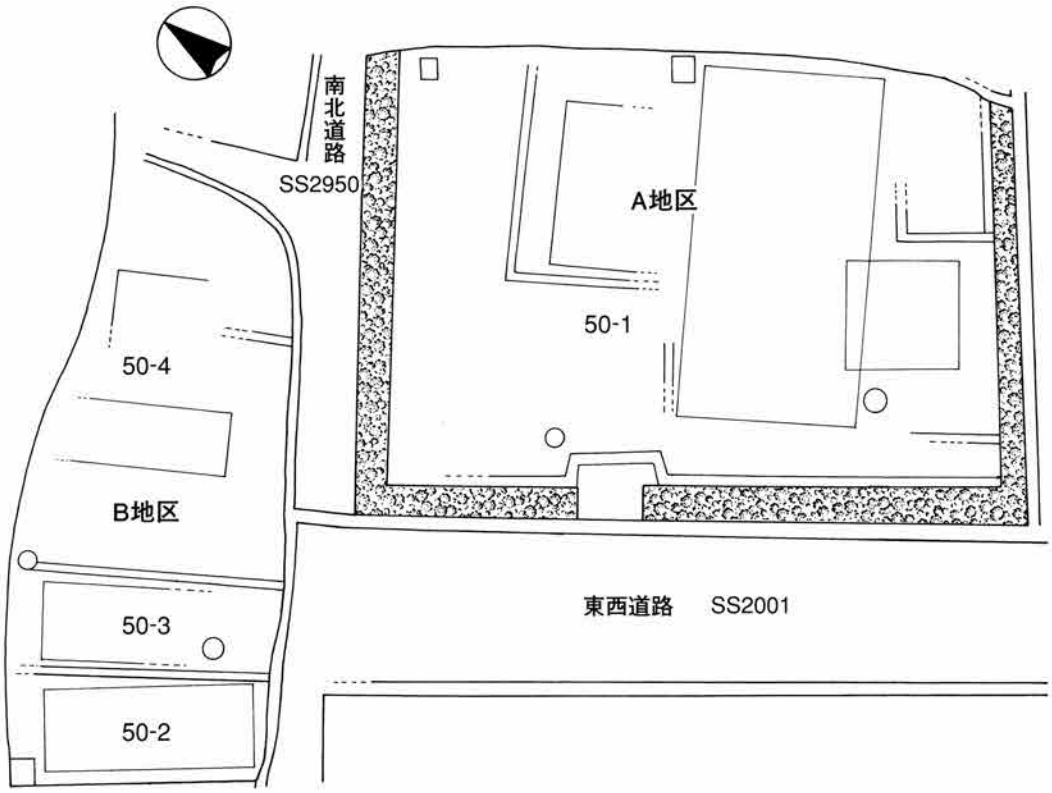
2．遺構（第16図～23図、PL.19～31）

第50次調査区は検出された道路遺構によって、大きく3つの地区に分けられる。東西道路SS2001の南側については、第50次調査では屋敷区画の一部分を検出したにすぎないので、この屋敷区画の大半が調査範囲となっている第52次調査について報告する際にまとめて報告することとする。このため、本報告書で扱う範囲は、主として東西道路SS2001の北側の武家屋敷区画と、南北道路SS2950・2952を境とする西側の町屋区画である。まず、町割の基本となる道路遺構について述べ、次に武家屋敷区画をA地区、町屋区画をB地区として、それぞれの地区ごとに報告する。

本調査区は、朝倉氏滅亡時期に該当する最終時期の遺構残存状況が悪く、下層の遺構面の検出を行なった。検出された主な遺構は、道路4、土塁3、石垣4、溝16、礎石建物10、門1、井戸4、石積施設3、柵列2等であった。A地区は三方を土塁石垣に囲まれ、東西道路SS2001に面して門が1ヶ所だけ設けられているので、武家屋敷1軒としてあつかい、この屋敷を50-1として記述する。B地区については地区内が溝で区切られ、それぞれに礎石建物が建ち、その規模から町屋が並ぶ地区と考えられる。南側から順に50-2・3・4として1軒づつ記述する。

町割に関わる遺構

SS2001　この東西道路は、すでに第36次調査で一部が検出されていた。第49・50次調査でその続きが約64.5mにわたって検出されたことにより、総延長約79.5mが発掘されたことになる。道路東端は河川



挿図8　第50次調査区略図

の氾濫原の範囲に入るため未検出だが、南北幹線道路SS495に接続すると考えられる。第50次調査によって西端は南北道路SS2950・2952に接続し、T字路になることが明らかとなった。道路の幅は場所によってことなるが、全体的にみて西から東に進むにしたがい、道幅は狭くなる。南北道路SS2952に接する場所は幅約7.0mで、側溝を含めると約7.8m。第49次と第50次調査の屋敷を仕切る土塁石垣SA2882の付近では幅約6.2m（側溝を含むと7.4m）を測る。さらに東に進んで、南北道路SS2680と交わる地点では幅約6.0mで、第36次調査区では幅約5.5mと狭くなっている。道路の断面をみてみると、よく叩きしめられた粘質の山土の上に砂利を敷き詰めた厚さ約0.05～0.1mの層が幾層もみられる（第16図 東西道路SS2001西端土層図）。側溝等の改修状況など他の遺構と合わせて考えると、大きくは5回にわたって改造が行なわれたと推察される。改修ごとに砂利を入れて積み上げを行なっているので、最下層の道路面と最上層の道路面とでは0.8～1.0mの高低差がみられる。なお、最下層の道路面の更に下層から土壙SX3020が検出しており、町割が設定される以前の遺構として注目される。この道路がそのまま後世の字境として残り、北が奥間野、南が吉野本となっている。

SS2950　A地区とB地区を分ける南北方向道路で、道幅は約2.6mである。道路西側に側溝SD2954が設けられている。北進すると第46次調査で検出された大規模屋敷の進入路となる。道路断面から、3回の改修があったことが確認でき、これらの面はSS2001の中間期に対応する。当初は道路ではなく、また、最終時期には屋敷区画に取り込まれてしまい、道路としては使われなくなっていたと考えられる（第16図 Nライン北壁土層図）。

SS2951　南北道路SS2950に接続する枝道で、西側の山の方向に続いている。法満寺谷の方へに入っていく道か。長さ7.0mほどを検出したのみで、道幅約2.0m、南北道路SS2950と接する地点では道幅がややひろがり約2.6mを測る。

SS2952　東西道路SS2001に接続する南北方向の道路。西側の屋敷区画が道路側に張り出しているため、SS2001に交差する地点は道幅が狭くなっており、幅は約2.0mしかない。南進すると若干拡くなり、約2.6mを測る。道路断面はSS2001と対応しており、同じ期間にわたって道路として使用されていたことが確認できる。SS2951とは異なり、SS2001と同じく町割の基本となる道路であったと考えられる。

SD2860　東西道路SS2001の南側溝である。溝幅は約0.3mを測る。溝の南側石は屋敷の石垣となっており、道路面よりも約0.4m高く積まれる。東方向に排水されるので、西に進むにつれて溝は浅くなり、側石も小さく、一部では外れてしまったためか素掘の状態となっていた。また、南北道路SS2952に接する地点では、側石は検出されていない。道路の改修にあわせて、側溝も改修されている。

SD2863　東西道路SS2001の北側溝である。北面の側石はA地区の屋敷の土塁石垣となっている。南面は石を積まず素掘としている。この溝の西端は、南北道路SS2950・2952の西側溝SD2953・2954と接続している。A地区屋敷の門SI2988の正面と、南北道路SS2950に接する部分では、溝の南面にも側石が積まれている。溝幅は東進するに従って拡くなり、西端部では約0.4mだが、A地区屋敷の東端部では約0.8mを測る。

SD2953　南北道路SS2952の西側溝である。B地区の町屋区画50-2・3が南北道路SS2952に迫り出しているので、溝幅も約0.2～0.3mと狭く、南端部分では若干、幅がひろがり約0.4mを測る。町屋の屋敷境の溝SD2955・2956が接続する。SX2998・3019はこの溝を塞ぐ蓋石で、町屋区画の出入口と考えられる。

SD2954　南北道路SS2950と、これから分岐して西側の山に向って続く道路SS2951の側溝である。西側山裾からの水を排水する溝と考えられるが、山際部分については明瞭な遺構が検出されなかった。区画

50-4に設けられた溝SD2957からの水も流れ込み、最終的には東西道路SS2001の北側溝SD2863に排水される。溝幅は約0.2mを測るが、側石の崩落が激しい。東側石は50-4の出入口と見られる部分SX3021以外はほとんど残っていない。西側石は、B地区の屋敷石垣でもあり、道路面と屋敷面の高低差は約0.3mである。

SX3005　東西道路SS2001の北側溝SD2863の側石列である。門SI2988の正面部分にだけに積まれており、門の間口よりやや拡く約3.6mの幅で石を並べている。

SX3020　東西道路SS2001の深掘トレンチ調査で検出された土壙で、道路が造られる以前の最下層の遺構面に伴なう。

SX3021　南北道路SS2950の西側溝SD2954の側石列である。東側石はこのSX3021を除いてほとんど残っていない。SX3021によってSD2954の幅が極端に狭くなっているが、この部分が区画50-4からの出入口であったと推定される。

A地区（50-1）

A地区は東西道路SS2001の北側に位置し、南・東・西の三方を土塁SA2881・2882・2791に、北を石垣SV2685に囲まれた中規模の屋敷区画である。東西道路SS2001に面して門SI2988が設けられているが、これ以外に出入口と考えられる遺構はみられず、南向きの屋敷1軒の区画と考えられる。屋敷の大きさは東西約30m、南北約21m、約630㎡（土塁含む）である。屋敷の規模としては、平井地区の武家屋敷と比べるとやや小さいが、三方を土塁で囲まれる構造であり、また、特に武士以外の住人を想定できる具体的な遺構や遺物が検出されていないので、50-1については武家屋敷であると考えられる。

屋敷内から検出した建物等の遺構は、大きくは4期に分けられる。朝倉氏が滅亡した時期と対応する最終期の遺構面は残存状況が悪く、門SI2988近くの井戸SE2984や溝SD2961等、一部が残っているのみであった。これをⅠ遺構とする。これらの下層から検出したのが、礎石建物SB2975、井戸SE2902、石積施設SF2987等であり、屋敷東半部に集中する。これをⅡ遺構とする。西半部では、さらに1時期前の遺構群が検出している。礎石建物SB2976等であり、これをⅢ遺構とする。ⅡとⅢの遺構面の間には約0.3mのレベル差がある。また屋敷区画の南西部は上層遺構が検出されなかったので、深掘トレンチを設定し、下層を確認したところ、Ⅳ期の遺構面を確認したが、具体的な遺構は検出されなかった。

SA2881　屋敷正面（南辺）に設けられた東西方向の土塁石垣である。土塁幅は約1.8mを測る。中央やや西側よりに門SI2988が開かれている。この土塁は少なくとも礎石建物SB2976が建てられた時期には設けられていたと考えられるが、それ以前については明確ではない。土塁西端から約4.8mほどのところの石垣側面に竹筒が2本刺さっており、屋敷内からの水を排水する暗渠と推定される（第18図 東西道路SS2001北側石垣立面図）。

SA2882　第49次調査の屋敷区画との境界となる南北方向の土塁石垣である。土塁の幅は約1.2mを測るが、内側の石垣には時期によって変動がみられ、石の残っていない部分もある。造られた時期は、土塁SA2881と同時期と考えられる。50-1屋敷内からの排水は、基本的にはこの土塁をくぐって溝SD2872に流されるようになっており、2ヶ所に暗渠が設けられている。なお、この土塁の中からは、カワラケを2枚合わせたものが曲物に入った状態で出土しており、地鎮具と考えられる。

SA2791　屋敷の西辺に設けられた南北方向の土塁石垣である。内側は明確な石垣が検出されておらず、石を積まずになだらかな勾配をもつ盛土になっていた可能性も考えられる。他の土塁石垣と同じくⅢ遺

構に対応すると考えられるが、最終時期には西側の南北道路SS2950が埋められて屋敷境としては機能しなくなっていたと推定される。

SV2685　北辺の屋敷境になっている石垣である。50-1の屋敷の裏側であるためか、この一辺だけ土塁になっていない。北側に隣り合う第46次調査区の屋敷区画とは、高低差があり、50-1の屋敷のほうが約0.2m高い。石垣に接する形で石積施設SF2735・2987が造られている。

SI2988　土塁SA2881に開かれた門である。土塁の開口間口は8尺、門の建物間口は7尺である。柱を2本とする棟門型式の構造で、門柱を支える礎石や蹴放を受ける狭間石もよく残っている。土塁石垣の積み方や土塁内側に設けられた溝SD2873から、当初この門は間口10尺で造られていたが、これを改修し、東側を縮めて8尺とし、高さも約0.3m上げたと推定される。

SB2895　最上層の礎石建物である。SB2896の上層に建てられるが、残存する礎石はわずかであり、建物の規模や向きは不明である。礎石面でのレベル差をみると、SB2975よりも約0.2～0.3m高くなっている。Ⅰ期に対応する建物と推定される。

SB2896　一辺が約4.8mの方形の礎石建物で、内部の南半部には扁平な石が敷き詰められている。建物の裾まわりには小さな礫石が積み上げられており、石敷の周囲が高くなっている。建物の床面が一段低くなる建物と考えられるが、具体的にどのような建物であったかは不明である。昭和59年度の「発掘調査整備事業概要報告XVI」で報告の際は、礎石建物SB2975と同時期のⅡ遺構としているが、SB2896はSB2975の範囲に切り込んで建てられており、礎石の方向にも若干ズレがみられるので、二つの建物には時期差があると思われる。レベル的にはSB2896の方がSB2975よりも下層であるが、SB2896が周囲よりも床面が下がる構造であることを考慮すると、簡単にSB2896のほうが下層遺構であるとは断定できない。礎石建物SB2865より下層の建物であるが、遺構の時期については不明としておく。

SB2975　東西約7.9m、南北約15.5mを測る礎石建物である。この建物は南北に長く、南半部約6.8mの範囲には幾層もの有機質の堆積がみられる。この部分は土間と考えられ、内部にはほとんど礎石がみられない。建物東南の一角は7～8cmほど一段高くなっており、框の一部と考えられる木材が出土している。一方、北半部8.7mの範囲は内部にも礎石が残っているので、床を持つ構造と考えられる。基本となる柱間寸法は6.25尺と考えられる。敷地内の奥行一杯に建てられており、南側は土塁との間が約2.0m、北側は約1.0mしかない。建物の向きは土塁に平行ではなく、やや東に曲がった方向で建てられている。

SB2976　Ⅲ遺構の礎石建物である。建物東側の部分は礎石が残っていないので、全体の大きさは不明である。南北は約7.2mを測る。基本となる柱間寸法は6.2尺と考えられる。南と西の縁に雨落しの溝SD2959・2960が設けられている。建物の方向はSB2975と同じである。

SB3018　SB2975の上層に残存する礎石建物である。SB2895と同時期の建物と推定されるが、規模等は不明である。

SA2990　礎石建物SB2976の西側において検出した柵列である。SB2976と土塁SA2791のほぼ中間に設けられたもので、柵列は土塁に平行である。径2～3寸の雑木を皮付のまま用い、掘立にしている。

SD2873　土塁SA2881の内側に沿って設けられ、門SI2988内側ではコの字形に曲がり、屋敷区画の東に向って排水される石組溝。最後は暗渠SZ2921を通って、屋敷境の溝SD2872に排水される。土塁SA2881と同時期のものと考えられる。

SD2874　屋敷区画東南角で約5.2mにわたって検出した東西方向の溝で、側石の多くは外れてしまっている。側石のレベルから、Ⅲ遺構に対応する下層の溝と考えられる。

SD2875　SB2896の北辺に沿い、SB2975に突き当たって北に曲がる石組溝である。水は暗渠SZ2922から、SD2872に排水される。溝幅約0.3mを測る。

SD2876　土塁SA2882内側に設けられた南北方向の石組溝である。SD2875に接続するまでの約5.0mが検出されている。

SD2877　第46次調査区の屋敷と50-1の屋敷を分ける屋敷境の溝である。50-1区画の北東角の部分で約3.0mほど検出した。水はSD2872へ流れる。

SD2958　SD2873につながる南北方向の石組溝で、わずかに2.0mほどが検出された。

SD2959　SB2976の南側に設けられた雨落溝で、側石はほとんど残っておらず、溝幅約0.3mを測る。

SD2960　同じくSB2976の西側に設けられた雨落溝で、部分的に側石が残存する。北から南に向って溝幅は拡がり、南端では約0.5mを測る。

SD2961　門SI2988を通り屋敷内に入ると、すぐ右手に位置する最上層の溝である。Ⅰ遺構に対応する。

SE2902　礎石建物SB2975と同時期の井戸で、上部が崩れており、形がやや歪で方形に近い。直径約1.8mを測る。

SE2984　この井戸はⅠ遺構に伴なうもので、門SI2988を入ってすぐの西脇に位置する。天端石が残り、径1.2mを測る。井戸の東側には洗場的な石敷と考えられる集石SX3017がみられる。

SF2735　50-1屋敷区画の北西角に設けられた石積施設である。Ⅰ遺構ないしⅡ遺構に伴なう上層の遺構と考えられる。当初は長辺1.5m、短辺0.8mの大きさであっが、途中でほぼ中央部分に石を積み直し、半分の大きさに縮小して使用したと考えられる。深さは約0.4mである。

SF2987　50-1屋敷区画の北辺中央に造られた石積施設である。これも途中で規模を小さく造り直したと思われ、当初は長辺1.9m、短辺1.2mの大きさであったと考えられる。深さは約0.6mを測る。

SX2939　礎石建物SB2896の内部、南半部に施された石敷である。

SX3009　長さ約3.4mにわたって検出された石列。石列の方向は礎石建物SB2975・2976に平行である。SX3011のように礎石建物に付随する遺構か。

SX3011　礎石建物SB2976の北辺際に沿う石列。約2.6mにわたって検出した。

SX3017　門SI2988を入ってすぐにみられる石敷。SE2984の洗場の石敷か。

B地区（50-2・3・4）

B地区は南北道路SS2950・2952の西側に位置し、背後は石垣SV2965・2966に囲まれた区画である。東西約11.5m、南北約27.0mを測り、北西部は山際高台の区画が張り出し狭くなっているため、面積は約260㎡である。地区内を溝SD2955・2956で細分化して、小区画を作っており、その規模から町屋の区画と考えられる。小区画を南から50-2、50-3、50-4としてそれぞれの屋敷についてみてみると、50-2、50-3の区画は間口約4.5mとかなり小さい。奥行は11.5mで、建物は敷地一杯に建てられていたと推定される。50-4の区画は間口約18.0mを測り、敷地面積も50-2・3区画のおよそ3倍となっている。50-4の敷地内には少なくとも3棟の礎石建物（SB2972・2973・2974）が確認されており、更に区画が分かれていた可能性も考えられるが、屋敷の区画を示す明確な遺構は残っていないので、ここでは1つの区画として扱う。まずは屋敷割に関わる遺構について述べ、次に区画ごとに述べる。

SV2965　B地区南端の石垣である（第8図 SV2965立面図）。高さは約1mである。石垣は部分的に崩落が激しく、積まれた石も比較的小さいものが多い。この石垣を境として南隣の区画は1m以上高い。

SV2966　B地区西端の石垣である（第8図 SV2966立面図）。高さは約1.5mで、西隣の山際高台の区画との屋敷境となっている。

SD2955　50-2と50-3の屋敷境となる東西方向の溝である。暗渠SZ2991から南北道路SS2952の側溝SD2953へ排水される。側石は1石しか積まれておらず、外れてしまった部分もある。

SD2956　50-3と50-4の屋敷境となる東西方向の溝である。暗渠SZ2992からSD2953へ排水される。溝幅は約0.3mを測り、側石は2～3石積まれている。屋敷内の改修に応じ、この溝も改修されたと考えられる。溝の西端には井戸SE2983があるので、井戸からの排水も流れるようになっていたと思われる。

50-2区画

SB2970　間口約3.7m、奥行約9.2m、を測る礎石建物で、敷地一杯に建てられている。南辺の礎石列は間隔が狭くばらつきがみられ、基本となる柱間寸法は不明である。

SF2986　南西角に設けられた石積施設である。石垣SV2965・2966に接するような形で作られている。一辺約1.0mで、ほぼ正方形の桝形をしている。

SX2997　礎石建物SB2970と石垣SV2966との間にある幅約1.5mのスペースが石敷になっている。

SX3019　南北道路側溝SD2953に蓋をするように石が置かれる。この区画の出入口と考えられる。

50-3区画

SB2971　おそらく50-2の町屋と同じく敷地一杯に建てられていたと推定されるが、礎石は部分的にしか残存していない。間口約3.6mを測る。

SE2982　建物内部に設けられた井戸で、直径約0.8mを測る。

SX2998　南北道路側溝SD2953の蓋石で、幅約1.8mを測る。1間幅の屋敷出入口と考えられる。

SX2999　礎石建物SB2971と石垣SV2966との間にある幅約1.2mのスペースで検出された石敷。

50-4区画

SB2972　SD2956に沿って建つ礎石建物。規模は不明。

SB2973　間口約2.8mを測る礎石建物。西端の礎石が残存していないため奥行は不明である。柱間寸法はばらつきがあり確定できない。レベル的にはSB2974と同じであるので、同時期の建物と推定される。

SB2974　規模、柱間寸法は不明。建物内東側に石敷SX3003が残る。SB2973と同時期の建物と考えられ、建物の方向も平行に並んでいる。

SA2989　50-4区画の北側は道路SS2950・2951に沿ってゆるやかに湾曲しているが、区画に沿って掘立柱の柵列が設けられている。山際から溝SD2957まで約5尺間隔で柱が建てられている。

SD2957　柵列SA2989の南端で検出された東西方向の溝。側石は約2.0mしか残存していない。南北道路側溝SD2954に排水される。

SE2983　50-4区画の南西角に設けられた井戸。直径0.7mを測る。

SX3000　区画南西角に残る石列。2列になっており溝側石とも考えられるが、溝幅は0.2m以下で狭い。

3．遺物（第24～38図、PL.32～46）

本報告書では、第49・50次発掘調査を扱っているが、調査区と屋敷割が必ずしも一致していない。例えば、区画50-1の大部分は50次調査により発掘調査されているものの、SA2882から約6m西側までは49次調査でおこなっている。このため、本来は区画50-1の出土遺物については49・50次にまたがっているのであるが、報告の繁雑さを避けるため、49次調査による出土遺物についても50次調査として報告している。従って第3表に示す遺物点数についても、49次分であるが50次分としてカウントしている物があることを予めお断りしておきたい。また、50次調査では東西道路であるSS2001よりも北側3～6mについても調査範囲としているが、区画割と報告書掲載内容を一致させるため、これらについては今回の報告からは除外してある。当該区画については第51次の調査報告書作製時に合わせて報告する予定である。

表3は、出土破片数を製品別、器種別にカウントしたものである。これらの中で最も高い割合を示すのは越前焼であり41.93%を示し、次いで土師質が33.89%であり、この両者で75.82%に達している。ただし、越前焼は甕・壺・擂鉢などの大形品が多いことから、当然のことながら破片数も多くなる傾向を示す。また、土師質皿については、灯明皿や酒盃など複数の用途があり、特に酒盃のばあいは使い捨てにされることが多いことから、消費量も多かったものと想定される。本表で注目したいのは、主要な用途として供膳具として使用される鉄釉・灰釉・青磁・白磁・染付である。

本表の中から鉄釉・灰釉・青磁・白磁・染付の中から供膳具である碗皿類を抜き出してみると、鉄釉250：灰釉201：青磁423：白磁762：染付614となる。これを、国内産である瀬戸・美濃焼と輸入品である中国陶磁器の割合に変換すると約1：4となる。もちろんこの数字が汎日本的な傾向ではなく、同じ越前の中にあっても遺跡の性格により大きく異なるであろうことに議論の余地はないが、戦国時代に属する一城下町の流通、消費形態の実態を示す一例として興味深いものである。

以下、遺構別および層位別に報告するが、文中における越前焼大甕および擂鉢の分類については、『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡　県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』福井県立朝倉氏遺跡資料館（1983年）に基づいている。

SS2001

本道路は遺構で報告したように一部にトレンチによる下層遺構の調査をおこなっており、遺物の取り上げについても、層位ごとにおこなっている。

1面（第24・25図、PL.32・33）

越前焼　(501～504)は甕の口縁部片である。(501)はⅣ群に分類される大甕であり、(502～504)は中形甕である。(505～513・515～518)は擂鉢であり、Ⅲ群のものと最も新しいⅣ群のものが見られる。(505)は、Ⅲ群に分類されるもので、口唇部に弱い沈線を有し、口縁内側には1条の強い沈線を有する。擂目は密である。(506)は、Ⅳ群であり、内面には降灰による自然釉が多く付着しているため、擂目は明瞭ではない。(507)はⅣ群であるが、口唇部が外方へ強く引き出されている。また口縁内側には沈線を有する。内面には9条を1単位とする擂目を有する。(508)はⅣ群の小破片である。口縁内側の沈線は段状を呈し、体部内側の擂目は密である。(509)はⅢ群のものであり、口唇部、口縁内側には明瞭な沈線

器種			点数	%
日本製陶器	越前焼	甕	6,005	
		壺	790	
		鉢	345	
		擂鉢	1,337	
		桶	14	
		薬研	1	
		皿	1	
		瓶	1	
		その他	1	
		小計	8,495	41.93%
	土師質	皿	6,784	
		耳皿	3	
		土釜	68	
		土鈴	5	
		土錘	1	
		芯押	1	
		小壺	1	
		その他	3	
		小計	6,866	33.89%
	鉄釉	碗	210	
		皿	40	
		茶入	13	
		壺	64	
		桶	13	
		花生	5	
		瓶	9	
		小壺	3	
		香炉	2	
		鉢	5	
		擂鉢	2	
		その他	4	
		小計	370	1.83%
	灰釉	碗	39	
		皿	162	
		壺	14	
		小壺	1	
		花生	6	
		鉢	18	
		香炉	5	
		卸皿	3	
		盤	2	
		瓶	3	
		小計	253	1.25%
	瓦質	風炉	2	
		香炉	6	
		火舎	1	
		瓦燈	16	
		花生	1	
		火鉢	6	
		その他	9	
		小計	41	0.20%
	信楽		6	
	備前		7	
	その他			4
合計			16,042	79.18%

器種			点数	%
中国製陶磁器	青磁	碗	273	
		皿	150	
		香炉	35	
		鉢	10	
		盤	44	
		瓶	1	
		壺	4	
		花生	16	
		坏	3	
		その他	8	
		小計	544	2.69%
	白磁	碗	6	
		皿	721	
		坏	35	
		壺	5	
		合子	2	
		鉢	2	
		その他	2	
		小計	773	3.82%
	染付	碗	178	
		皿	419	
		坏	17	
		盤	3	
		壺	1	
		合子	1	
		その他	3	
		小計	622	3.07%
	青白磁		2	
	その他		58	
合計			1,999	9.87%
朝鮮製陶磁器			32	
タイ製陶磁器			1	
輸入陶磁器合計			2,032	10.03%

器種		点数	%
金属製品	銅銭	193	
	釘	32	
	小柄	5	
	金具	1	
	五徳	1	
	刀	3	
	刀子	2	
	鎹	1	
	かんざし	1	
	火箸	2	
	銅製菊皿	1	
	銅製掛仏	1	
	煽止	1	
	鉄製瓶蓋	1	
	その他	16	
	小計	261	1.29%
石製品	バンドコ	150	
	砥石	28	
	硯	26	
	盤	121	
	臼	18	
	炉壇石	3	
	風炉	7	
	鉢	43	
	石塔	3	
	五輪塔	17	
	井戸枠	18	
	火打	1	
	火鉢	7	
	その他	546	
	小計	988	4.88%

器種		点数	%
木製品	椀	78	
	皿	12	
	箸	69	
	曲物	47	
	桶	49	
	折敷	28	
	下駄	20	
	棒	40	
	楔	7	
	杭	9	
	付札	1	
	家具材	1	
	蓋取手	1	
	柄	3	
	鍔	1	
	羽子板	1	
	自在鈎	2	
	戸板の桟	2	
	灯明台	3	
	灯明台の支柱	1	
	鍋蓋	1	
	箱	7	
	ヘラ	3	
	盆の脚	1	
	杵	1	
	鳥形	1	
	栓	2	
	脚	1	
	柱	3	
	糸巻き	1	
	蒔絵	1	
	将棋駒	1	
	櫛	6	
	刀形	1	
	その他	499	
	小計	904	4.46%
その他	骨	8	
	壁土	2	
	種子	12	
	その他	11	
	小計	33	0.16%
総合計		20,260	

表3　第50次調査出土遺物一覧表

を有する。(510)はⅣ群であり、(507)と同様に口唇部を外方へ強く引き出している。(511)は、口唇部がやや内傾した三角形状を呈し、口縁部内面に1条の沈線を巡らす典型的なⅣ群の口縁部形態を呈したものである。10条を1単位とする擂目を密に有する。(512)も、(511)と同様に典型的なⅣ群の口縁部形態を呈しているが、口縁部内面は弱い段になっている。体部内面の擂目は密である。(513)はⅢ群に属する小破片である。(515･516)は、共にⅣ群の小破片である。(517)は、底部から体部下半の破片であり、内面には10条を1単位とする擂目を有する。体部外面には墨書が認められる。(518)は、口径32.0cmを測るⅢ群の擂鉢である。縦方向の擂目の他に、体部内面上方には円形の擂目を有する。(514)は体部内面上半に半同心円文を有する捏鉢であり、(519)は口径33.0ｃｍを測る捏鉢である。

土師質土器　口径8.8～9.0cmを測る(520～524)と、口径10.1～10.4cmを測る(525～526)に2分される。後者のタイプは体部上半外面に強いナデ調整をおこなっている。また、(520～523)にはタール痕が認められることから、灯明皿として使用したものと考えられる。

瀬戸・美濃焼　(527)は灰釉陶器皿であり、口径9.1cm、器高2.3cmを測る。(528)は鉄釉陶器皿であり、口径11.0cm、器高2.3cmを測る。

中国製陶磁器　(529～534)は青磁である。(529)は復元口径15.8cm、復元器高7.0cmを測る碗であり、腰部より外上方に直線的に開く体部を持つ。また体部外面には線描連弁文を描いている。(530)は口径15.0cmを測る碗であり、体部外面には退化した雷文帯を描く。(531)は無文の皿であり、(532)は碗の底部片である。(533･534)は供に香炉であり、(533)は口径7.0cm、(534)は口径8.1cmを測る。(535～541)は白磁である。(535)は口縁部が外側へ強く屈曲するタイプであり、口径13.0cmを測る。(536)は、口径13.8cmを測る端反碗である。(537～539)は、口径10.6～13.2cmを測る端反タイプの皿であり、本遺跡では最も通有なものである。(540)は、口径9.7cm、器高1.7cm測る抉り高台を有する皿である。(541)は、口径7.2cm、器高1.7cmを測る口唇部が波状を呈する菊皿であり、本遺跡では最も新しいタイプの白磁皿である。(542～554)は染付である。(542)は、口径11.0cmを測り、体部が内湾する碗である。体部外面にはデフォルメされた草花を描く。(543)は、口径11.0cmを測る碗である。体部外面には牡丹を描いている。(544)は碗の底部片であり、中心部が盛り上る饅頭心タイプである。(545)は口径13.2cmを測り、口縁部を外上方へ屈曲させる皿である。体部内外面に唐草文を描く。(546)も(545)と同器形の皿であり、口径13.2cmを測る。体部外面には牡丹唐草文を描く。(547)は、口径11.0cmを測る皿である。(548)は口径9.6cmを測り、体部外面下半に芭蕉葉文を描く。底部を欠失するものの碁笥底の皿である。(549)は口径8.7cm、器高2.2cmを測り、体部外面には牡丹唐草文を描く皿である。(550)は、碁笥底の皿底部であり、内面には捻花を描いている。(551)は皿の底部片であり、内面には花を描いている。(552)は底部が凹状を呈する蓮子碗タイプであり、内面には花文を描く。(553)は、口径9.7cm、器高1.2cmを測る皿であり、体部外面には唐草文、底部内面には捻花を描いている。(554)は大形の鉢の底部片である。

2面（第25･26図、PL.33･34）

越前焼　(555)はⅣ群に属する大甕の口縁部片であり、(556)は中形甕の口縁部片である。(557・558・560・561)は、擂鉢である。(557・558)はⅢ群に、(560・561)はⅣ群に分類される。(559)は捏鉢であり、体部内面上部には櫛状工具による同心円状の文様を有する。(562)は卸皿であり、内面には8条を1単位とする卸目を有する。(563・564)は小形の壺である。(563)は口径5.2cm、器高11.0cm、を測り、肩部には耳の剥離痕が認められる。体部外面下半には縦方向のヘラ削り調整をおこなっている。

土師質土器　(565) は口径6.4cm、器高1.3cmを測り、(566) 口径6.6cm、器高1.6cmを測る。ともに口唇部は丸く収める。(567) は口径8.1cm、器高1.5cmを測り、口唇部を上方へ摘みあげている。口縁部内外面にはタール痕を有する。(568) は口径9.4cm、器高1.8cmを測る。体部は外湾しながら伸び口縁部へ至り、口唇部は上方へ摘みあげている。(569) は口径9.2cm、器高1.8cmを測る全体的に器厚が厚く作られている。口縁部内外面にタール痕を有する。(570) は口径10.0cm、器高2.2cmを測る。口唇部は上方へ摘みあげている。また、口縁部内外面にタール痕を有する。(571) は口径13.0cm、器高2.4cmを測る。(572) は直径1.9cmを測る灯芯押である。

瀬戸・美濃焼　(573) は口径10.0cmを測る灰釉皿である。(574) は口径11.7cmを測る鉄釉碗であり、(575) は口径10.0cmを測る鉄釉皿である。(576) は口径13.2cmを測り、ほぼ直立した体部を持つ鉄釉の桶である。肩部には把手を有する。

中国製陶磁器　(577～581) は青磁である。(577) は碗の底部片であり、体部外面には線描蓮弁文を有する。(578) は口径8.0cmを測り、腰部で屈曲した体部が外湾しながら伸びる小形の皿である。(579) は口径12.0cmを測る輪花型の皿であり、本遺跡では類例の少ないタイプである。(580) は口径10.8cm、器高3.0cmを測り、口唇部が波状を呈する菊皿である。(581) は無文の碗である。(582～586) は白磁である。(582) は、底部と体部の屈曲付近に高台を有し、体部が内湾しながら立ち上がる碗である。本遺跡では類例が少ない。(583) は口径9.6cm、器高2.4cmを測り、(584) は口径9.1cm、器高2.0cmを測る皿である。(585) は碁笥底の皿である。(586) は口径12.1cm、器高3.1cmを測る皿であり、本遺跡では普遍的に見られるタイプである。

3面（第26図、PL.34）

土師質土器　(587) は口径9.1cm、器高2.1cmを測り、口唇部を上方へ摘みあげる。また、口縁部内外面にはタール痕を有する。(588) は口径9.9cm、器高1.7cmを測り、口唇部は丸く収める。(589) は口径9.8cm、器高2.1cmを測り、(590) は口径13.0cm、器高2.4cmを測る。

瀬戸・美濃焼　(591) は鉄釉壺の頸部から口縁部の破片である。

金属製品　(592) は刀子であるが切先を欠失している。

3～4面（第26図、PL.34）

越前焼　(602) 壺の口縁部であるが、小片であるため口径は不明である。

瀬戸・美濃焼　(593) 13.9cmを測る灰釉陶器碗であり、体部は直線的に広がる。

4面（第26図、PL.34）

中国製陶磁器　(594) は口径11.5cmを測る染付皿であり、体部外面には唐草文を描いている。

4～5面（第26図、PL.34）

中国製陶磁器　(595) は青磁碗であり、口径11.6cmを測る。体部外面には線描蓮弁文を描く。(596) は、口径6.9cmを測る白磁坏である。

5面（第26図、PL.34）

越前焼　(603) はⅢ群に属する大甕の口縁部片であり、(604) はⅢ群に属する擂鉢片である。

土師質土器　(597) は口径10.2cmを測り、(598) は口径11.0cm、器高2.0cmを測る。(599) は口径13.1cm、器高1.7cmを測る。口縁部内外面にはタール痕を有する。(600) は口径13.2cm、器高2.0cmを測る。器厚がやや薄い作りである。

5～6面（第26図、PL.34）

越前焼　(605～607) はⅢ群に属する擂鉢の口縁部であり、(605) は9条を、(607) は13条を1単位とする擂目を有する。(605～607) 供に擂目の間隔が開いている。

7～8面（第26図、PL.34）

土師質土器　(601) は口径9.9cm、器高1.9cmを測り、口唇部を僅かに上方へ摘み上げている。

最下層（第27図、PL.35）

本層は次に述べるSX3020を覆う層であり、SS2001造成に伴う整地土である。

土師質土器　口径10.0cm前後の (609～615)、口径12.0cm前後の (616～620)、口径15.0cm前後の (621・622)、口径17.0cm前後の (623～626)、口径19.0cm前後の (627・628) が認められる。手法的には多くが体部下半に指頭圧痕を残し、体部上半に横方向のナデ調整をおこなう物であるが、(615・616) のように横ナデ調整をおこなわない物も少数ではあるが認められる。

中国製陶磁器　(629) は青磁碗の底部片であり、体部外面は無文である。

SX3020（第26・27図、PL.34・35）

本遺構出土の遺物は、SS2001造成以前の遺物である。

越前焼　(608) はⅢ群に属する大甕の口縁部片である。

土師質土器　(630) は口径8.3cm、器高1.4cmを測り、(631) は口径8.8cm、器高1.8cmを測る。供に口唇部は上方へ摘み上げている。

漆器製品　(632) は口径14.5cm、器高4.5cmを測る。器面を黒漆で塗った後に、文様を朱漆で描いている。

SS2950

1面（第27図、PL.35）

越前焼　(643) はⅣ群に分類される大甕の口縁部片である。

2面（第27図、PL.35）

越前焼　(641・642) 供にⅢ群の擂鉢であり、(641) は10条を1単位、(642) は8条を1単位とする擂目を有する。

土師質土器　(633～635) は口径6.5cm前後を測り、(636・637) は口径8.8cm前後を測る。(634) は焼成段階での溶着が認められ、(636・637) にはタール痕が見られる。

中国製陶磁器　(638) は口径9.3cm、器高3.1cmを測る白磁皿であり、底部内面には押型が認められる。釉調は僅かに青味を帯びた白色である。

SS2952（第27図、PL.35）

越前焼　(644) は典型的なⅣ群に属する擂鉢である。(645) は壺、(646) は鉢の口縁部片である。

中国製陶磁器　(639・640) ともに染付である。(639) の体部外面には唐草文が描かれ、(640) の底部内面には魚文が描かれている。

SD2860（第27・28図、PL.35・36）

越前焼　(647) はⅣ群に分類される大甕片であり、(648) はⅣ群の擂鉢である。体部内面には8条を1単位とする擂目を有する。

土師質土器　口径7.0cm前後を測る (653・654)、口径9.0～10.0cmを測る (655～657)、口径12.6cmを測る

(658)が認められる。手法的には体部下半に指頭圧痕を残し、体部上半に横ナデ調整をおこなっている。口唇部は丸く収めている。

瀬戸・美濃焼　(659)は底部で強く屈曲した体部が外上方へ直線的に伸びる鉄釉碗である。(660)は小形の鉄釉水滴である。

中国製陶磁器　(661～663)は青磁碗である。(661)は口径13.2cmを測り、体部外面には線描蓮弁文を描いている。(662)は底部内面に魚文の押型を有し、体部外面には線描蓮弁文を有する。(663)は底部内面に押型文を用いている。(664)は青白磁の蓋であり、体部外面および天井部外面には渦巻文が施されている。隣接した調査区である第51次発掘調査にて出土している青白磁梅瓶とセット関係を持つものと想定される。(665～667)は染付碗である。(665)は口縁部内外面に圏線を巡らせ、(666・667)は内面には退化した唐草文を描いている。

SD2863（第27・28図、PL.35・36）

越前焼　(649)は口径34.0cm、器高11.4cmを測るⅣ群の擂鉢である。体部内面には8条を1単位とする擂目を有する。(650)は口径16.8、器高5.8cmを測る体部内湾形の鉢であり、(651)は口径25.0cm、器高8.0cmを測る体部が外上方へ開くタイプの鉢である。(652)は口縁部が短く直立する壺である。

土師質土器　(668)は口径7.2cm、器高1.6cmを測る。底部が凸状を呈する所謂ヘソ皿と呼ばれるタイプである。(669～676)は口径9.0ｃｍ前後を測る。口唇部を摘み上げるタイプ(669・670・672・675・676)と、丸く収めるタイプ(671・673・674)が認められる。(677～679)は口径11.5cm前後を測る。体部上半の横ナデ調整を強く行うため、その境には稜線が作られている。(680～682)は口径13.5cm前後を測る。(680)は口唇部を僅かに上方へ摘み上げている。

瓦質土器　(683)は香炉の体部片であり、体部外面には雷文が施文されている。

中国製陶磁器　(684～686)は青磁である。(684)は碗の底部片。(685)は香炉の体部片。(686)は口径26.0cmを測る盤の口縁部片である。(687)は染付皿であり、底部内面には玉取獅子を描いている。

漆器製品　(688)は口径15.0cm、器高8.7cmを測る椀である。遺存状態は悪く黒漆は大部分が剥落している。

石製品　(690)は、長さ7.8cm、幅3.2cmを測る小形の硯である。

区画50-1-Ⅰ遺構（第29図、PL.37）

越前焼　(691～694)は大甕の口縁部片でありⅣ群に属する。本遺跡では最も普遍的な大甕である。(695～703)は擂鉢である。(695・697・699・701・703)はⅢ群に、(696・698・700・702)はⅣ群に属する。(696)は10条、(697)は10条、(698)は9条、(699)は9条をぞれぞれ1単位とする擂目を有する。(704)は口径18.0cmを測る小形甕であり、体部下方に1条の凸帯を有する。また、体部内面には当具痕が認められる。(705)は口径16.8cm、器高26.0cmを測る広口壺である。

瀬戸・美濃焼　(706)は口径13.0cmを測る鉄釉の香炉である。

中国製陶磁器　(708～712)は青磁である。(708)は口径11.5cm、器高6.8cmを測る。体部外面は無文であるが、底部内面には押型文を有する。(709)は口径13.0cm、器高7.9cmを測り、底部外面には線描蓮弁文を有する。(710)は碗の底部片である。(711)は口径11.9cm、器高3.0cmを測る皿である。(712)は、口径9.4cmを測る体部無文の香炉である。(713～716)は染付である。(713)は口径17.0cmを測る。体部

外面には人物を描き、その上に雷文を描いている。(714)は口径12.2cmを測る皿であり、体部外面には唐草文を描く。(715)は口径13.5cmを測り、体部内外面に唐草文を描いている。(716)は皿の底部片であり、体部外面には退化した唐草文、底部内面には十字花文を描いている。(707)は緑釉陶器の香炉である。

金属製品　(717)は火箸であり、全長は17.1cmを測る。上端のリングには対となる火箸の一部が付着している。

SA2882（第30・31図、PL.38・39）

越前焼　(718)はⅢ群に属する擂鉢であり、9条を1単位とする擂目を有する。(719)は口径17.7cm、器高5.5cmを測る体部内湾形の鉢である。

土師質土器　(739)は口径6.8cm、器高1.7cmを測り、口唇部は丸く収める。内面には点々とタール痕が認められる。(740～745)は口径9.0cm前後、器高は2.0cmを測る。口唇部は丸く収める。(746)は口径12.9cm、器高2.0cmを測り、口唇部は上方へ摘み上げている。(747)は口径16.7cm、器高2.7cmを測り、(748)は口径16.9cm、器高2.8cmを測る。供に後述する(751)の曲物内に納められた形で出土している。(749・750)は羽釜である。(749)は口径10.3cm、器高8.3cm、(750)は口径11.0cm、器高8.4cmを測る。全体的にやや箱形に近い器形を呈しており、体部上半には指頭圧痕を残している。

中国製陶磁器　(775)は、腰部で強く屈曲した体部を大きく外湾させる青磁皿である。

木製品　(751)は曲物であり口径19.5cm、器高12.4cmを測る。(747・748)の土師質土器を収納した状態で、SA2882の基底部より出土していることから、構築時に地鎮具として利用されたものと想定される。

漆器製品　(752)口径14.3cmを測る碗であり、黒漆にて全体を塗布した後に、朱漆で文様を描いている。SA2882より下層での出土である。

SF2735（第37図、PL.45）

土師質土器　(895)は口径7.0cm、器高1.6cmを測る小形のタイプであり、口唇部を上方へ摘み上げる。(896～900)は口径9.0cm前後を測る物であり、口唇部を摘み上げる（897～899）と、丸く収めるタイプ(896・900)が存在する。(901・902)は、口径11.0cm前後を測り、(901)は口唇部を丸く収め、(902)は口唇部を摘み上げている。(903)は口径12.2cm、器高2.3cmを測り、口唇部は摘み上げている。

区画50-1-Ⅱ遺構（第30・31図、PL.38・39）

越前焼　(720～732)は擂鉢である。(720・721・722・727・728)はⅢ群に属し、(720)は口径28.0cm、器高10.2cmを測り、体部内面には9条を1単位とする擂目を有する。また（728)は9条を1単位とする擂目を有する。(723～726・729～732)はⅣ群に属する。(726)は10条、(729)は9条、(730)は11条をそれぞれ1単位とする擂目を有する。また、これらの擂目単位の間隔は比較的密である。(734～738)は大甕であり、(735)はⅢ群、(734・736～738)はⅣ群である。(733)は大形壺の口縁部片である。

土師質土器　(753)は口径9.3cm、器高2.0cmを測り、口唇部を上方へ摘み上げる。内面には少量のタール痕が付着している。(754)は口径9.4cm、器高1.9cmを測り、口唇部を上方へ摘み上げ、口縁部外面にタール痕が付着する。(755)は口径9.7cm、器高1.9cmを測り、口縁部を外側へ屈曲させている。また口唇部は丸く収める。口縁部外面にタール痕が付着している。(756)は口径12.0cmを測る羽釜である。(757)は口径2.7cm、器高3.3cmを測り、球形を呈する小壺である。体部下半には指頭圧痕を明瞭に残している。

瀬戸・美濃焼　(758)は灰釉鉢の底部片である。(759)は口径11.1cm、器高2.5cmを測る鉄釉皿である。

(760) は鉄釉の片口であるが、片口部は欠失している。体部下半は露胎である。(761) は口径2.9cmを測る小形の鉄釉茶入である。

中国製陶磁器　(762) は口径8.6cm、器高3.0cmを測る白磁小碗である。底部近くの体部は露胎となっている。(763～769) は青磁碗である。(763) は口径16.5cmを測り体部外面には線描蓮弁文を描いている。(764) は口径14.0cm、(765) は口径13.2cmを測る。供に体部外面は無文である。(766) は口径12.0cm、器高6.8cmを測り、体部外面には線描蓮弁文を描く。また底部内面には「吉」字の型押を有する。(767) は口径11.8cm、(768) は口径10.2cmを測り供に体部外面には線描蓮弁文を描いている。(769) は底部片であり、内面には型押を有する。(770・771) は染付の底部片である。

朝鮮製陶磁器　(772) は蕎麦茶碗と同様の釉調を持つ皿であり、口径9.9cmを測る。

漆器製品　(773) 口径9.0cm、器高2.6cmを測る。朱漆の皿であり、底部外面のみ黒漆を塗っている。

金属製品　(774) は銅製の紅皿である。口径3.8cm、器高1.6cmを測る。

区画50-1-Ⅲ遺構（第32・33図、PL.40・41）

越前焼　(776) はⅣ群、(777・778) はⅢ群に属する大甕である。(779～788) は擂鉢であり、(779・781～788) はⅢ群、(780) のみがⅣ群に属する。(783) は口径29.9cm、器高10.6cmを測り、体部内面には14条を1単位とする擂目を有する。(785) は口径37.4cm、器高13.9cmを測り、口縁部には片口を有している。また、体部内面には12条を1単位とする擂目を有する。(786) は口径27.3cm、器高9.7cmを測り、擂目は12条を1単位としている。また体部内面に「本」字のヘラ書を有する。(787) は口径38.2cm、器高13.8cmを測る。体部内面には14条を1単位とする擂目が認められる。(788) は口径35.5cm、器高12.0cmを測り、11条1単位とする擂目を有する。このほか、(779) は10条、(780) は9条、(782) は13条の擂目をそれぞれ有する。全体的に擂目単位の間隔は広がっており、密度の高い擂目は認められない。(789) は壺であり、体部外面下半には縦方向のヘラ削り調整が認められる。(803) は口径4.7cmを測る壺の口縁部片であり、片口を有している。(804) は、直径3.6cmを測る。甕の胴部を打ち欠いて円盤状に加工したものであるが、本遺跡では多く出土するものの用途は不明である。

土師質土器　(791) は口径7.3cm、器高1.7cmを測る。体部には6㎜の穿孔が1カ所認められる。(792～795) は口径9.5cm前後を測る。口唇部は (794) が丸く収めるほかは、端部を上方へ摘み上げている。(796・797) は口径11.6cm前後、器高2.0cm前後を測る。(798) は口径13.1cm、器高2.6cmを測るやや深身のタイプである。

瀬戸・美濃焼　(799) は灰釉陶器碗の底部片である。(790) は灰釉陶器の壺であるが、本遺跡での出土例は少ない。(800) は鉄釉陶器の小形碗であり、口径8.6cm、器高3.8cmを測る。(801) は口径10.8cmを測る鉄釉陶器の天目茶碗である。(802) は鉄釉陶器の大形皿の底部片である。

中国製陶磁器　(805～815) は青磁である。(805) は口径11.2cmを測り、(806) は口径13.4cmを測る。両者供に体部無文の碗である。(807・808) は体部外面に線描蓮弁文を描き、(807) は口径12.4cm、(808) は口径13.3cmを測る。(809～813) は碗の底部片であり、(809) 以外は内面に押型文を有する。(814) は口径11.0cmを測る皿であり、(815) は口径23.9cmを測る盤である。(816～823) は白磁である。(816・817) は底部片であり、(817) は内面に押型文を有する。(818) は口径13.1cmを測る皿であり、僅かに青味を帯びた釉調を呈している。(819～822) は口径9cm前後、器高2.0cm前後を測る。底部に抉り高台を有し、釉調が黄色味を帯びた華南地方産の白磁である。(823) は口径8.0cm、器高3.0cmを測る。釉調はやや濁った感じを呈するもので、薄く刷毛で塗っているため、内外面で施釉範囲が一致していない。(824・

825）は染付碗の底部片である。

朝鮮製陶磁器　（826）は口径12.7cmを測る刷毛目の端反碗である。（689）は徳利形を呈する壺の口縁部片である。

漆器製品　（827）は口径15.2cm、器高5.6cmを測る碗である。全体を黒漆で塗った後に、朱漆で文様を描いていたが、大部分が剥落している。（828）は碗であり、黒漆の上に朱漆で文様を描いている。

石製品　（829）は硯であり、長さ11.4cm、幅7.0cmを測る。よく使い込まれており、陸は凹状を呈している。

区画50-1-Ⅳ遺構（第34・35図、PL.42・43）

越前焼　（865）はⅣ群に属する大甕片である。（866）は擂鉢の口縁部片であり、Ⅲ群に属する。

土師質土器　（830）は長軸4.8cm、短軸3.6cmを測る耳皿である。

瀬戸・美濃焼　（831）は口径10.8cmを測る鉄釉碗であり、（832）は鉄釉碗の底部片である。

中国陶磁器　（833）は青磁碗の体部外面に線描蓮弁文を有する底部片である。（834）は口径12.0cm、器高3.1cmを測る青磁皿である。腰部で強く屈曲した体部は、外湾しながら口縁部へ至る。（835）は口径9.6cmを測る小形の体部内湾の青磁皿である。（836）は口径6.2cmを測る白磁の小形壺である。体部外面上半には形押しによる草花文を有する。

漆器製品　（837）は口径8.4cm、器高2.2cmを測る黒漆の小皿である。底部内面には朱漆で文様を描いている。（838）は口径13.9cm、器高5.0cmを測る。黒漆を塗布した後に朱漆で文様を描いている。（839）は口径13.9cm、器高4.5cmを測る。黒漆を塗布した後に、朱漆で底部内外面および底部内面に扇文を描いている。（840）は口径12.9cm、器高3.7cmを測る碗である。黒漆を塗布した後に体部外面および底部内面に朱漆にて文様を描く。

区画50-1-Ⅴ遺構（第34・35図、PL.42・43）

越前焼　（867～869）は擂鉢である。（867・869）はⅢ群であり、（868）はⅣ群である。摺目単位の間隔はⅢ群よりもⅣ群の方が密である。（867）は10条、（868）は9条、（869）は8条を1単位とする擂目を施している。（870）は大形壺である。

土師質土器　（841）は口径6.9cm、器高2.0cmを測り、丸味を帯びた器形を呈している。（842）は口径10.0cm、器高2.0cmを測る。口唇部は上方へ摘み上げている。（843）口径11.2cm、器高2.2cmを測り、体部上半には強い横ナデを行っている。口唇部は丸く収めている。

瓦質土器　（844）口径9.9cm、器高4.9cmを測る香炉である。体部外面中位にはスタンプ文を施文する。

瀬戸・美濃焼　（845）は口径11.4cm、（846）は口径12.2cmを測る鉄釉碗である。（846）は体部下半が丸味を呈した、やや古い様相を呈している。

中国製陶磁器（847）は口径11.8cmを測る無文の青磁碗である。

漆器製品　（848）は口径8.6cm、器高2.4cmを測る小形の黒漆の皿である。（849）は口径14.0cm、器高6.3cmを測る碗であり、黒漆を塗布した後に朱漆により文様を描いている。

SD2873（第34図、PL.42）

中国製陶磁器　（850）は青磁碗の底部片であり、内面には押形文を有する。（851）は口径11.4cm、器高2.7cmを測る白磁皿である。体部が大きく外湾しながら口縁部へ至る特徴的な器形を呈する。

SD2875（第34図、PL.42）

土師質土器　（852）は口径8.4cm、器高2.2cmを測る。口唇部は上方へ摘み上げている。

中国製陶磁器　(853) は口径14.0cmを測る染付碗である。体部外面にはアラベスク文を描いている。

SD2876（第34図、PL.42）

土師質土器　(854) は口径7.1cm、器高1.7cmを測り、口縁部付近にまで指頭圧痕を残している。口唇部は丸く収めている。(855・856) は口径8.8cm前後、器高1.6cm前後を測る。(855) は口唇部を摘み上げ、(856) は丸く収めている。(857) は口径11.3cm、器高2.4cmを測る。口唇部は丸く収める。

瀬戸・美濃焼　(858) は灰釉陶器の皿である。体部内面は丸ノミ削ぎを行っている。

中国陶磁器　(859) は口径11.5cm、器高2.5cmを測る白磁皿である。(860) は青磁皿の底部片である。(861) は口径12.6cmを測る青磁碗である。(862) は口径12.8cmを測る染付皿であり、体部外面には唐草文を描いている。

木製品　(863・864) は箸であり、全長は (863) が23.4cm、(864) が22.8cmを測る。両者供に中心部が太く、両端が細く加工されている。

区画50-2（第35～37図、PL.43～45）

越前焼　(871) は口径23.7cm、器高8.7cmを測るⅣ群の擂鉢である。10条を1単位とする摺目を密に施している。(872) はⅢ群に属する擂鉢であり、8条を1単位とする摺目を密に有する。(878) はⅢ群に、(876・877・879～881) はⅣ群に分類される大甕の口縁部片である。(882) は、頸部以上を欠失するが小形壷である。体部下半は縦方向のヘラ削りを行っている。(883) は体部が内湾する鉢であり、口径は18.6cmを測る。

土師質土器　(904～906) は口径9.0～10.0cm、器高2.2cmを測る。口唇部を丸く収める (905) と、摘み上げる (904・906) が認められる。(907) は口径11.2cmを測る羽釜であり、体部内外面には指頭圧痕を残している。

瀬戸・美濃焼　(908～911) は灰釉陶器である。(908) は口径10.0cmを測り、体部内面は丸ノミ削ぎを行っている。(909) は口径6.0cm、器高1.5cmを測る小形の皿であり、底部内面には葉状の押型文を有する。(910) は口径12.0cm、器高2.6cm、(911) は口径15.0cmを測る皿である。(912～914) は鉄釉碗であり、(912) は口径8.4cm、(913) は口径10.4cm、(914) は口径11.5cmを各々測る。

中国製陶磁器　(915～918) は青磁である。(915) は口径14.8cmを測り、体部外面には線描蓮弁文を描く。(916) は碗の底部片である。(917) は小破片のため碗皿の特定は難しいが、器厚が薄い特徴を有しており、本遺跡において普遍的に認められる製品とは様相が異なる物である。(918) は口径11.9cmを測る皿である。(919) は口径12.1cm、器高2.7cmを測る端反りの白磁皿であり、本遺跡では最も普遍的なタイプである。(920～929) は染付である。(920) は口径17.1cmを測り、体部外面には最も退化した唐草文を描いている。(921) は碗の小片である。口縁部には退化した波頭文を描いている。(922) は皿の底部片であり、体部外面には唐草文を描く。(923) は碁笥底の皿の底部片である。(924) 口径10.6cm、器高2.8cmを測る皿であり、底部内面には獅子を描いている。本遺跡出土の染付では、新しい時期に位置づけられるタイプである。(925) は口径9.1cmを測り、体部外面には牡丹唐草文を描く。(926) は口径13.5cmを測り、体部外面には唐草文を描いている。(927) は皿の底部片であり、内面には玉取獅子を描いている。(928・929) は口径6.0cm前後を測る坏である。

朝鮮製陶磁器　(930) は、徳利形を呈する壺の底部片である。器厚は薄く均一である。

石製品　(884) は笏谷石製の捏鉢であり、口径43.4cm、器高15.3cmを測る。体部外面は丸ノミにより縦

方向4段の調整を行い器面を整えている。(885)は笏谷石製のバンドコ片である。平面形は楕円を呈するものと想定される。

SF2986（第37図、PL.45）

土師質土器　(931・932)は口径9.2cm前後、器高2.2cm前後を測るものであり、口縁部内外面にはタール痕が認められる。両者供に口唇部を摘み上げる。(933)は口径14.9cm、器高2.6cmを測り、口唇部を上方へ摘み上げている。

区画50-3（第35～37図、PL.43～45）

越前焼　(873～875)は擂鉢である。(873・874)はⅣ群に属する。(873)は13条、(874)は9条を1単位とする摺目を密に施している。(875)は口径32.4cm、器高11.0cmを測るⅢ群に属する擂鉢であり、9条を1単位とする摺目を体部内面に有する。(886～888)はⅣ群に分類される大甕の口縁部片である。(889)は、口径19.0cmを測る広口壷であり、体部中程に1条の凸帯を巡らせている。(890)は、口径11.9cmを測る壷であり、欠失しているものの肩部には耳を有する。いわゆるルソン壷の写しと想定される。

土師質土器　(934)は口径6.1cm、器高1.8cmを測る最も小形のタイプである。(935)は口径8.6cm、器高1.9cmを測り、口唇部を摘み上げるタイプである。(936)は口径10.3cm、器高2.0cmを測り、口唇部は丸く収めている。

瓦質土器　(937)は灯明台の小片である。

瀬戸・美濃焼　(938・939)は灰釉陶器皿である。(938)は口径10.8cm、器高2.8cmを測り、体部内面は丸ノミ削ぎを行っている。(939)は口径9.5cmを測り器高2.5cm、底部内面に花形の押型文を押している。(940)は鉄釉壺であり、体部下半は露胎である。

中国製陶磁器　(941)は口径11.8cmを測り、体部外面には線描蓮弁文を描いている。(942)は青磁長頸壺の口縁部である。(943)は口径10.9cm、器高2.9cmを測る白磁の碁笥底皿である。釉色が灰色を呈し、貫入が多く入ることなどから華南系の製品と考えられる。(944～947)は染付である。(944)は口径13.0cm、器高5.0cmをはかり、体部外面および底部内面に最も退化した唐草文を描いている。(945)は大形の碁笥底皿である。(946)は底部内面に人物文を描く皿である。(947)は口径9.6cmを測る。底部を欠失するが碁笥底の皿である。

石製品　(891)は、方形の平面形を呈する笏谷石製の水盤である。

SE2982（第36・37図、PL.44・45）

越前焼　(892)は、甕の口縁部片である。(893)はⅣ群に属する擂鉢であり、摺目は密である。

瀬戸・美濃焼　(948)は、体部内面に丸ノミ削ぎを行い、口径9.8cm、器高2.7cmを測る。

朝鮮製陶磁器　(894)は徳利形を呈する壺の底部片である。器厚は薄く均一である。

区画50-4-Ⅰ遺構（第38図、PL.46）

越前焼　(949・950)はⅣ群に属し、(951)はⅢ群に属する大甕である。(996)は中形甕の口縁部片である。(952)はⅣ群の擂鉢である。(953)はⅢ群の擂鉢であり、口径36.6cm、器高11.3cmを測る。体部内面には、10条を1単位とする擂目を、やや間隔を置いて施文している。

土師質土器　(955)は口径6.3cm、器高1.6cmを測る。(956)は口径9.3cm、器高2.1cmを測り、口唇部は上方へ摘み上げる。口縁部内外面にタール痕が認められる。(957)は口径10.0cm、器高2.2cmを測る。

口唇部は摘み上げである。(958) は口径11.6cm、器高2.3cmを測り、口唇部は丸く収めている。口縁部内外面にはタール痕が認められる。

瀬戸・美濃焼　(954) は口径15.2cmを測るさ鉄釉壺である。(959) は口径5.8cm、器高1.4cmを測る小形の灰釉皿である。(960) は灰釉碗の底部片であり、体部外面には線描蓮弁文を描く。(961・962) は鉄釉碗であり、(961) は口径12.3cm、(962) は口径11.3cmを測る。

中国製陶磁器　(963～965) は青磁である。(963) は口径13.1cm、器高4.8cmを測る。腰が若干張り、全形が扁平な形を呈する無文碗である。(964) は、口径14.5cmを測る無文碗である。(965) は、口径7.3cmを測る小形の香炉である。(966～968) は染付である。(966) は、口径5.8cmを測る坏であり、(967) は口径12.3cmを測り、体部外面に最も退化した唐草文を描く碗である。(968) は饅頭芯タイプの碗の底部片であり、内面には人物文を描いている。

SE2983（第38図、PL.46）

土師質土器　(969) は口径7.0cm、器高1.8cmを測る。口唇部は丸く収め、口縁部内外面には少量のタール痕が付着している。(970) は口径9.0cm、器高2.2cmを測る。口唇部は上方へ摘み上げている。

SD2956（第38図、PL.46）

土師質土器　(971) は口径14.0cm、器高2.4cmを測り、口唇部は上方へ摘み上げる。

瀬戸・美濃焼　(972) は鉄釉の皿であり、口径11.4cm、器高2.6cmを測る。(973) は鉄釉碗であり口径11.8cmを測る。釉はやや薄く施釉されている。

区画50-4-Ⅱ遺構（第38図、PL.46）

土師質土器　(974～978) は口径6.5～7.3cmを測る小形のタイプである。口唇部は全て丸く収めている。(979・980) は、口径9.0～10.0cmを測るものであり、口唇部は摘み上げている。(981・982) は口径11.0cm前後を測り、口唇部は丸く収める。(983) は口径15.5cm、器高2.7cmを測り、体部外面下半には指頭圧痕を残し、体部上半は横ナデ調整する。内面は黒色処理がされており、底部および体部の一部にはヘラ磨きが認められる。

瀬戸・美濃焼　(984～986) は灰釉皿である。(984) は口径5.2cm、器高1.4cm、(985) は口径5.6cm、器高1.3cm、(986) は口径7.9cm、器高1.9cmを各々測る。(987) は口径15.4cmを測る鉄釉碗である。

中国製陶磁器　(988～991) は青磁碗である。(988) は口径14.2cmを測り、口縁部外面にはやや崩れた雷文帯を描く。(989) は口径12.8cmを測り、体部外面には片切彫りの縞蓮弁文を有する。(990) は底部片であり、体部外面には線描文様を有する。(991) は口径11.6cm、器高7.0cmを測る体部外面無文の碗であるが、底部内面には押型文を押している。(992) は白磁の碁笥底皿である。(993) は口径12.9cmを測る染付碗であり、口縁部外面には波頭文を描く。

金属製品　(994) は小柄である。残存長9.3cm、高さ1.3cmを測る。(995) は直径2.7cm、高さ0.3cmを測る飾り金具であり、中心部には一辺6mmの方形孔を有する。

4．小結

第50次調査ではA地区の屋敷、および東西道路SS2001でそれぞれ深掘トレンチを設置し、下層遺構を確認することができた。東西道路SS2001は町割の基本となる道路であるが、その最下層から、計画的な町割による城下町構築以前の遺構を確認できたことは、城下町成立を考える上でも重要な意味を持つ。また、町割の行なわれる以前の遺構から、朝倉氏の滅亡する最終期までの遺構について、それぞれ面的に捉えることができたことも有意義であった。ここでは、A地区および東西道路SS2001において検出した遺構ついて、上層から順にⅠ～Ⅳ期というように分類して遺構を整理し、遺構別に一覧表にまとめた。

Ⅰ期　…　朝倉氏の滅亡する最終期の遺構。A地区屋敷内では部分的に遺構の一部が残存するような状況で、面的には捉えられなかった。

Ⅱ期　…　Ⅰ期から約0.3m下層で検出された遺構面である。A地区最大規模の礎石建物SB2975を中心とする。主に屋敷の東側半部で検出された遺構が多い。

Ⅲ期　…　Ⅱ期の遺構から更に約0.3m下層の遺構面である。主な遺構は屋敷西側から検出された礎石建物SB2976である。

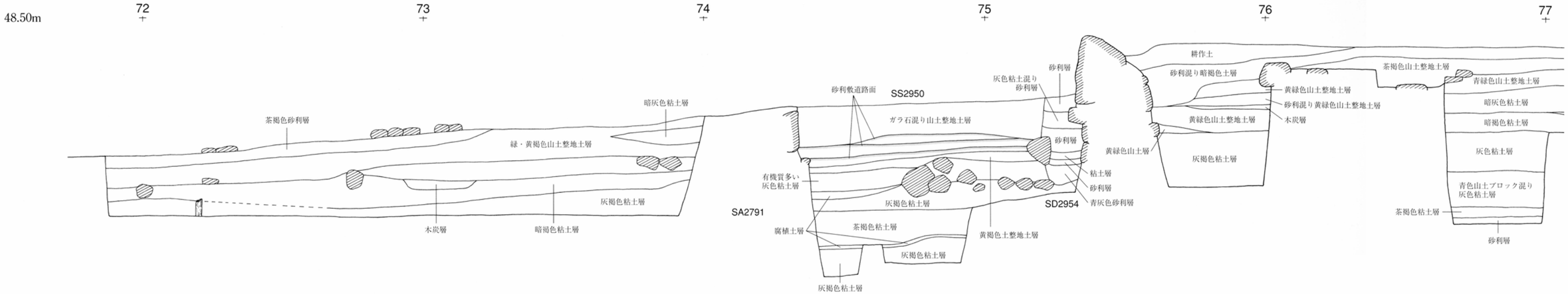
Ⅳ期　…　A地区屋敷南西部で入れられた深掘トレンチから確認された下層遺構面である。具体的な遺構は検出されなかった。東西道路SS2001の深掘トレンチで確認された最下層面と対応すると考えられる。

遺構名	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
SS2001	○	○	○	
SA2791		○	○	
SA2881	○	○	○	
SA2882	○	○	○	
SA2990		○		
SI2988	○	○	○	
SB2895	○			
SB2896		?		
SB2975		○		
SB2976			○	
SB3018	○			
SD2873	○	○	○	
SD2874			○	
SD2875		○		
SD2876		○	○	

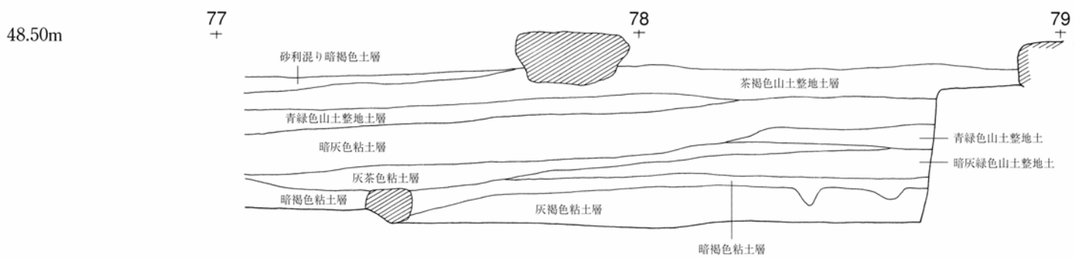
遺構名	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
SD2877	○	○	○	
SD2958		○		
SD2959			○	
SD2960			○	
SD2961	○			
SE2902		○		
SE2984	○			
SF2735	○	○		
SF2987	○	○		
SX2939		?		
SX3005	○	○	○	
SX3009			○	
SX3011			○	
SX3017	○			
SX3020				○

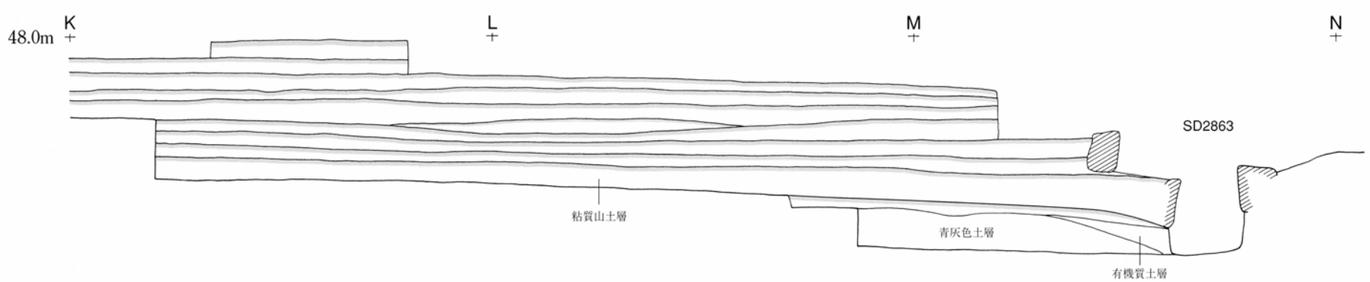
表 4　第50次調査遺構時期別分類一覧

第16図　第50次調査土層図（1）



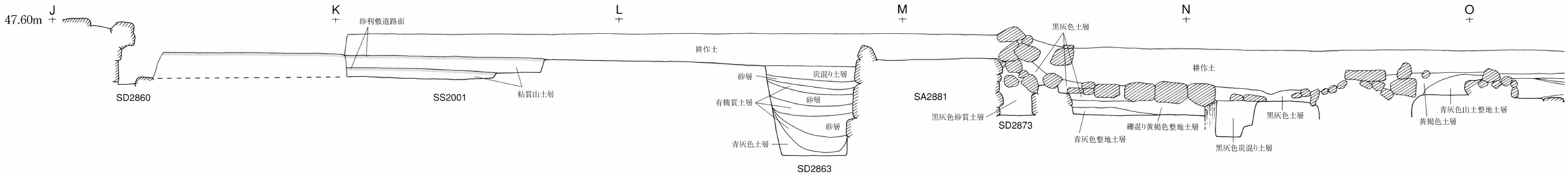
Nライン北壁土層図

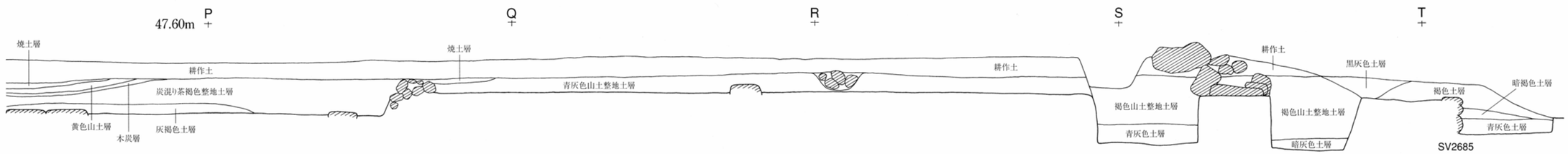




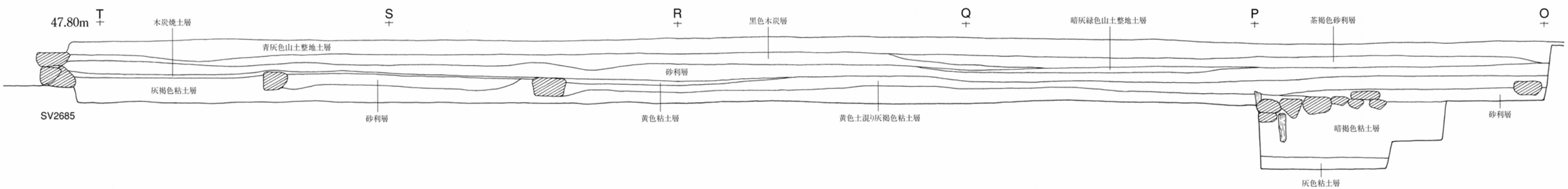
東西道路SS2001西端土層図

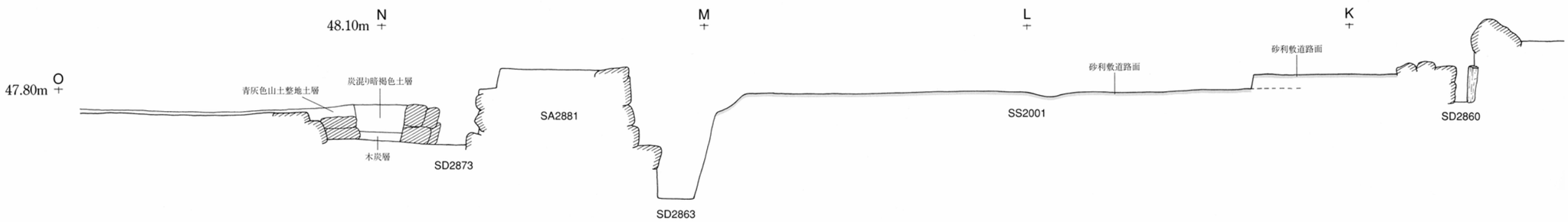
第17図　第50次調査土層図（2）





67ライン東壁土層図



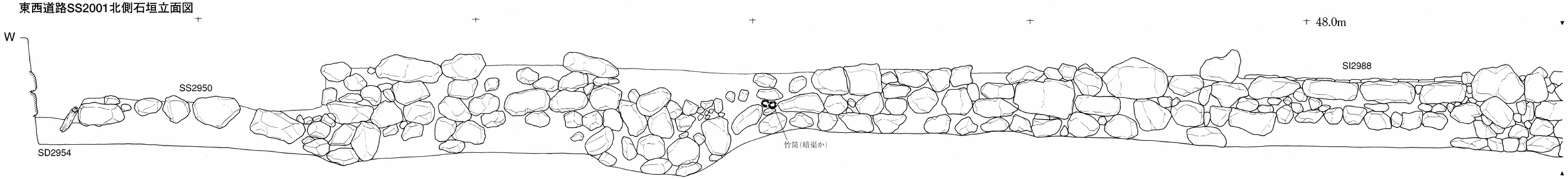


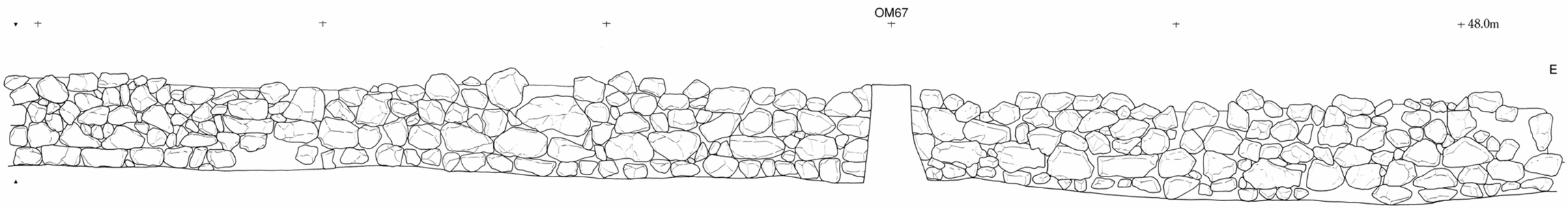
70ライン西壁土層図

0　3m

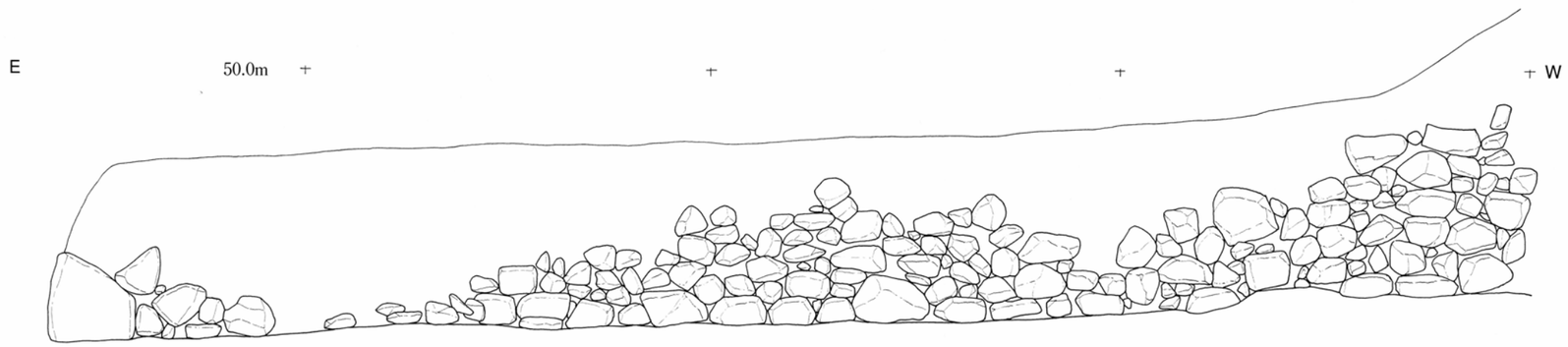
第18図　第50次調査石垣立面図

東西道路SS2001北側石垣立面図

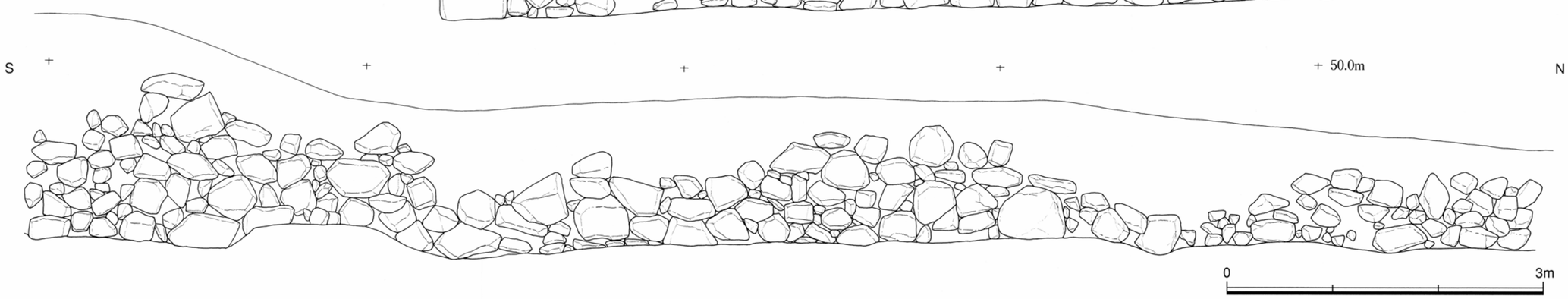




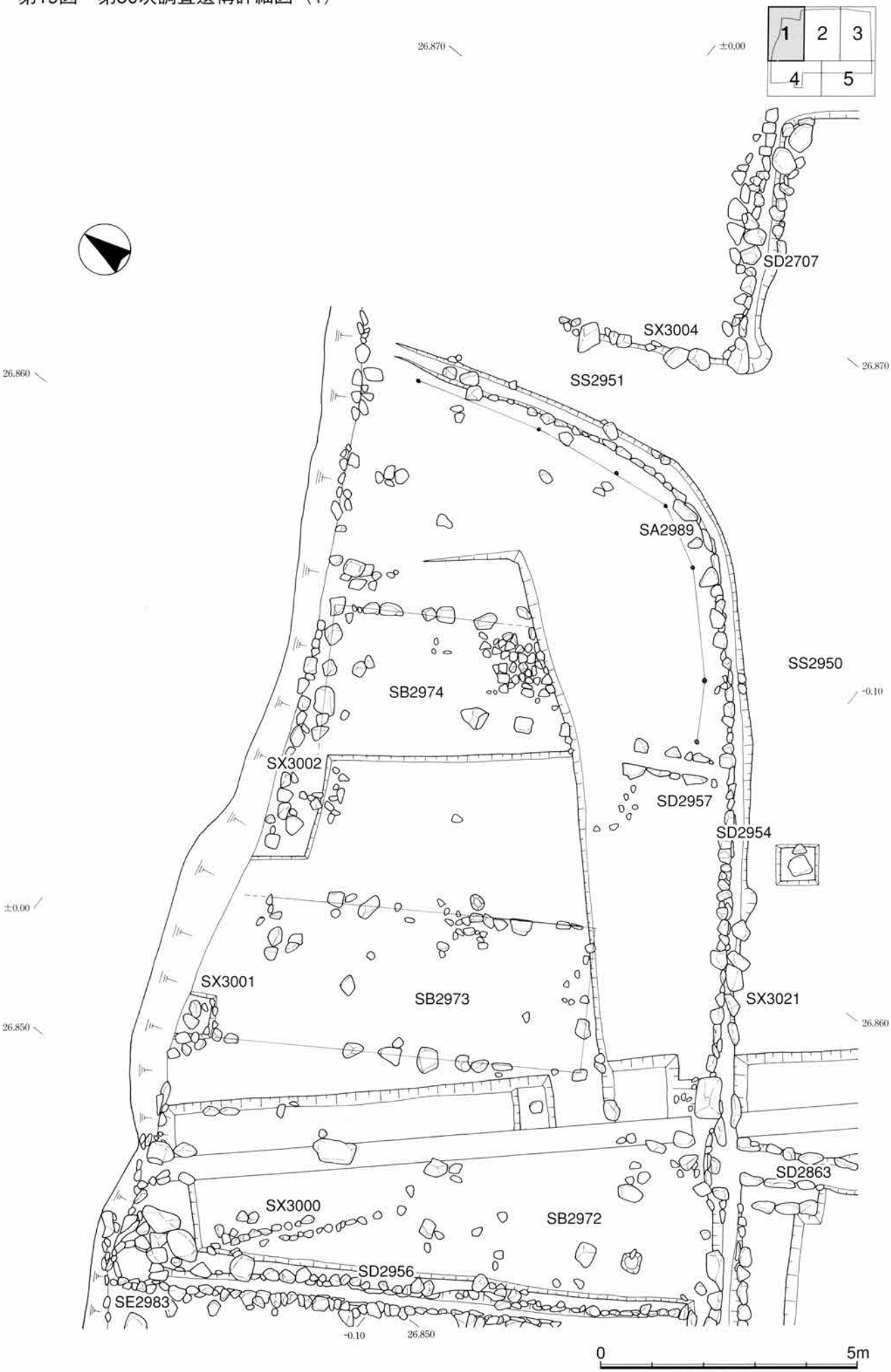
SV2965立面図



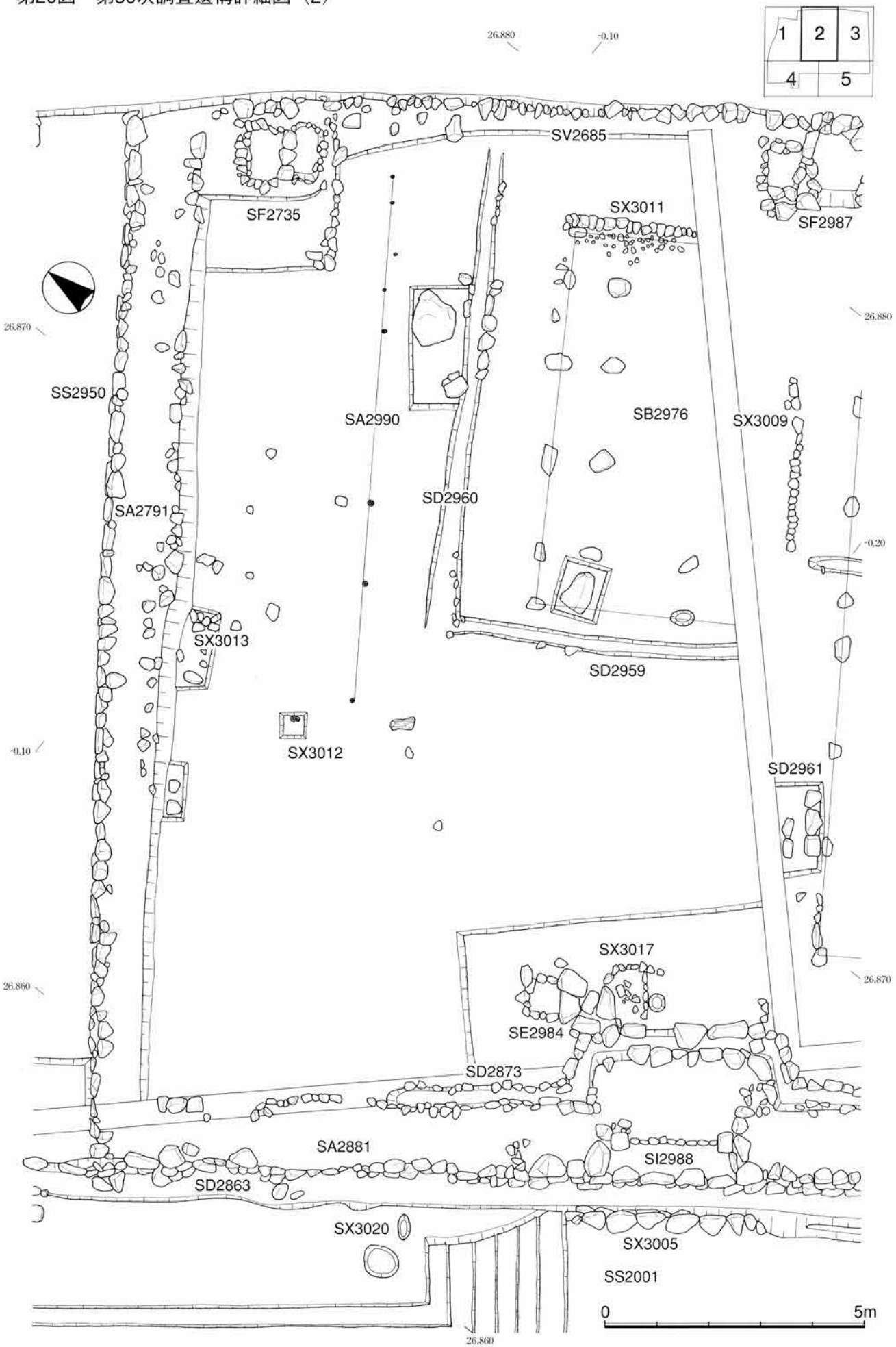
SV2966立面図



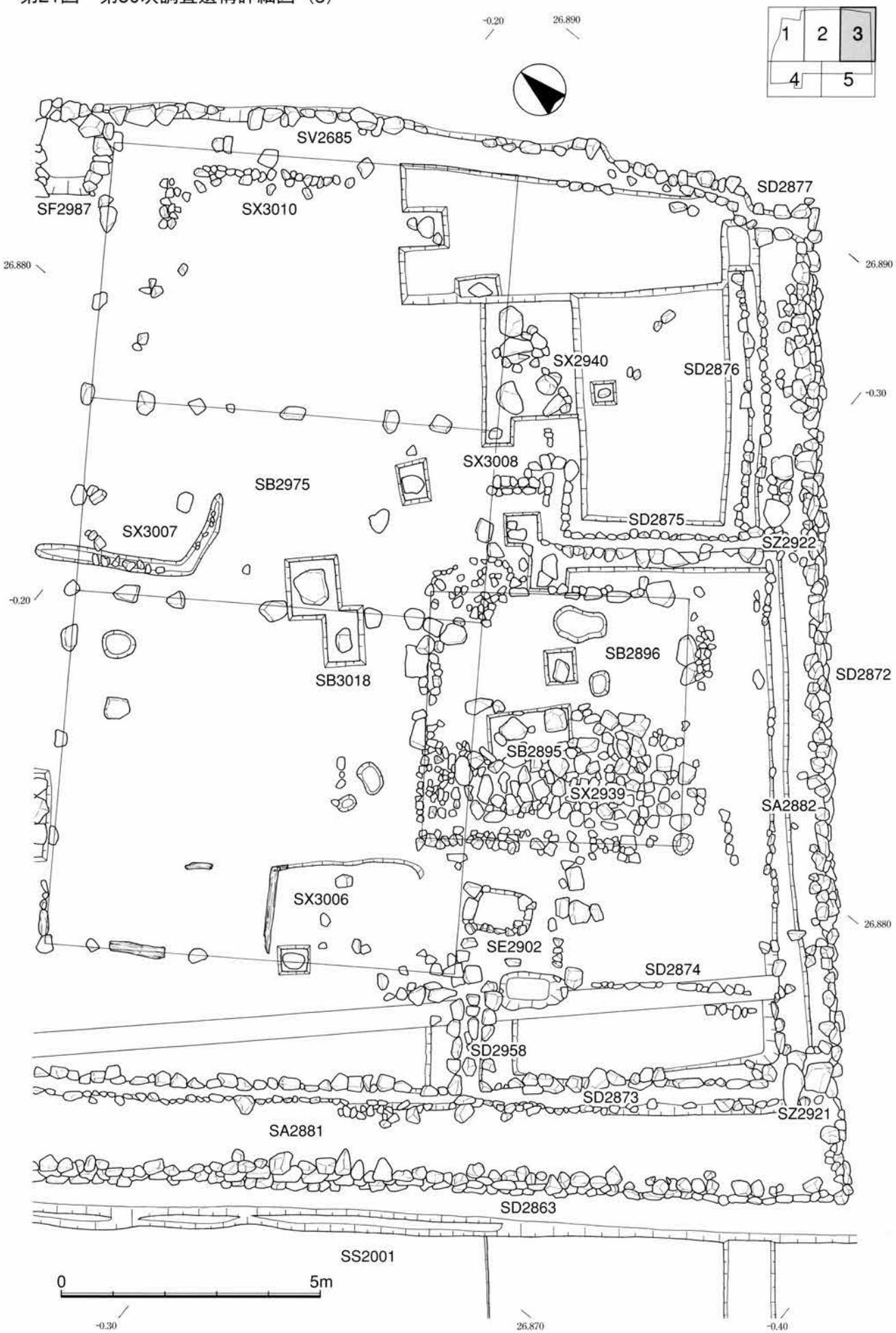
第19図　第50次調査遺構詳細図（1）



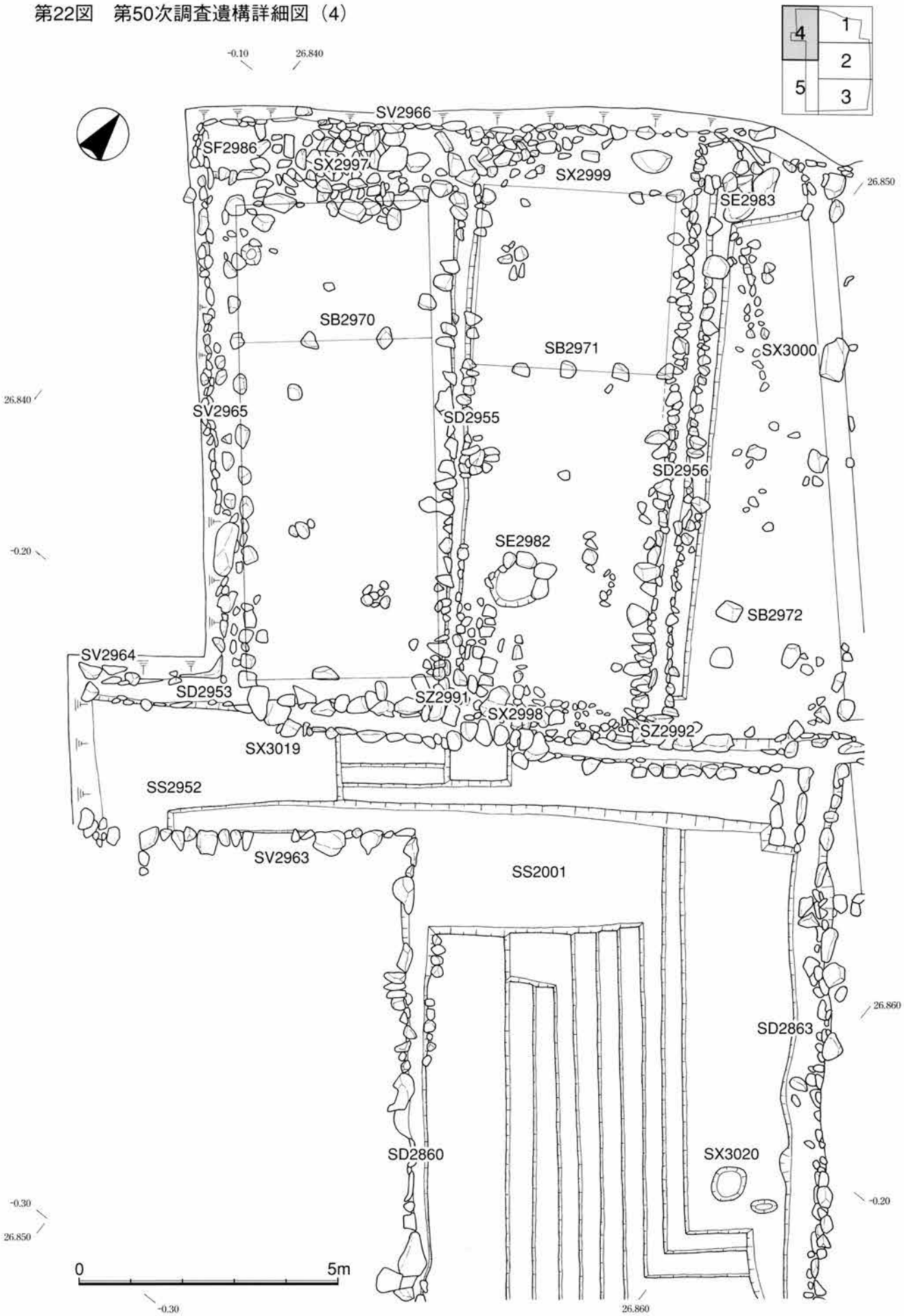
第20図　第50次調査遺構詳細図（2）



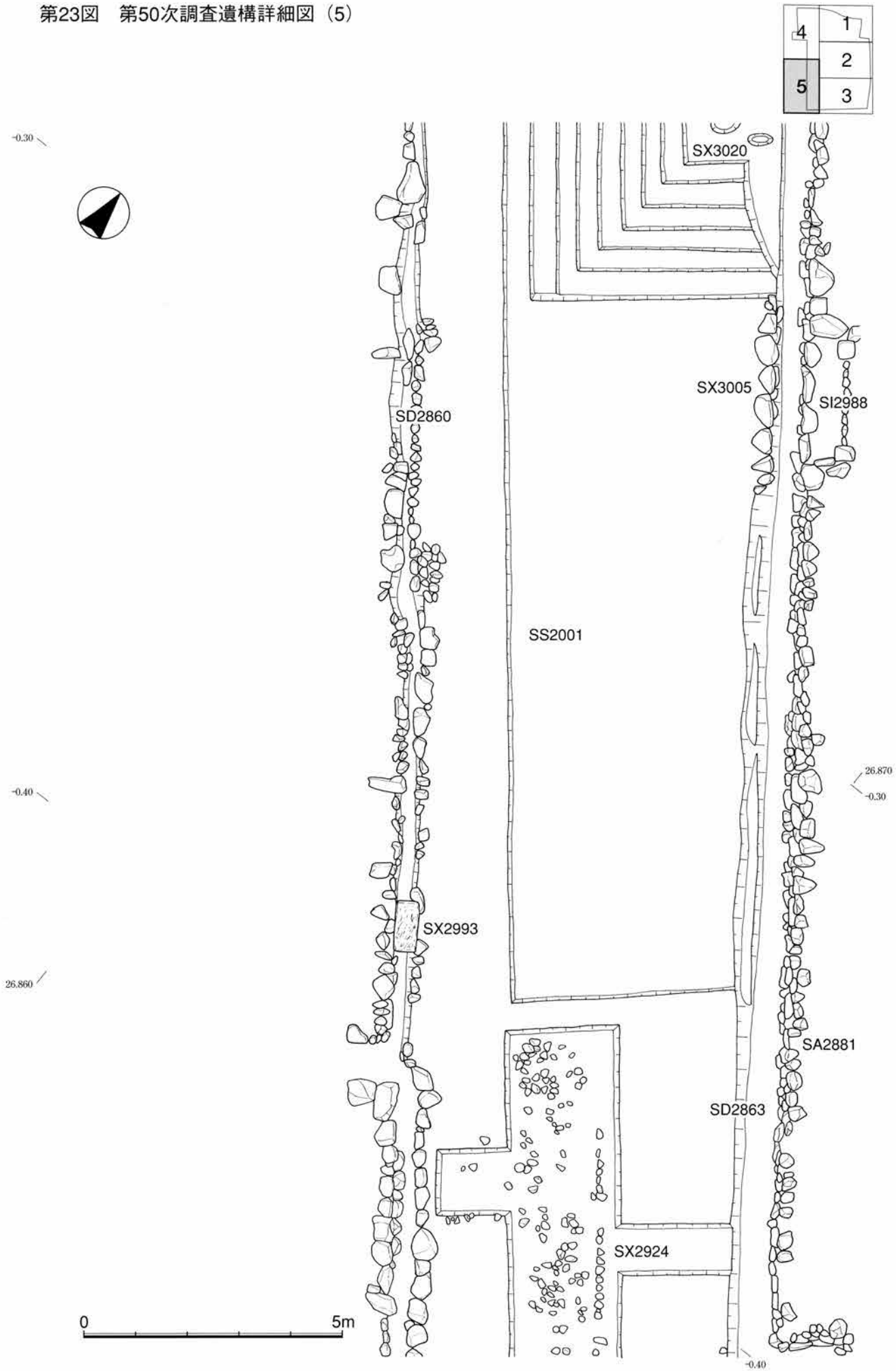
第21図　第50次調査遺構詳細図（3）



第22図　第50次調査遺構詳細図（4）



第23図　第50次調査遺構詳細図（5）



第50次調査区全景（1）

調査区全景　航空写真

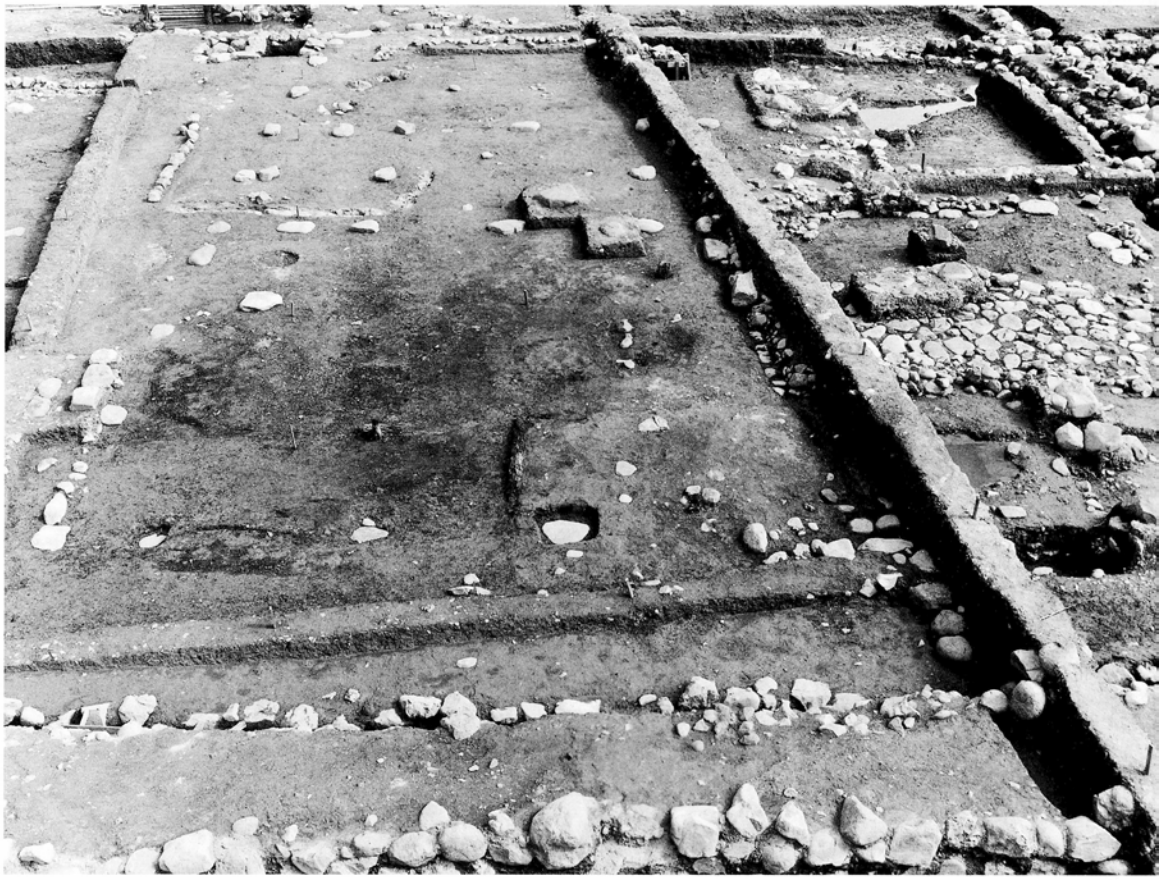
調査区全景
（北から）

第50次調査区全景（2）

調査区 全景
（南から）

調査区 全景
（東から）

区画50-1 全景
（南から）

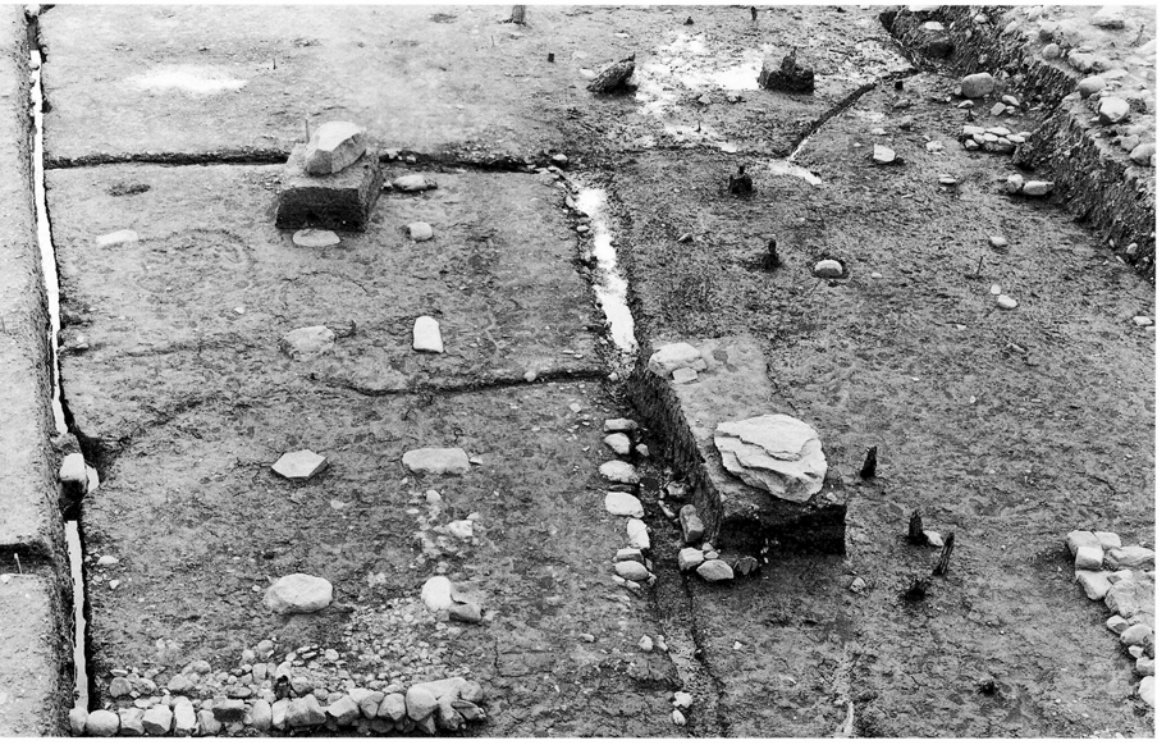


区画50-1 東半部
（南から）

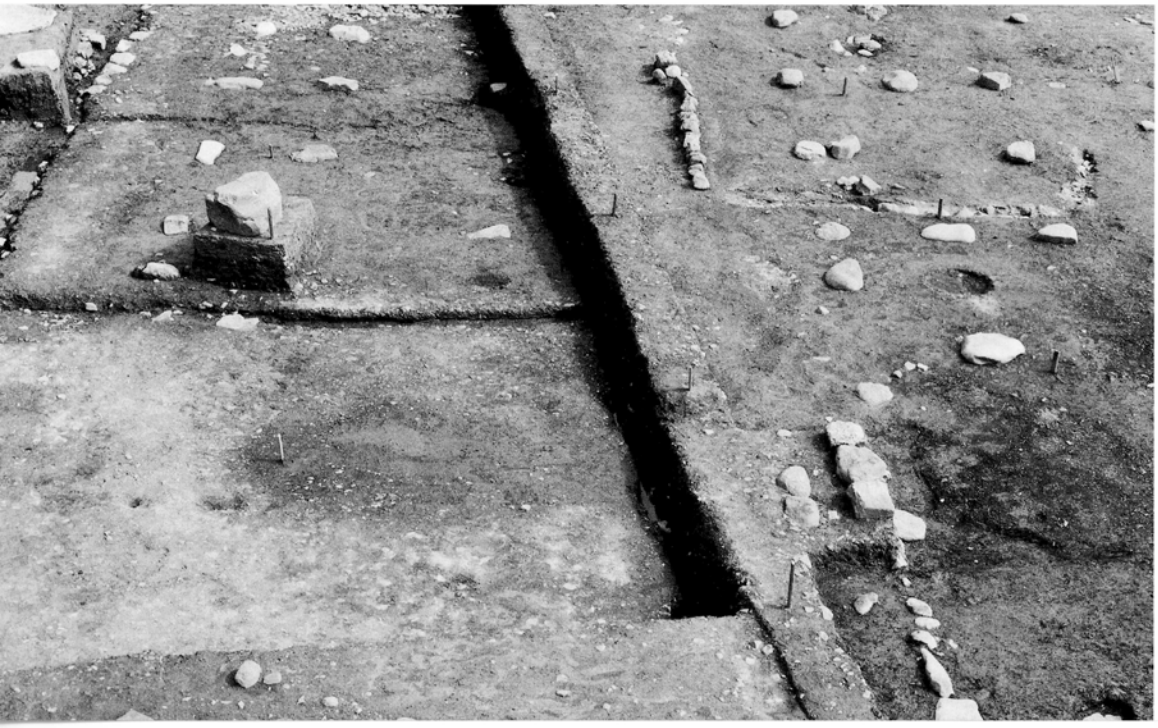
区画50-1 西半部
（南から）

第50次調査 区画50-1(2)

区画50-1 SB2975
(北から)



区画50-1 SB2976
SA2990
(北から)



区画50-1 SB2976
SD2959
SD2960
SD2961
(南から)

区画50-1 SB2975
SB2976
(西から)

区画50-1 SB2895
SB2896
SD2875
(西から)

区画50-1 SI 2988
SX3005
(南から)

第50次調査 区画50-1(4)

区画50-1 SI2988
SE2984
SX3017
(北から)

区画50-1 SA2881
SI2988
(南から)

区画50-1 ◀SA2882
(南から)
▶SA2791
(北から)

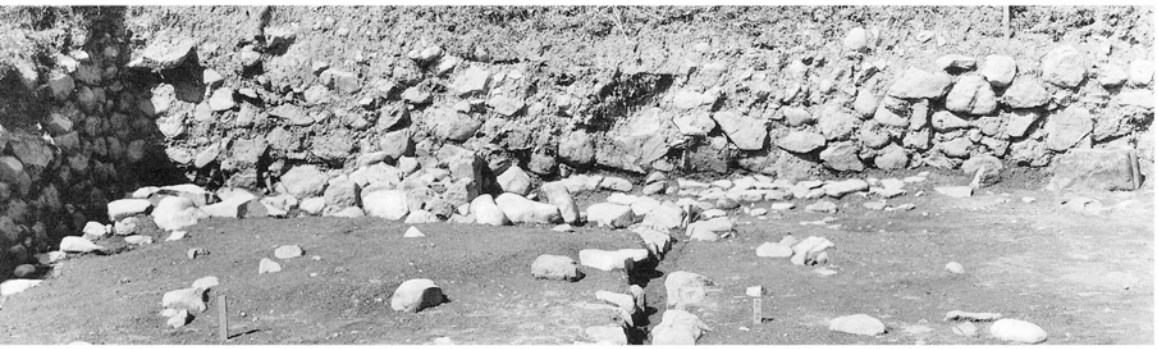
区画50-2·3·4 遠景
（北から）

区画50-2·3 近景
（東から）

区画50-2 SB2970
（東から）

第50次調査 区画50-2·3

区画50-2 SF2986
SX2997
（東から）

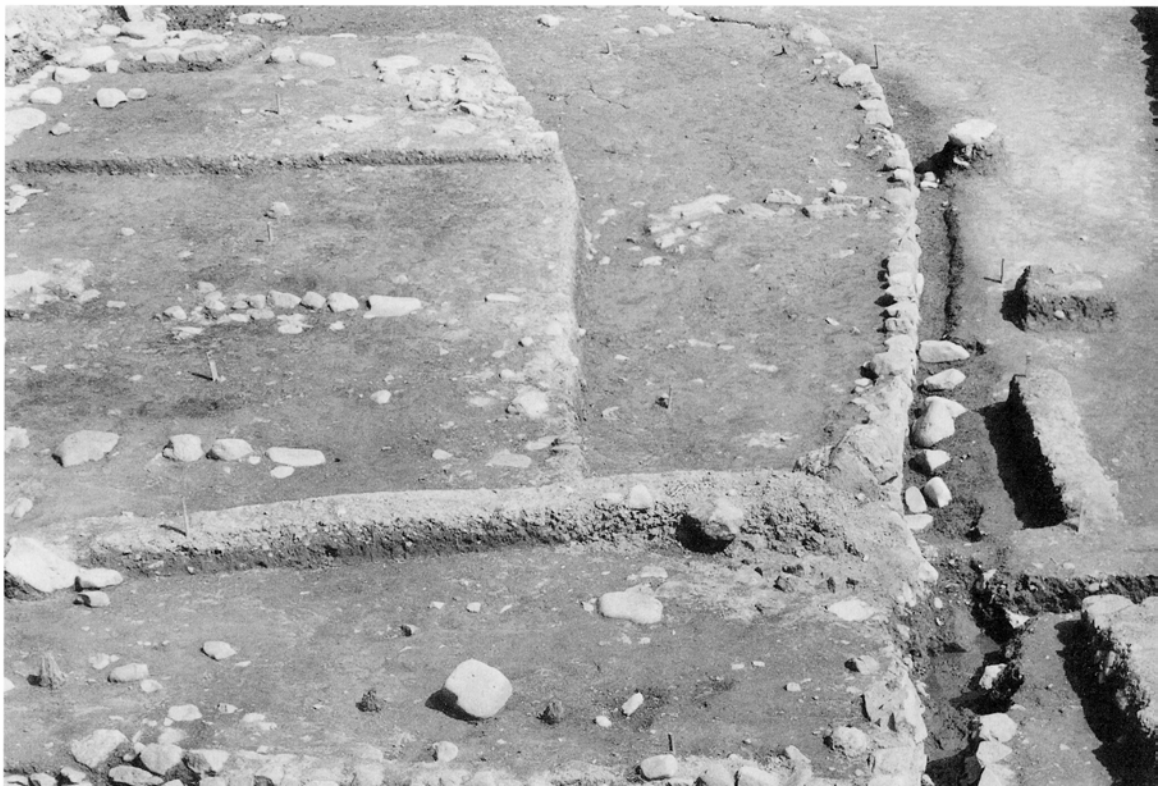


区画50-2·3 SV2966
（東から）

区画50-3 SB2971
（東から）

区画50-3 SX2998
SE2982
（東から）

区画50-4 SB2973
SB2974
（東から）



区画50-4 SB2973
SB2974
（南から）

SS2001 全景
（東から）

SS2001
SA2881
SD2863
（東から）

SS2001 深堀トレンチ
（東から）

SS2950
SS2951 全景
（南から）

第50次調査 溝
SD2860
（北から）

◀SD2863（西から）
SD2954（南から）
▶SD2956（東から）

◀SD2955（東から）
▶SD2953（北から）

◀SX3019
▶SE2984

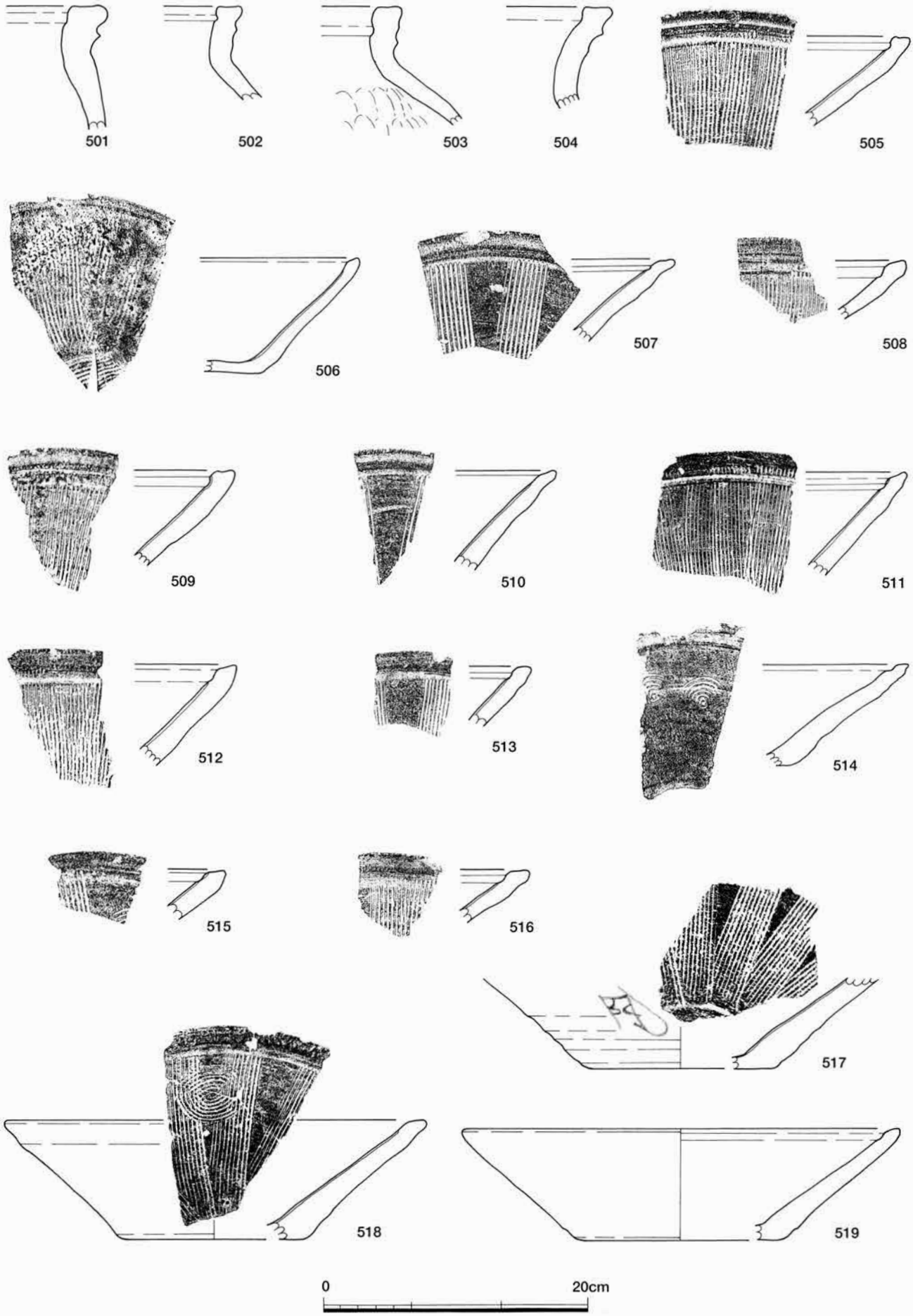
◀SE2982
▶SE2983

◀SF2986
▶SF2735

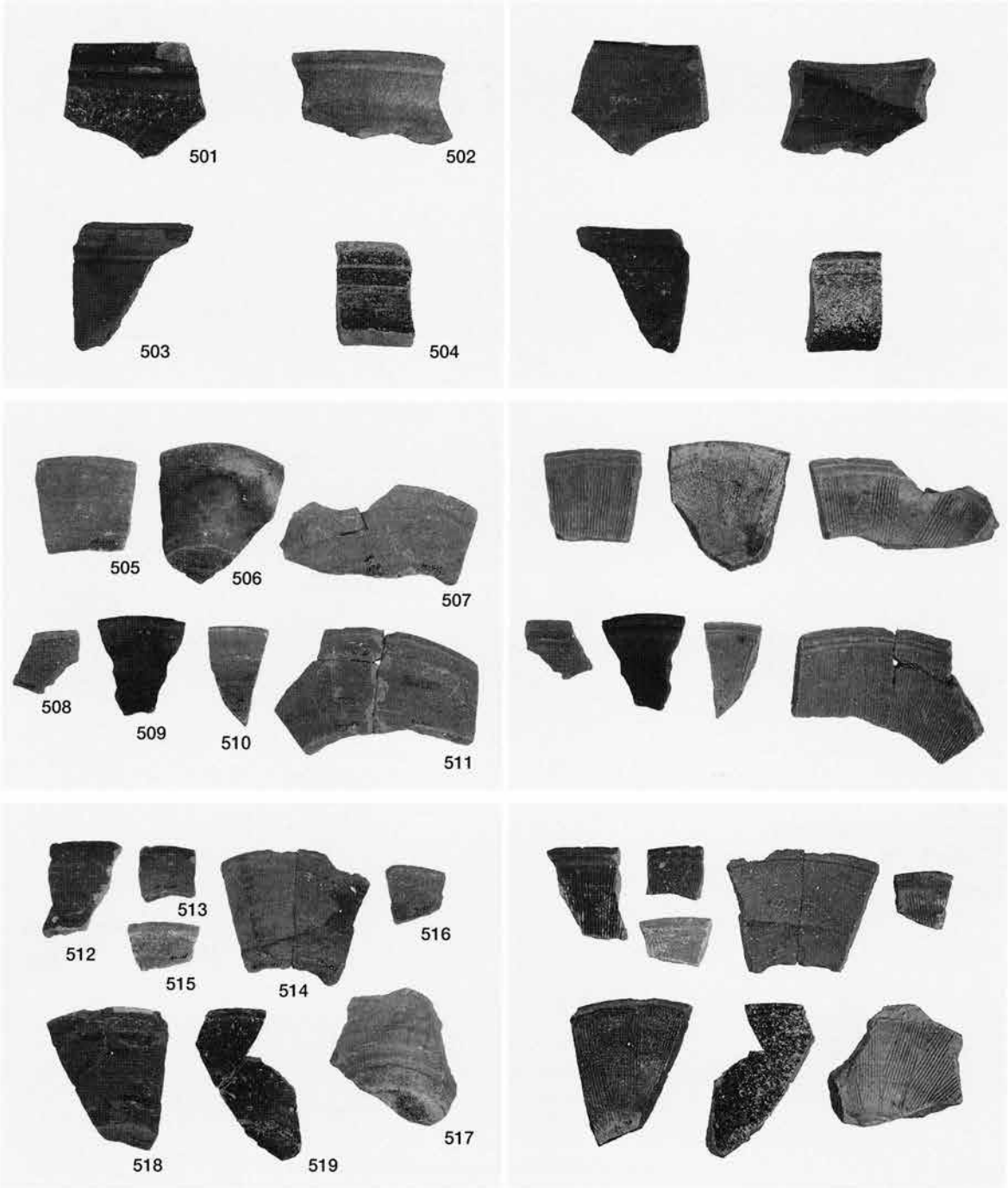
SF2987

第24図　第50次調査出土遺物（1）

SS2001 1面



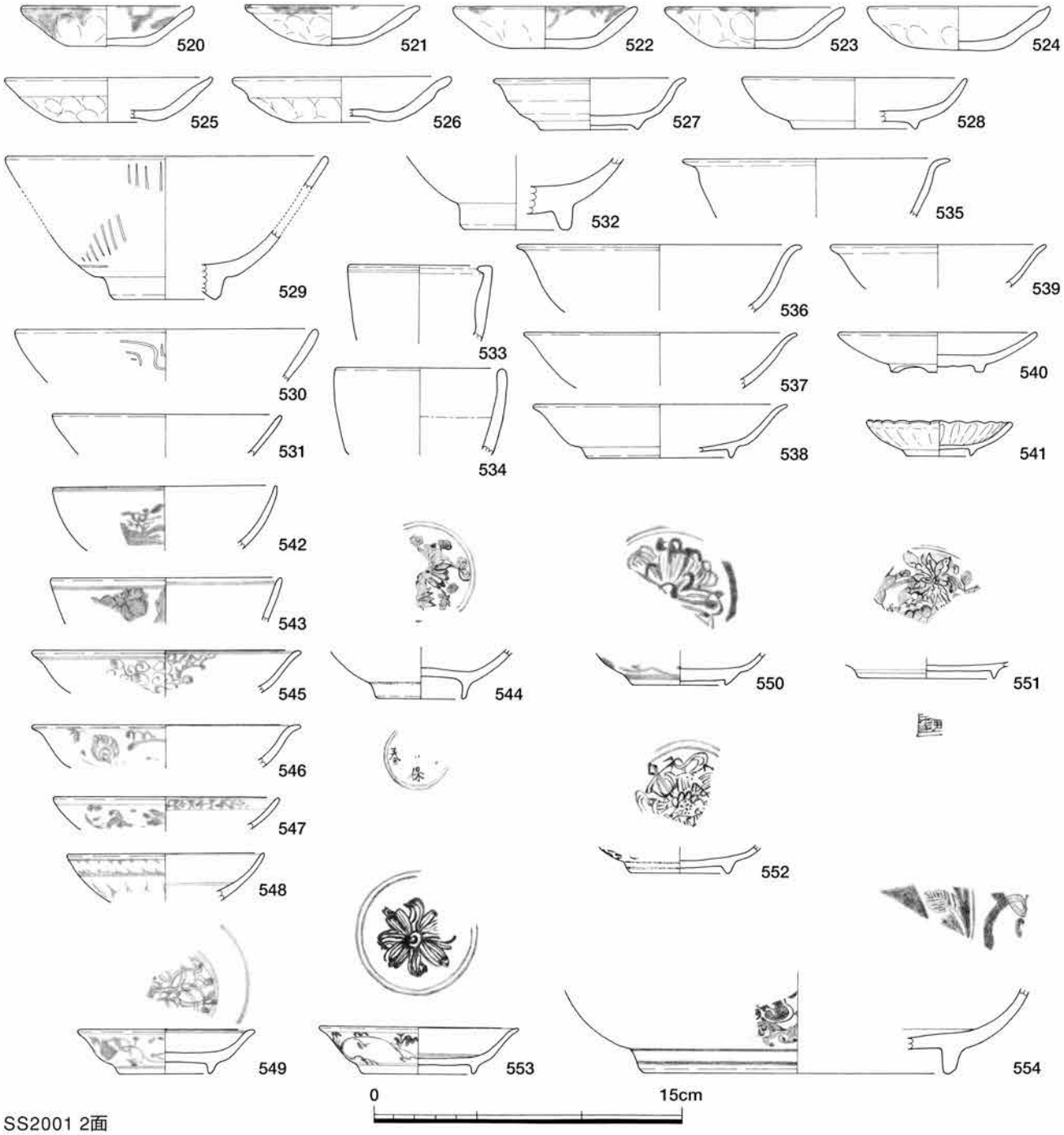
越前焼 甕501～504　擂鉢505～513·515～518　捏鉢514·519



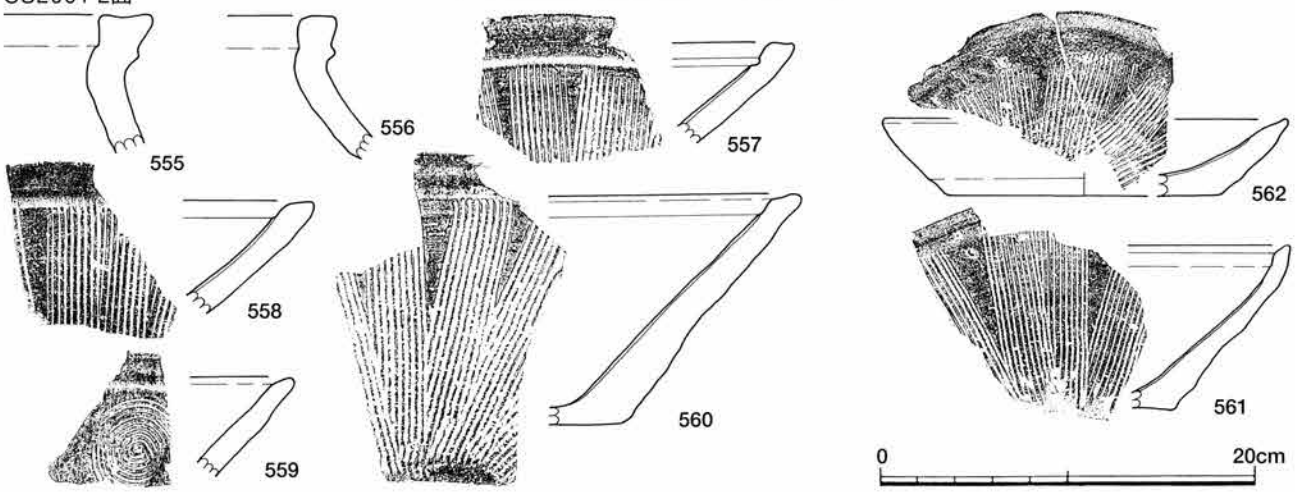
越前焼 甕501～504　擂鉢505～513・515～518　捏鉢514・519

第25図　第50次調査出土遺物（２）

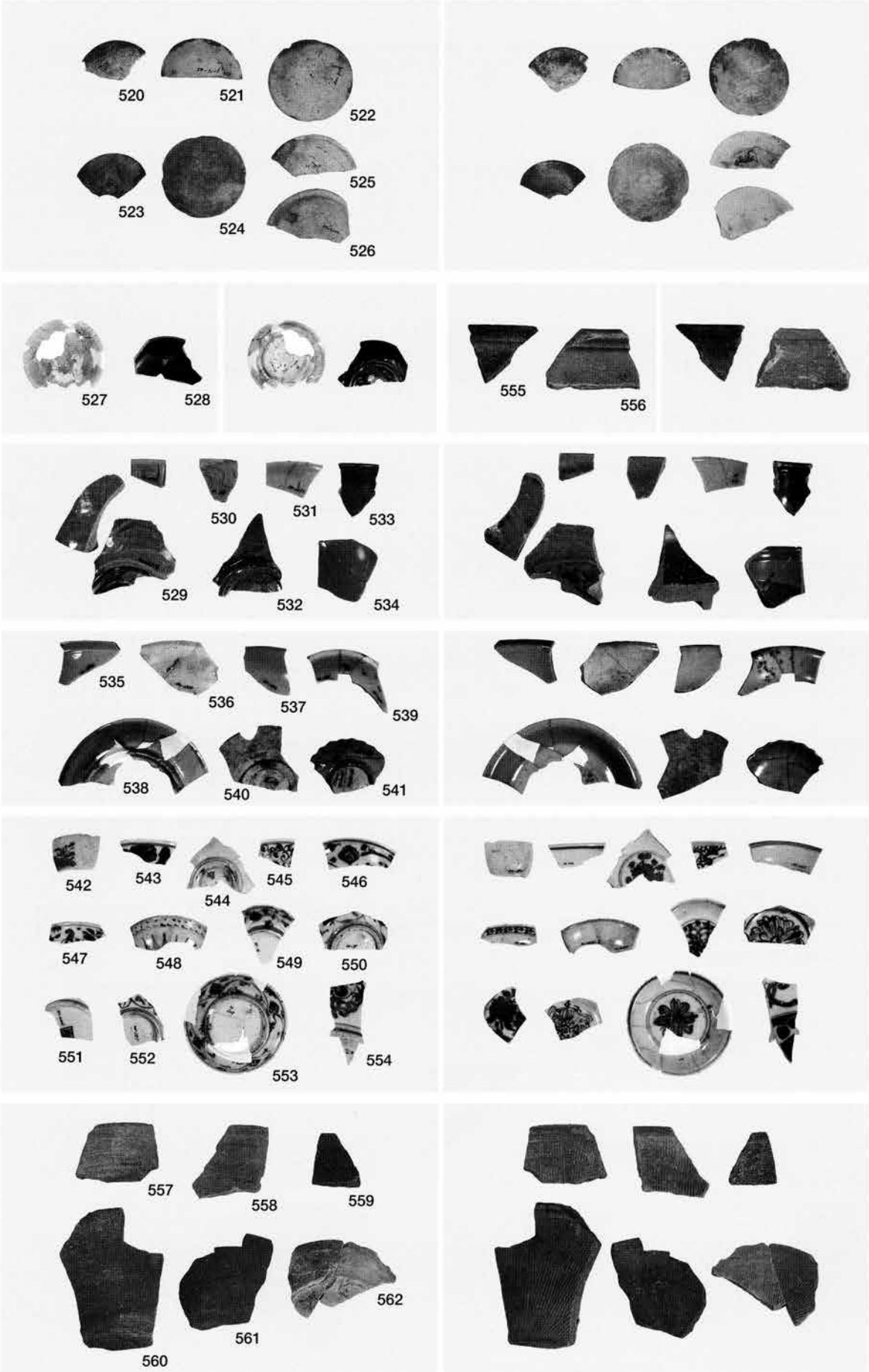
SS2001 1面



SS2001 2面



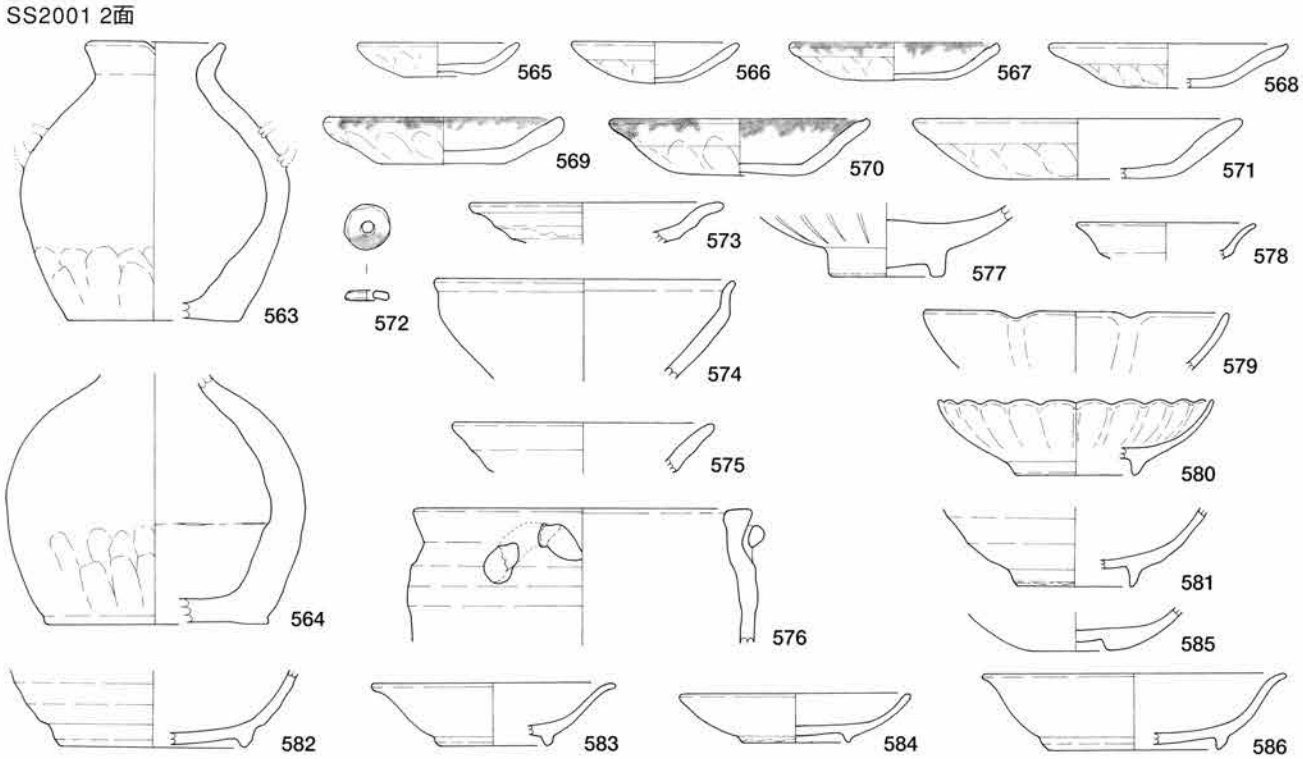
越前焼 甕555・556　擂鉢557～561　卸皿562　**土師質** 皿520～526　**灰釉** 皿527　**鉄釉** 皿528　**青磁** 碗529～532　香炉533・534
白磁 碗535　皿536～541　**染付** 碗542～544　皿545～553　鉢554



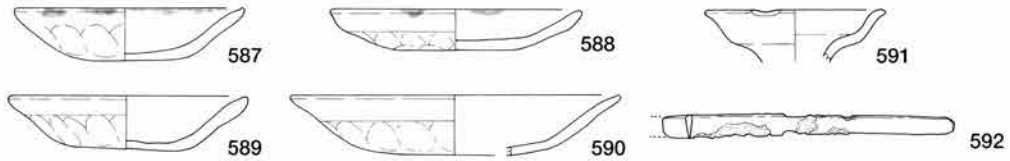
越前焼 甕555・556　擂鉢557～561　卸皿562　**土師質** 皿520～526　**灰釉** 皿527　**鉄釉**皿528　**青磁** 碗529～532　香炉533・534　**白磁** 碗535　皿536～541　**染付** 碗542～544　皿545～553　鉢554

第26図　第50次調査出土遺物（3）

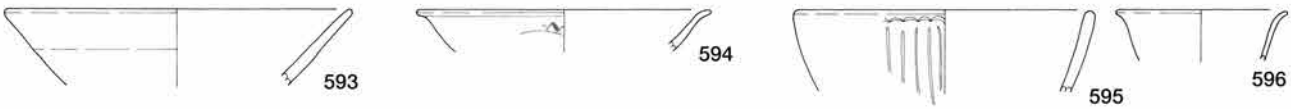
SS2001 2面



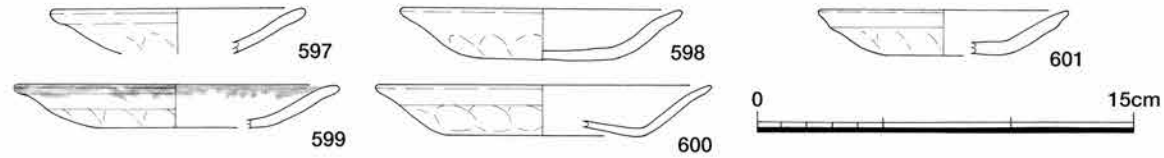
SS2001 3面



SS2001 3～4面　SS2001 4面　SS2001 4～5面

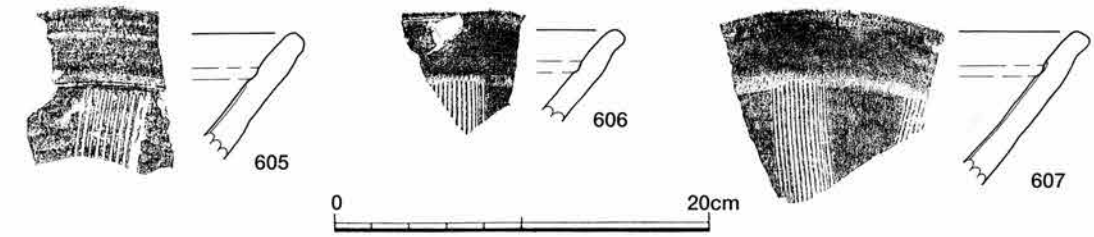


SS2001 5面　SS2001 7～8面

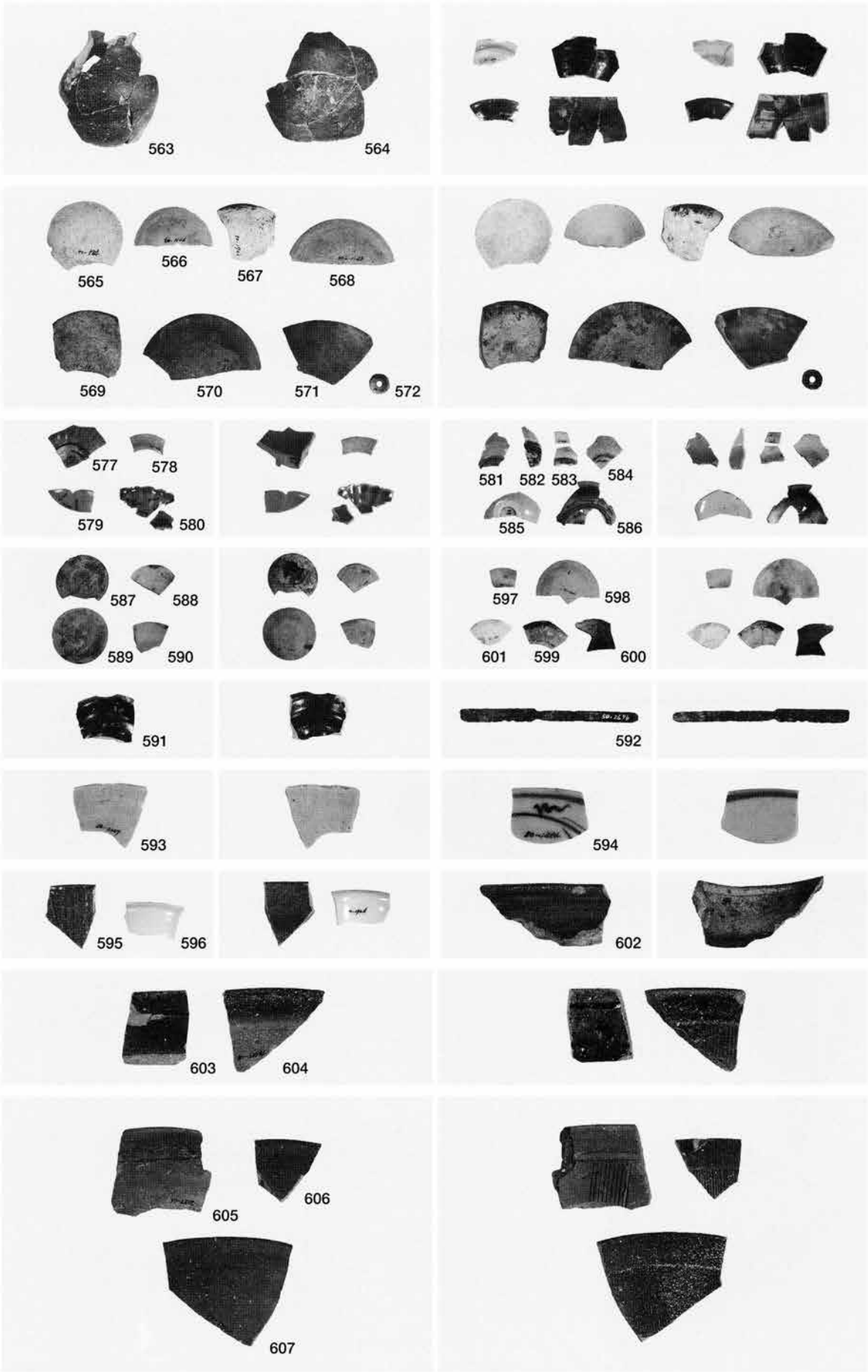


SS2001 3～4面　SS2001 5面　SX3020

SS2001 5～6面



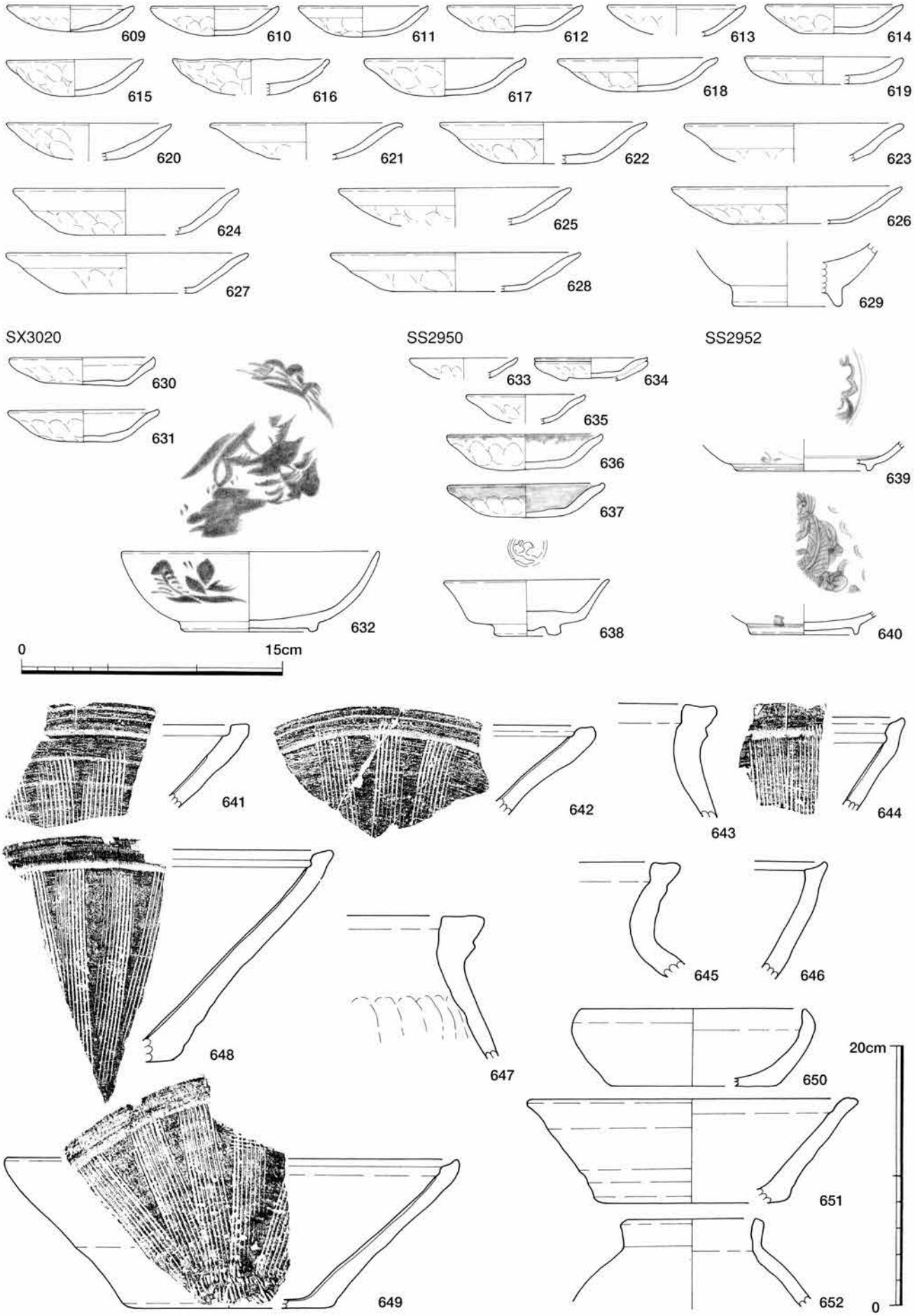
越前焼 甕603・608　擂鉢604～607　壺563・564・602　**土師質** Ⅲ565～571・587～590・597～601　灯心押572　**灰釉** 碗593　Ⅲ573
鉄釉 碗574　Ⅲ757　桶576　壺591　**青磁** 碗577・581・595　Ⅲ578～580　**白磁** 碗582　Ⅲ583～586　坏596　**染付** Ⅲ594
鉄製品 刀子592



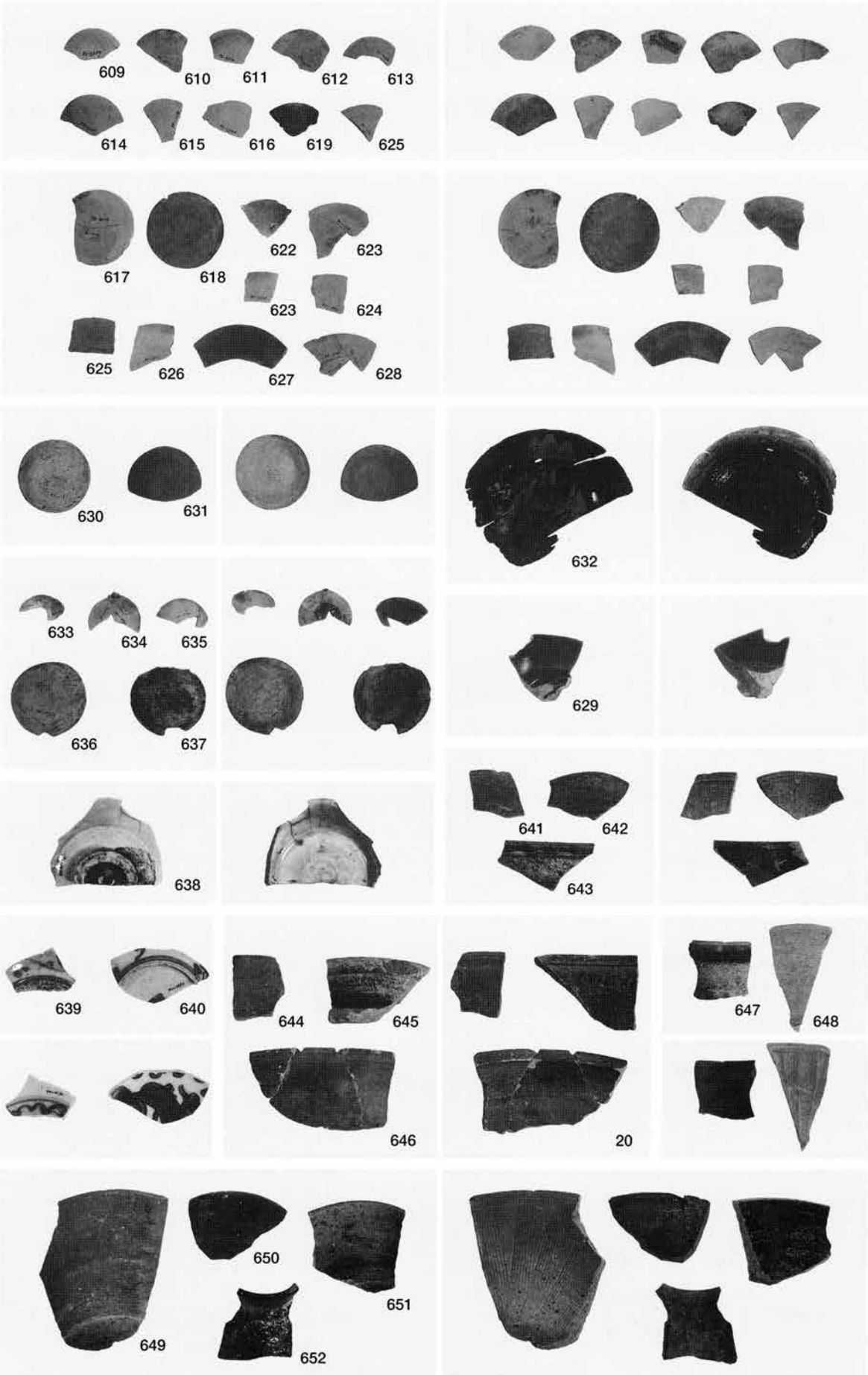
越前焼 甕603・608　擂鉢604～607　壺563・564・602　**土師質** 皿565～571・587～590・597～601　灯心押572
灰釉 碗593　皿573　**鉄釉** 碗574　皿757　桶576　壺591　**青磁** 碗577・581・595　皿578～580
白磁 碗582　皿583～586　坏596　**染付** 皿594　**鉄製品** 刀子592

第27図　第50次調査出土遺物（4）

SS2001 最下層



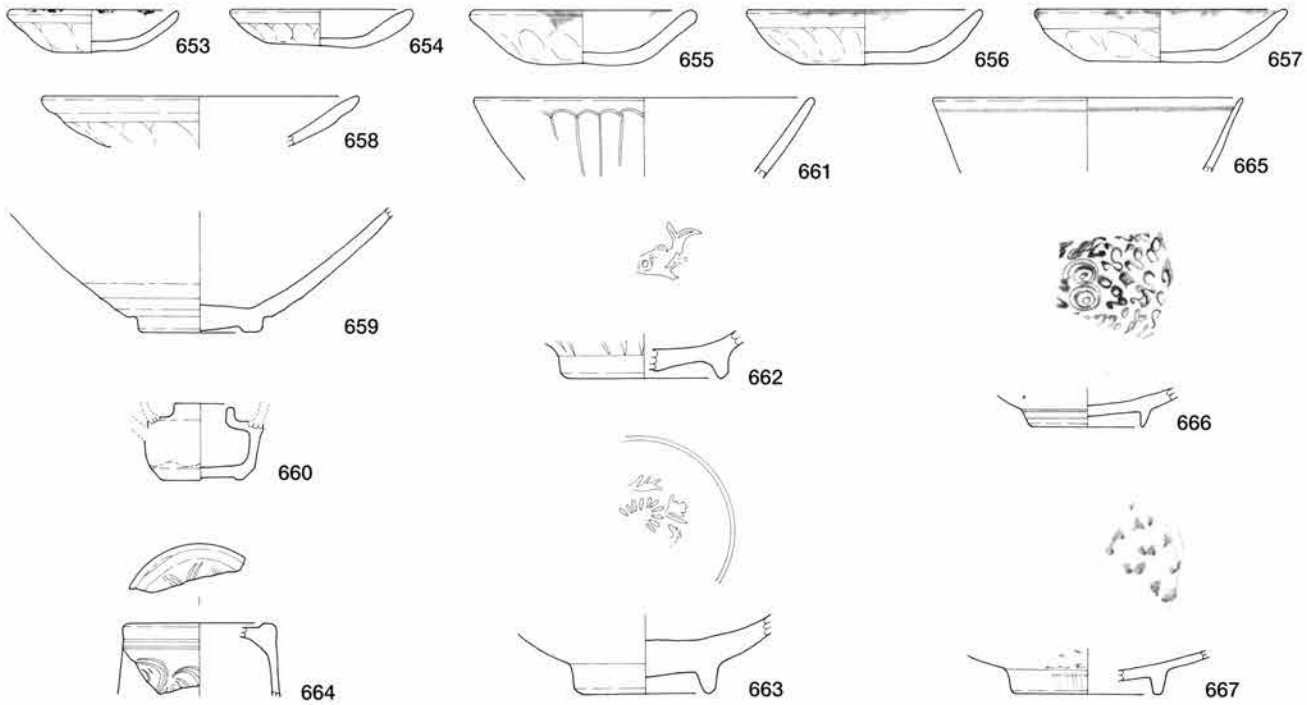
越前焼 甕643・647　擂鉢641・642・644・648・649　壺645・652　鉢646～651　**土師質** 皿609～628・630・631・633～637　**青磁** 碗629
白磁 皿638　**染付** 皿639・640　**漆器** 椀632



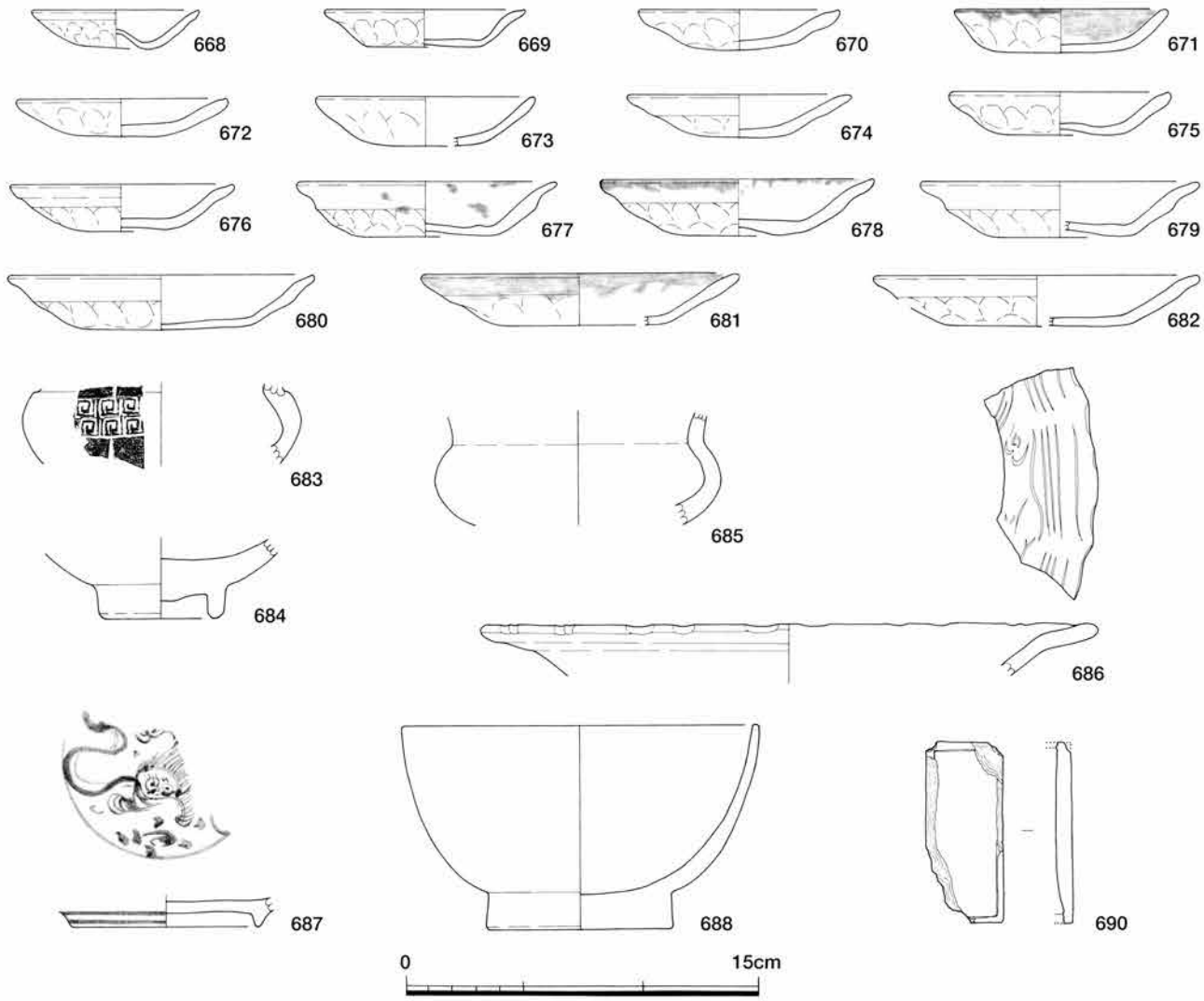
越前焼 甕643・647　擂鉢641・642・644・648・649　壺645・652　鉢646～651　**土師質** 皿609～628・630・631・633～637
青磁 碗629　**白磁** 皿638　**染付** 皿639・640　**漆器** 椀632

第28図　第50次調査出土遺物（5）

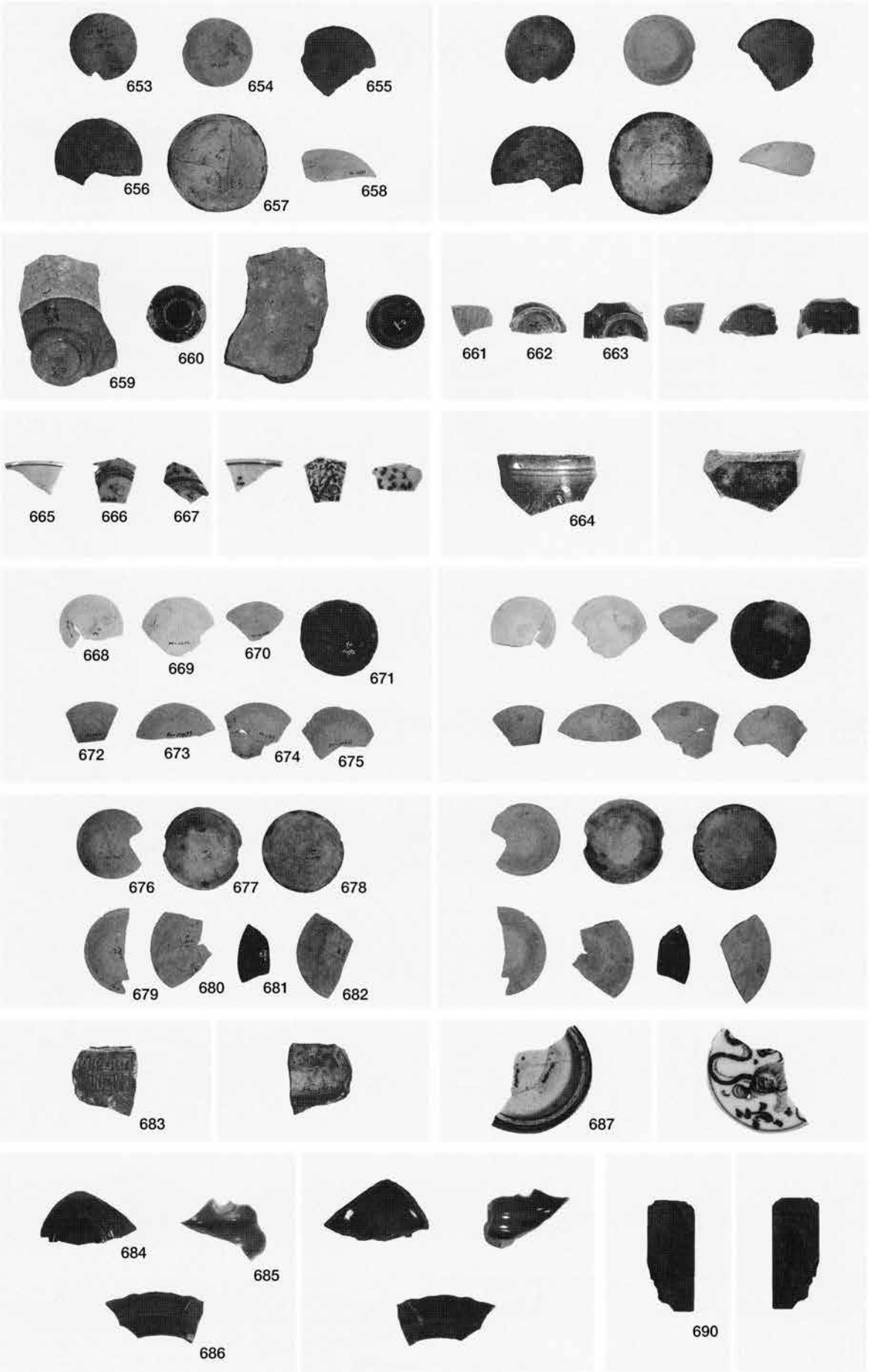
SD2860



SD2863



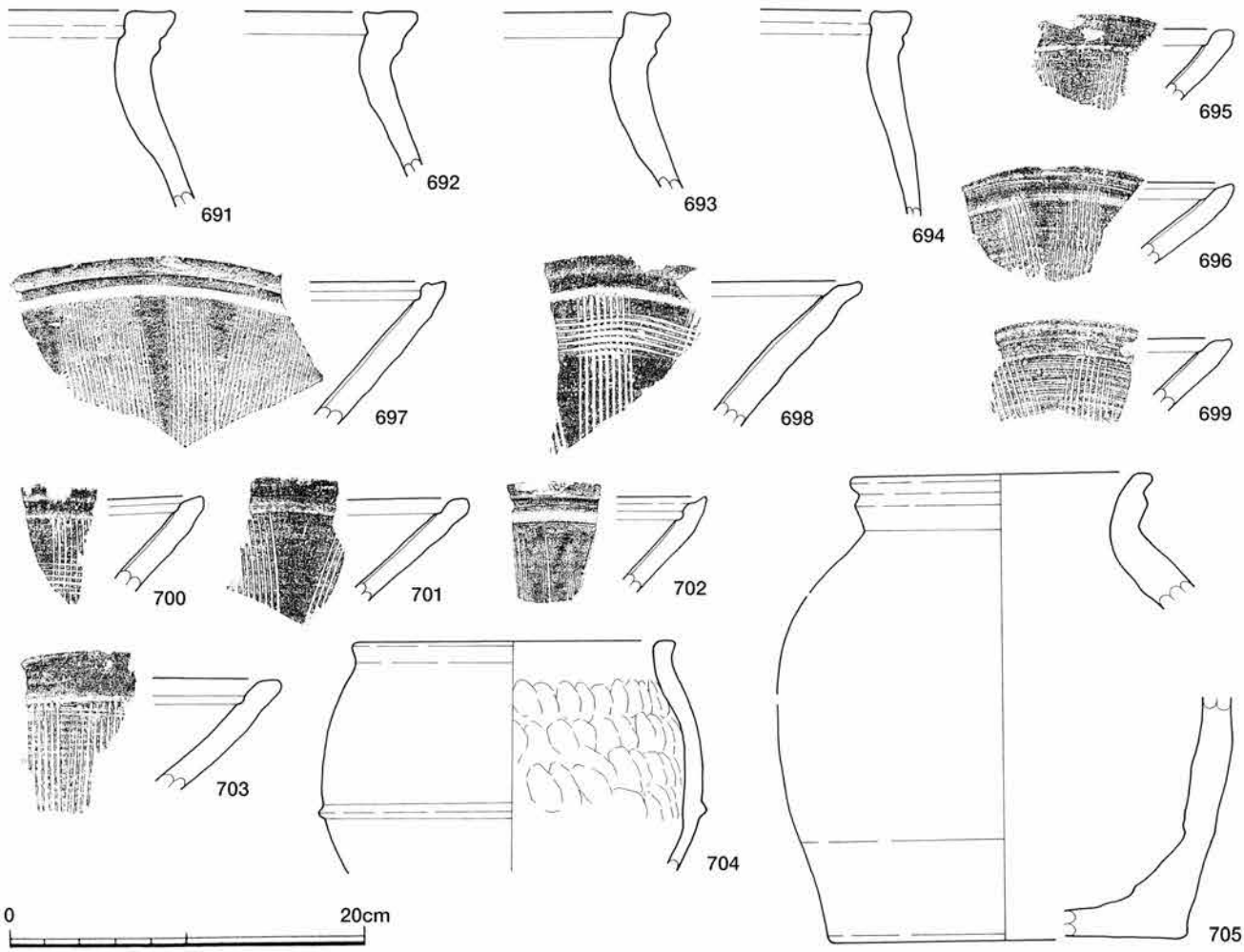
土師質 皿653～658・668～682　**瓦質** 香炉683　**鉄釉** 椀659　水滴660　**青磁** 碗661～663・684　香炉685　盤686　**青白磁** 蓋664
染付 碗665～667　皿687　**漆器** 椀688　**石製品** 硯690

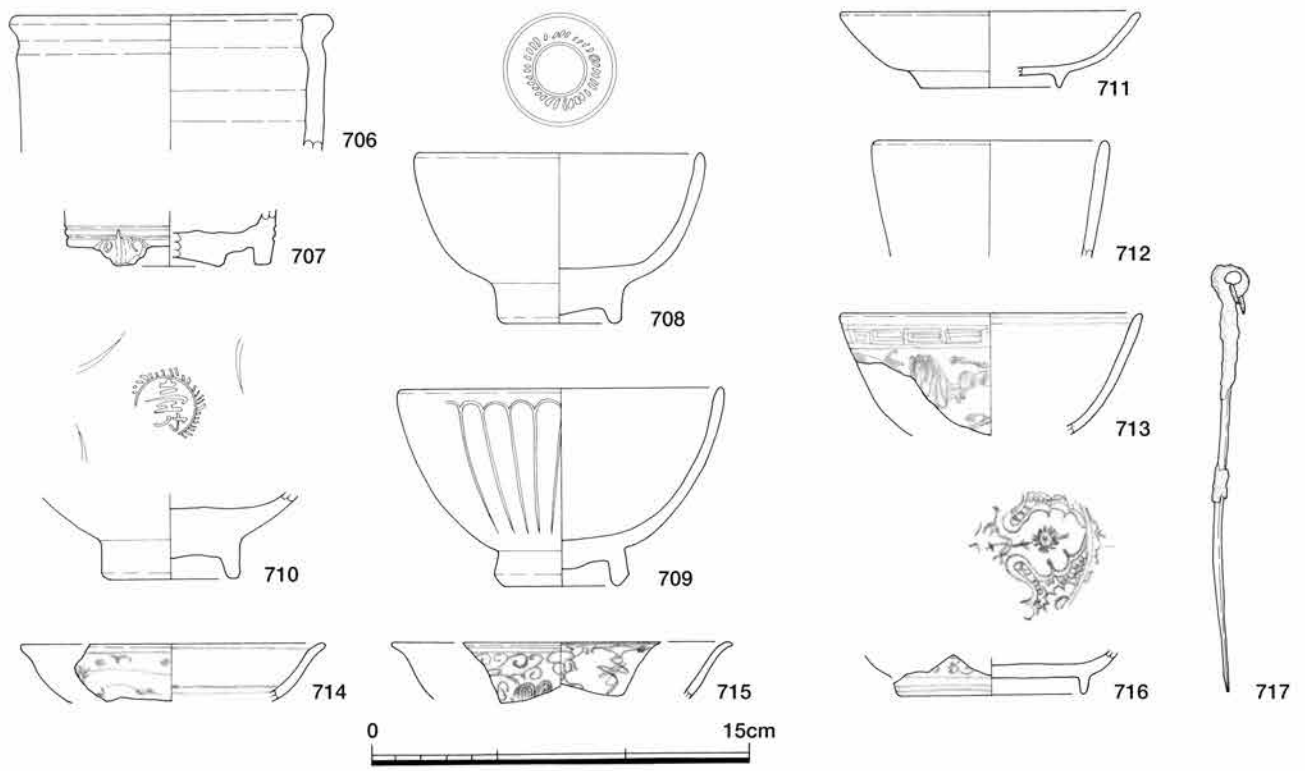


土師質 皿653～658・668～682　**瓦質** 香炉683　**鉄釉** 椀659　水滴660　**青磁** 碗661～663・684　香炉685　盤686
青白磁 蓋664　**染付** 碗665～667　皿687　**漆器** 椀688　**石製品** 硯690

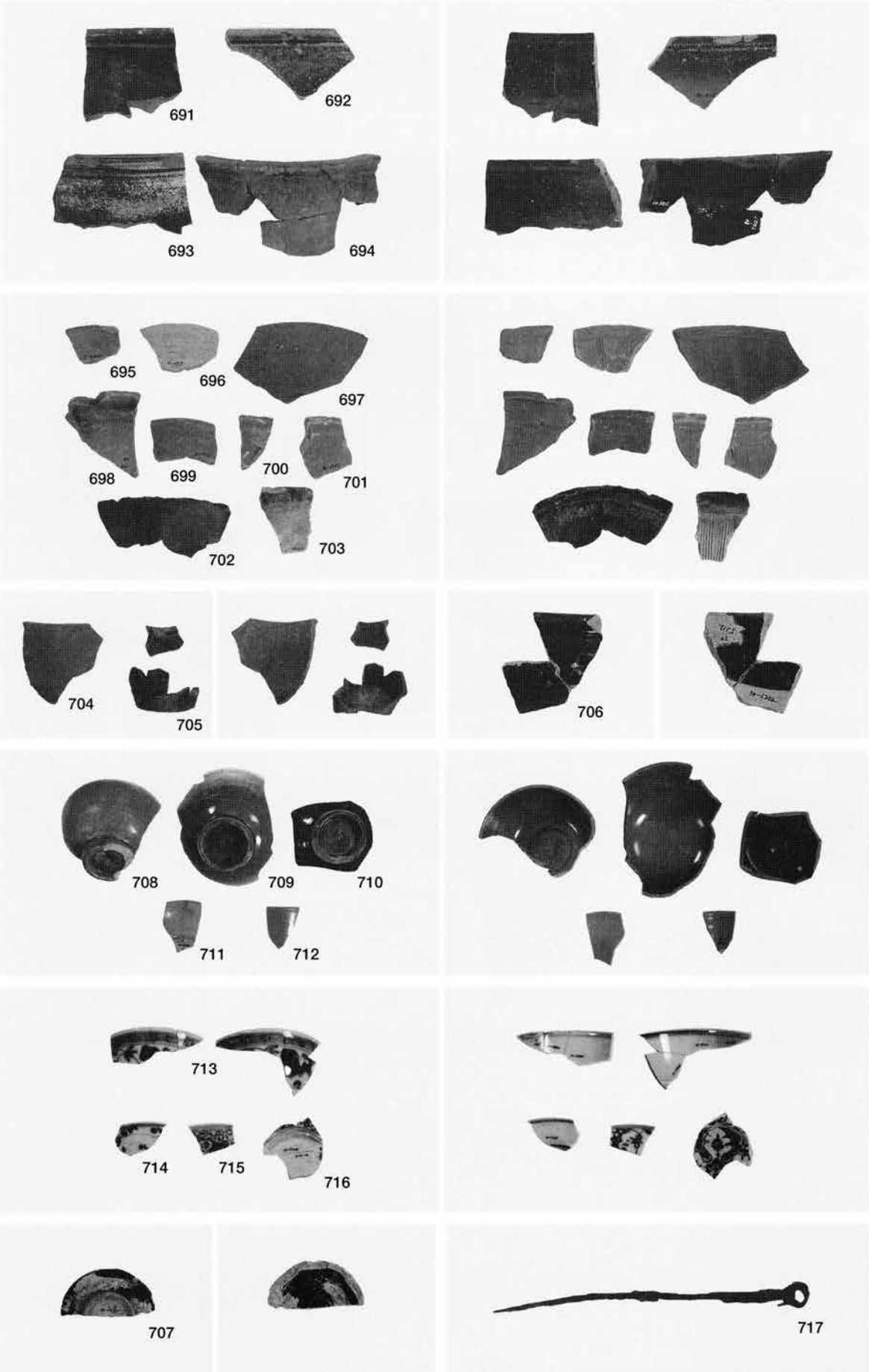
第29図　第50次調査出土遺物（6）

区画50－1－Ⅰ遺構





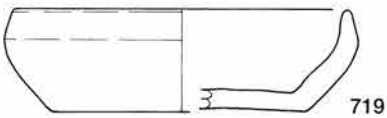
越前焼 甕691～694　小形甕704　擂鉢695～703　壺705　**鉄釉** 香炉706　**緑釉** 香炉707　**青磁** 碗708～710　皿711　香炉712
染付 碗713　皿714～716　**金属製品** 火箸717



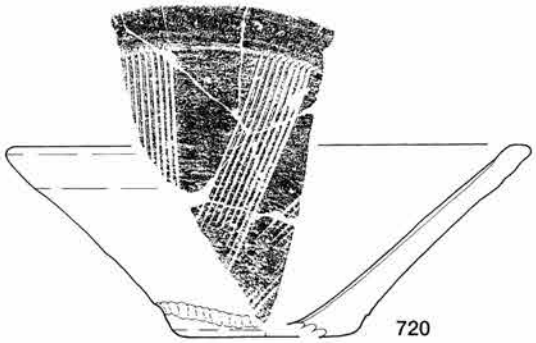
越前焼 甕691～694　小形甕704　擂鉢695～703　壺705　**鉄釉** 香炉706　**緑釉** 香炉707　**青磁** 碗708～710　皿711　香炉712　**染付** 碗713　皿714～716　**金属製品** 火箸717

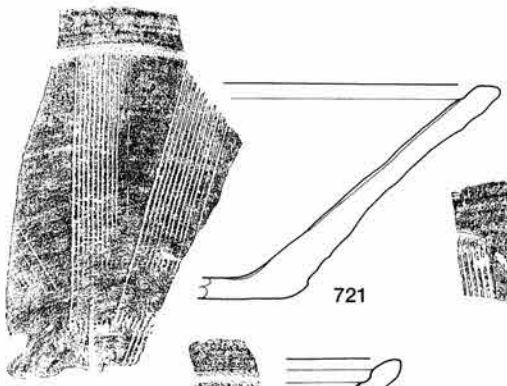
第30図　第50次調査出土遺物（7）

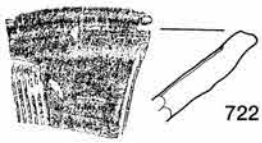
SA2882

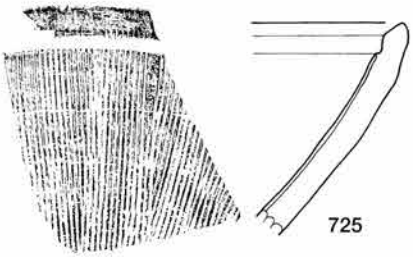


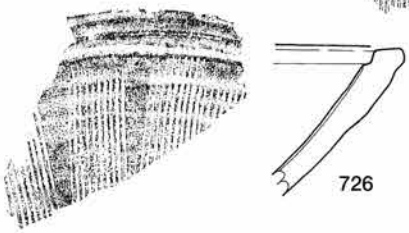
区画50－1－Ⅱ遺構

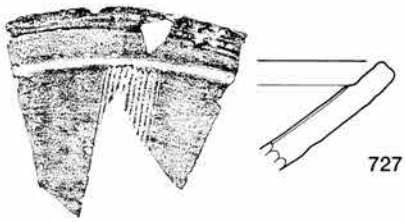


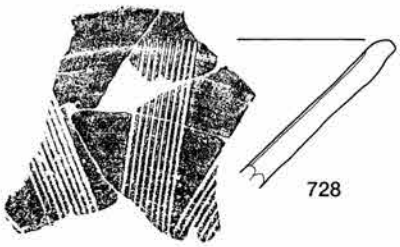


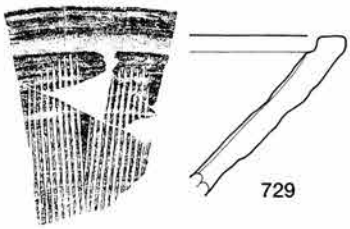


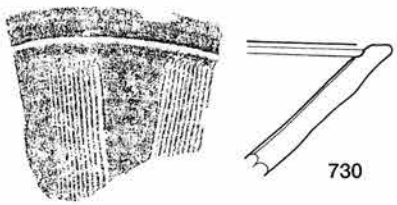


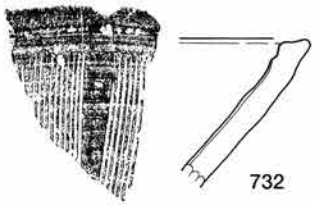


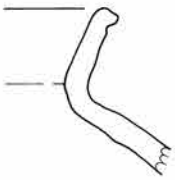


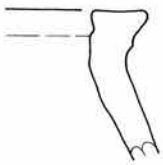


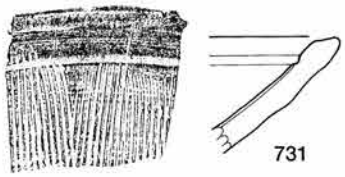


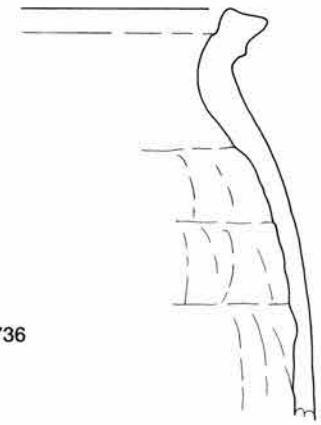


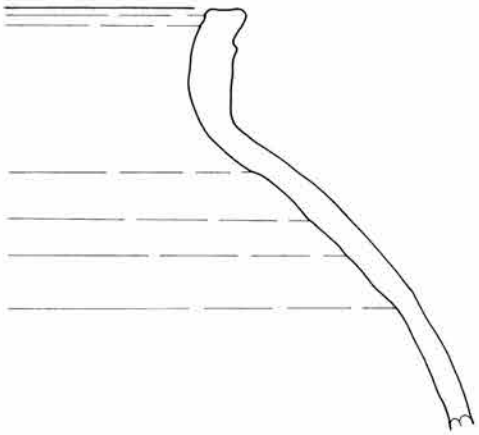


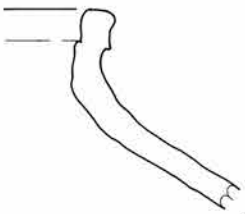


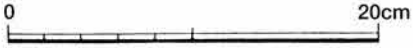




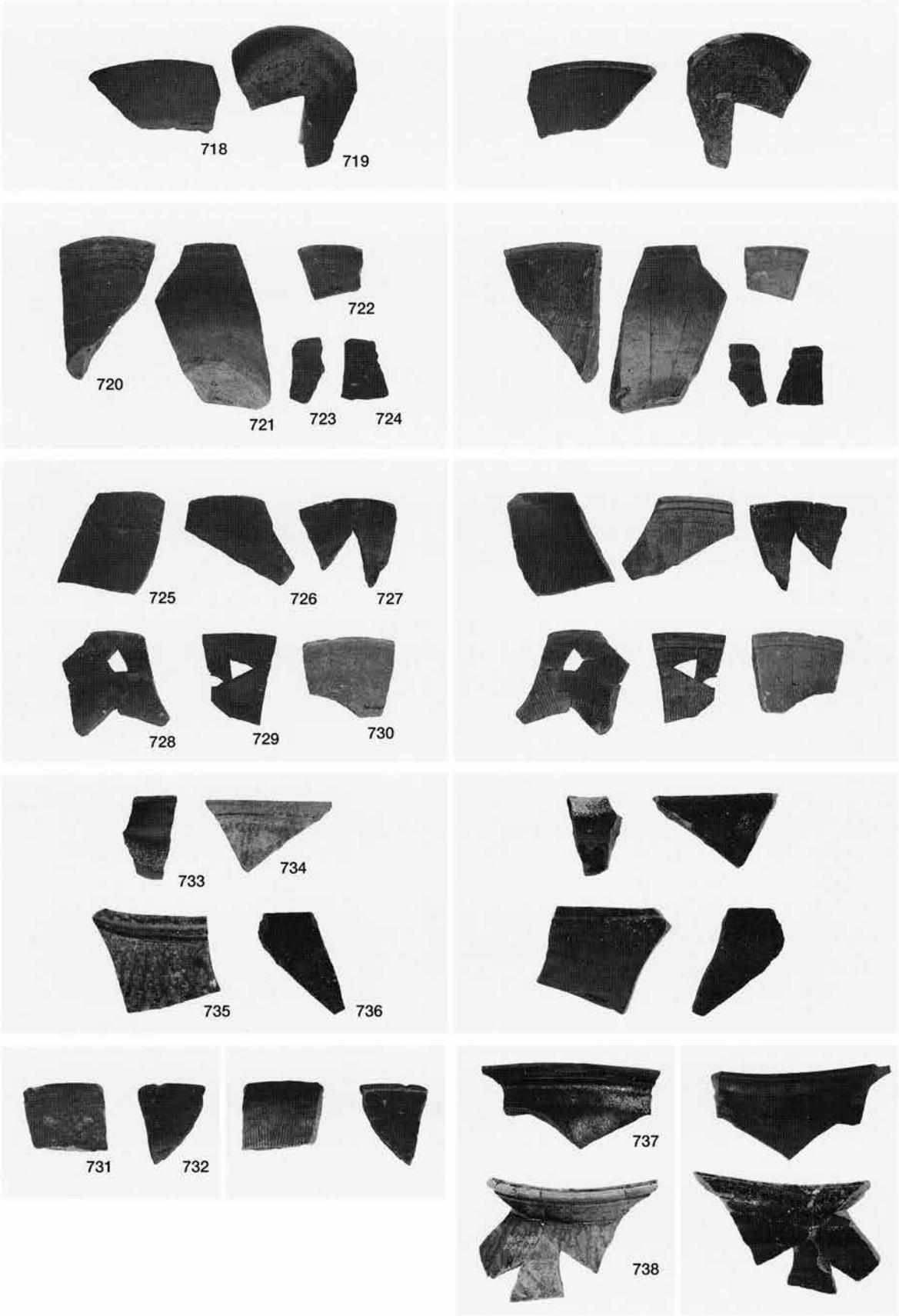








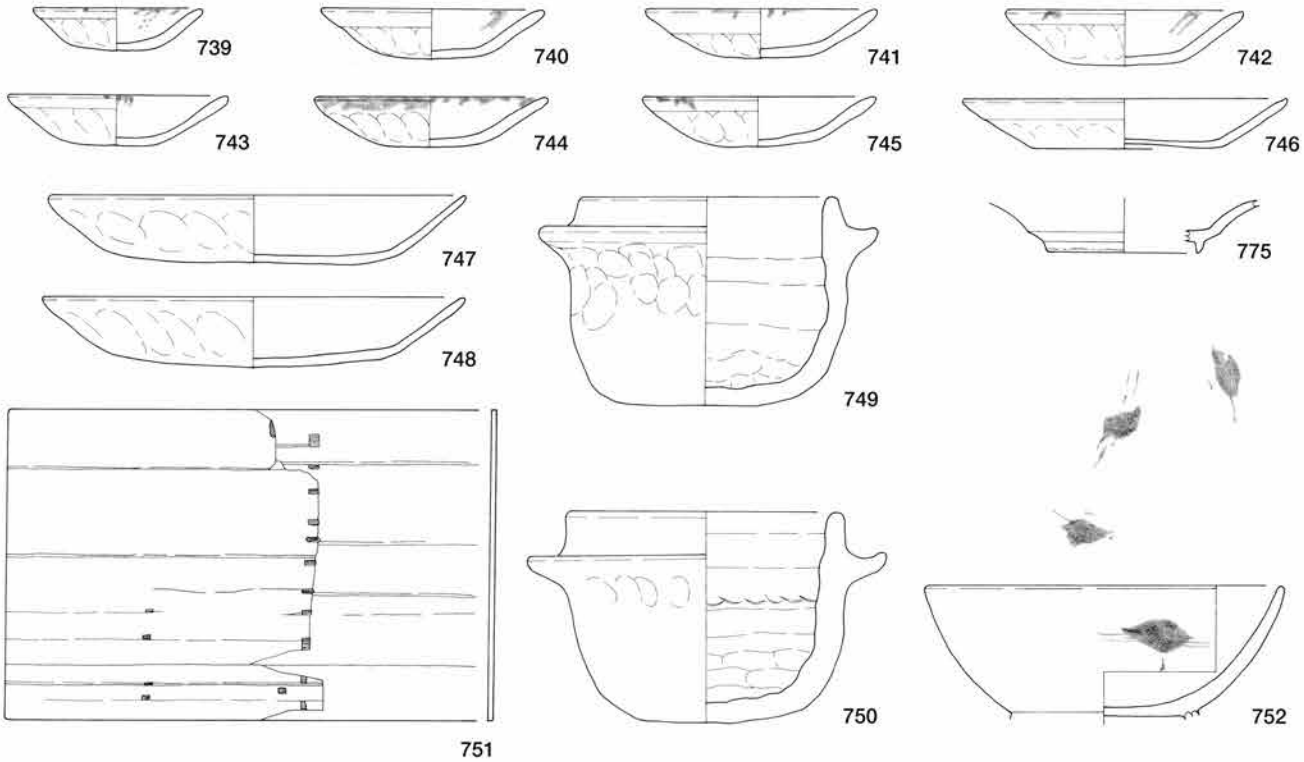
越前焼 擂鉢718・720～732　甕734～738　壺733　鉢719



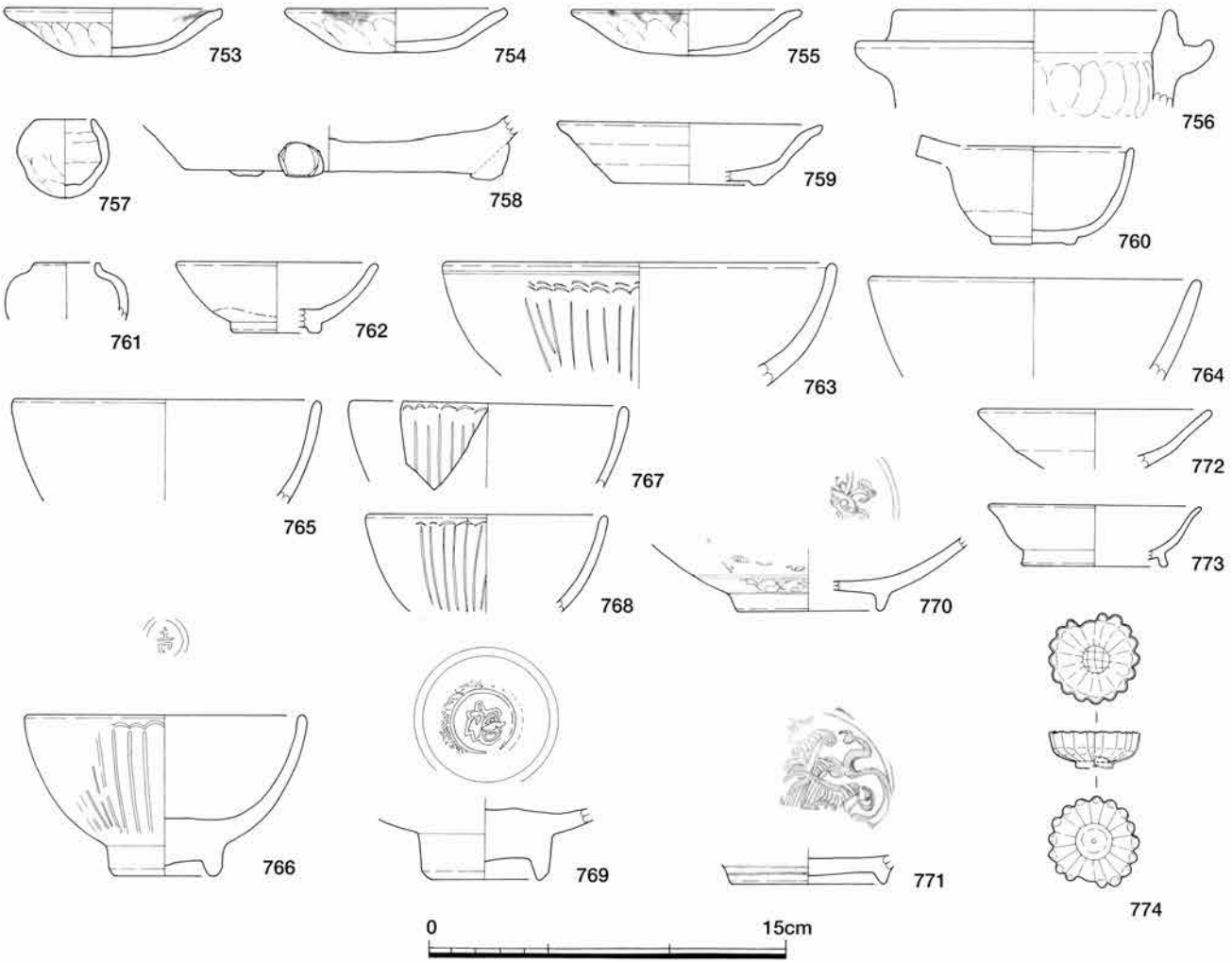
越前焼 擂鉢718・720～732　甕734～738　壺733　鉢719

第31図　第50次調査出土遺物（8）

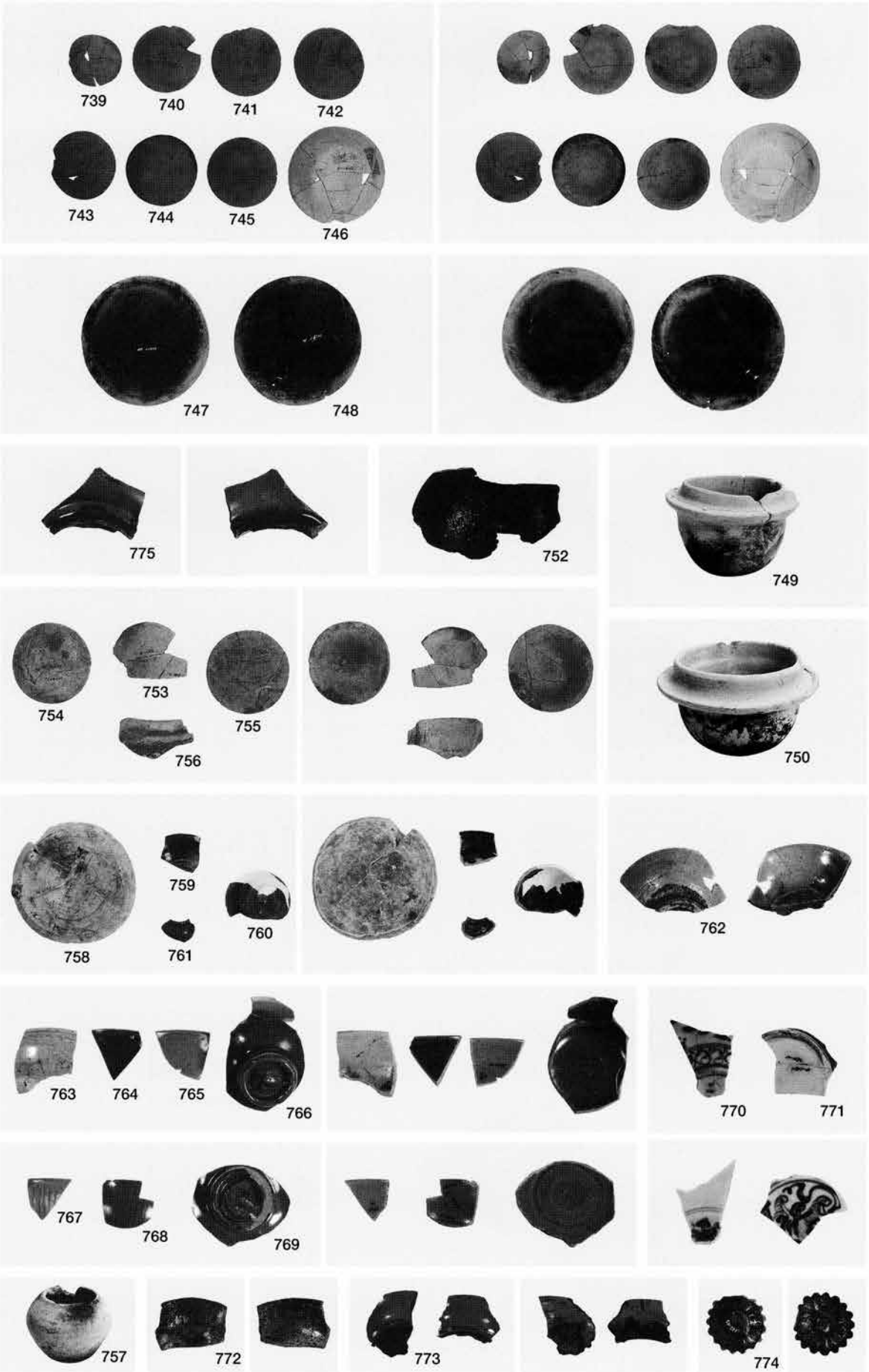
SA2882



区画50－1－Ⅱ遺構



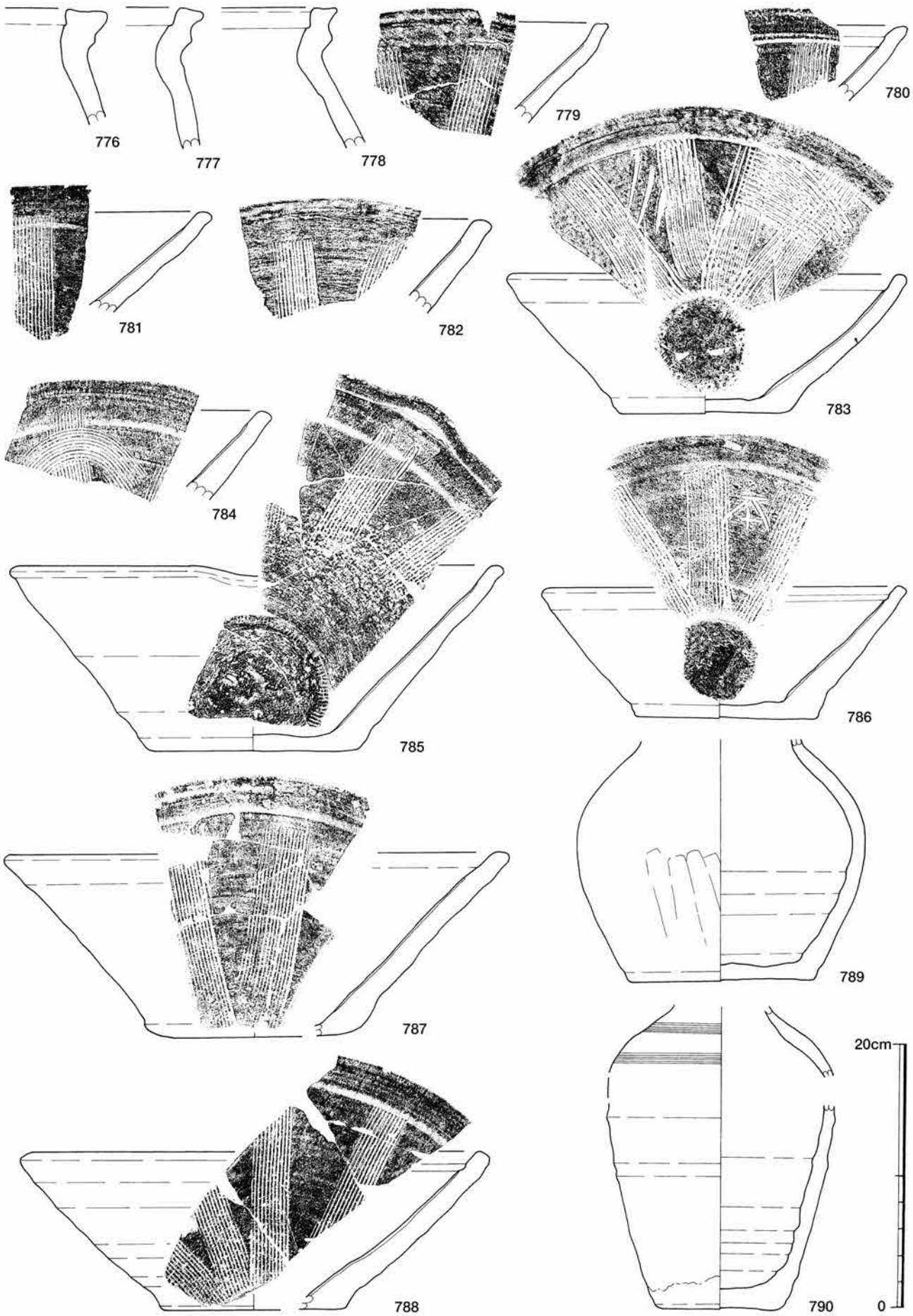
土師質 皿739～748・753～755　羽釜749・750・756　小壺757　**灰釉** 鉢758　**鉄釉** 皿759　片口茶入761　**青磁** 碗763～769　皿775
白磁 碗762　**染付** 碗770　皿771　**漆器** 椀752　**木製品** 曲物751　**金属製品** 紅皿774



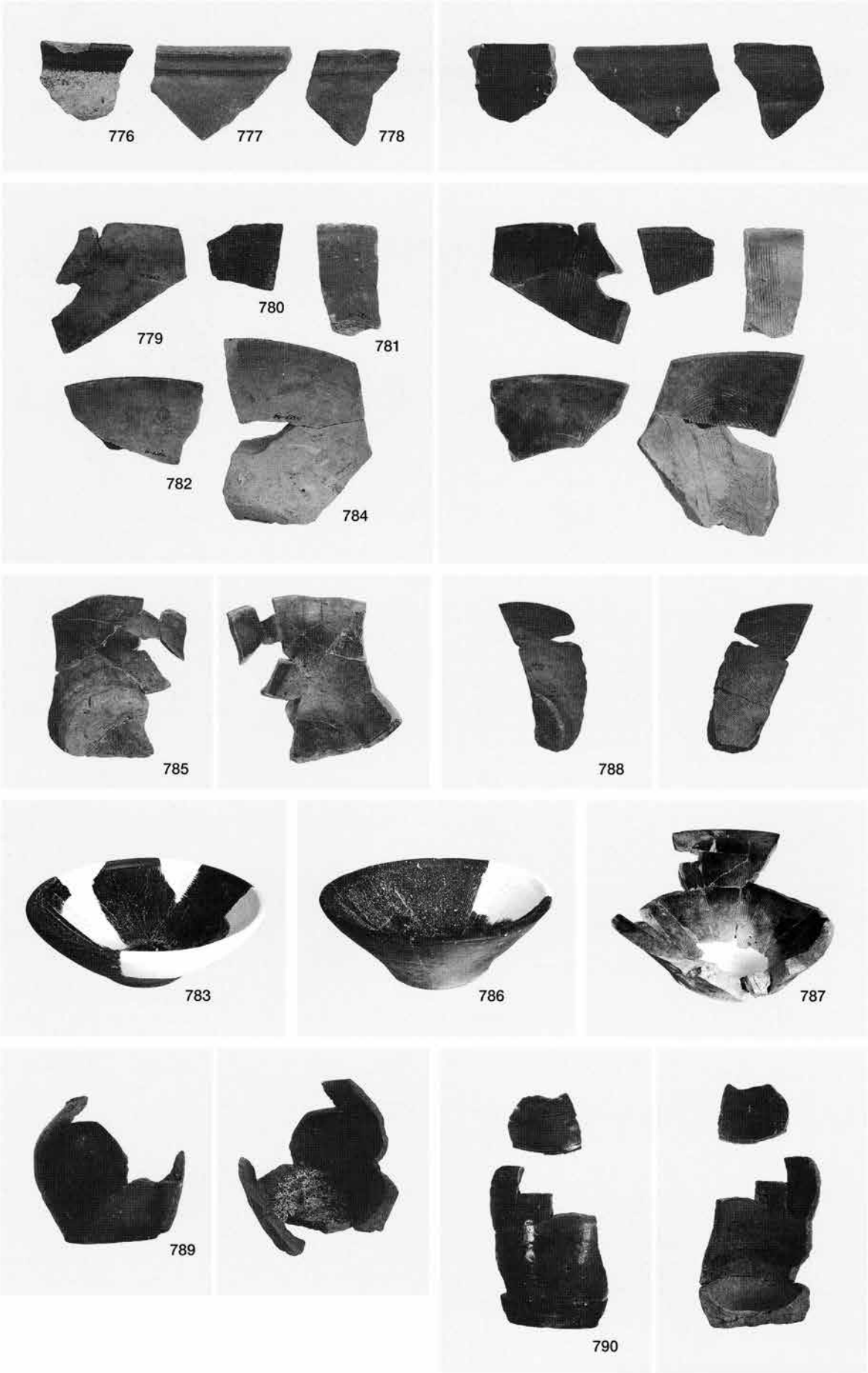
土師質 皿739～748・753～755　羽釜749・750・756　小壺757　**灰釉** 鉢758　**鉄釉** 皿759　片口茶入761
青磁 碗763～769　皿775　**白磁** 碗762　**染付** 碗770　皿771　**漆器** 椀752　**木製品** 曲物751　**金属製品** 紅皿774

第32図　第50次調査出土遺物（９）

区画50－1－Ⅲ遺構面



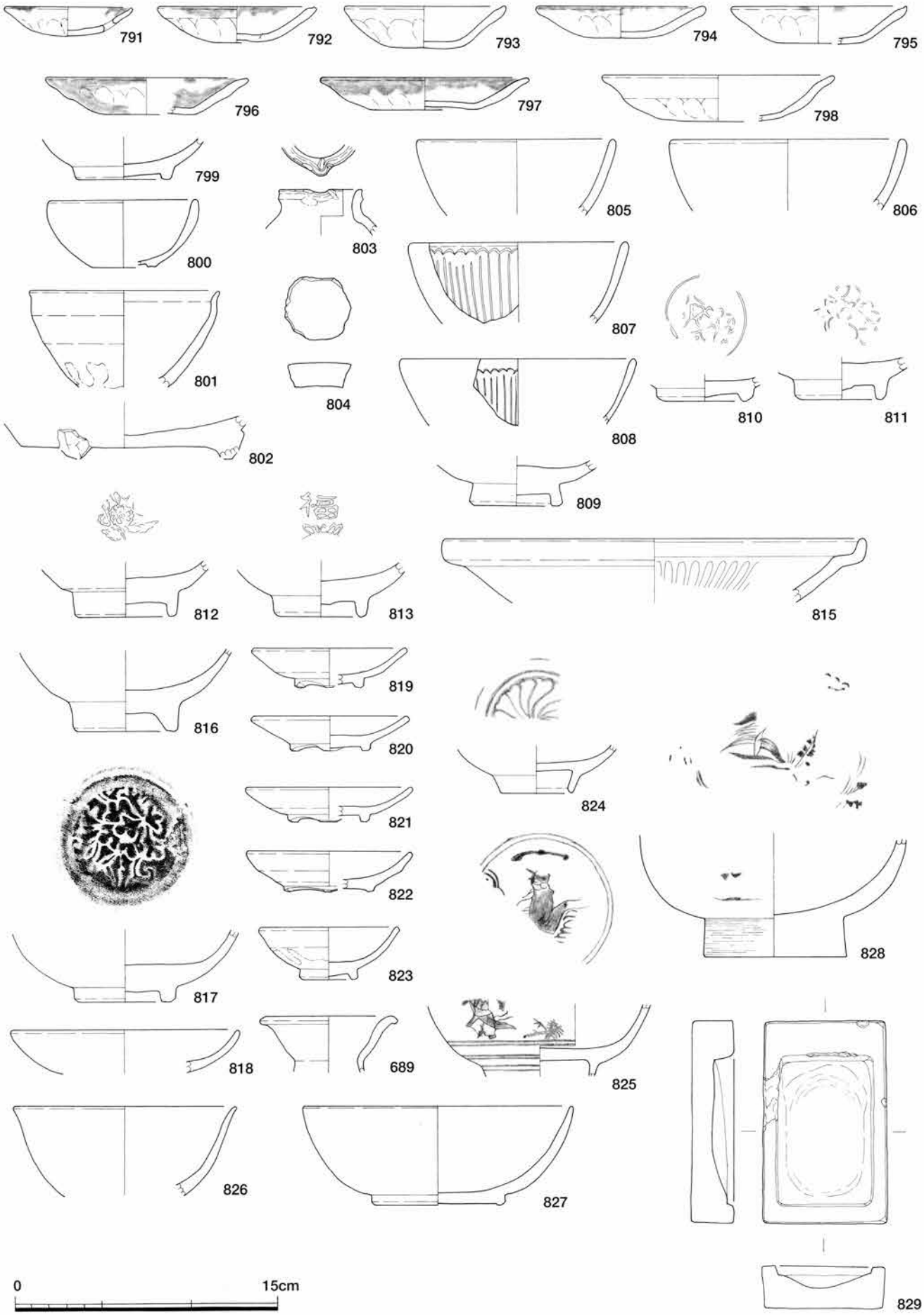
越前焼 甕776～778　擂鉢779～788　壺789　**灰釉** 壺790



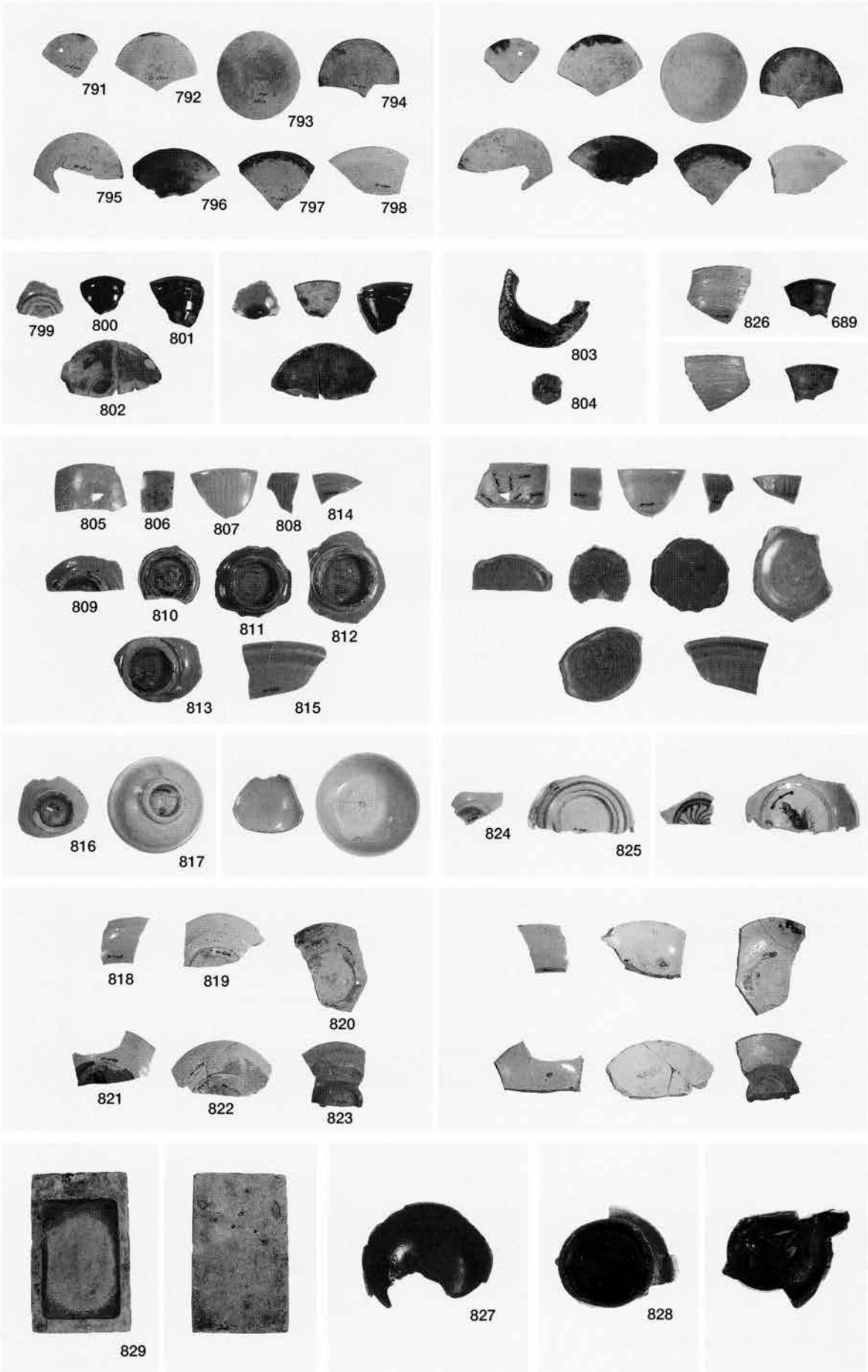
越前焼 甕776～778　擂鉢779～788　壺789　**灰釉** 壺790

第33図　第50次調査出土遺物（10）

区画50－1－Ⅲ遺構



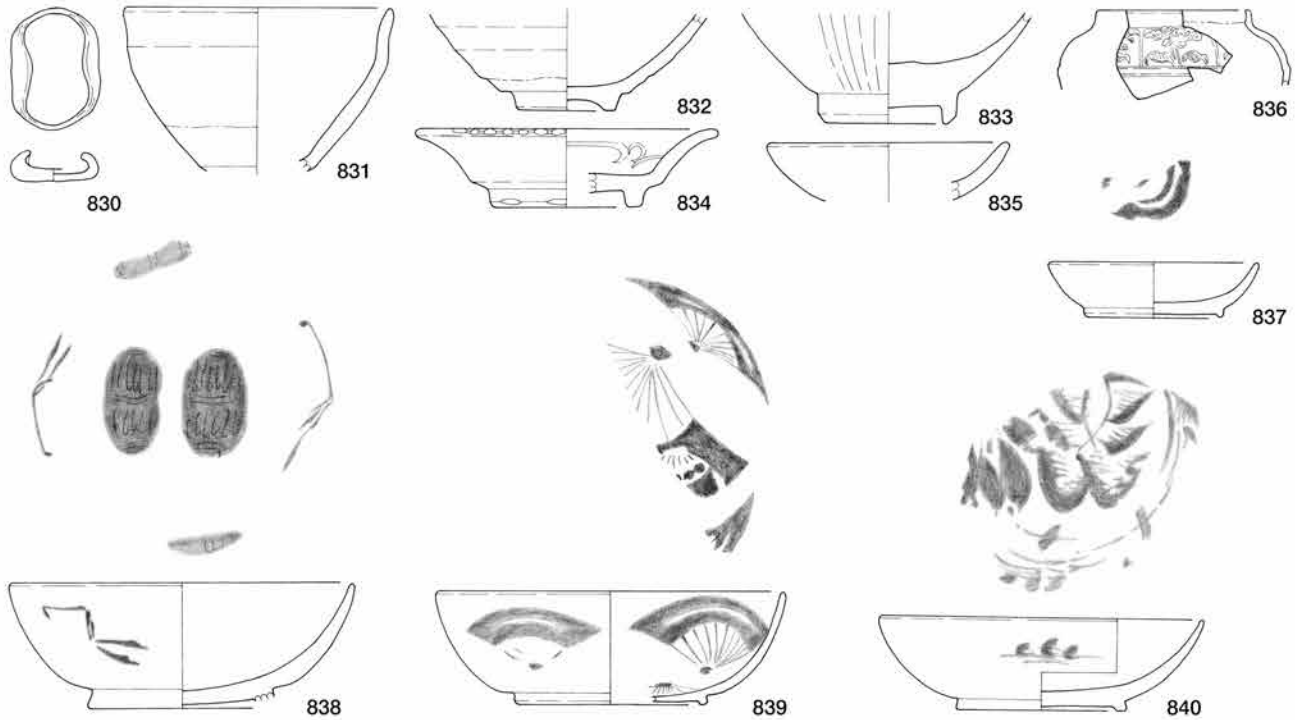
越前焼 壺803　円盤804　**土師質** 皿791～798　**灰釉** 碗799　鉢802　**鉄釉** 碗800・801　**青磁** 碗805～813　**白磁** 碗816・817　皿818～822　碗823　**染付** 碗824・825　**朝鮮製** 碗826　壺689　**漆器** 椀827・828　**石製品** 硯829



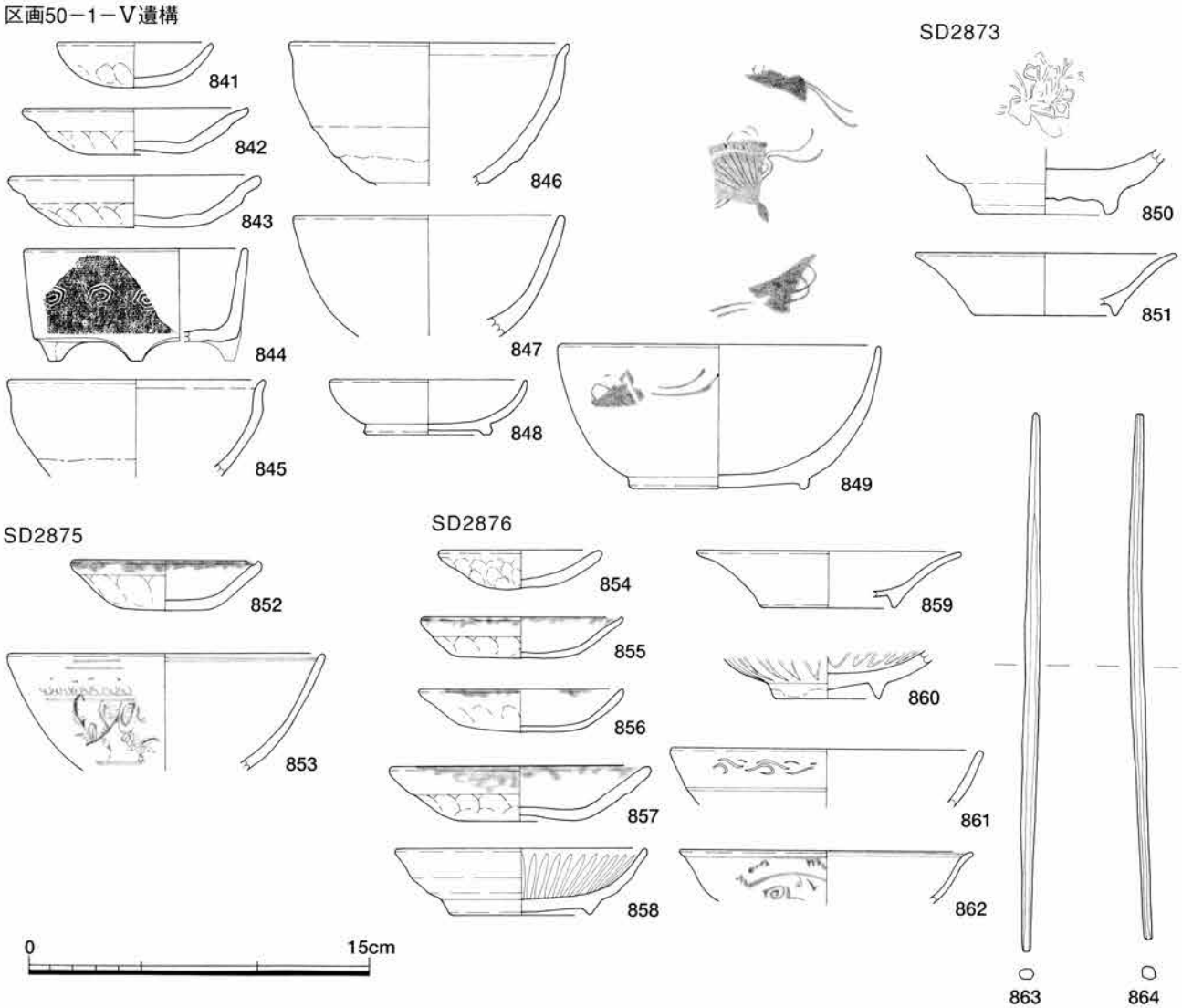
越前焼 壺803　円盤804　**土師質** 皿791～798　**灰釉** 碗799　鉢802　**鉄釉** 碗800・801　**青磁** 碗805～813
白磁 碗816・817　皿818～822　碗823　**染付** 碗824・825　**朝鮮製** 碗826　壺689　**漆器** 椀827・828　**石製品** 硯829

第34図　第50次調査出土遺物（11）

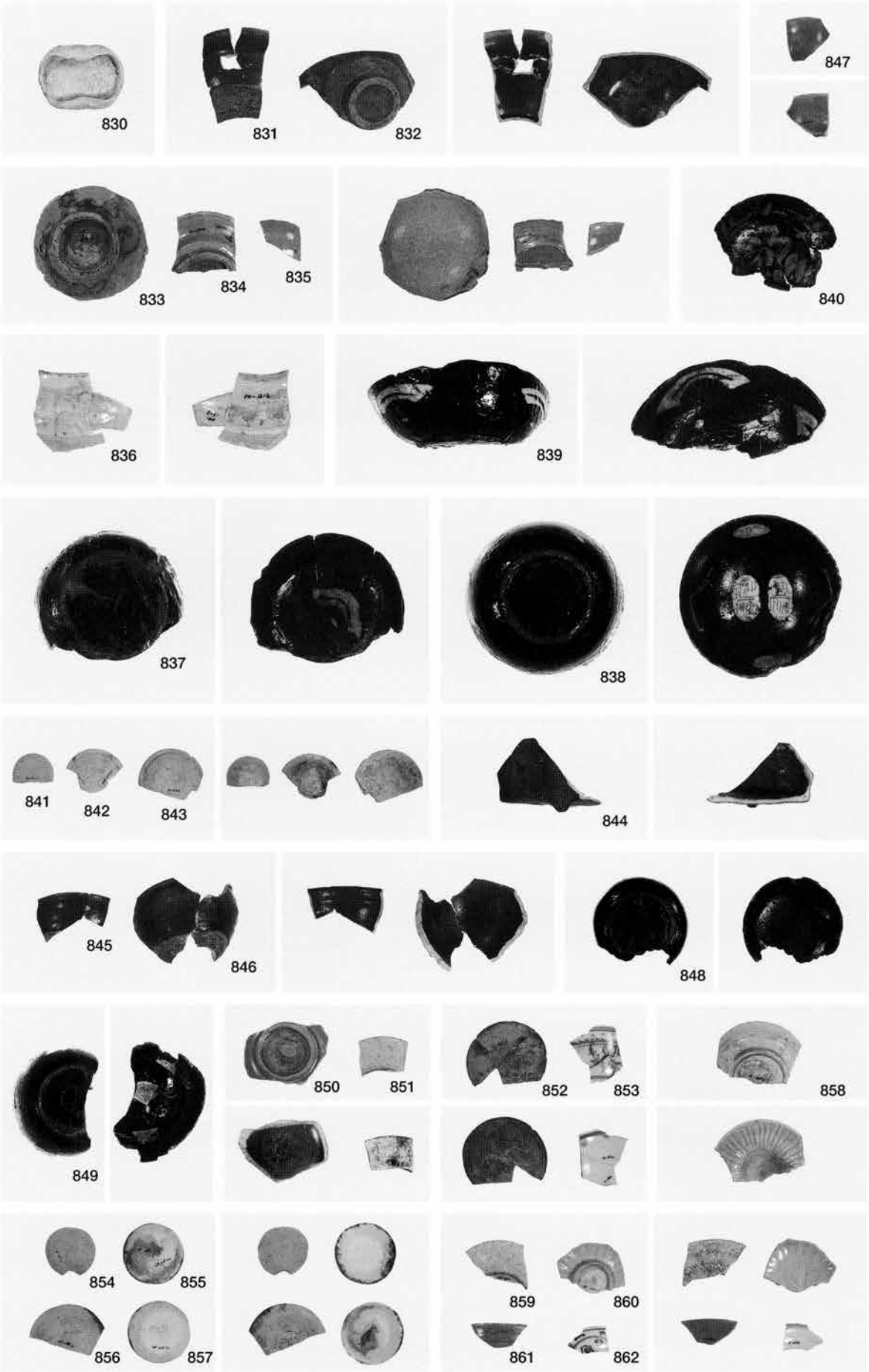
区画50－1－Ⅳ遺構



区画50－1－Ⅴ遺構



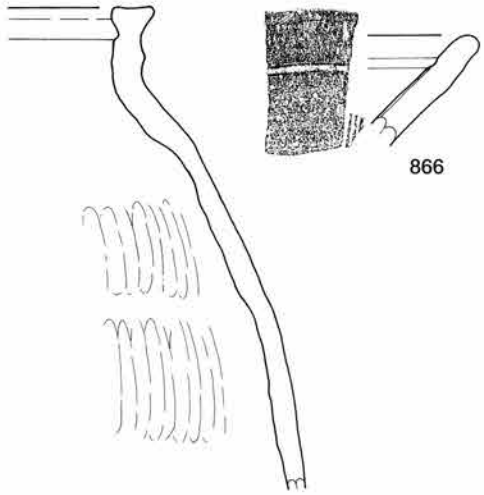
土師質 皿841～843・852・854～857　耳皿830　**瓦質** 香炉844　**灰釉** 皿858　**鉄釉** 碗831・832・845・846　**青磁** 碗833・847・850・861　皿834・835・860　**白磁** 皿851・859　小壺836　**染付** 碗853　皿862　**漆器** 椀838～840・849　皿837・848　**木製品** 箸863・864



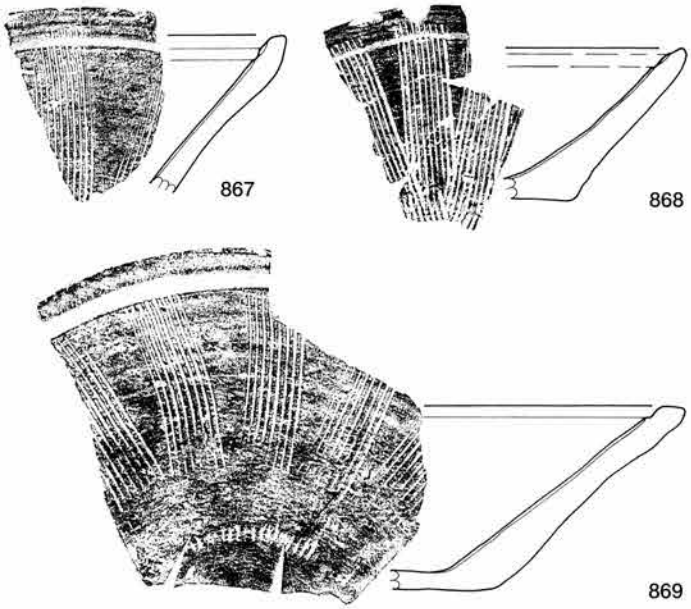
土師質 皿841～843・852・854～857　耳皿830　**瓦質** 香炉844　**灰釉** 皿858　**鉄釉** 碗831・832・845・846
青磁 碗833・847・850・861　皿834・835・860　**白磁** 皿851・859　小壺836　**染付** 碗853　皿862
漆器 椀838～840・849　皿837・848

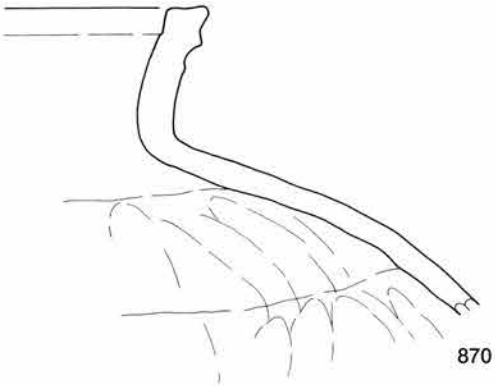
第35図　第50次調査出土遺物（12）

区画50－1－Ⅳ遺構

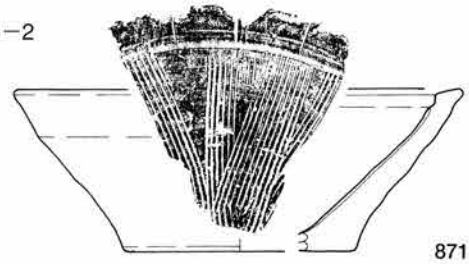


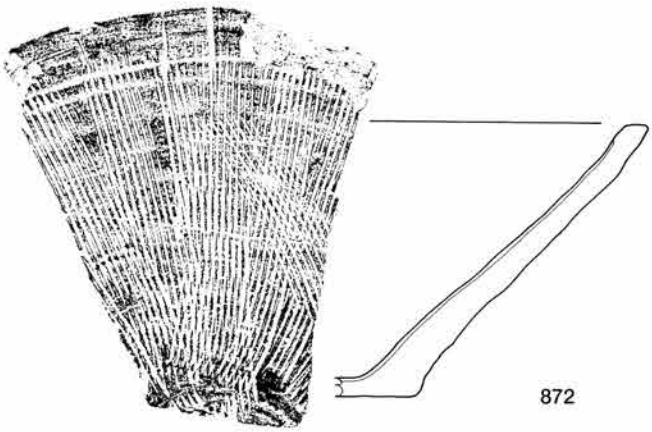
区画50－1－Ⅴ遺構



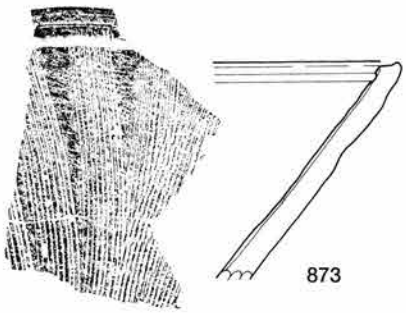


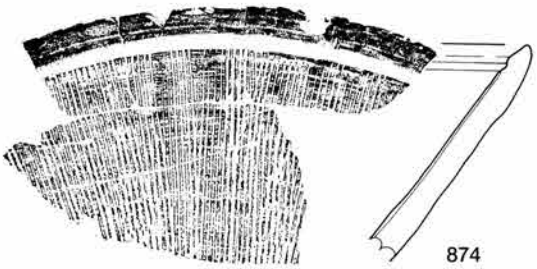
区画50－2

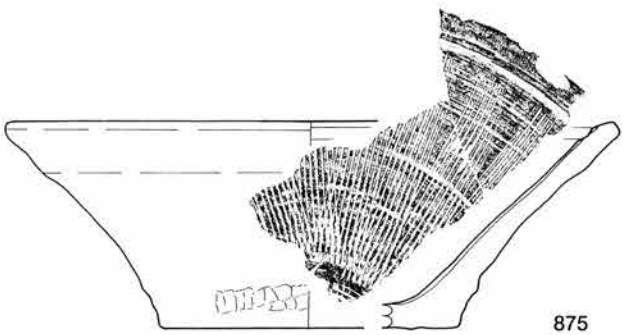




区画50－3

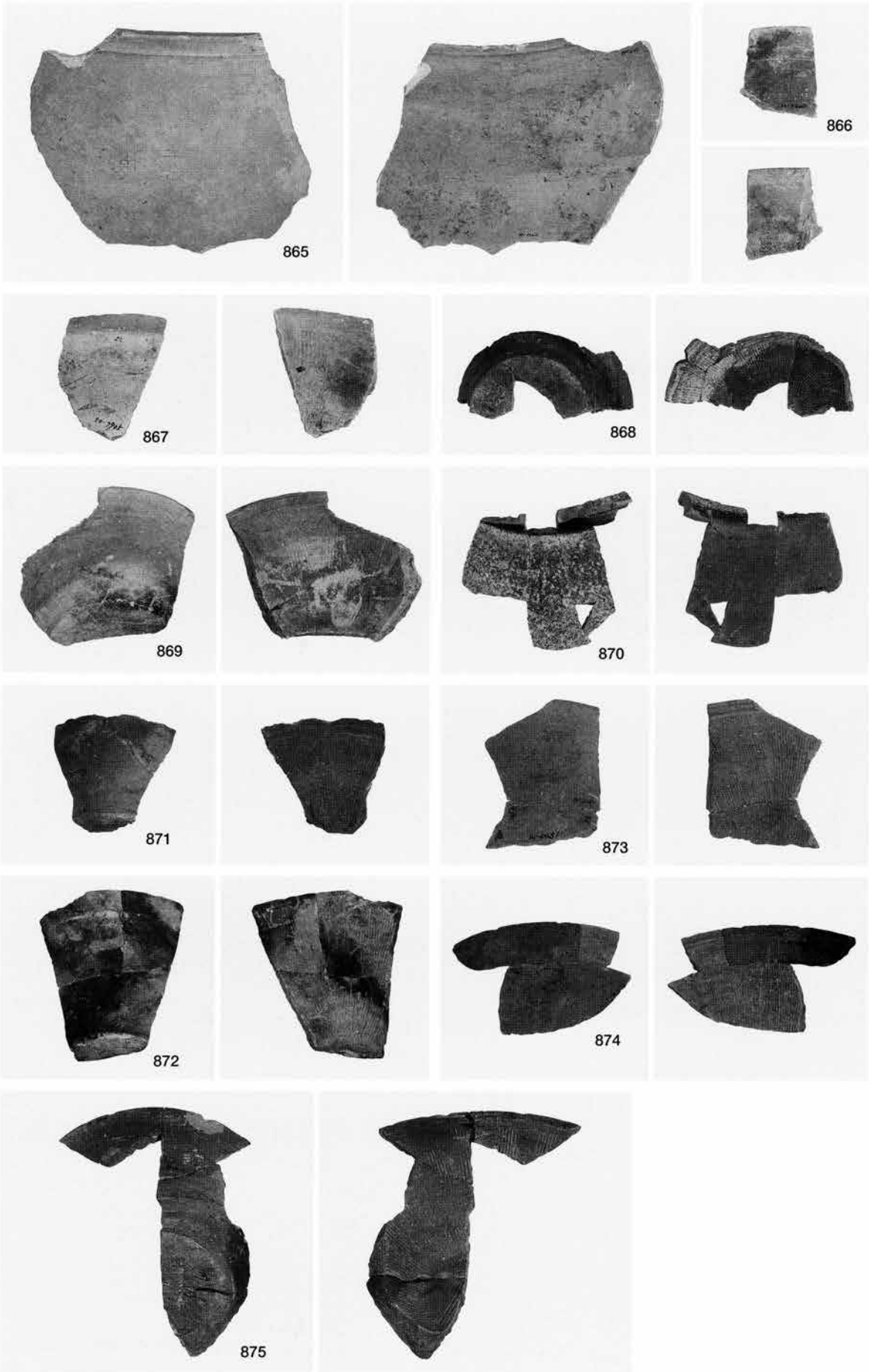






0　20cm

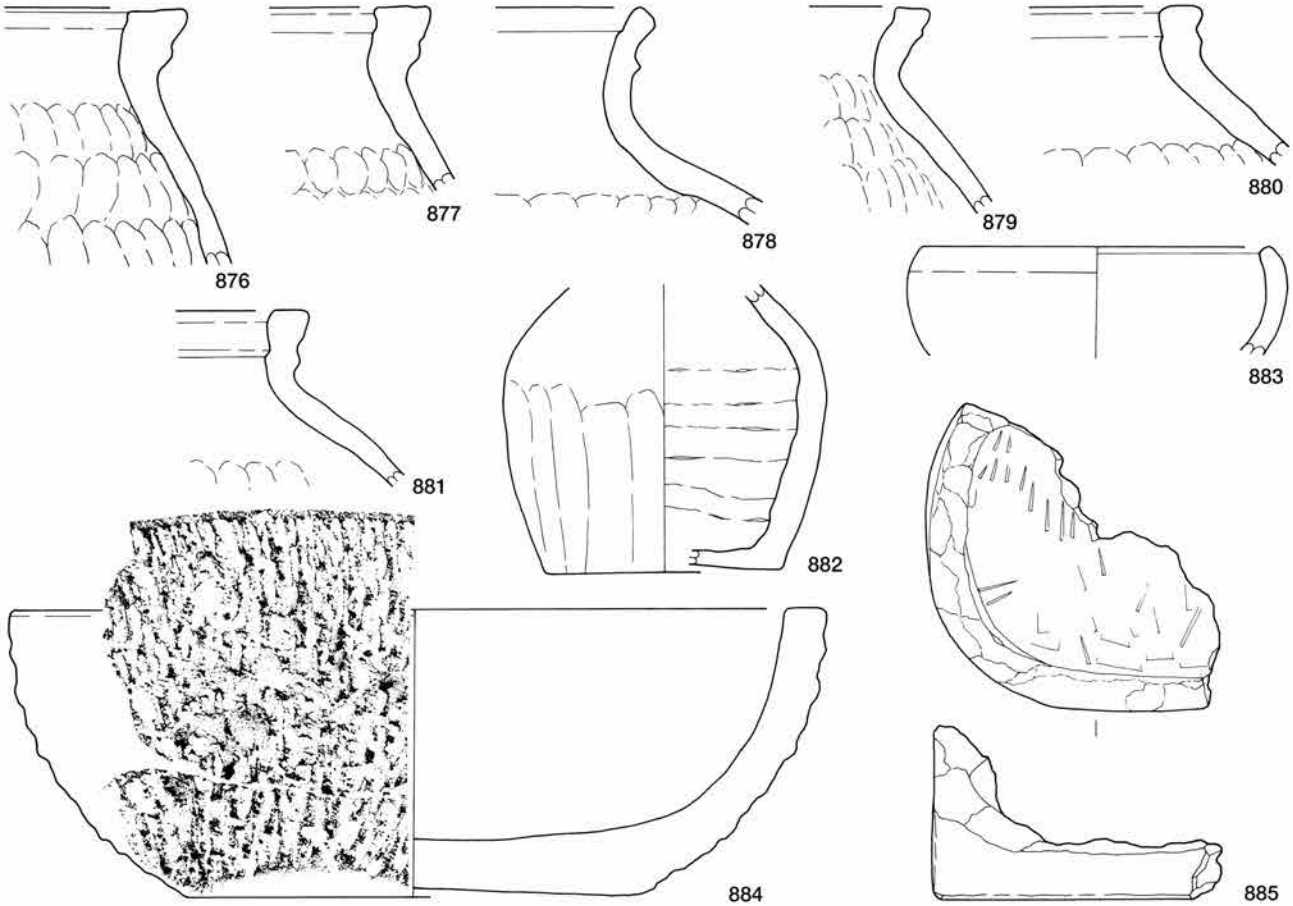
越前焼 甕865　擂鉢866～869・871～875　壺870



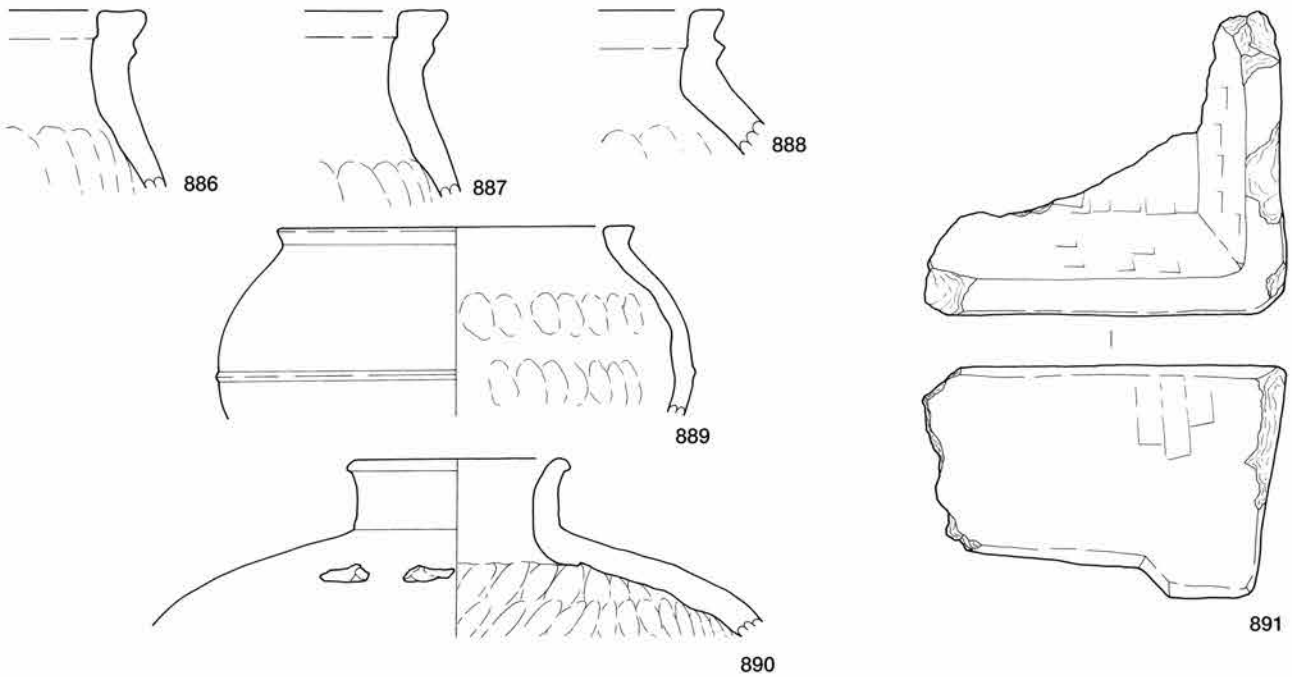
越前焼 甕865　擂鉢866～869・871～875　壺870

第36図　第50次調査出土遺物（13）

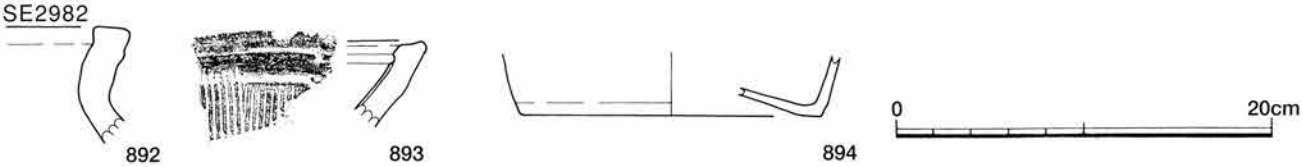
区画50－2



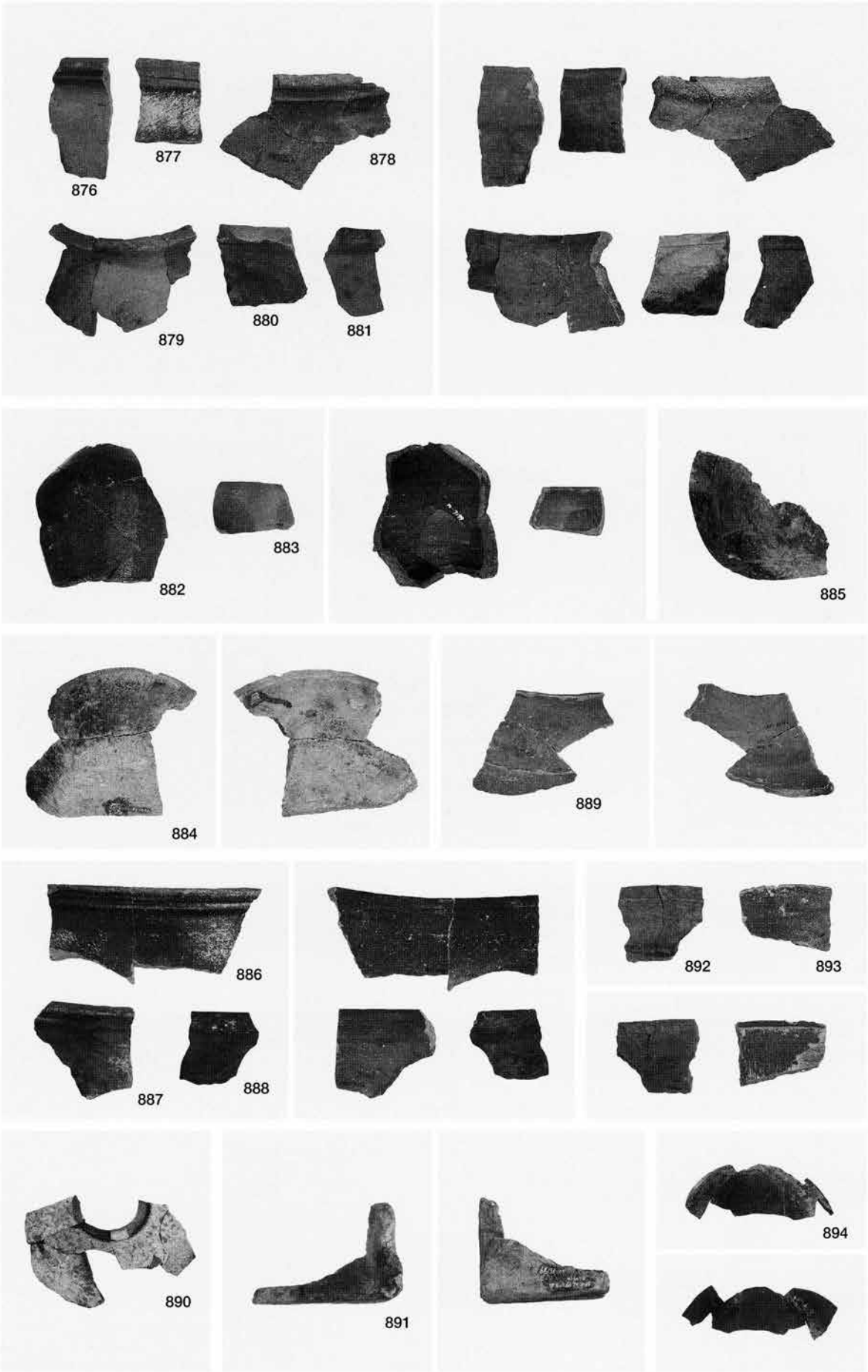
区画50－3



SE2982



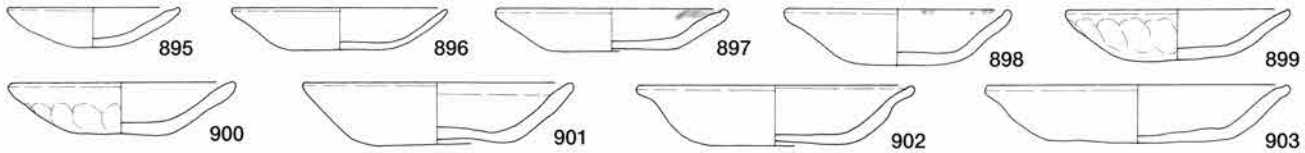
越前焼 甕876～881・886～888・892　擂鉢893　壺882・889・890　鉢883　**朝鮮製** 壺894　**石製品** 捏鉢884　バンドコ885　盤891



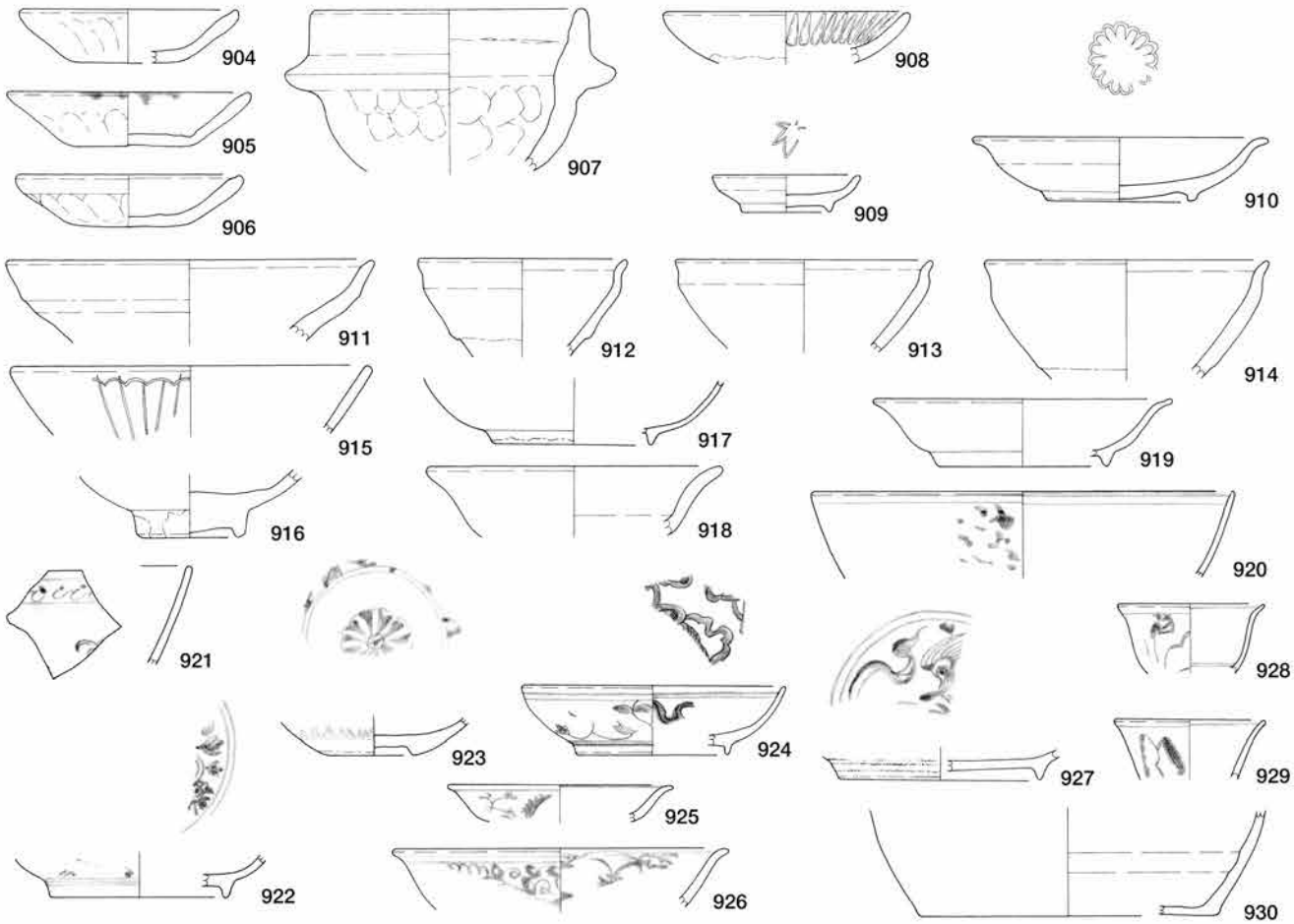
越前焼 甕876～881・886～888・892　擂鉢893　壺882・889・890　鉢883　**朝鮮製** 壺894
石製品 捏鉢884　バンドコ885　盤891

第37図　第50次調査出土遺物（14）

SF2735

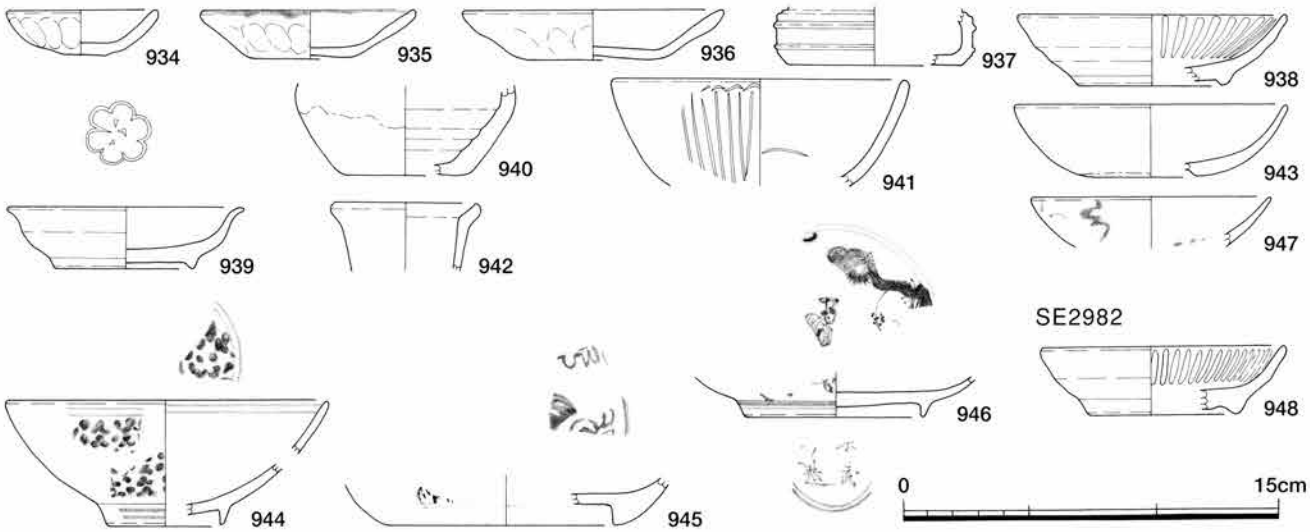


区画50－2

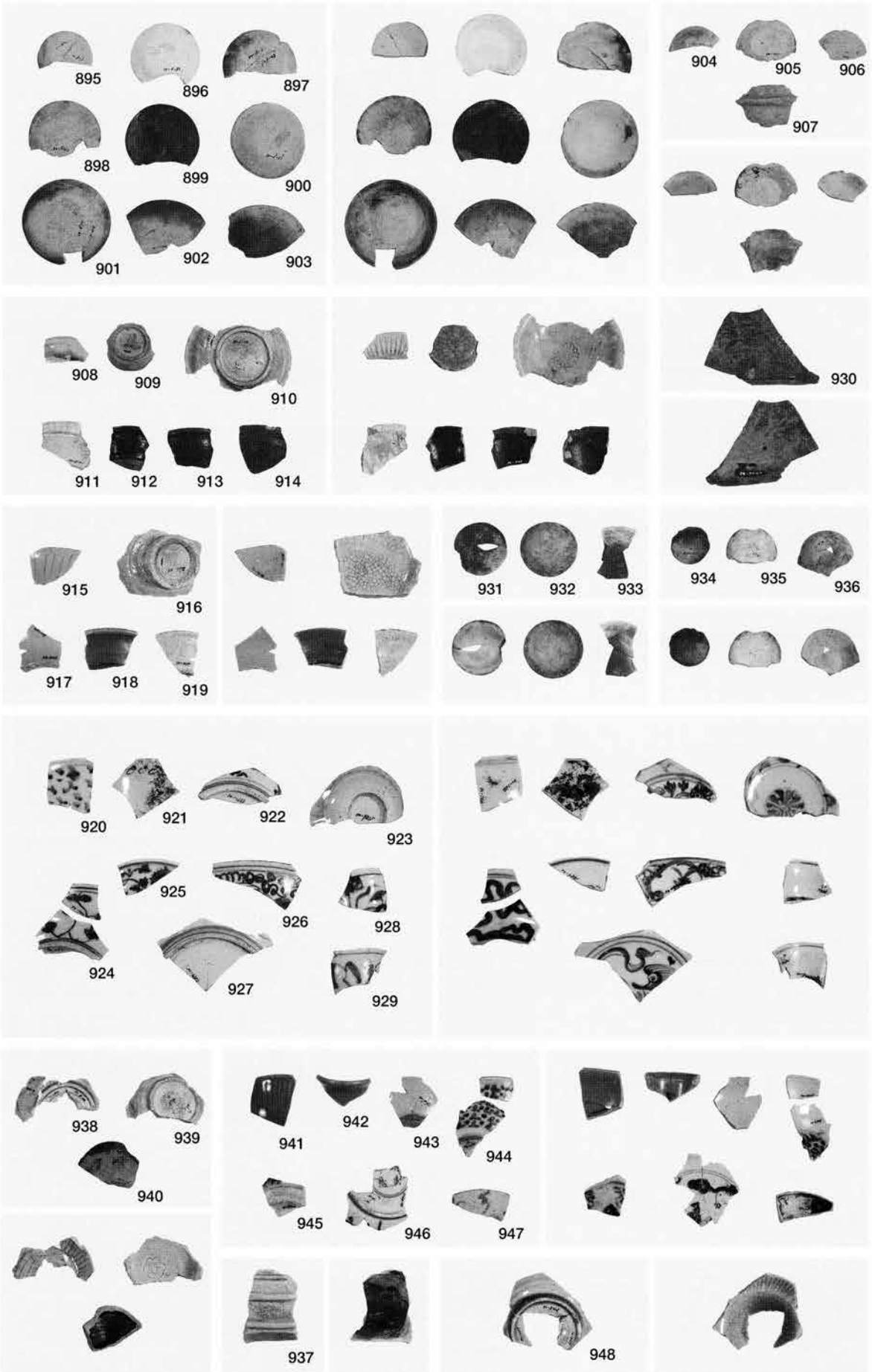


SF2986

区画50－3



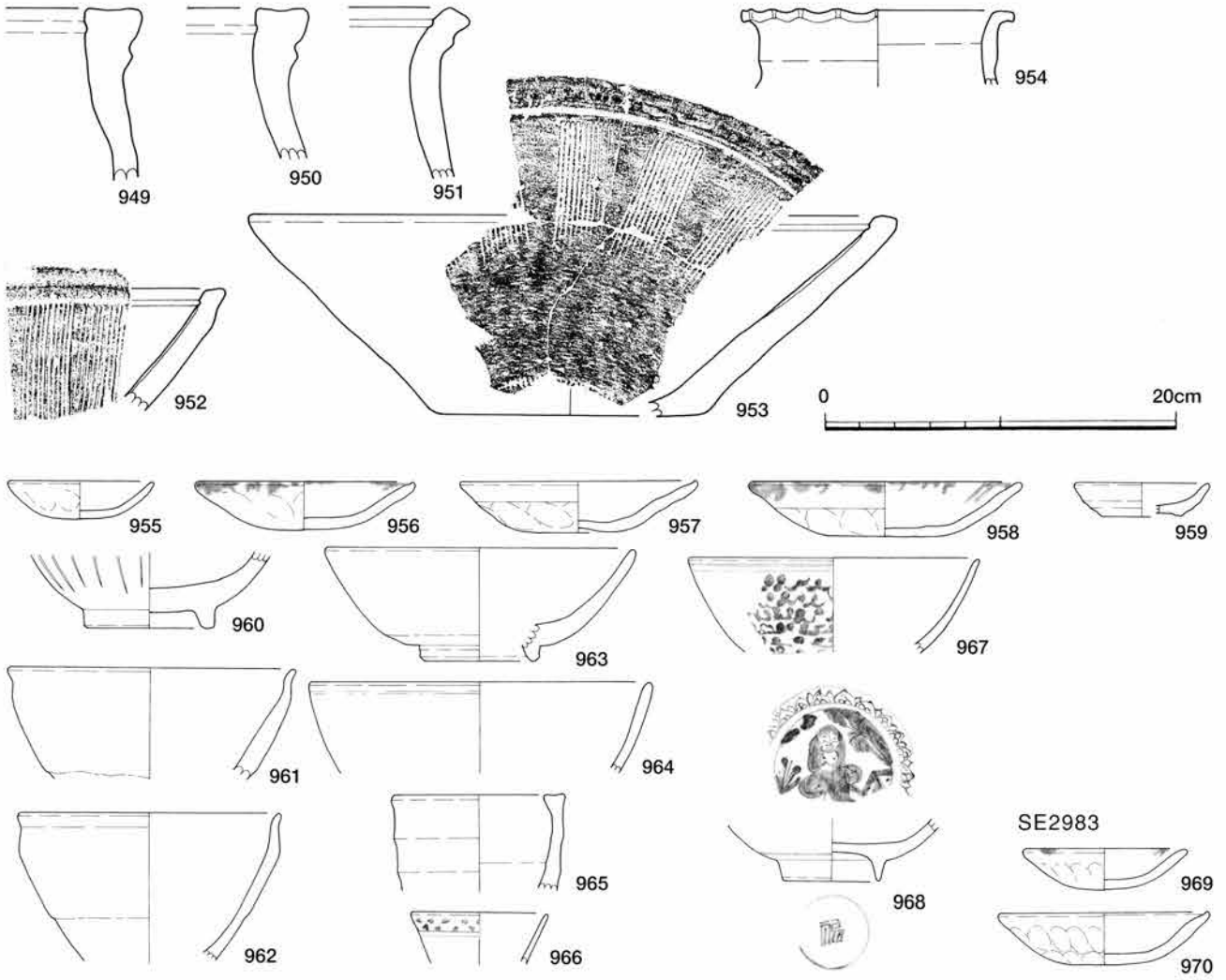
土師質 Ⅲ895～906・931～936　羽釜907　**瓦質** 灯明台937　**灰釉** Ⅲ908～911・938・939・948　**鉄釉** 碗912～914　壺940
青磁 碗915・916・941　Ⅲ917・918　壺942　**白磁** Ⅲ919・943　**染付** 碗920・921・944　Ⅲ922～927・945～947　坏928・929　**朝鮮製** 壺930



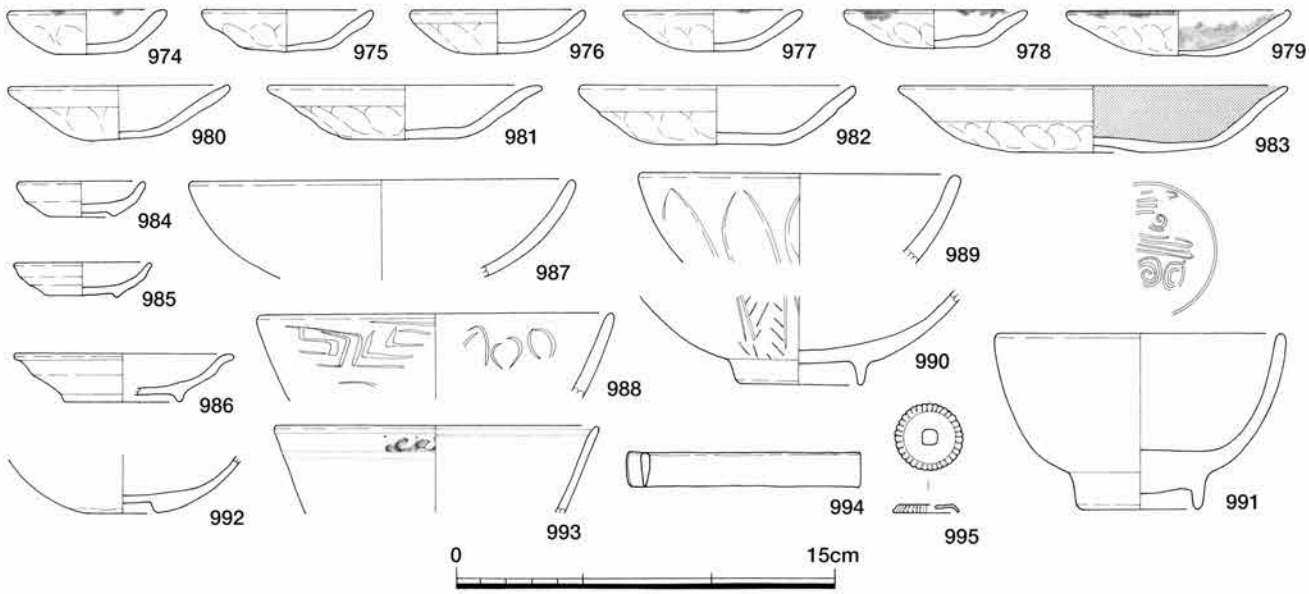
土師質 皿895～906・931～936　羽釜907　**瓦質** 灯明台937　**灰釉** 皿908～911・938・939・948　**鉄釉** 碗912～914　壺940
青磁 碗915・916・941　皿917・918　壺942　**白磁** 皿919・943
染付 碗920・921・944　皿922～927・945～947　坏928・929　**朝鮮製** 壺930

第38図　第50次調査出土遺物（15）

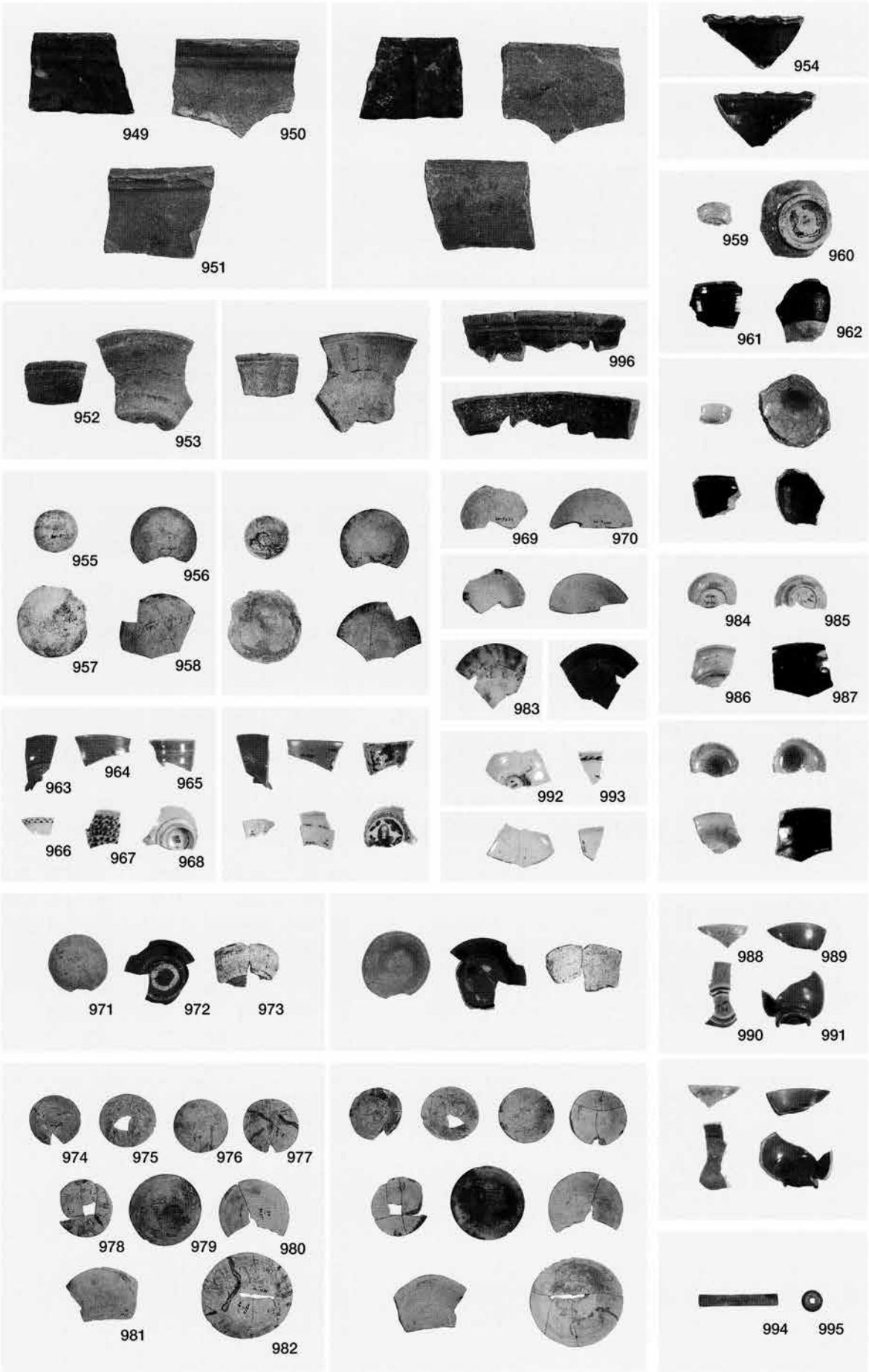
区画50－4－Ⅰ遺構



区画50－4－Ⅱ遺構



越前焼 甕949～951　擂鉢952・953　**土師質** 皿955～958・969～971・974～983　**灰釉** 碗960　皿959・984～986　**鉄釉** 碗961・962・973・987　皿972　壺954　**青磁** 碗963・964・988～991　香炉965　**白磁** 皿992　**染付** 碗967・968・993　坏966　**金属製品** 小柄994　飾り金具995



越前焼 甕949～951・996　擂鉢952・953　**土師質** 皿955～958・969～971・974～983　**灰釉** 碗960　皿959・984～986
鉄釉 碗961・962・973・987　皿972　壺954　**青磁** 碗963・964・988～991　香炉965　**白磁** 皿992
染付 碗967・968・993　坏966　**金属製品** 小柄994　飾り金具995

報 告 書 抄 録

ふ り が な	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡　発掘調査報告Ⅸ
副 書 名	第49･50次調査
シリーズ番	9
編集者名	佐藤　圭
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所　在　地	〒910-2152　福井県福井市安波賀町4-10　TEL.0776-41-2301
発行年月日	平成19年3月30日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″		
第49次調査	福井市城戸ノ内町字奥間野	18210	史－31	35°59′56″	136°17′51″	1,300㎡	環境整備に伴う発掘調査
第50次調査	福井市城戸ノ内町字奥間野、吉野本	18210	史－31	35°59′57″	136°17′50″	1,300㎡	同　上

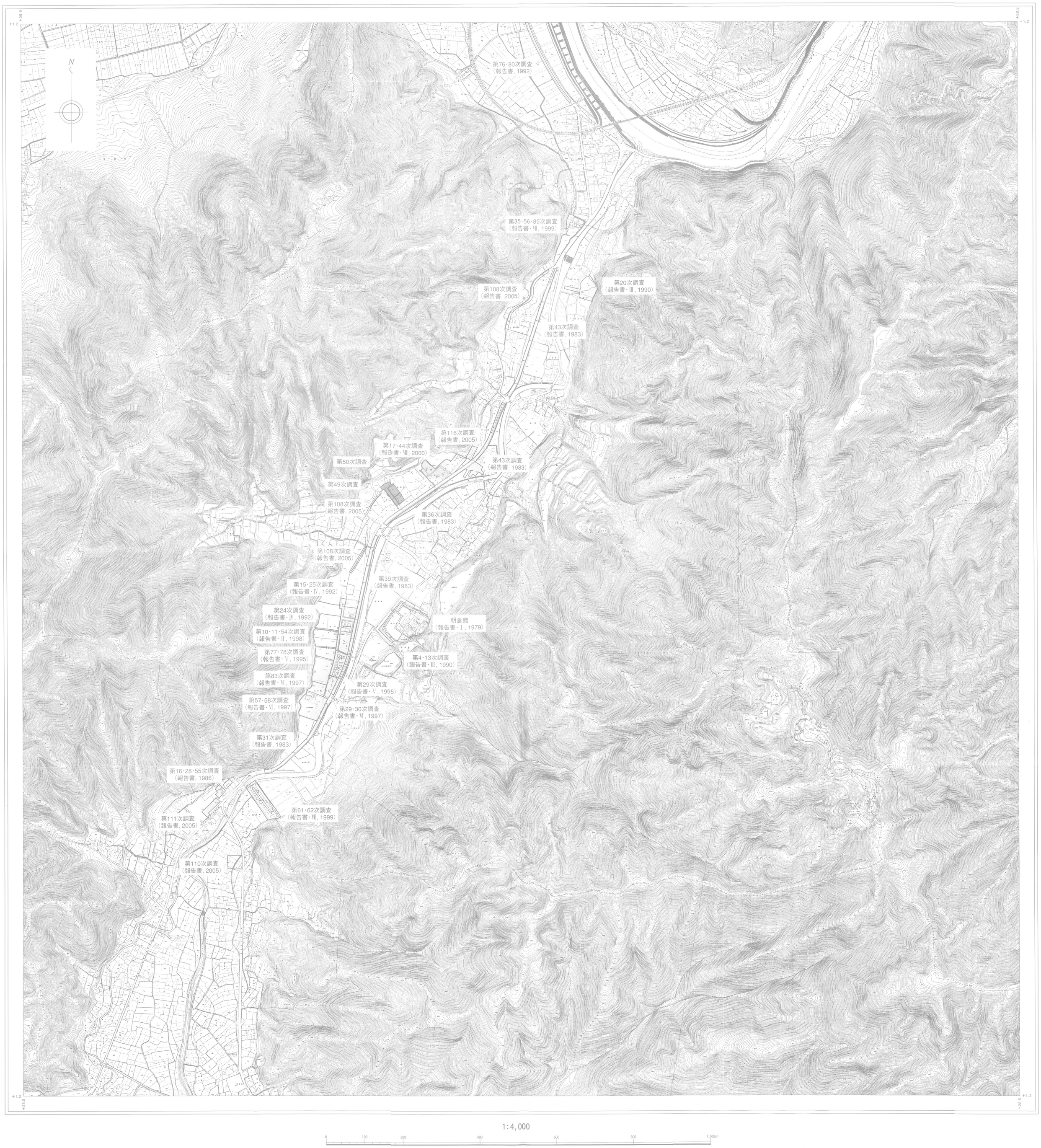
調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第49次調査	武家屋敷	15･16世紀	道路4、溝11、土塁1、礎石建物8、門1、井戸3、石積施設1、甕埋設遺構1	越前焼、土師質皿、鉄釉碗、灰釉碗、青磁碗皿、白磁皿、染付碗皿、金属製品、石製品、木製品	土塁と溝で区画された小規模武家屋敷の主殿や付属建物を検出
第50次調査	武家屋敷 町屋	15･16世紀	道路4、土塁3、石垣4、溝16、礎石建物10、井戸4、石積施設3、門1、柵列2	越前焼甕・壺・擂鉢、土師質皿、鉄釉、灰釉、瓦質、青磁･白磁･染付、金属製品、石製品、木製品	東西道路に面した武家屋敷と、南北道路に面した町屋区画を検出

平成19年3月20日　印刷
平成19年3月30日　発行

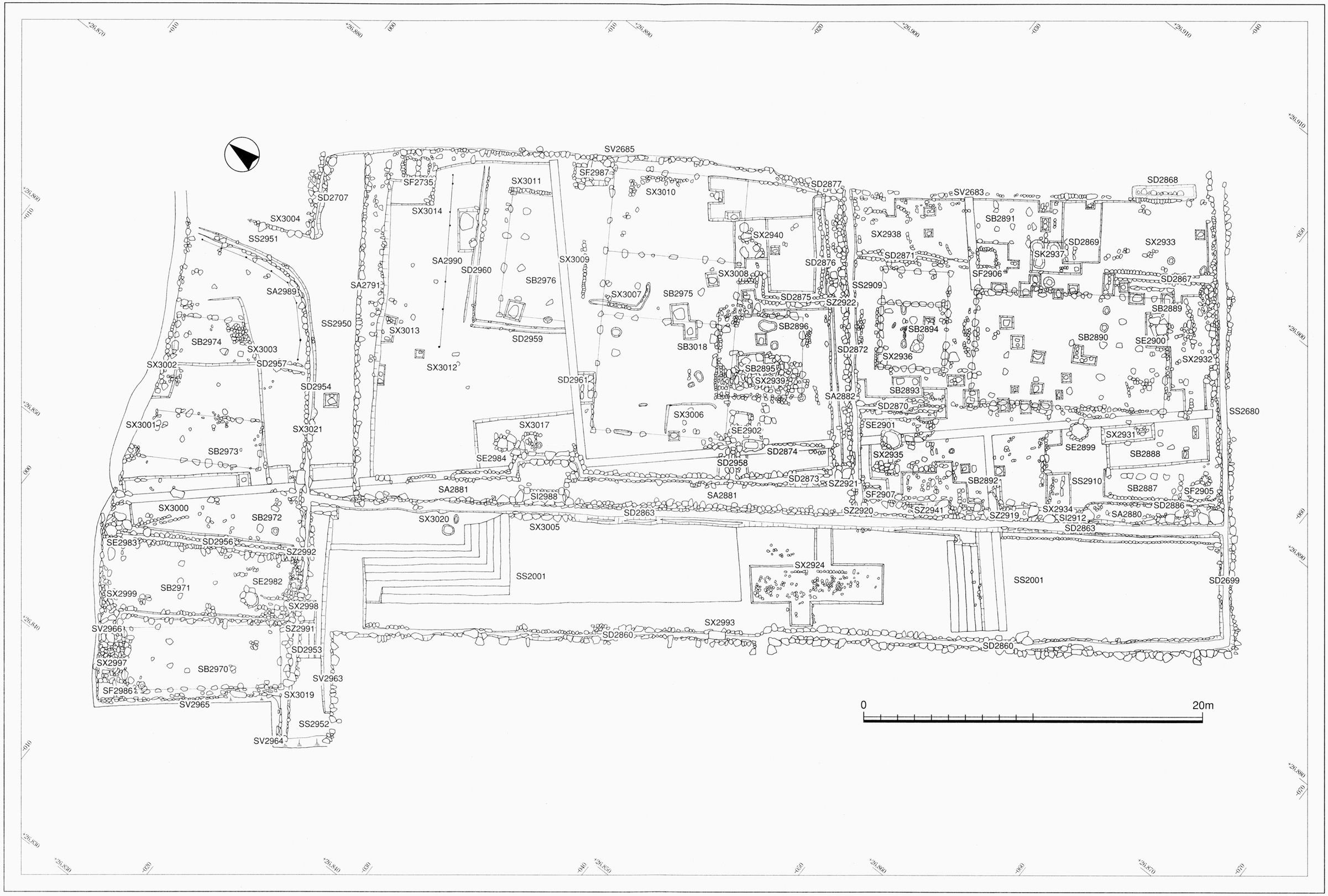
特別史跡
一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅸ
第49・50次調査

執筆・編集　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
発　　行　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
福井市安波賀町4－10
印　　刷　白崎印刷株式会社

付図1　特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡



1:4,000

0　100　200　400　600　800　1,000m

付図２　第49・50次調査遺構全測図